岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 183

樋ヶ鼻遺跡

一般県道目木大庭線改築に伴う発掘調査

2004

岡山県教育委員会

1　調査地周辺空撮（南から）

2　調査区空撮（北西から）

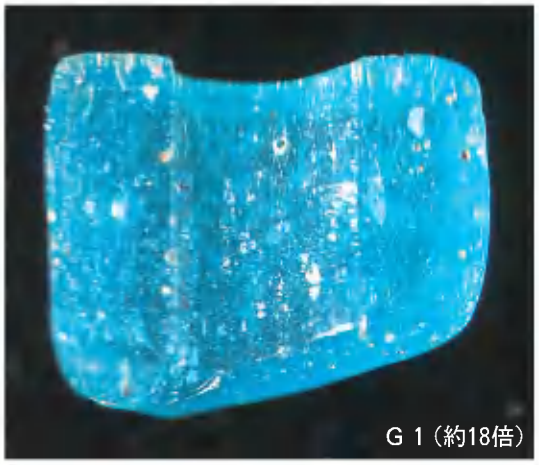
巻頭図版２

1　竪穴住居11炭化材・焼土塊検出状況（南東から）

2　竪穴住居11西壁Ｉ―Ｊ（南東から）

3　蛇紋岩製勾玉

4　施溝痕のある鋳造鉄器



5　ガラス小玉顕微鏡写真

序

この報告書は、一般県道目木大庭線改築に伴い平成14年度に発掘調査を実施した樋ヶ鼻遺跡（といがはないせき）の発掘調査報告書です。

調査地は、岡山県が中・四国を含めた広域物流拠点として整備を行った、真庭産業団地に隣接しています。この真庭産業団地建設に先立ち、岡山県教育委員会は平成６～８年度に旦山遺跡・惣台遺跡・野辺張遺跡・先旦山遺跡・旦山古墳群・奥田古墳・水神ヶ峪遺跡の発掘調査を実施し、その成果は『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告136』に収載しているところです。また、平成12年にも、関連の造成工事に先立ち、旦山遺跡の確認・立会調査を実施し、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告161』として刊行しています。

さて、今回の調査では、弥生時代中期～後期の集落跡や古墳時代後期の小竪穴式石室・土壙墓、近世墓などが見つかり、多くの成果をあげました。なかでも、弥生時代中期後半～後期前半の集落跡は、竪穴住居が密集して連続的に建て替えられていることなどが判明し、これは、竪穴住居の変遷や同時存在の位置関係と存続期間など、集落の構造を考えるうえでの数少ない良好な資料となりました。また、そのうちの後期の焼失住居は、上屋の炭化材の残りが良好なうえ、床面からは炭化したダイズ・アズキ・コメなどが採取されていて、当時の住居構造の解明だけでなく、生業や食生活を知る手がかりとしても注目されます。

これらの成果を収載いたしましたこの報告書が、文化財の保護・保存ならびに歴史研究の基礎資料としてお役にたてれば、幸甚に存じます。

発掘調査および報告書作成にあたって、岡山県真庭地方振興局建設部、久世町教育委員会、ならびに地元の関係各位から、温かい御理解と多大な御協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

平成16月３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　正　岡　睦　夫

例　　言

1　本書は、一般県道目木大庭線改築に伴い、岡山県教育委員会が真庭地方振興局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した樋ヶ鼻遺跡（といがはないせき）の調査報告書である。

2　樋ヶ鼻遺跡は、真庭郡久世町中原樋ヶ鼻799ほかに所在する。

3　試掘調査は平成13年度に大橋雅也、全面調査は平成14年度に福田正継・物部茂樹・米田克彦が担当して実施した。調査面積は、試掘調査が300㎡、全面調査が2,280㎡である。

4　本書の作成は、平成15年度に岡山県古代吉備文化財センターにおいて米田が担当した。

5　本書の執筆は、協議を担当した松本和男、試掘調査担当の大橋、全面調査担当の福田・物部・米田が分担し、文責は各項目あるいは遺構ごとの文末に示した。

6　本書の編集は米田が行った。

7　出土遺物の鑑定・分析は次の専門家に依頼し、有益な成果報告をいただくとともに、多くの御教示と御指導を賜った。記して深謝する次第である。

・石器石材の鑑定　　妹尾　護（倉敷芸術科学大学国際教養学部教授）
・炭化穀物種子の同定　　小西猛朗（元九州大学農学部教授）
　　椿坂恭代（札幌国際大学博物館客員研究員）
・黒漆様樹脂の分析　　北野信彦（くらしき作陽大学食文化学部助教授）

8　本書に使用した遺物の実測や実測図の浄写、遺構図の浄写等は、報告書作成担当の米田とその指導のもとに整理作業員が行った。

9　遺構写真については調査員が撮影したが、空中写真は有限会社アール・シー・スカイワークに委託した。また、遺物・炭化穀物種子の写真については、江尻泰幸氏の協力・援助を得た。

10　本書に関連する出土遺物および図面・写真・マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325－３）に保管している。

凡　　例

1　本書に用いた高度値は海抜高であり、方位は平面直角座標Ⅴ系（日本測地系）の座標北である。また第７図に記載した国土座標値は日本測地系に準拠しているが、世界測地系の座標値も一部に併記している。

2　本書掲載の遺構および遺物実測図の縮尺については明記してあるが、おもなものについて次のように統一している。

遺構

竪穴住居・段状遺構（1/80）　土壙・墓（1/40）　溝（1/80）

遺物

土器（1/4）　土製品（1/3）　石器・石製品（1/2・1/3・1/8）

金属製品（1/2・1/3）　玉類（1/1）

3　遺構全体図のなかで各遺構名を表示しきれない場合、次のように省略している。

竪穴住居 → **住**　段状遺構 → **段**　土壙 → **土**

4　竪穴住居と段状遺構の断面図に記した高度値は、複数の高度値がある場合を除き、１か所の表記としている。

5　本書に掲載した遺物の番号については、土器、土製品、石器・石製品、金属製品、木製品に分けて通し番号をつけ、土器以外については、次のアルファベットを番号の前に付している。

土製品：**C**　石器・石製品：**S**　金属製品：**M**　ガラス製品：**G**　木製品：**W**

6　本書に掲載した土器のうちで中軸線の両側に白抜きのあるものは、口径が全体の1/6以下のために口径が不確実なものである。

7　本書記載の遺構図中の被熱範囲等に付したトーンなどは、基本的に次のとおりに統一している。

被熱・焼土面　焼土塊　炭　炭化穀物種子

（トーン内の点線は強い被熱によって硬化した範囲を示す）

8　本書における土層名称は、基本的に各調査担当者の表記方法に従っている。

9　本書に掲載した第５図は、久世町発行の「久世町全図№２」（1/10,000）を複製し、加筆・縮尺改変したものである。

10　本書の第２章については、岡山県教育委員会が1999年に発行した『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136の「第２章」を一部修正のうえ再録した。

11　本書に用いた遺構・遺物の時代区分については、一般的な政治史区分に準拠したが、それを補うために文化史区分・世紀を併用している。弥生時代から古墳時代の時期区分は、岡山県教育委員会が1995年に発行した「津寺遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98の土器編年に基づいているが、一部は『堂の前遺跡』（美甘村教育委員会　1989年）を参照した。なお、古墳時代は７世紀前半まで、古代は７世紀後半から12世紀中頃とし、中世は12世紀後半から16世紀中頃を指し、近世は16世紀後半以降と捉えている。

本 文 目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第１章　調査の経緯と経過 ……（松本・大橋・米田） 1

　第１節　調査に至る経緯 …… 1

　第２節　調査の経過 …… 3

　第３節　報告書作成の経緯 …… 3

　第４節　調査および報告書作成の体制 …… 3

　第５節　日誌抄 …… 4

第２章　地理的・歴史的環境 ……（福田） 5

　第１節　地理的環境 …… 5

　第２節　歴史的環境 …… 6

第３章　発掘調査の概要 ……（物部・米田） 10

　第１節　遺跡の概要 …… 10

　第２節　弥生時代の遺構と遺物 …… 13

　第３節　古墳時代の遺構と遺物 …… 70

　第４節　古代以降の遺構と遺物 …… 74

第４章　まとめ ……（米田） 77

　第１節　発掘調査成果 …… 77

　第２節　久世町中原地区周辺における弥生時代の集落変遷 …… 80

付載　自然科学的分野における分析・鑑定

　樋ヶ鼻遺跡出土の炭化穀物種子について ……（小西猛朗・椿坂恭代・米田） 84

　樋ヶ鼻遺跡出土の弥生土器に付着固化した黒漆様樹脂の分析 ……（北野信彦） 86

石製品一覧表 …… 87

金属製品一覧表 …… 88

土製品一覧表 …… 88

小玉一覧表 …… 88

新旧遺構名称対照表 …… 88

図版

報告書抄録

挿図目次

第１図　久世町位置図（1/2,000,000）…… 1
第２図　調査地位置図（1/7,500）…… 1
第３図　トレンチ・調査区配置図（1/1,500）…… 2
第４図　Ｔ１・４～６断面（1/500）…… 2
第５図　樋ヶ鼻遺跡と周辺遺跡分布図（1/20,000）…… 6
第６図　基盤層の地質概略図（1/600）…… 10
第７図　遺構全体図（1/200）・断面（1/150）…… 11・12
第８図　弥生時代の遺構配置・支群区分（1/400）…… 13
第９図　Ａ群（竪穴住居１～10）①（1/80）…… 14
第10図　Ａ群（竪穴住居１～10）②（1/80）…… 15
第11図　Ａ群（竪穴住居１～10）変遷（1/300）…… 16
第12図　竪穴住居１・２（1/80）…… 17
第13図　竪穴住居１～３出土遺物（1/4・1/3）…… 17
第14図　竪穴住居10（1/80・1/40）…… 18
第15図　竪穴住居10出土遺物（1/4・1/2・1/3・1/8）…… 19
第16図　Ａ群（竪穴住居１～10）出土遺物①（1/4・1/3）…… 20
第17図　Ａ群（竪穴住居１～10）出土遺物②（1/2・1/3）…… 21
第18図　Ｂ群（竪穴住居11～15）（1/100）…… 22
第19図　Ｂ群（竪穴住居11～15）変遷（1/250）…… 23
第20図　竪穴住居11（1/80・1/40）…… 24
第21図　竪穴住居11出土遺物①（1/4）…… 25
第22図　竪穴住居11出土遺物②（1/4）…… 26
第23図　竪穴住居11出土遺物③（1/2・1/3・1/8）…… 27
第24図　竪穴住居12（1/80）…… 27
第25図　竪穴住居12出土遺物（1/4）…… 28
第26図　竪穴住居13（1/80）・出土遺物（1/4）…… 29
第27図　竪穴住居14（1/80）・出土遺物（1/4・1/3・1/8）…… 30
第28図　竪穴住居15（1/80）…… 31
第29図　竪穴住居15下層・柱穴出土遺物①（1/4）…… 32
第30図　竪穴住居15下層・柱穴出土遺物②（1/4）…… 33
第31図　竪穴住居15上層出土遺物（1/4）…… 34
第32図　竪穴住居15出土遺物（1/2・1/3・1/8・1/1）…… 35
第33図　Ｂ群（竪穴住居11～15）出土遺物（1/4・1/2・1/3）…… 36
第34図　Ｃ群（竪穴住居16～19）（1/80）…… 37
第35図　Ｃ群（竪穴住居16～19）変遷（1/200）…… 38
第36図　竪穴住居16（1/80）・出土遺物（1/1）…… 38
第37図　竪穴住居17（1/80）…… 38
第38図　竪穴住居18（1/80・1/40）…… 39
第39図　竪穴住居18出土遺物（1/4・1/3）…… 40
第40図　竪穴住居19（1/80・1/40）…… 41
第41図　竪穴住居19出土遺物（1/4・1/2）…… 42
第42図　Ｃ群（竪穴住居16～19）出土遺物①（1/4）…… 43
第43図　Ｃ群（竪穴住居16～19）出土遺物②（1/4・1/2）…… 44
第44図　Ｄ群北側（竪穴住居20～24）（1/80）…… 45
第45図　竪穴住居20（1/80）・出土遺物（1/4）…… 45
第46図　竪穴住居21（1/80）・出土遺物（1/4）…… 46
第47図　竪穴住居22（1/80）・出土遺物（1/4）…… 46
第48図　竪穴住居23（1/80）・出土遺物（1/4）…… 47
第49図　竪穴住居24（1/80）・出土遺物（1/4・1/3・1/8）…… 47
第50図　竪穴住居25（1/80）…… 47
第51図　竪穴住居26（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）…… 48
第52図　竪穴住居27（1/80）…… 48
第53図　Ｄ群南側（竪穴住居28・29、段状遺構１・２）（1/80）…… 49
第54図　竪穴住居28出土遺物（1/4）…… 49
第55図　竪穴住居29出土遺物（1/4・1/2）…… 50
第56図　段状遺構２出土遺物（1/4・1/3）…… 50
第57図　Ｅ群（竪穴住居30～33、段状遺構３・４）（1/80）…… 51
第58図　Ｅ群内柱穴出土遺物（1/4）…… 52
第59図　竪穴住居30（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）…… 52
第60図　竪穴住居31（1/80）・出土遺物（1/4）…… 53
第61図　竪穴住居31・段状遺構３出土遺物（1/4・1/2・1/3）…… 54
第62図　段状遺構３（1/80）…… 54
第63図　段状遺構３出土遺物（1/4）…… 55
第64図　段状遺構４（1/80）・出土遺物（1/4）…… 56
第65図　竪穴住居32・33（1/80）…… 56
第66図　被熱面１（1/40）…… 56
第67図　Ｆ群（竪穴住居34、段状遺構５～８）（1/80）…… 57
第68図　竪穴住居34（1/80）・出土遺物（1/4）…… 57
第69図　段状遺構５・６（1/80）・出土遺物（1/4・1/2・1/3）…… 58
第70図　段状遺構６出土遺物（1/8）…… 58
第71図　段状遺構７（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）…… 59

第72図　段状遺構８（1/80）・出土遺物（1/8）　……　59
第73図　竪穴住居35（1/80）・出土遺物（1/4）　……　59
第74図　土壙１～５配置図（1/200）　……　60
第75図　土壙１（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）　……　60
第76図　土壙２（1/40）・出土遺物①（1/4）　……　61
第77図　土壙２出土遺物②（1/2・1/3・1/8）　……　62
第78図　土壙３～５（1/40）・出土遺物（1/4）　……　62
第79図　土壙３出土遺物①（1/4）　……　63
第80図　土壙３出土遺物②（1/2・1/3）　……　64
第81図　土壙４・５出土遺物（1/4・1/2）　……　64
第82図　土壙６～14（1/40）・出土遺物（1/2・1/4）　……　65
第83図　土壙15～21（1/40）・出土遺物（1/4）　……　66
第84図　溝１・２（1/80）・出土遺物（1/4）　……　67
第85図　溝３～５（1/80）　……　67
第86図　北谷部包含層（1/150）・出土遺物（1/4・1/2・1/3）　……　68
第87図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2・1/3）　……　69
第88図　古墳時代の遺構配置図（1/600）　……　70
第89図　１号墳検出時地形測量図（1/150）　……　70
第90図　１号墳石室実測図（1/40）・出土遺物（1/4）　……　71
第91図　墓１（1/40）・出土遺物（1/4）　……　72
第92図　墓２（1/40）・出土遺物（1/4）　……　73
第93図　墓３（1/40）　……　73
第94図　たわみ１（1/80）・出土遺物（1/4）　……　73
第95図　遺構に伴わない遺物（1/4）　……　73
第96図　古代以降の遺構配置図（1/600）　……　74
第97図　段状遺構９・10（1/80）・出土遺物（1/4）　……　74
第98図　墓４～12（1/40・1/20）　……　75
第99図　墓５・８～10出土遺物（1/3・1/1・1/4）　……　76
第100図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/3・1/2）　……　76
第101図　樋ヶ鼻遺跡における弥生時代の遺構群の変遷（1/1,000）　……　77
第102図　久世町中原地区周辺における弥生集落の遺構配置・変遷（1/1,500・1/7,500）　……　81
第103図　久世町中原地区周辺における弥生集落の消長　……　82
第104図　樋ヶ鼻遺跡出土の黒漆様樹脂および日本産漆の赤外吸収スペクトル　……　86

表目次

第１表　土壙一覧表　……　66
第２表　墓４～12一覧表　……　75
第３表　樋ヶ鼻遺跡における弥生時代主要遺構の変遷　……　77
第４表　樋ヶ鼻遺跡における石器の器種組成　……　79
第５表　樋ヶ鼻遺跡における石器の主要石材　……　79
第６表　久世町中原地区周辺における弥生集落の円形竪穴住居数　……　80
第７表　岡山県内における弥生時代の穀物種子一覧表　……　85
第８表　石製品一覧表　……　87
第９表　金属製品一覧表　……　88
第10表　土製品一覧表　……　88
第11表　小玉一覧表　……　88
第12表　新旧遺構名対照表　……　88
第13表　樋ヶ鼻遺跡の炭化穀物種子計測表　……　図版 20

図版目次

巻頭図版１
　１　調査地周辺空撮（南から）
　２　調査区空撮（北西から）
巻頭図版２
　１　竪穴住居11炭化材・焼土塊検出状況（南東から）
　２　竪穴住居11西壁Ｉ－Ｊ（南東から）
　３　蛇紋岩製勾玉
　４　施溝痕のある鋳造鉄器
　５　ガラス小玉顕微鏡写真
図版１
　１　調査地遠景（北から）
　２　調査区空撮（北東から）

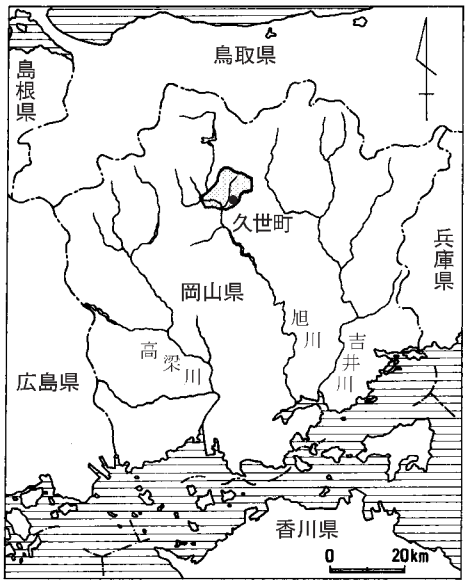
図版２
　１　調査区中央部全景（東から）
　２　調査区東側全景（北から）
図版３
　１　竪穴住居10（Ａ群）床面検出状況（北西から）
　２　Ａ群（竪穴住居１～10）完掘状況（北西から）
図版４
　１　Ｂ群（竪穴住居11～15）完掘状況（南西から）
　２　竪穴住居11東半 炭化材等検出状況（東から）
　３　竪穴住居11床面 炭化穀物種子出土状況（南東から）
図版５
　１　竪穴住居12・13完掘状況（南東から）
　２　竪穴住居14・15完掘状況（西から）
図版６
　１　Ｃ群（竪穴住居16～19）完掘状況（北から）
　２　竪穴住居18中央穴・間仕切り溝（北東から）
　３　竪穴住居19完掘状況（東から）
　４　竪穴住居19中央穴断面（南西から）
　５　竪穴住居19内土壙（東から）
図版７
　１　Ｄ群（竪穴住居20～25）全景（南西から）
　２　Ｅ群（竪穴住居30～33、段状遺構３・４）全景（西から）
図版８
　１　竪穴住居31完掘状況（北東から）
　２　竪穴住居32完掘状況（北西から）
　３　Ｆ群（竪穴住居34、段状遺構５～８）全景（北西から）
図版９
　１　土壙１（北西から）
　２　土壙２～５（西から）
　３　土壙４・５（東から）
図版10
　１　１号墳 主体部（北西から）
　２　１号墳 主体部（南西から）
　３　１号墳 主体部礫床（南西から）
図版11
　１　墓１（北から）
　２　墓１遺物出土状況（南から）
　３　墓２（北東から）
　４　墓３（北から）
　５　墓４・５（北東から）
　６　墓５遺物出土状況（北東から）
　７　墓６・７（西から）
　８　墓８～11（南西から）
図版12
　１　Ａ群（竪穴住居１～10）出土土器
　２　弥生土器（29）に塗布された黒漆様樹脂（約８倍）
　３　竪穴住居11出土土器
図版13
　１　竪穴住居13出土土器
　２　竪穴住居14出土土器
　３　竪穴住居15出土土器
図版14
　１　竪穴住居18出土土器
　２　Ｃ群（竪穴住居16～19）出土土器
図版15
　１　竪穴住居30出土土器
　２　竪穴住居31出土土器
　３　弥生土器の壺（370）底部内面に付着した黒漆様樹脂
　４　土壙２出土土器
　５　弥生時代の土製品
図版16
　１　サヌカイト製石器
　２　黒曜石製石器
　３　サヌカイト剥片（竪穴住居10）
　４　太型蛤刃石斧の未・完成品
図版17
　１　扁平片刃石斧の未・完成品
　２　磨製石包丁の未・完成品
図版18
　１　砥石
　２　その他の石製品
　３　モモ種子
　４　弥生時代の鉄器
図版19
　１　１号墳出土土器
　２　墓１・２出土土器
　３　墓５・８・９出土遺物
　４　古代以降の遺物
図版20
　竪穴住居11出土の炭化穀物種子

第１章　調査の経緯と経過

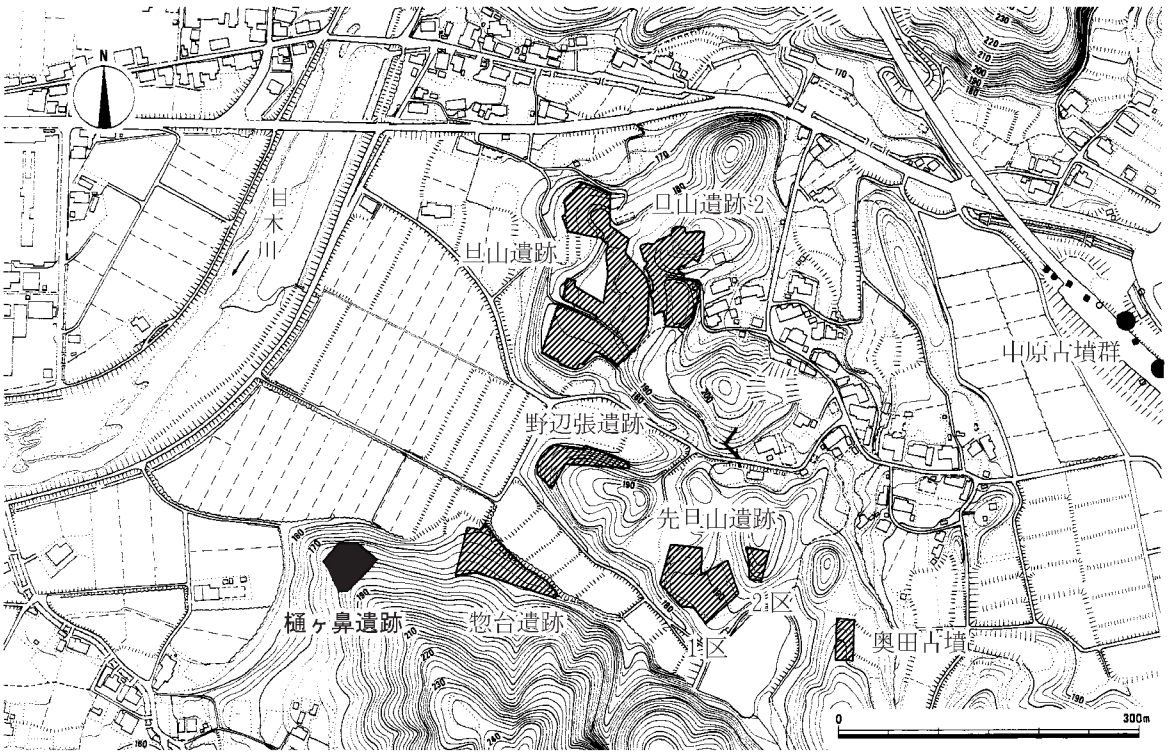
第１節　調査に至る経緯

（１）試掘調査に至る経緯

岡山県真庭地方振興局建設部(以下、真庭局)は、真庭産業団地への西側進入道路整備のため、緊急地方道路整備事業として「一般県道目木大庭線」の特殊改良工事を計画し、平成12年３月15日に岡山県教育委員会文化課(以下、文化課)に久世町中原・三崎地内の埋蔵文化財の有無について照会を行った。文化課は、この計画予定地が従前から周知された埋蔵文化財包蔵地ではないものの、近隣に「惣台遺跡」が所在することから、事業予定地内に埋蔵文化財が包蔵されていることが予想されるため、試掘調査の必要がある旨を３月24日に回答した。この回答を受けて真庭局は、文化課に対して試掘調査の依頼を３月28日に提出した。



第１図　久世町位置図（1/2,000,000）



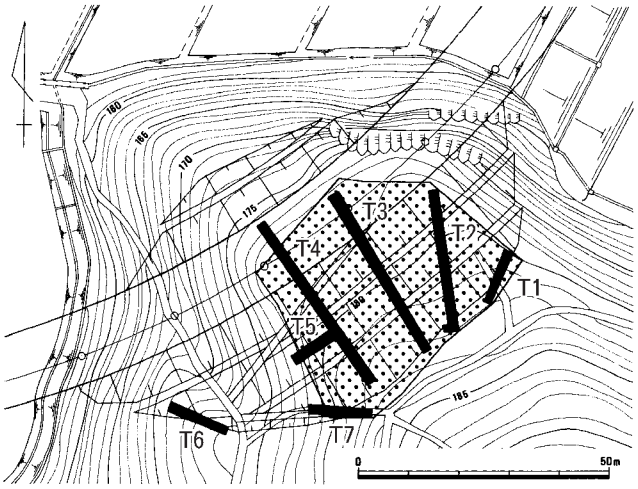
第２図　調査地位置図（1/7,500）

試掘調査依頼を受けた文化課は、事業予定地の現況が山林であるため、翌年の平成13年４月12日に真庭局と現地確認ならびに調査実施にあたっての条件整備等の協議を行った。５月22日には現地において、文化課、真庭局と調査実施機関である岡山県古代吉備文化財センター(以下、センター)の三者で６月18日からの試掘調査に向けての最終的な調査条件整備の確認を行った。　　（松本和男）

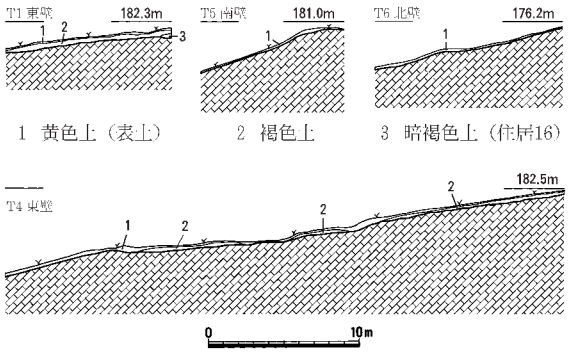
（２）試掘調査とその後の経過

試掘調査は、平成13年度国庫補助事業の一つとして、センターが平成13年６月18日から７月２日にかけて実施した。天候等のため、実質の現場作業は９日間である。調査は、北西に突出する丘陵部の標高180ｍ付近のやや平坦になる箇所を中心に、等高線に直交するようにＴ１～Ｔ７の計７本の幅２ｍのトレンチを設定し、重機による表土掘削の後、遺構・遺物の有無の把握に努めた（第３図)。

調査の結果、遺構は主にＴ２・Ｔ３の南半を中心に検出された。この試掘調査時に認識された遺構は、重複した竪穴住居７軒以上、土壙６基などである。これらの遺構は、本発掘調査によって第７図に示すように全容が把握されている。また、Ｔ３の北半部では広い範囲で竪穴住居の遺構埋土と考えた黒褐色土が厚く堆積しており、重複した遺構が良好に遺存していることが想定された。各トレンチからの出土遺物は、主に弥生時代中期後半から後期にかけての弥生土器であり、検出されたこれらの遺構の時期を示すものと考えられた。また、少量ではあるが６世紀代の須恵器、中世の土師器も出土していることから、遺構を限定できなかったものの、この時期のものも存在する可能性が高いと推測された。このほか、調査前の聞き取りやＴ２の状況から、Ｔ１～Ｔ２付近において近世墓が広がることも推測された。



第３図　トレンチ・調査区配置図（1/1,500）



第４図　Ｔ１・４～６断面（1/500）

以上のことから、この丘陵上では、隣接する惣台遺跡と同様、弥生時代中期から後期の集落が展開し、その後も古墳時代から中近世の遺構が営まれた可能性が高いと判断された。

新規発見されたこの遺跡は、小字名から樋ヶ鼻遺跡と名称され、センターから平成13年７月５日付けで「試掘調査の報告」が提出された。この報告の内容を受け、文化課は事業担当の真庭局と度重なる協議を行い、設計変更の困難な遺構が広がる丘陵部2,280㎡を調査対象とし、平成14年度上半期に本発掘調査を行うことに合意した。なお、文化財保護法第57条の３に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」は真庭局から平成13年８月24日付で提出され、平成13年９月11日付教文埋第714号で県教育委員会から発掘調査の指示が出されている。　　（大橋雅也）

第２節　調査の経過

平成13年度の試掘調査の成果を受け、2,280㎡を対象に発掘調査を実施することとなったため、平成14年４月１日付けで文化財保護法第58条の２に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を提出し、４月８日からセンター職員３名が調査にあたった。発掘調査は重機で表土を除去した後、人力で遺構の検出・掘り下げを行い、随時、遺構の実測・写真撮影を行った。調査の進展に伴い、予想もしなかった古墳石室の発見や、弥生時代の遺構密度が濃厚で、竪穴住居が複雑に重なり合っていることも判明し、調査は困難を極めた。しかし、最終的に多大な成果が得られ、９月21日には現地説明会を開催し、県全域から約170名が来跡した。発掘調査は９月26日に終了し、９月27日付けで勝山警察署長あてに文化財保護法第59条の２に基づく「埋蔵文化財発見通知」を提出した。成果として、弥生時代中～後期の集落跡、古墳時代の墓、近世墓を確認し、遺構総数92、遺物箱数58を数える。　（米田克彦）

第３節　報告書作成の経緯

報告書作成は、平成15年４月１日から12月31日までの期間、センターにおいて調査員１名が実施した。遺物整理は、洗浄・注記を調査終了までに完了していたため、土器の復元、石製品・金属製品の抽出から始め、実測・写真撮影を随時行った。遺物の実測は主に整理作業員、実測の一部・浄写は調査員が行い、遺物整理台帳も併せて作成した。遺構の図面整理・下図の作成は調査員、浄写は調査員の指導のもと整理作業員が行った。報告書には竪穴住居35軒、段状遺構８基、土壙21基、溝５条、古墳時代の小竪穴式石室１基、土壙墓３基、近世墓９基など、調査で確認した全遺構をほぼ収載できた。遺物は土器519点、土製品４点、石製品98点、金属製品23点、玉類７点を掲載した。また、石器石材の鑑定、炭化穀物種子の同定、黒漆様樹脂の分析を専門家に依頼した。報告書の構成は各時代で遺構別に配したが、弥生時代の竪穴住居・段状遺構は各群ごとにまとめて掲載している。　（米田）

第４節　調査および報告書作成の体制

平成13年度（2001年度）

岡山県教育委員会

教 育 長	宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長	國貞 忠克

文化課

課　　長	松井 英治
課長代理（埋蔵文化財係長）	松本 和男
課長代理	藤井 守雄
主　　任	奥山 修司

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長	正岡 睦夫
次　　長	能登原 巧
＜総務課＞	
課　　長	安西 正則
総務係長	田中 秀樹
主　　任	小坂 文男
＜調査第一課＞	
課　　長	高畑 知功
課長補佐（第一係長）	平井 泰男
文化財保護主査	大橋 雅也(試掘担当)

平成14年度（2002年度）

岡山県教育委員会

教 育 長　宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長　三浦 一男

文化課

課　　長　西山　猛
課長代理（埋蔵文化財係長）松本 和男
課長代理　宮田 正彦
文化財保護主任　尾上 元規
主　　事　浜原 浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　正岡 睦夫
次　　長　藤川 洋二

＜総務課＞

課　　長　安西 正則
課長補佐（総務係長）　田中 秀樹
主　　任　小坂 文男

＜調査第二課＞

課　　長　伊藤　晃
課長補佐（第一係長）　中野 雅美
文化財保護主幹　福田 正継（調査担当）
文化財保護主事　物部 茂樹（調査担当）
文化財保護主事　米田 克彦（調査担当）

平成15年度（2003年度）

岡山県教育委員会

教 育 長　宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長　三浦 一男

文化財課

課　　長　西山　猛
課長代理　田村 啓介
課長補佐（埋蔵文化財係長）平井 泰男
文化財保護主任　尾上 元規
主　　事　浜原 浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　正岡 睦夫
次　　長　藤川 洋二
文化財保護参事　松本 和男

＜総務課＞

課　　長　中田 哲雄
課長補佐（総務係長）　笏本 弘忠
主　　任　小坂 文男

＜調査第二課＞

課　　長　伊藤　晃
課長補佐（第二係長）　江見 正己
文化財保護主事　米田 克彦（報告書担当）

調査・報告書作成協力者

家田淳一（佐賀県立博物館）、池上　博（久世町教育委員会）、白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）、村上恭通（愛媛大学）、舩津昭雄（久世町文化財保護審議会委員）

第５節　日誌抄

平成13年（2001年）

６月18日（月）　試掘調査開始
７月２日（月）　試掘調査終了

平成14年（2002年）

４月１日（月）　発掘調査準備
４月８日（月）　発掘資材搬入、発掘調査開始
９月18日（火）　ラジコンヘリによる空撮
９月21日（土）　現地説明会（参加者約170名）
９月25日（水）　発掘資材搬出
９月26日（木）　発掘調査終了

平成15年（2003年）

４月１日（火）　報告書作成・遺物整理開始
12月31日（水）　報告書作成・遺物整理終了

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

岡山県真庭郡久世町は、ＪＲ姫新線や中国自動車道が建設された津山から新見にかけて連なる盆地列のほぼ中央に位置する山間部の町で、周囲に湯原、勝山、落合、久米、鏡野の各町と富村が境を接している。現在の町域は昭和30年に確定したもので、旧久世町と美和村の合併による面積75.12ｋ㎡を測るが、その81％は山林である。この地域の気候は比較的温暖で雪は少なく、台風や地震などの自然災害もほとんどない。

久世町の地形は、旭川とその支流である目木（めき）川が形成した沖積平野を中心に、北は中国山地、南は吉備高原の一部が含まれる。北部の中国山地は高くて急峻で、町内の最高所である三坂山の標高903ｍを筆頭に、擂鉢山で897ｍに達し、その南面は多くの深い谷が入り込んでいる。急峻な山地の麓には、標高200～300ｍの低い山地または丘陵が横たわり、沖積平野との境をなしている。一方、沖積平野は極めて平坦となっており、久世町の中心地として商工業の集積が進んでいる。

ここで、久世町全域の地理的環境をもう少し細かく理解するために、町内を流れる大小の河川の流路を上流に向かって辿りながら、周辺の地形を概観してみたい。

久世と勝山の町境から目木川の合流地を経て落合町に至る範囲の旭川は、川幅が広くて緩やかな曲線を描きながらゆったりと流れるが、上流の勝山町以北では川幅が極端に狭くなって流路が屈曲し、全般にわたって深い谷地形を形成している。

旭川と目木川が合流する中島の地点から、北東方向に向かって目木川を約３㎞ほど遡ると、東方向の前方に笹向山から北北西の方向に突き出した山塊を望むことができる。ここは久世と落合の町境になる丘陵が、沖積平野の方向へ舌状に張り出しているため、目木川の流れを妨げることになり、その上流の流路が緩やかに湾曲して川幅を広くし、丘陵に囲まれた沖積地に水田を形成している。一方、目を西方向に転ずれば、砥石山の麓から南方向に張り出した長くて広い台地が存在し、その先端部分に久世中学校がある。この台金屋（だいかなや）を中心に東の目木から西の鍋屋まで続く台地は、旭川や目木川の流域に所在する沖積平野を目前にし、眼下の水田面から低い地形になっている。

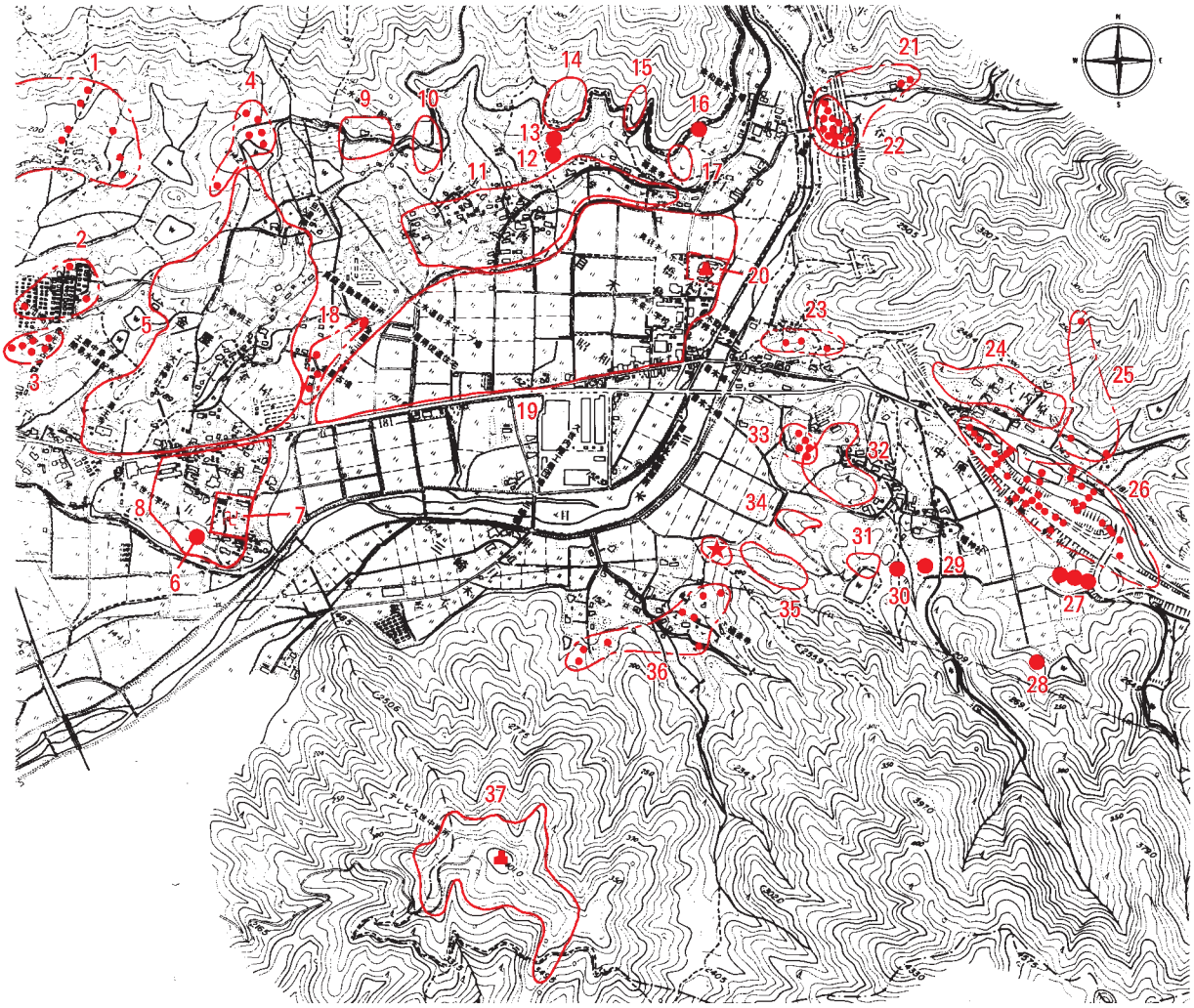
旭川の左岸に位置する久世町久世の旭町と下町の境界地点には、元町で合流した三坂川と小谷川が北方向から流入している。三坂山山麓の三坂川と小谷川に挟まれた地域は、上面が平坦で低い丘陵が所在する。さらに小谷川の上流や右岸の宮芝グラウンド周辺にも、旭川流域の沖積平野に面した緩斜面が認められる。

旭川右岸には主要な河川がなく、横畝川などの小河川が旭川に向かって北流するが、水源からの距離が極めて短く、落合町との境界に位置する急峻な山の麓が、旭川の河原になっている。

このような地形である久世町の地理的環境から遺跡の立地条件を推定すれば、旭川と目木川に挟まれた目木から台金屋を経て鍋屋に至る台地上が最も良好で、目木川の左岸に位置する真庭産業団地の南区域周辺がそれに続き、旭川の右岸地域は良くないと思われる。　（福田正継）

第２節　歴史的環境

久世町に人間が最初に足を踏み入れたのは、縄文時代早期に遡ると推定される。その傍証となる最古の遺物は、楕円や格子目の押型文を有する縄文土器で、上野遺跡[1]、大旦遺跡[2]、薬王寺裏山遺跡[3]、長光寺山遺跡[4]で出土している。上野遺跡では前期になっても人間が活動した痕跡が認められ、爪形文や貝殻条痕文の土器が採集されている。中期には目木川上流の江森遺跡[5]が知られるだけであるが、後期になると上述の上野遺跡をはじめ、三坂川流域の三栄神社裏山遺跡[6]や小谷川流域の宮芝遺跡[7]で、磨消縄文を有する土器が出土している。上野遺跡では土壙が検出され、外反した口縁端部の上部外面に縄文帯が存在し、頸部は無文で胴部の縄文との境界部分に１条の沈線を巡らせるものや、頸部から口縁



1	多田古墳群	9	細ヶ遺跡	17	引屋敷遺跡	25	大内原古墳群	33	旦山古墳群
2	蛇ノ尾古墳群	10	多田須遺跡	18	金屋古墳群	26	中原古墳群	34	野辺張遺跡
3	長光寺古墳群	11	西口遺跡	19	日木埋没条理	27	（古墳群）	35	惣台遺跡
4	新池古墳群	12	戸坂１号墳	20	日木構	28	水神ヶ峪遺跡	36	三崎古墳群
5	大旦遺跡	13	戸坂２号墳	21	木谷古墳群	29	銅々古墳	37	篠向城跡
6	五反１号墳	14	戸坂遺跡	22	木谷遺跡	30	奥田古墳	★	**樋ヶ鼻遺跡**
7	五反廃寺	15	上ノ山遺跡	23	宮ノ山古墳群	31	先旦山遺跡		
8	五反遺跡	16	（経塚）	24	惣田遺跡	32	旦山遺跡		

第５図　樋ヶ鼻遺跡と周辺遺跡分布図（1/20,000）

部にかけて外反し、内外面にヘナタリによる条痕が認められるものなどの彦崎ＫⅡ式と思われる土器とともに、石鏃３本と叩き石や石錘が共伴した。さらに椀形土器の完形品が出土した落とし穴も存在した[8]。晩期の遺物として五反遺跡[9]の鉢形土器が古くから知られていたが、真庭産業団地の建設に伴って発掘調査が実施された旦山遺跡[10]で、65基にもおよぶ落とし穴が検出され、突帯文土器が出現する直前の資料として顕著な、谷尻遺跡の№130土壙内から出土した一括土器[11]に酷似した３点の深鉢形土器の破片が出土した。この土器片が出土した落とし穴は、平面形が楕円形または長方形になって埋土は火山灰が風化した腐植土の「黒ボコ」で、底部に逆茂木を埋め込む深い柱穴状の穴が存在した。平面形が円形を呈して埋土が黒ボコの下層に堆積している「灰色火山灰」で、底部が尖り底になって柱穴状の穴がないものも認められた。この２種類のタイプの落とし穴は、前者が33基、後者が24基、どちらのタイプにも属さないものが８基となっていた。旦山遺跡では、２か所の地点で２種類のタイプの落とし穴が切り合っているのが確認され、どちらも前者が後者を切っていたので、前者が新しくて後者が古いことが判明したが、後者がどれほど古く遡るのか、遺物が何も出土しなかったので分からない状況である。

弥生時代になると、前述の五反遺跡から前期後葉の壺形土器や甕形土器が出土しており、北西方向に位置する現在の久世中学校運動場南端付近の畑では、多量のサヌカイトの細片とともに中期中葉の甕形土器の破片も採集されている[12]。さらに北方向の大旦遺跡では、瓦粘土採土中に後期前葉の貯蔵穴が９基も発見され[13]、竪穴住居が検出された[14]。この五反地区から大旦地区にかけては低丘陵上に広大な緩斜面が展開し、旭川と目木川によって形成された沖積平野を背景に、前期後葉から継続して集落を拡大するだけの立地条件が備わっており、久世町における一大拠点集落跡が所在すると考えられる[15]。一方、中期後葉から後期前葉にかけては、集落跡と思われる遺跡が急激に増大する。目木川の流域の左岸には、上野遺跡や木谷遺跡[16]だけでなく、樋ヶ鼻遺跡と近接した惣台遺跡[17]、野辺張遺跡[18]、先旦山遺跡[19]、旦山遺跡などが存在する。上野遺跡と旦山遺跡は低丘陵上に所在する遺跡で、竪穴住居や貯蔵穴が数多く存在して遺跡の規模も大きいが、残る４遺跡は丘陵の斜面などの狭い場所に立地し、遺跡の規模そのものは小さい。先旦山遺跡では、丘陵の頂部に見張り台と思われる１軒の大形竪穴住居が存在し、低位部に周囲を溝で囲まれた竪穴住居群を検出した。この溝内の竪穴住居群を出土した土器から推定すると、１軒もしくは２軒の竪穴住居が、少しずつ場所を変えながら建て続けられたと考えられた。惣台遺跡や野辺張遺跡でも同時期に存在した竪穴住居は、せいぜい１軒か２軒だったと思われる。弥生時代の墳墓は不明であったが、平成12年に真庭産業団地で地滑り災害が発生する恐れが生じ、旦山遺跡の応急的な発掘調査が実施され、後期後葉に属する５基の土壙墓が検出された[20]。

古墳時代になると古墳が数多く築造されるが、久世町内の前方後円墳は惣古墳群のアタゴ山５号墳[21]と堂ノ旦１号墳[22]だけで、どちらも規模が小さい。また樋ヶ鼻遺跡の北方向に位置し、国道181号北側の目木川に向かって舌状に張り出した丘陵上には、宮ノ山１号墳[23]という前方後円墳が所在するが、現地踏査を行った結果では、２基の方墳が連なっているのかもしれないという印象をもった。５世紀中葉になると造墓活動が活発になり、中原古墳群[24]や旦山古墳群[25]のように低平な墳丘を有する方墳や円墳が丘陵の尾根上に数多く築造される。両古墳群の埋葬施設はほとんどが箱式石棺であるが、木棺直葬のものも蛇ノ尾３号墳や初岡孵卵場敷地内古墳などであり、比較的古い須恵器が数点出土している[26]。さらに後期になると町内各所に群集墳が形成され、埋葬施設が横穴式石室の古墳が出現する。大正時代に発掘された富尾古墳群中の丸山12号墳（小倉見古墳）からは、環頭柄頭が出土して注目され[27]、木

谷古墳群の11号墳では、装飾付脚付子持壺やトンボ玉を含む多量の遺物が存在した。[28] また石室内に陶棺が入れられていた古墳も多く、ゴマガ山古墳、木谷４・５号墳、小谷２・６号墳などが知られている。[29] 古墳時代の集落跡は、古式土師器が多く出土して竪穴住居も確認された宮芝遺跡が、古墳時代初期の遺跡として著名である。[30] 昭和36年の道路工事中に古代の須恵器が土師器の高杯とともに発見された鍋屋遺跡[31]も知られているが、竪穴住居などの遺構は確認されていない。平成７年の真庭産業団地の建設に伴う発掘調査で、惣台遺跡と先旦山遺跡から竪穴住居や掘立柱建物が検出され、古墳時代後期の小規模な集落の様子を知ることができた。[32]

７世紀中葉の白鳳時代になると、五反廃寺[33]が造営される。この寺は大庭郡大庭郷にあり、造営氏族として大庭臣が考えられる。この大庭臣は『続日本紀』天平神護２年(766)条に、「美作国人従八位下白猪臣大足賜姓大庭臣」とあり、美作国人白猪臣大足が大庭臣を賜姓されたことが分かる。そして吉備での「白猪」は白猪屯倉との関係が推察され、555年の白猪屯倉設置に伴い大和政権から派遣された白猪史氏に関わるものと推察される。[34] なお東西方向に所在する出雲街道を挟んで北東の地点には、10数点の墨書土器とともに陶製円面硯や獣足壺の脚部が出土した、郡衙推定地の西口遺跡[35]が存在する。奈良時代や平安時代の古代の遺物は、大旦遺跡や先旦山遺跡でも採集されているが、[36] 旦山遺跡では２棟の掘立柱建物が検出された。[37] また特異な遺構として、４基の火葬墓が発見された上野火葬墓[38]や上口地区と富尾地区の経塚[39]がある。なお整然と条里制地割が残されている目木条里[40]は、施行の時期について大化前代から平安時代まで各説があったが、発掘調査を実施した結果、鎌倉時代以降のものであることが判明した。

中世になると、発掘調査によって検出された遺構や出土した遺物は、極端に少なくなる。旦山遺跡では、地形の高い部分に溝が巡らされた２棟の大形掘立柱建物が存在し、青磁碗の破片や宋銭が確認され、離れた位置に土師質の小皿が伴う小形掘立柱建物も検出された。また土壙は６基あり、中国製の古銭が14枚も見つかった小規模で浅い円形のものや、炭の入った方形のものも認められた。[41] 確実に中世に属する墳墓は中原古墳群の４基だけで、土器を石で囲っただけのものや多くの人頭大から拳大の割り石に覆われたものが存在した。[42] 中世か近世か判断できない遺構は、木谷古墳群で数多く検出した土壙墓群がある。[43] 樋ヶ鼻遺跡の南西方向に位置する山頂には、篠向城[44]が築造されている。岩屋城や高田城とともに美作西部の拠点的山城で、その縄張りは広大かつ複雑になっており、主要な３つの郭、土塁、堀切、竪堀などで構成されているという。赤松氏と山名氏の美作国守護をめぐる争いの時期である南北朝時代から16世紀初頭にかけては、久世町の山城に関する記録自体がほとんどないのが実態だが、この篠向城に関しては、天正16年(1361)に当時赤松貞職の居城であった篠向城を山名時氏父子が攻撃したことや、文亀年間(1501～1503)に山名右近亮が守備する篠向城を三浦氏が攻撃したことなどが記録に残されている。

近世の時期と確認された土壙墓群は、先旦山遺跡と水神ヶ峪遺跡[45]で検出され、人骨以外に肥前陶器の皿、煙管、鋏、毛抜き、数珠玉、寛永通寶などが出土した。後者は、等高線に沿って帯状に列をなして存在し、上面に墓石が置かれていた。また前者には大形の掘立柱建物があり、近接して便所と思われる２基の土壙が伴っていた。[46] なお近世の久世で特に著名な人物は、名代官早川八郎左衛門正紀である。関東地廻代官に転ずるまで天明10年(1787)から享和元年(1801)の14年間に、数多くの遺徳をしのぶ物語が伝えられている。その久世代官陣屋は、久世河岸から年貢積出しに設けた御蔵の敷地を転用したもので、古図に位置・形・建物が示されているが、[47] 発掘調査は行われていない。　　（福田）

註

（１）山磨康平「上野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』91　日本道路公団広島建設局津山工事事務所・岡山県教育委員会　1994年
（２）松本和男「大旦遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』57　岡山県教育委員会　1984年
（３）松本和男「久世町内の縄文遺跡」『久世町史』　久世町教育委員会　1975年
（４～７）註３に同じ。江森遺跡は『久世町史』では余野上遺跡となっている。
（８）註１に同じ。
（９）註３に同じ。
(10) 浅倉秀昭「旦山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999年
(11) 高畑知功ほか「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1976年
(12) 船津昭雄「久世町内の弥生時代遺跡」『久世町史』　久世町教育委員会　1975年
(13) 註12に同じ。
(14) 註２に同じ。
(15) 松本和男「久世町内の弥生時代遺跡の展開」『久世町史』　久世町教育委員会　1975年
(16) 福田正継「木谷古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　日本道路公団広島建設局津山工事事務所・岡山県教育委員会　1995年
(17) 福田正継「惣台遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999年
(18) 福田正継「野辺張遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999年
(19) 福田正継「先旦山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999年
(20) 扇崎由・松本和男・福本明「旦山遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』161　岡山県教育委員会　2001年
(21) 久世町教育委員会『久世町埋蔵文化財分布地図』　1989年
(22・23) 註21に同じ。
(24) 福田正継・山磨康平「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　日本道路公団広島建設局津山工事事務所・岡山県教育委員会　1995年
(25) 福田正継「旦山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999年
(26) 松本和男「久世町内の古墳」『久世町史』　久世町教育委員会　1975年
(27) 木村豪章「古墳時代の基礎的研究稿－資料(1)－」『東京国立博物館紀要』第16号　東京国立博物館　1980年
(28) 註16に同じ。
(29～31) 註26に同じ。
(32) 註17と註29に同じ。
(33) 池上博「五反廃寺」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』２・４　久世町教育委員会　1997・2000年
(34) 亀田修一「吉備における古代寺院の出現とその背景」『古代寺院の出現とその背景』　埋蔵文化財研究会・第42回研究集会実行委員会　1997年
(35) 註33に同じ。
(36) 註２・19に同じ。
(37) 註10に同じ。
(38) 松本和男「古代の遺跡」『久世町史』　久世町教育委員会　1975年
(39) 註38に同じ。
(40) 松本和男「久世町目木条里発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』12　岡山県教育委員会　1982年
(41) 註10に同じ。
(42) 註24に同じ。
(43) 註16に同じ。
(44) 池上博「羽庭城」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』３　久世町教育委員会　1999年
(45) 浅倉秀昭「水神ヶ峪遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999年
(46) 註19に同じ。
(47) 中野美智子「幕府領の代官支配」『久世町史』　久世町教育委員会　1975年

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概要

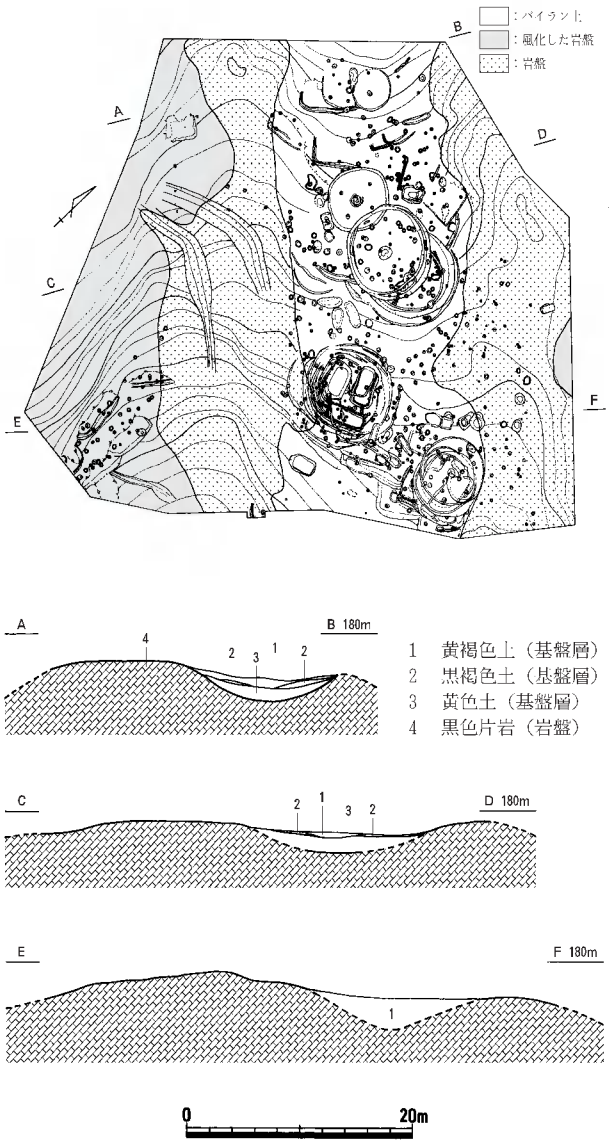
樋ヶ鼻遺跡は久世町中原樋ヶ鼻799ほかに所在し、現在の大字中原と三崎の境にあたる。遺跡は丘陵先端部に立地し、調査区の南東方向は急斜面で標高400ｍ前後の山塊が連なる。また目木川が北から西へ湾流する部分にあたり、遺跡が立地する丘陵先端部は周辺では最も目木川の方へ突き出ており、目木・台金屋に広がる小平野を眺望できる環境にある。

遺跡の地形は、南東から北西に下る緩斜面を有し、調査区の南と北にそれぞれ岩盤（黒色片岩）が露呈し、それらの岩盤の間は小さな谷部を形成していた。そしてその小さな谷部にはバイラン土が堆積し、それが遺跡の基盤層となっていた。第７図断面の第１層の表土と第３層の褐色土（腐植土）を除去すると、岩盤・基盤層となり、この上面が遺構検出面となる。調査地は、海抜高180ｍ前後であり、平野部との比高差は約30ｍである。調査対象面積は2,280㎡であるが、調査地周辺は崖面であったため、実際に調査できた範囲は約1,500㎡ほどである。

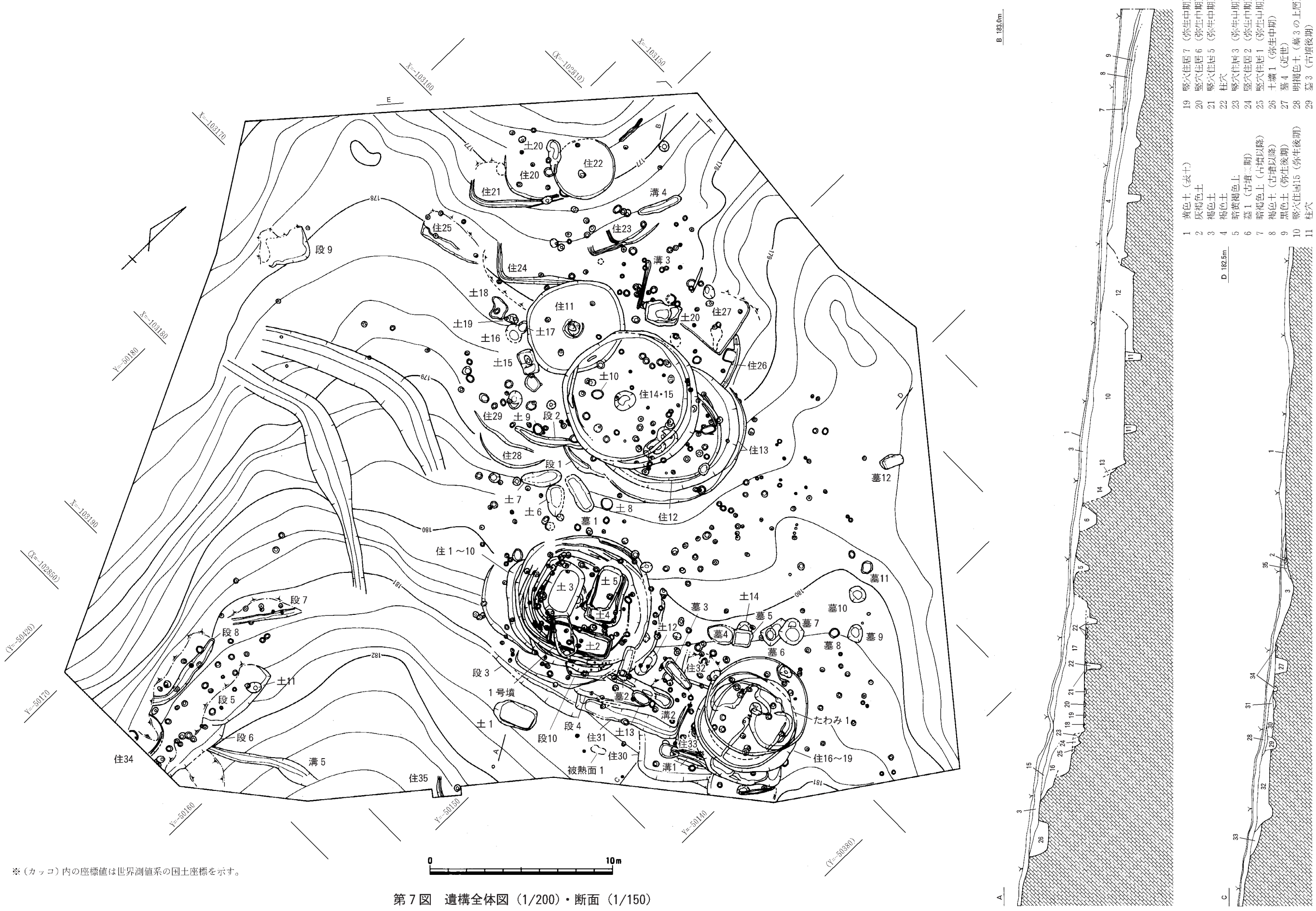
今回の調査で確認した遺構の種別は、弥生時代中期後半～後期中葉の集落跡、古墳時代後期の小竪穴式石室・土壙墓、中世の段状遺構、近世墓などである（第７図）。

弥生時代の遺構は確認数が多く、調査区の全体で認められた。ただ弥生時代の竪穴住居・段状遺構は、強固な岩盤上には認められず、小さな谷部に堆積した基盤層、もしくは調査区南側の風化した岩盤上に集中しており、弥生時代の遺構配置が地形・地質に規制されていたと考えられる（第６図）。

古墳時代以降は基本的に墓域に利用されている。古墳時代の遺構は、調査区中央部で後期の小竪穴式石室をもつ古墳１基、土壙墓３基などを確認した。近世墓は９基を検出し、調査区の東側に整然と配置されていた。　（米田）



第６図　基盤層の地質概略図（1/600）



※（カッコ）内の座標値は世界測値系の国土座標を示す。

第７図　遺構全体図（1/200）・断面（1/150）

第２節　弥生時代の遺構と遺物

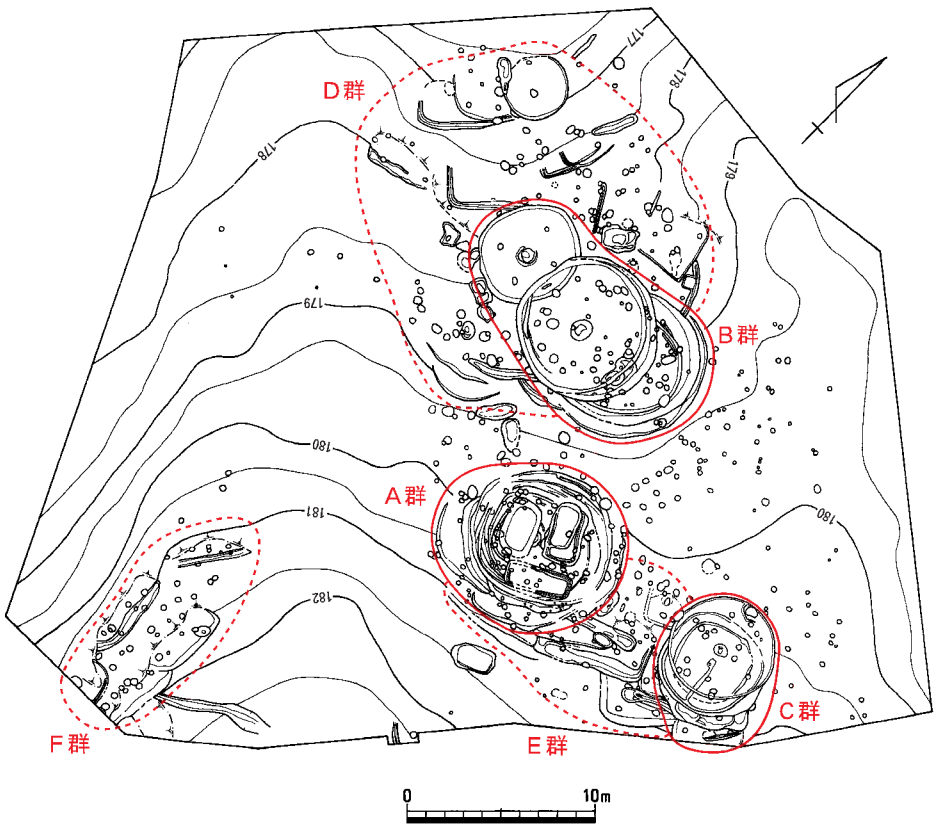
（１）概要

弥生時代の遺構は本遺跡において遺構数が最も多く、その配置は調査区全体にわたっている。調査区周辺の地形を考慮すると、調査区の南東方向の斜面上方に集落が続く可能性も否定できないが、その斜面が比較的急峻であることから、弥生時代の集落範囲は調査区内にほぼ収まると考える。

今回の調査で確認した弥生時代の遺構は、円形の竪穴住居24軒、長方形の竪穴住居11軒、段状遺構８基、土壙21基、溝５条、被熱面１のほか、柱穴108個である。時期別に各遺構数をあげると、弥生時代中期後半は竪穴住居23軒のうち円形13軒・長方形10軒（うち２軒は後期前葉以前）、段状遺構４基、土壙６基、後期初頭から中葉にかけては竪穴住居12軒のうち円形11軒・長方形１軒、段状遺構４基、土壙５基、溝２条などである。柱穴は強固な岩盤を掘削しているものが多く認められた。

調査区は第６図に示したように岩盤が南北に存在し、それらに挟まれる小さな谷部に堆積した基盤層上に弥生時代の遺構が集中し、地形・地質に制約された遺構配置と言える。特に円形の竪穴住居は、調査区中央部に密集して複雑に重なり合った状態で確認された。遺構は種別ごとに配置地点がまとまっており、円形の竪穴住居群はＡ～Ｃ群、長方形の竪穴住居・段状遺構はＤ～Ｆ群に大別できる。各群の併存関係は、中期後葉がＡ・Ｄ群、後期前葉がＢ・Ｅ群、後期中葉がＣ・Ｆ群と捉えている。

次項では、第８図のように竪穴住居・段状遺構をＡ～Ｆ群に分け、各群ごとに概説する。　（米田）

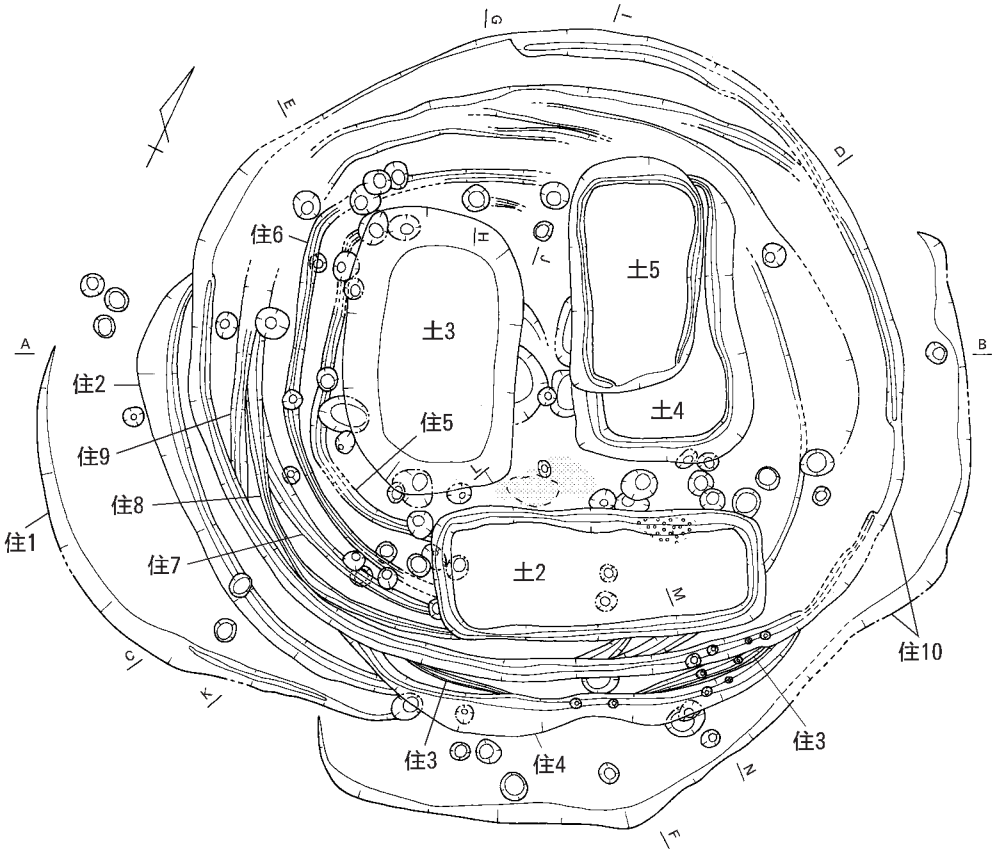


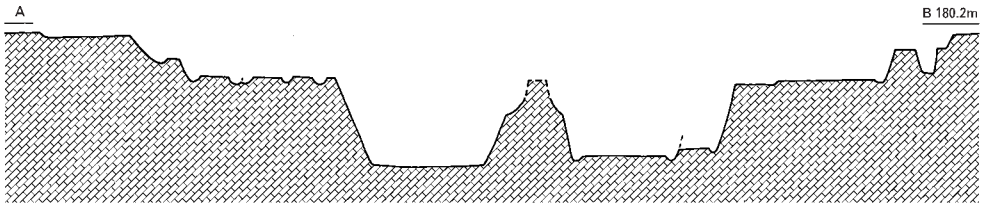
第８図　弥生時代の遺構配置・支群区分（1/400）

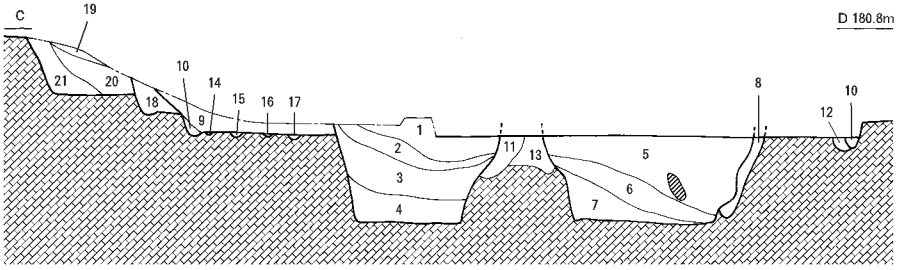
（２）竪穴住居・段状遺構

Ａ群（竪穴住居１～10）（第９～17図、図版３）

Ａ群は竪穴住居１～10、土壙２～５のまとまりであり、調査区中央部の東側に位置する。Ａ群の上



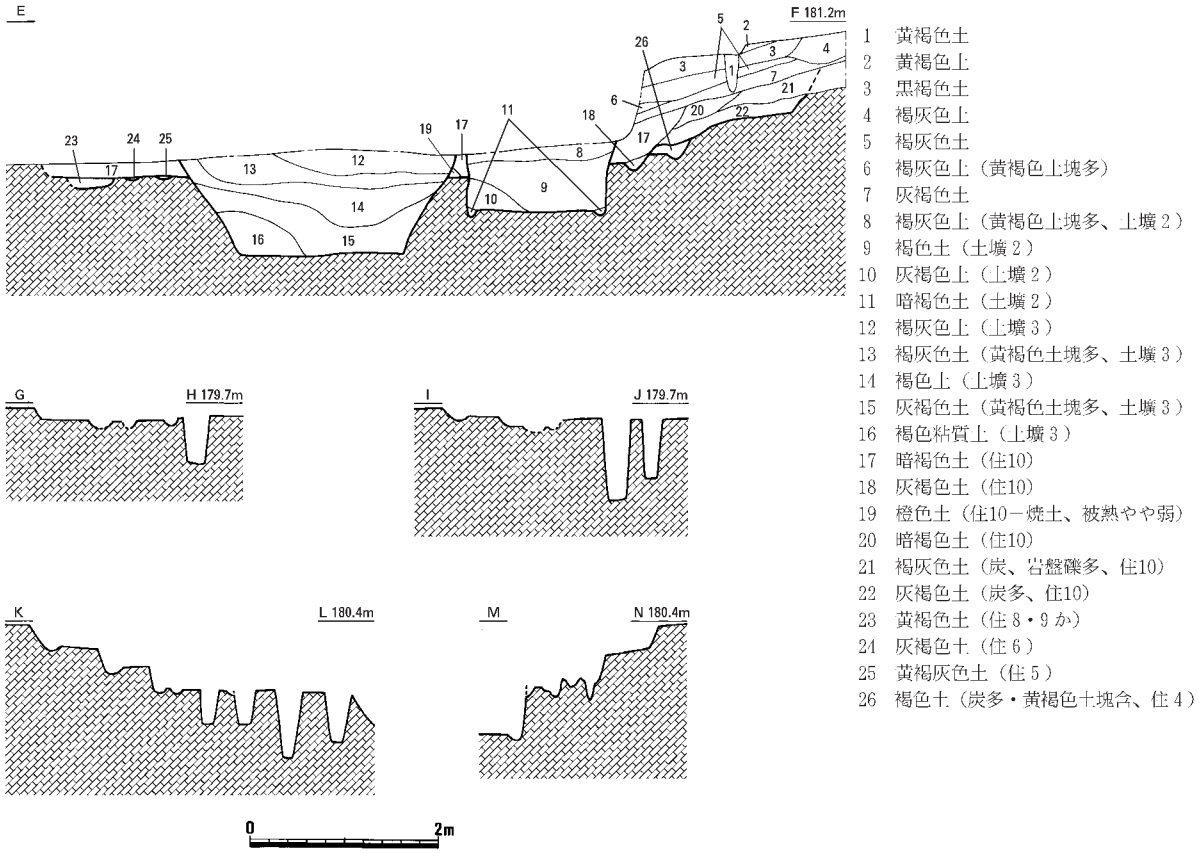




1　褐灰色土（土壙２）
2　褐灰色土（黄褐色土塊多、土壙２）
3　褐色土（土壙２）
4　灰褐色土（土壙２）
5　暗褐色土（炭多、土壙５）
6　黄色土塊（土壙５）
7　褐灰色土（炭多、土壙５）
8　暗褐色土（土壙４）
9　暗褐色土（住10）
10　灰褐色土（住10）
11　灰褐色土（住10の中央穴）
12　黄褐色土（住８・９か）
13　褐色土（炭・黄褐色土塊）
14　黄褐色土（住８）
15　黄褐色土（住７）
16　灰褐色土（住６）
17　黄褐灰色土（住５）
18　暗褐色土（炭多、黄褐色土塊含、住２）
19　褐色土（住１）
20　黄褐灰色土（岩盤礫多、住１）
21　黄褐灰色土（岩盤礫多、住１）

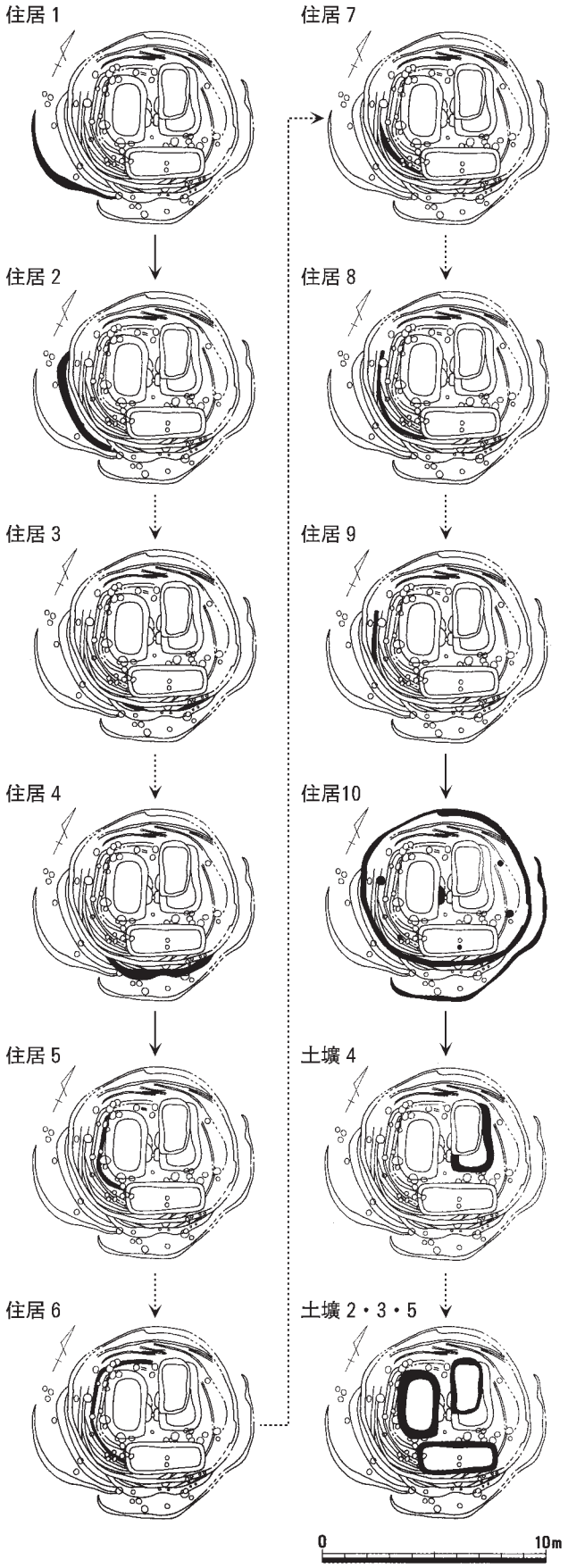
0　2m

第９図　Ａ群（竪穴住居１～10）①（1/80）



第10図　Ａ群（竪穴住居１～10）②（1/80）

層では、１号墳の小竪穴式石室が構築されていた。Ａ群が存在する調査区東側は、Ａ・Ｃ・Ｅ群の遺構群が連続しており、基盤層が確認できないほど遺構が密集しているような状況であった。調査当初は遺構の存在は確認できたものの、遺構プランが判然としないため、サブトレンチを設定し、遺構埋土の堆積状況の把握に努めた。第10図のＥ－Ｆ断面では第７層、第14図のＥ－Ｆ断面では第２層までレンズ状の堆積土を示していた。竪穴住居10の床面付近では、第９図のＣ－Ｄ断面の第２・６層、第10図のＥ－Ｆ断面の第８・12層にみられるような黄褐色土塊（基盤層土塊）を多く含む埋土が確認できたため、床面から15㎝上位で精査を行い、土壙２～５を検出・掘削した。土壙２～５完掘後、竪穴住居の調査を再開し、最新段階の竪穴住居10を完掘し、その床面で竪穴住居５～９の壁体溝を検出した。また竪穴住居10の南東側では竪穴住居３・４の壁体溝、南側では竪穴住居１・２を確認した。調査時の土層観察では竪穴住居10が竪穴住居１～９より新しく、竪穴住居４が竪穴住居１～３より新しく、竪穴住居２は竪穴住居１より新しいと判断した。これに基づいて、Ａ群の遺構変遷を復元したのが、第11図である。Ａ群の竪穴住居は床面のレベルが高いものが古く、低いものが新しい傾向にあり、斜面上方から下方に少しずつ移動しながら竪穴住居を建て替えている。竪穴住居５～９は層位的な新旧関係を捉えることができなかったが、いずれも想定される床面が竪穴住居10の床面とほぼ同一レベルであることや、竪穴住居10が最大規模であることから、竪穴住居５～10は拡張傾向にあると捉えた。また土壙２～５は竪穴住居10より層位的に新しいが、出土土器に型式差が認められないことや、竪穴住居10内に土壙２～５が整然と配置されていることから、竪穴住居１～10の建て替え、土壙２～５の掘削・廃絶は連続的に行われ、いずれも弥生時代中期後葉の範疇に収まる。　（米田）



←：層位による順序、←…：復元による順序

第11図　Ａ群（竪穴住居１～10）変遷（1/300）

竪穴住居１（第９～13図）

Ａ群の南端に位置し、竪穴住居２に切られる。平面形は円形を呈する。規模は不明であるが、径５～６ｍと推定される。壁体溝は全周しない。柱穴は特定できない。出土遺物のうち、弥生時代中期の甕**１**、後期の壺**２**を図示したが、確実に竪穴住居１に伴うものではない。時期は竪穴住居２より古く、弥生時代中期後葉の古相以前と捉えている。　（米田）

竪穴住居２（第９～13図）

Ａ群南側に位置し、竪穴住居１を切り、竪穴住居４に切られる。壁体溝の一部を検出したに過ぎないが、平面形は円形を呈すると考えられる。規模・柱穴は不明である。遺物は覆土から弥生土器の甕**３**～**５**、高杯**６**、壁体溝から磨製石包丁の剥離工程未成品**S1**が出土した。甕**５**の存在も無視できないが、時期は弥生時代中期後葉の古相に比定される。　（米田）

竪穴住居３（第９・11・13図）

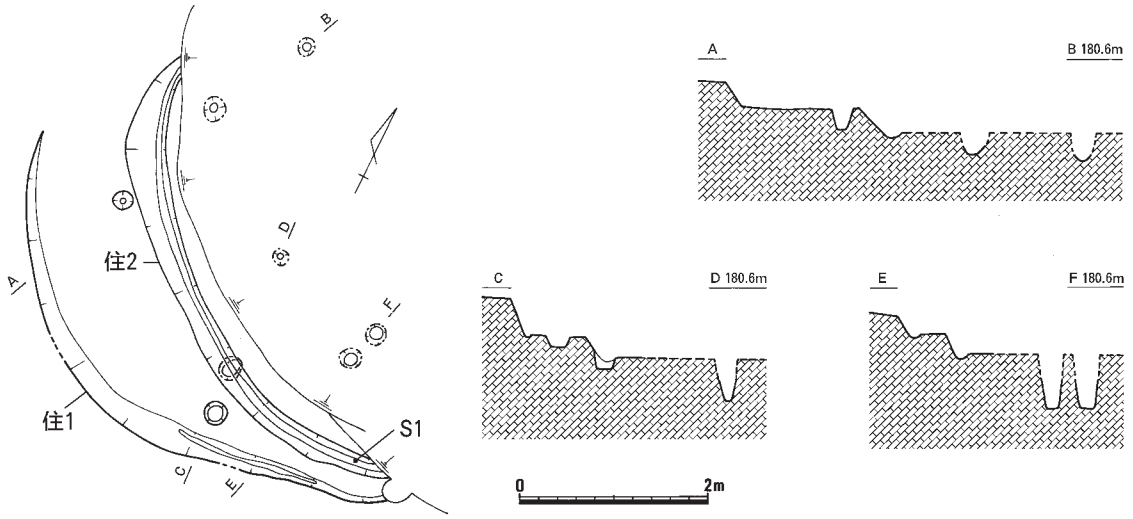
Ａ群南東側に位置し、竪穴住居４に切られる。残存しているのは壁体溝の一部のみであるが、円形プランの可能性が高い。規模は不明だが、小規模である。出土遺物は弥生時代中期後葉の甕**７**、砥石片**S2**がある。時期は弥生時代中期後葉の範疇と捉えて差し支えない。　（米田）

竪穴住居４（第９・11図）

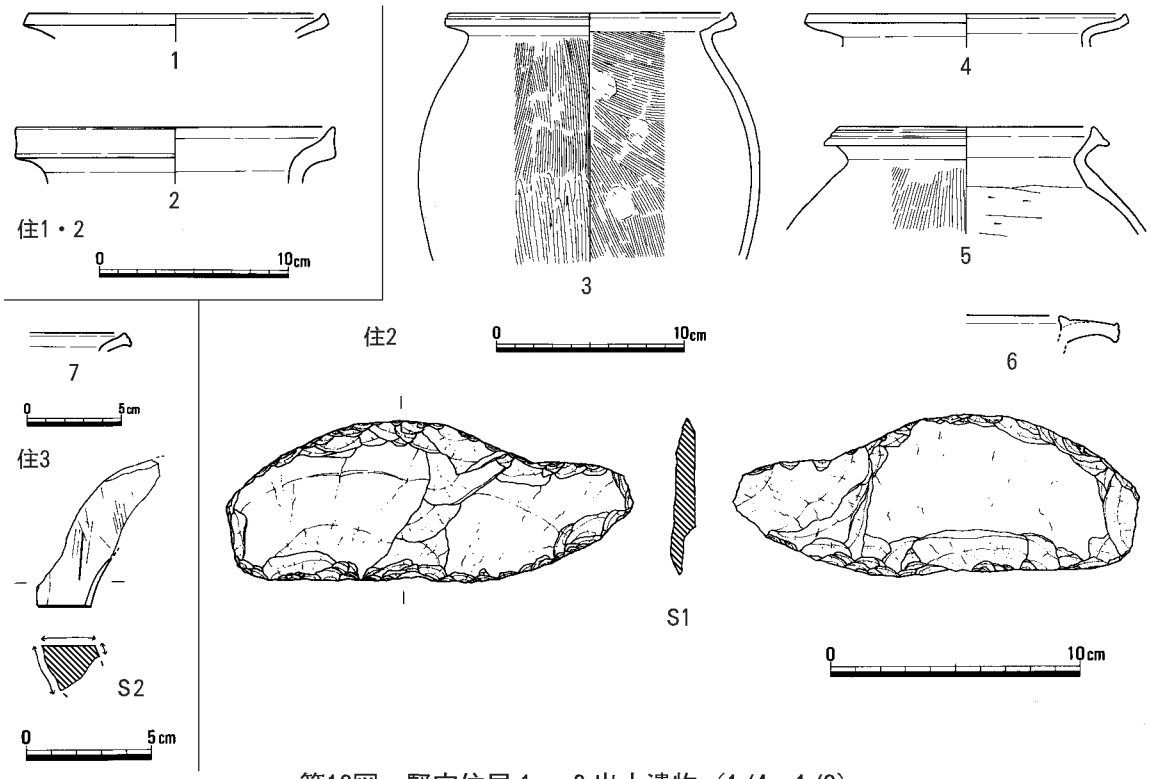
Ａ群南東側に位置し、竪穴住居１～３を切り、竪穴住居10に切られる。壁体溝のみの検出であるが、平面形は円形を呈すると考えられる。規模は径６ｍ弱と推定される。遺物は皆無である。時期は弥生時代中期後葉の範疇である。　（米田）

竪穴住居５～９（第９・11図）

Ａ群中央部に位置し、いずれも竪穴住居10に切られる。竪穴住居４とは直接切



第12図　竪穴住居１・２（1/80）

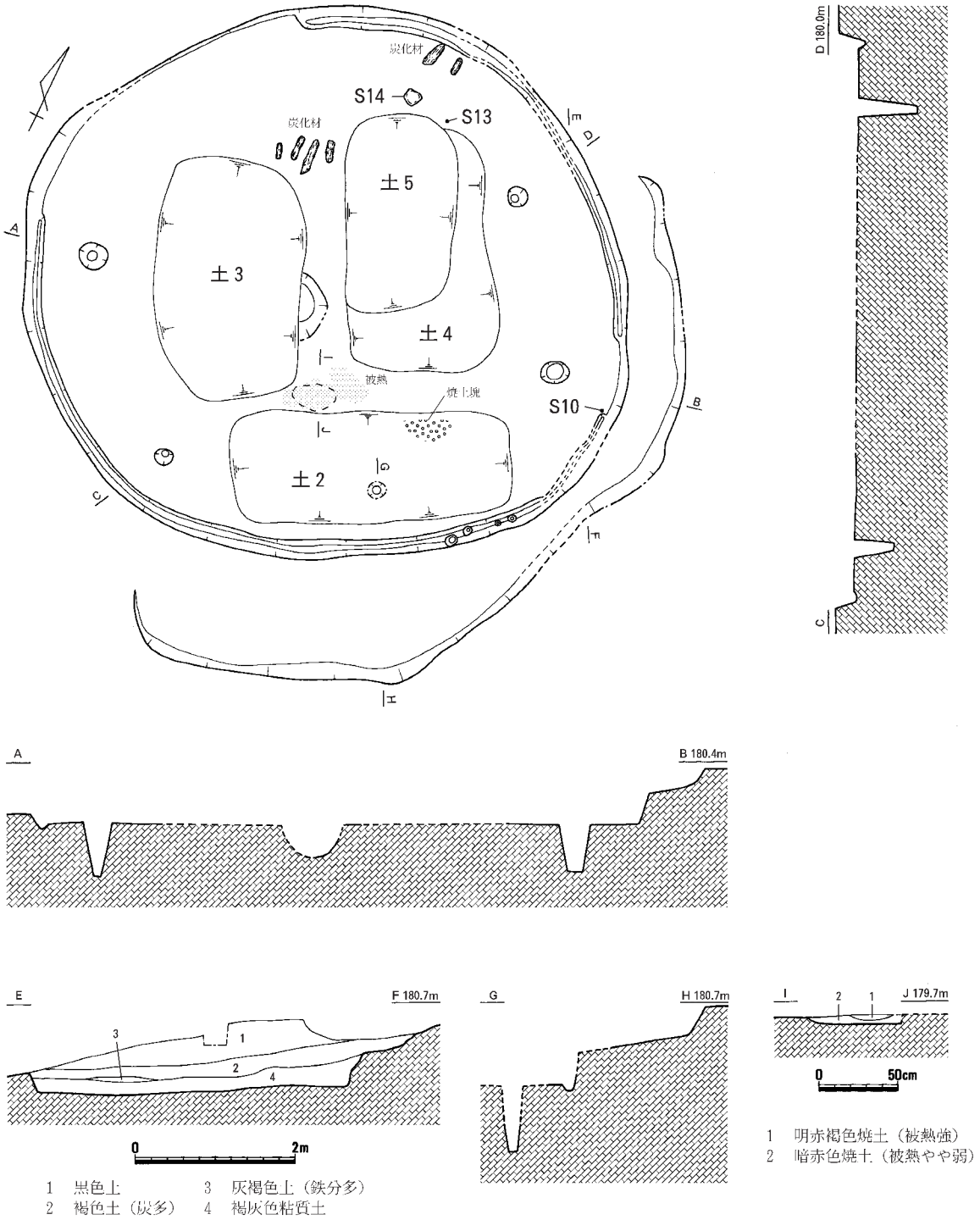


第13図　竪穴住居１～３出土遺物（1/4・1/3）

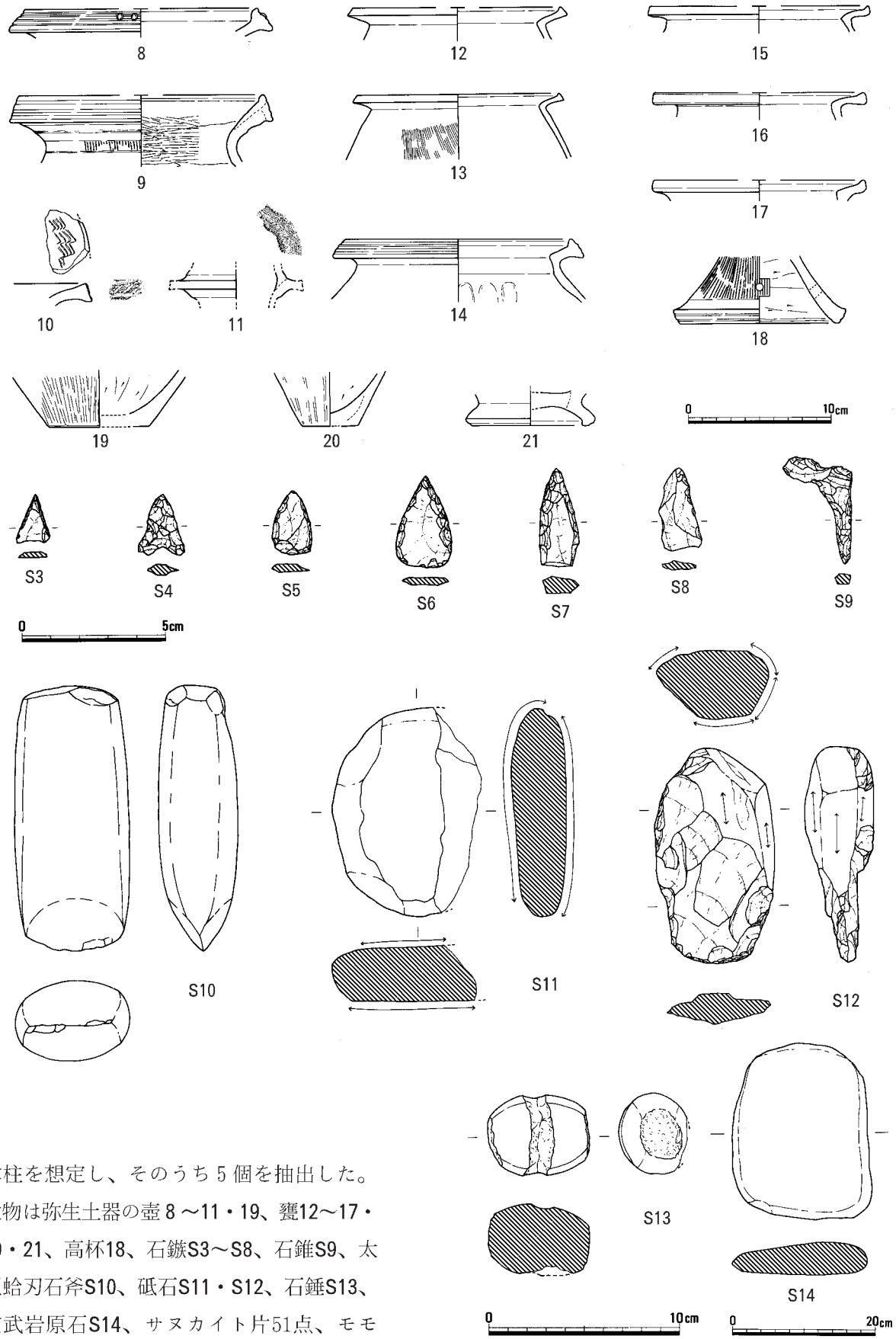
り合っていないが、壁体溝の検出面が竪穴住居10の床面であることから、竪穴住居４よりは新しいと考える。竪穴住居５～９は壁体溝のみが残存し、いずれも円形を呈する。規模は５～６ｍ前後と推定される。柱穴と壁体溝との対応関係については明らかではない。竪穴住居５～９の新旧関係については、いずれも想定される床面が竪穴住居10の床面とほぼ同一レベルであることや、竪穴住居10が最大規模であることから、竪穴住居５～10は拡張傾向にあると考え、竪穴住居５→６→７→８→９→10という変遷を想定した。遺物は皆無に近いが、時期は弥生時代中期後葉の範疇で捉えられる。　（米田）

竪穴住居10（第９・10・14・15図、図版３）

Ａ群のなかで最新の竪穴住居である。平面形は円形を呈し、規模は長径7.2m、短径6.7m、深さは最大で80㎝残存する。また住居の掘り方の外側の斜面上方には、長軸約8.6m、深さ30㎝の段状遺構が付設されている。壁体溝は西側と東側の一部が途切れており、全周しない。床面の北側には炭化材が放射状に認められたが、焼失した積極的な根拠としては十分ではない。床面中央では中央穴が認められ、その南東側には固く硬化している被熱面が認められた。主柱穴については、住居の規模から６

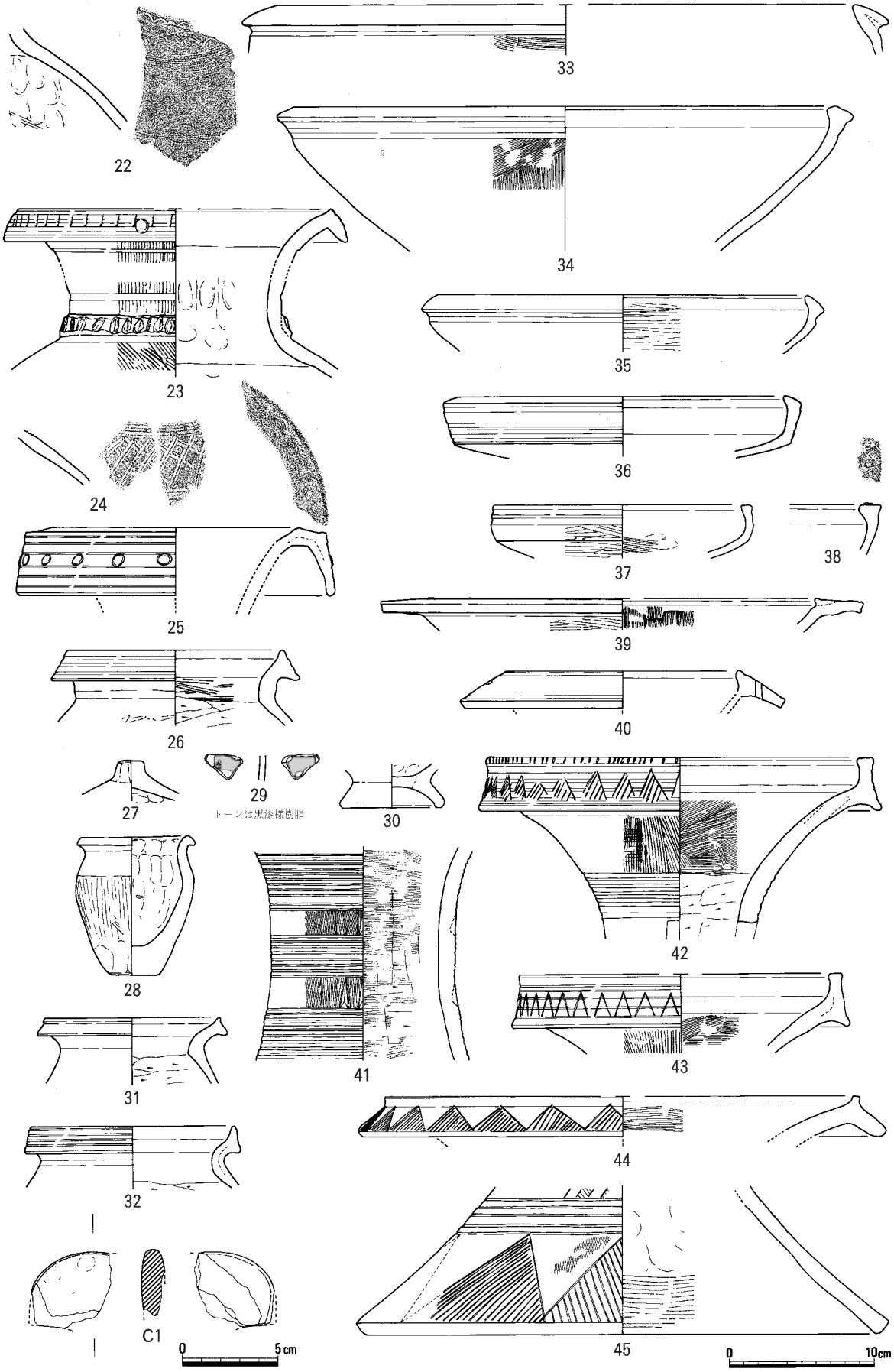


第14図　竪穴住居10（1/80・1/40）

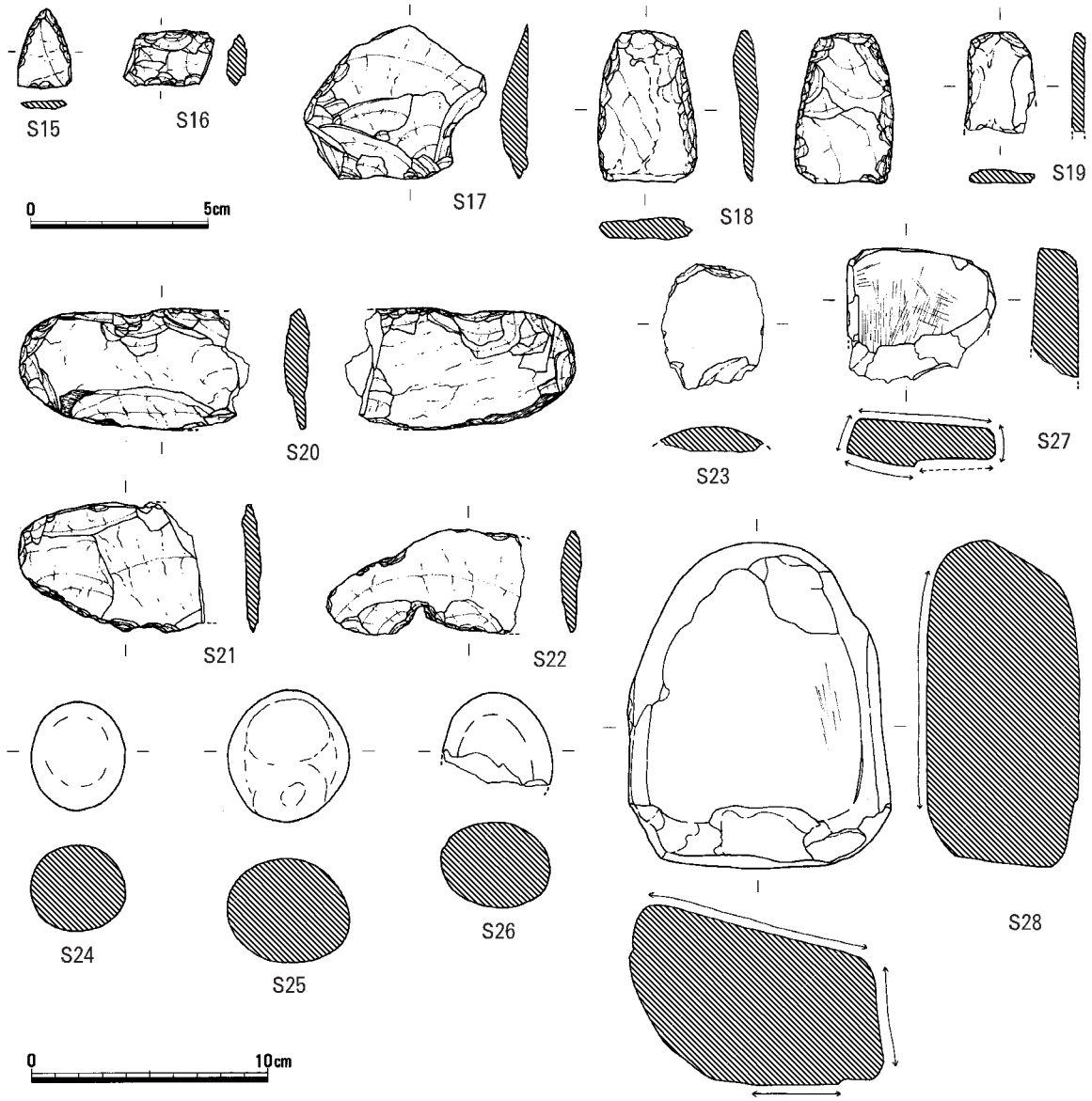


第15図　竪穴住居10出土遺物
（1/4・1/2・1/3・1/8）

本柱を想定し、そのうち５個を抽出した。遺物は弥生土器の壺８～11・19、甕12～17・20・21、高杯18、石鏃S3～S8、石錐S9、太型蛤刃石斧S10、砥石S11・S12、石錘S13、玄武岩原石S14、サヌカイト片51点、モモ種子１粒が出土した。時期は弥生時代中期後葉の新段階に比定される。　（米田）



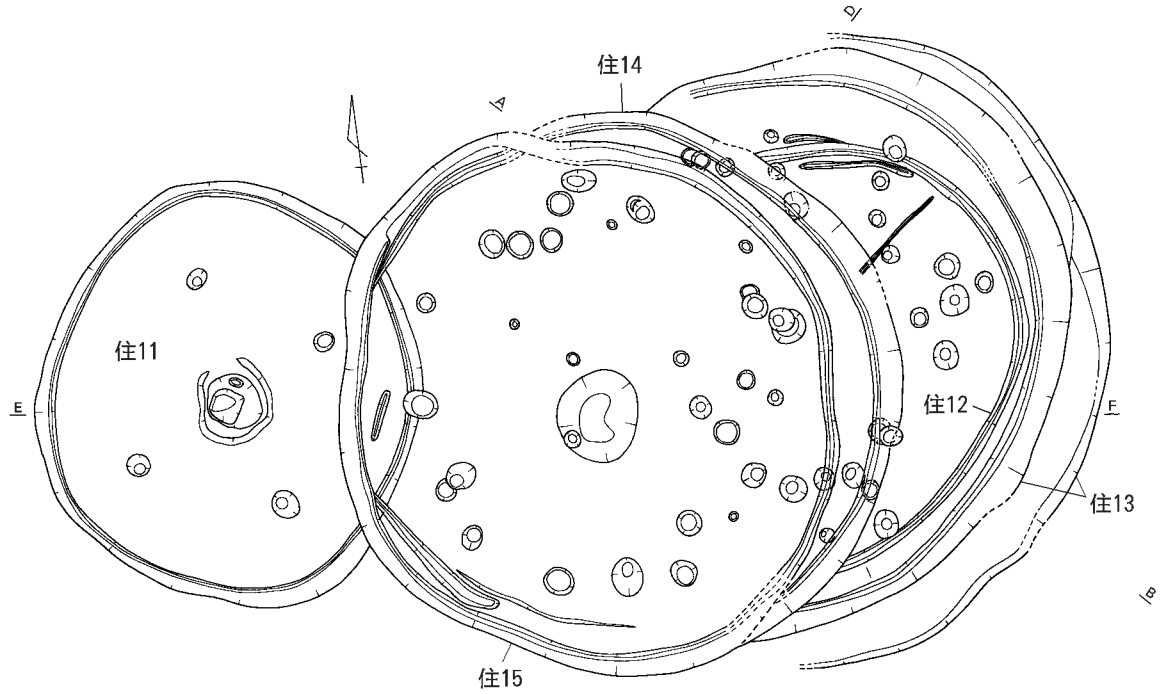
第16図　Ａ群（竪穴住居１～10）出土遺物①（1/4・1/3）

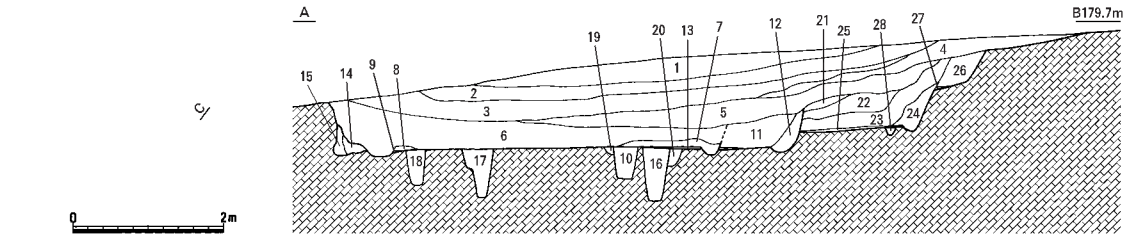


第17図　Ａ群（竪穴住居１～10）出土遺物②（1/2・1/3）

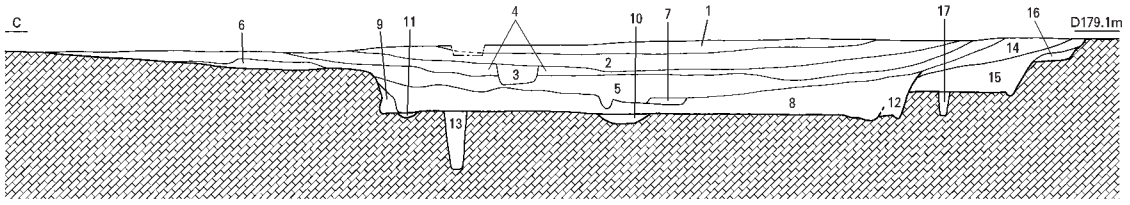
Ａ群（竪穴住居1～10）出土遺物（第16図、図版12）

竪穴住居１～10、土壙２～５を調査する過程で出土した遺物を次にまとめる。各遺物の出土遺構については特定できないが、本来は竪穴住居１～10、土壙２～５やＡ群上層のレンズ状の堆積土に包含していたと考えられる。弥生土器は壺22～26、蓋27、甕28・30～32、高杯33～40、器台41～45があり、22～25・27～30・33～41は中期、それ以外は後期に属する。28は小形の甕であり、完形品である。29は弥生土器の鉢の破片であると考えられ、内・外面全体に黒漆様樹脂が塗布されている。黒漆様樹脂の分析は北野信彦氏に依頼し、フーリエ変換型赤外分光光度計による測定、顕微鏡観察の結果、「ちぢみムラ」現象が確認され、現代の日本産漆の吸収スペクトルに近いことから、「漆」と同定された（付載参照）。C1は文様などは認められないが、残存状況から分銅形土製品の破片と考えられる。石器は、石鏃S15、楔形石器S16、加工痕のある剥片S17、扁平片刃石斧S18・S19、磨製石包丁未成品S20～S22、太型蛤刃石斧の破片S23、投弾S24～S26、砥石S27・S28などがある。（米田）

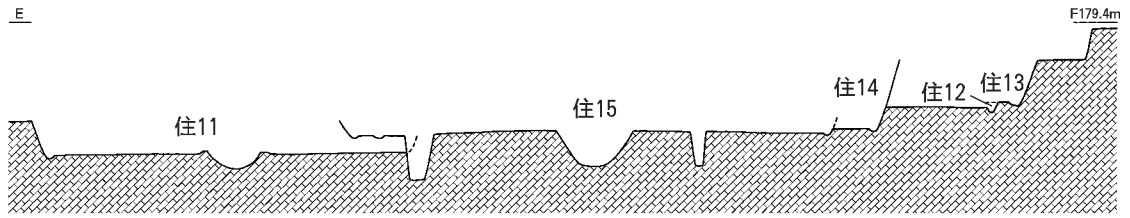




1　褐灰色土
2　黒褐色土
3　灰褐色土
4　暗褐色土
5　暗褐色土
6　暗灰褐色土（住居15）
7　暗褐色土（住居15）
8　黄褐色土（貼り床、住居15）
9　灰色土（住居15）
10　褐色土（住居15－柱穴）
11　暗黄褐色土（住居14）
12　暗褐色土（住居14）
13　暗褐色土（住居14）
14　黄褐色土（住居14）
15　暗黄褐色土（住居14）
16　褐色土（住居14－柱穴）
17　褐色土（住居14－柱穴）
18　暗褐色土
19　褐色土
20　褐色土
21　黄褐色土（住居13）
22　暗灰褐色土（住居13）
23　暗褐色土（住居13）
24　褐色土（住居13）
25　褐灰色土（住居13）
26　暗灰褐色土（住居13）
27　灰色土（住居13）
28　暗褐色土（住居12）



1　褐灰色土
2　黒褐色土
3　黒褐色土（土壙10）
4　暗黄褐色土
5　灰褐色土
6　暗黄褐色土
7　暗灰褐色土
8　暗褐色土（住居15）
9　暗褐色土（住居15）
10　褐灰色土（住居15）
11　褐色土（住居15－柱穴）
12　暗褐色土（住居14）
13　暗灰褐色土（住居14）
14　暗褐灰色土（住居13）
15　暗灰褐色土（住居13）
16　暗灰褐色土（住居13）
17　暗褐色土



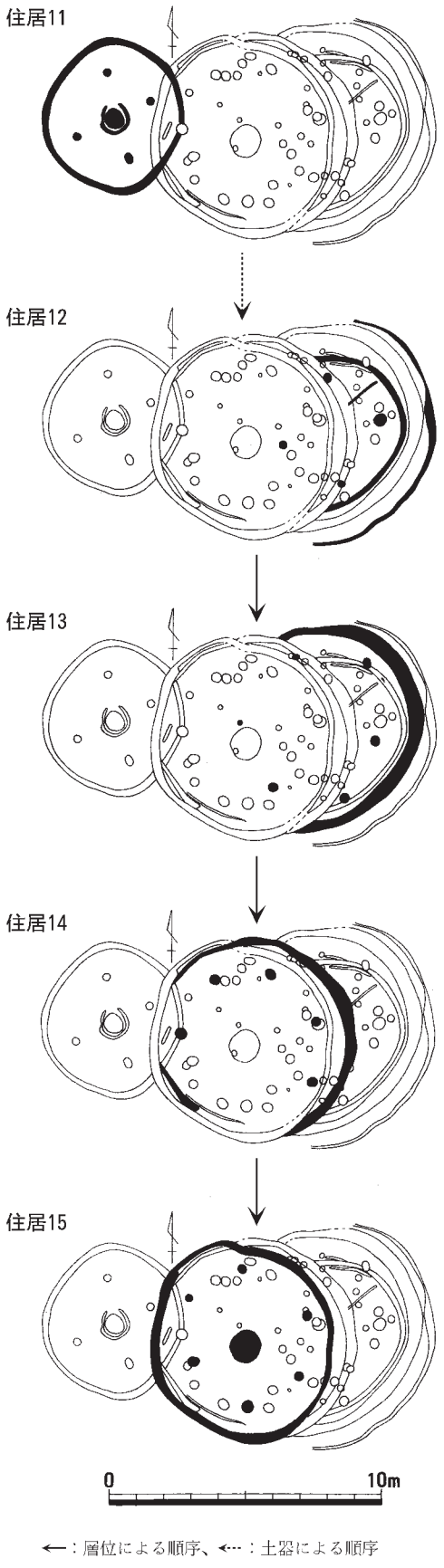
第18図　Ｂ群（竪穴住居11～15）（1/100）

Ｂ群（竪穴住居11～15）（第18～33図、図版４）

Ｂ群は調査区中央部に位置し、竪穴住居11～15のまとまりを指す。確実に竪穴住居と判断できるものは５軒ある。最古段階は焼失した竪穴住居11であり、Ｂ群のなかでも西端に位置し、床面レベルが最も低く、小規模である。次に竪穴住居12が築かれ、その直後に竪穴住居13へ拡張する。そして地点を斜面下方へ若干移して竪穴住居14を構築し、最終的に竪穴住居14とほぼ同一地点に竪穴住居15を建て替えている。新旧関係は、竪穴住居11と12・13は出土土器によって判断しているが、竪穴住居12～15は層位的に明らかにできた。出土土器をみると、Ｂ群（竪穴住居11～15）は弥生時代後期初頭から後期前葉にかけて、連続的に建て替えられたと考える。　（米田）

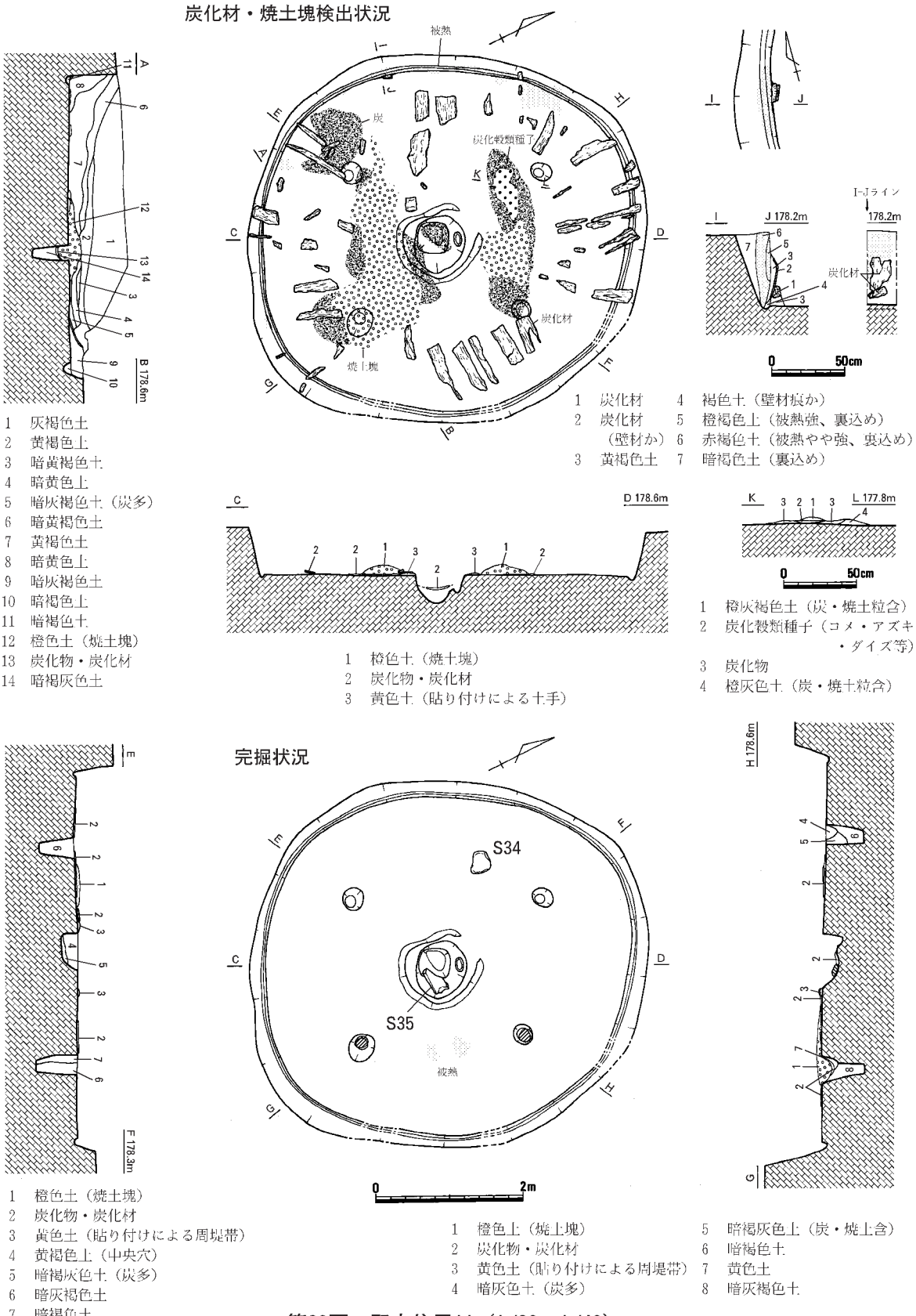
竪穴住居11（第18～23図、巻頭図版２、図版４・12）

Ｂ群の西端に位置し、竪穴住居15に切られる。平面形は不整円形を呈し、規模は長径5.0ｍ、短径4.7ｍ、深さは76㎝を測る。主柱穴は４個。中央穴は内部北際に楕円形の小ピットを持ち、台石**S35**が廃棄されていた。中央穴の周りには高さ２㎝の土手が巡る。床面直上では炭化材を放射状に検出し、壁際では炭化材が斜めに落ち込んだ状態で認められ、大半は垂木と想定される。床面で検出した炭化材は幅20～30㎝で、厚さ１㎝程度の板状を呈しており、板材の可能性もあるが、埋土によって押圧した可能性も否定できない。床面中央と西側の床面直上では炭面が確認でき、床面中央部の２か所では炭化材・炭面の直上で焼土塊が最大15㎝の厚さで認められた。西壁は全体にわたって極度の熱を受け、その一部（Ｉ－Ｊ）では板状の炭化材（壁材か）が直立し、その下方に径６㎝程度の丸太材を横たわして板材を固定している状態を確認した。Ｉ－Ｊ断面では、第３～７層は裏込め土と考えられ、第５・６層まで強く熱を受けている。床面では台石**S34**が中央西寄りに放棄されているのみで、遺物の大半は床面出土でないため、意図的な火災が示唆される。床面の中央北西寄り（Ｋ－Ｌ）では、長軸80㎝、短軸30㎝の範囲で被熱した炭化穀物種子が密集し、ダイズ684粒・アズ



第19図　Ｂ群（竪穴住居11～15）変遷（1/250）

キ約13粒・イネ３粒を検出した（付載参照）。出土遺物は弥生土器の壺46～55、甕56～62、高杯63～76、鉢81～84、ミニチュア土器85・86、器台87・88、鉋M1、石鏃S29・S30、砥石S31～S33、台石S34・S35、サヌカイト片11点、玄武岩片５点がある。埋没時期は弥生時代後期初頭に比定される。（米田）



1　灰褐色土
2　黄褐色土
3　暗黄褐色土
4　暗黄色土
5　暗灰褐色土（炭多）
6　暗黄褐色土
7　黄褐色土
8　暗黄色土
9　暗灰褐色土
10　暗褐色土
11　暗褐色土
12　橙色土（焼土塊）
13　炭化物・炭化材
14　暗褐灰色土

1　炭化材
2　炭化材（壁材か）
3　黄褐色土
4　褐色土（壁材痕か）
5　橙褐色土（被熱強、裏込め）
6　赤褐色土（被熱やや強、裏込め）
7　暗褐色土（裏込め）

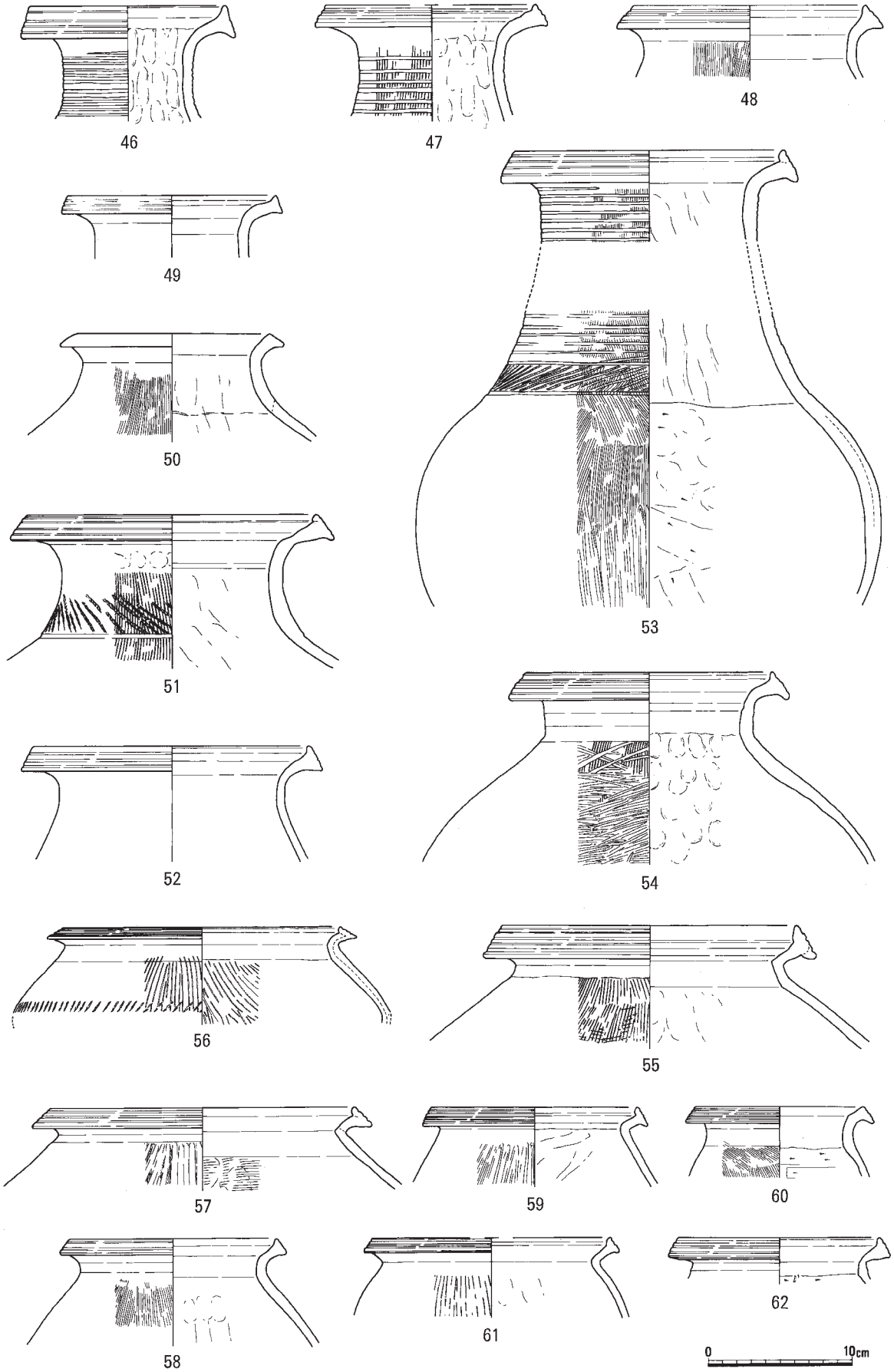
1　橙色土（焼土塊）
2　炭化物・炭化材
3　黄色土（貼り付けによる土手）

1　橙灰褐色土（炭・焼土粒含）
2　炭化穀類種子（コメ・アズキ・ダイズ等）
3　炭化物
4　橙灰色土（炭・焼土粒含）

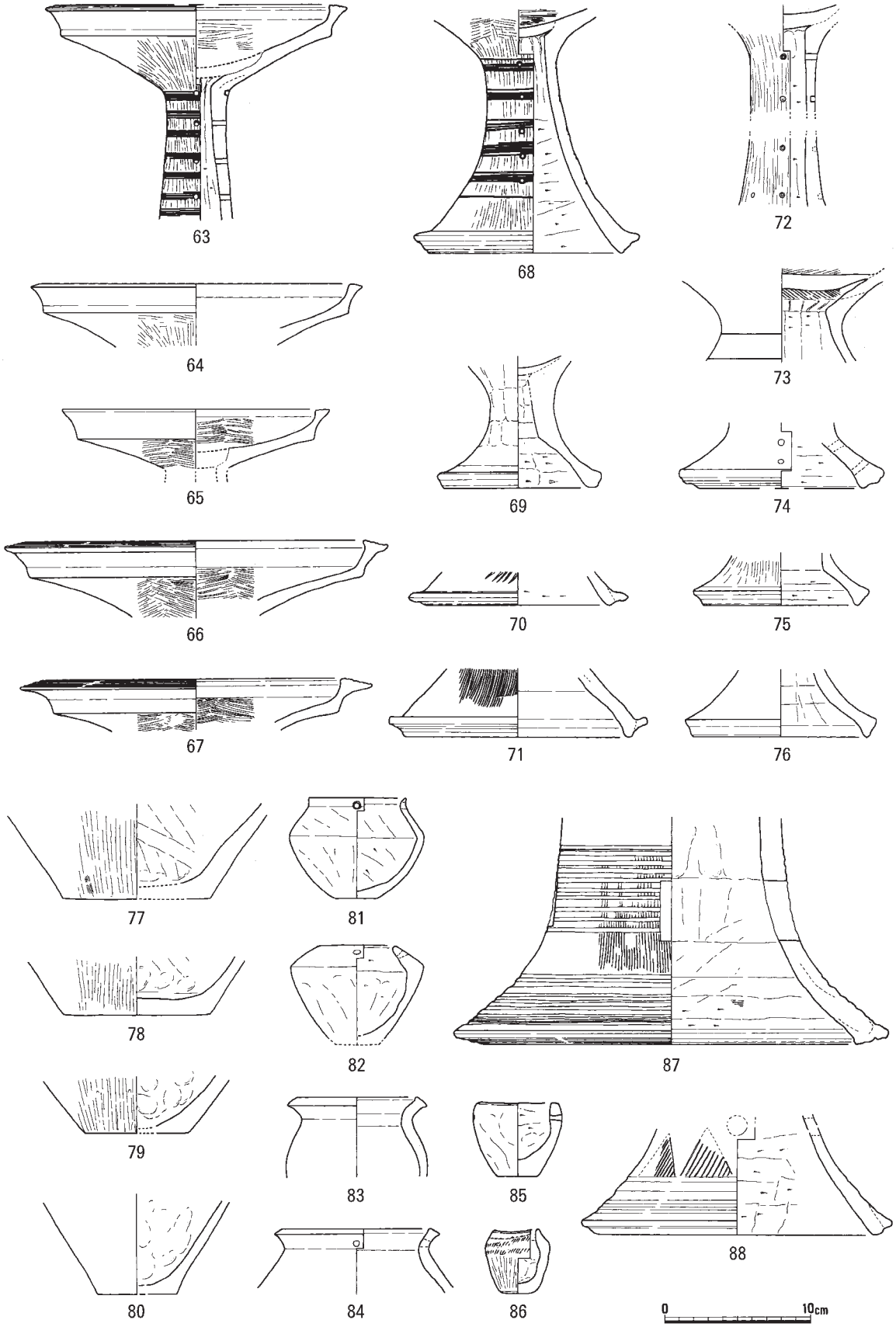
1　橙色土（焼土塊）
2　炭化物・炭化材
3　黄色土（貼り付けによる周堤帯）
4　黄褐色土（中央穴）
5　暗褐灰色土（炭多）
6　暗灰褐色土
7　暗褐色土

1　橙色土（焼土塊）
2　炭化物・炭化材
3　黄色土（貼り付けによる周堤帯）
4　暗灰色土（炭多）
5　暗褐灰色土（炭・焼土含）
6　暗褐色土
7　黄色土
8　暗灰褐色土

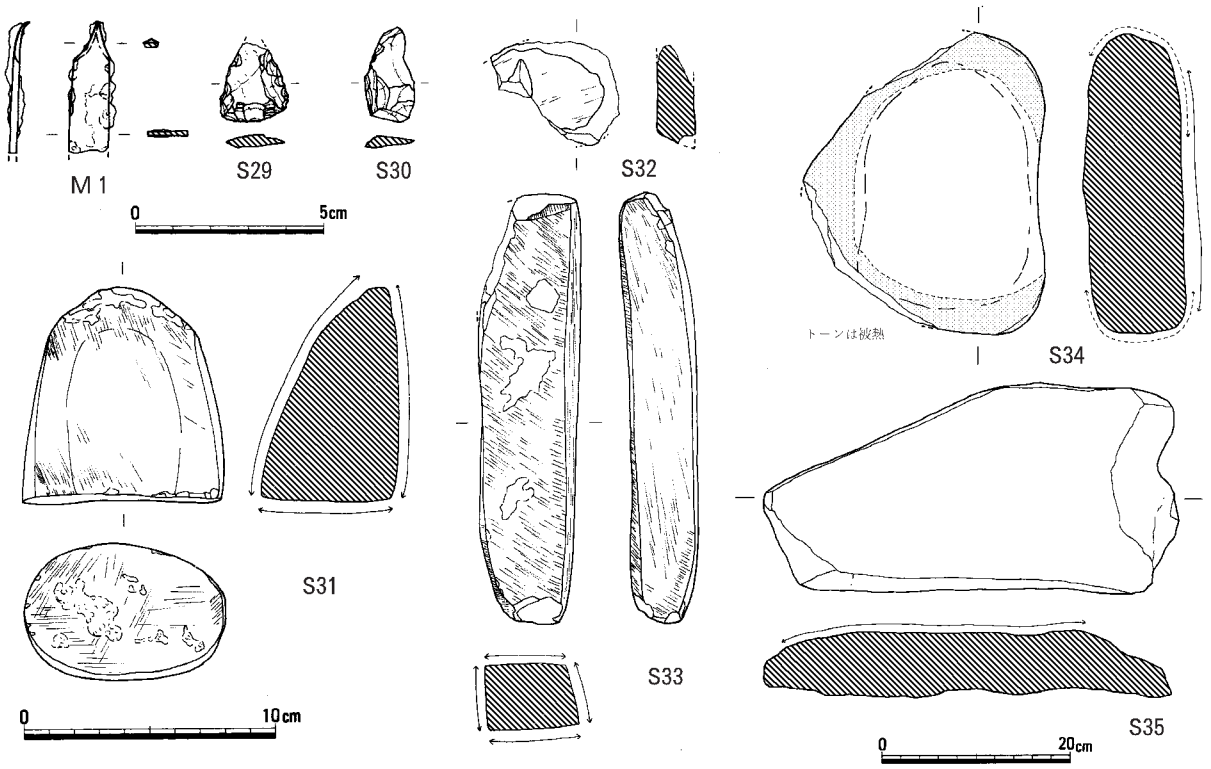
第20図　竪穴住居11（1/80・1/40）



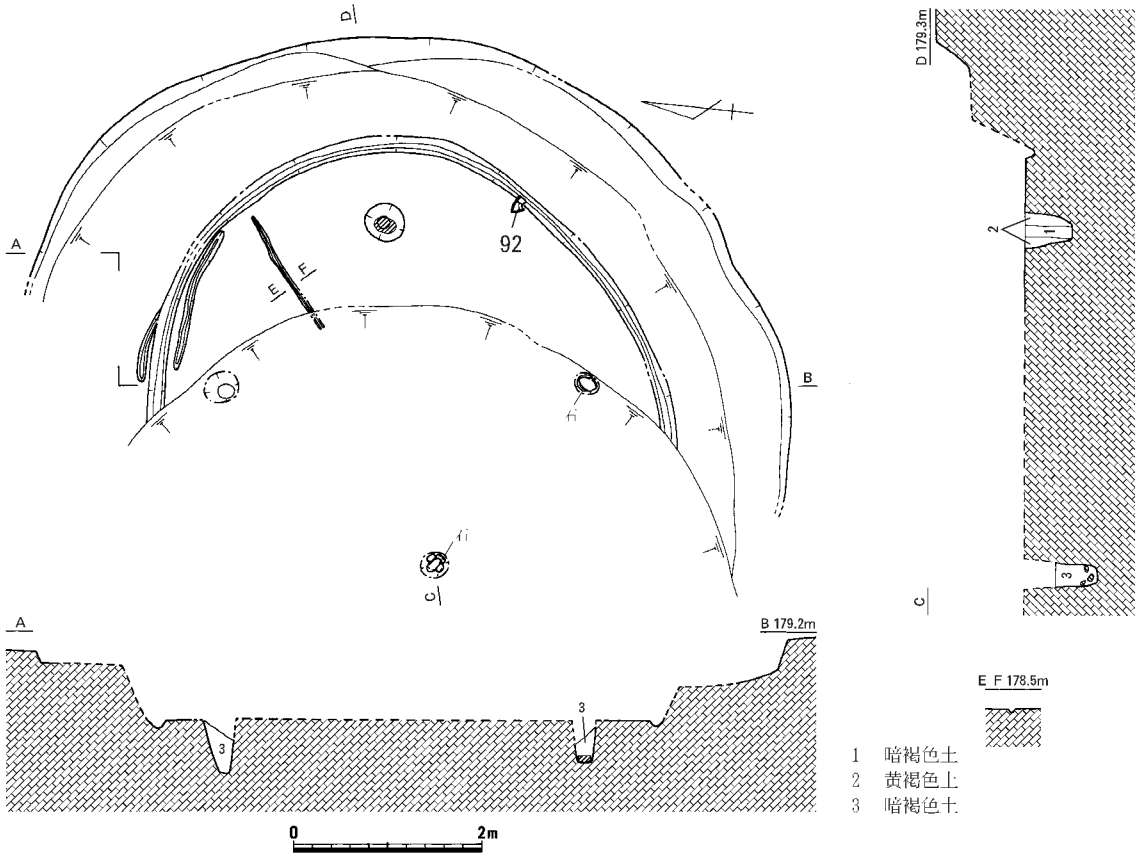
第21図　竪穴住居11出土遺物①（1/4）



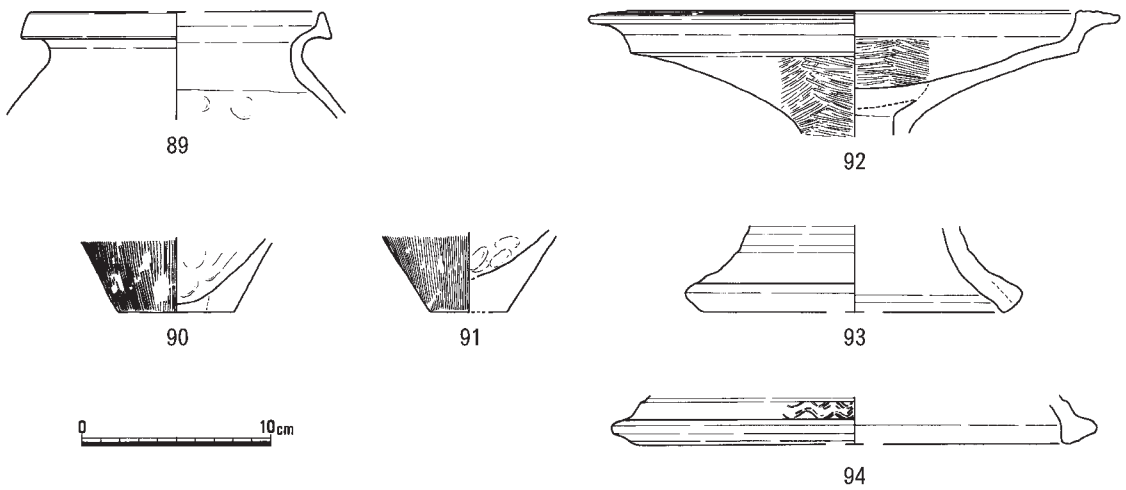
第22図　竪穴住居11出土遺物②（1/4）



第23図　竪穴住居11出土遺物③（1/2・1/3・1/8）



第24図　竪穴住居12（1/80）



第25図　竪穴住居12出土遺物（1/4）

竪穴住居12（第18・19・24・25図、図版５）

平面形は直径5.0～5.4ｍの楕円気味の円形と推定される。また竪穴住居西側の山側にテラス状の段が設けられている。竪穴住居13によって壁面が削平を受けているので正確な数値は測れないが、推定すると、床面から40～50㎝の高さの所に幅0.4～1.0ｍの平坦面が取り付くと考えられる。主柱穴は４個で、柱穴には根石が見られる。床面には細い間仕切り状の溝が確認された。壁体溝は３条検出され、建て替えまたは補修が少なくとも２回行われたと考えられる。中央穴の有無は不明である。遺物は、竪穴住居の南東端部で床面に密着して高杯**92**が出土した。その特徴から竪穴住居12の時期は、弥生時代後期前葉と考えられる。（物部茂樹）

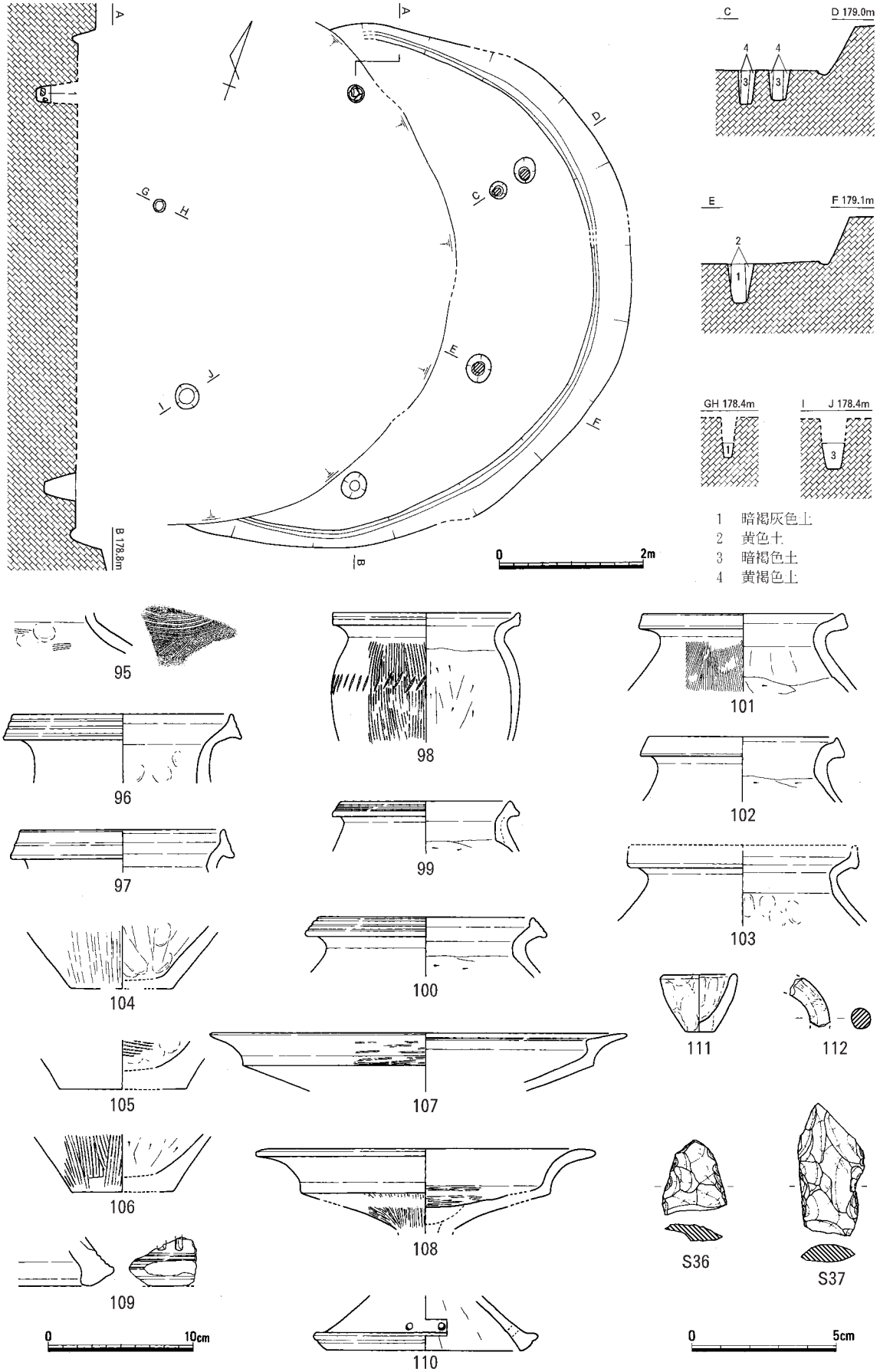
竪穴住居13（第18・19・26図、図版13、図版５）

平面形は直径約７ｍの円形を呈すると推定される。主柱穴は６個と考えられ、深さは40～70㎝を測り、柱痕が検出されるものがある。中央穴の有無は不明。出土遺物には土器と石器があるが、床面の遺物や柱穴出土の遺物はない。埋土を上中下部に分けて、遺物を取り上げた。埋土下部の遺物は、肩部に櫛描き文を持つ壺**95**、甕**99**・**101**とサヌカイト製石鏃の未成品**Ｓ36**である。**95**は混入と考えられる。埋土上部から出土した高杯**107**は、口縁端部が外方へ拡張する。埋土中部出土の高杯**108**は外湾する口縁部を持ち、杯部外面は放射状のヘラミガキを施す。杯部の深さは浅い。**111**は埋土上部出土の手捏ねの鉢、**112**は埋土上部出土の把手である。時期は弥生時代後期前葉と推定される。（物部）

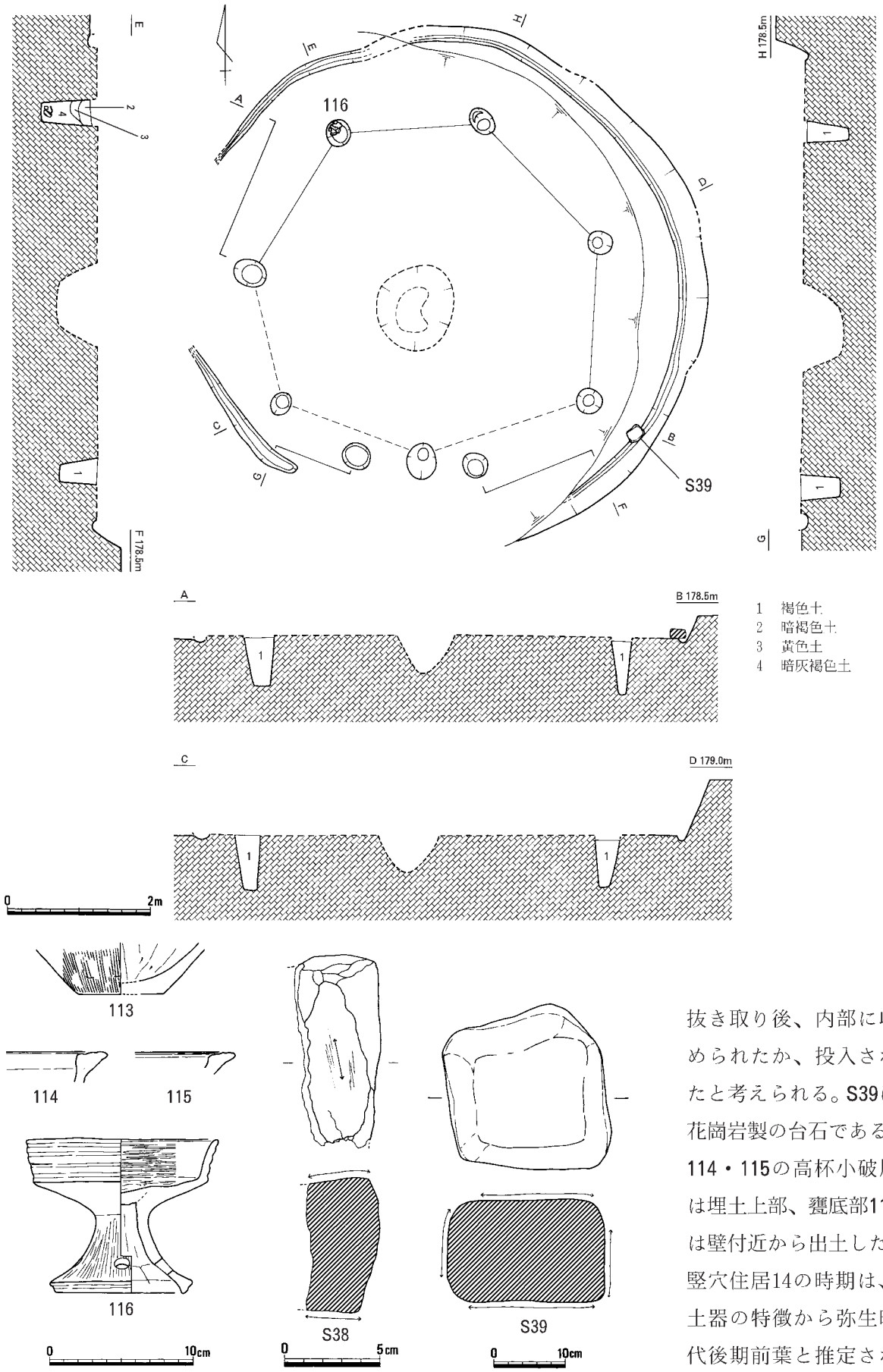
竪穴住居14（第18・19・27図、図版５・13）

平面形は直径約７ｍの円形を呈する。壁沿いに壁体溝が巡る。Ｂ住居群のうち、竪穴住居11以外の各竪穴住居に伴う柱穴は、調査時には明らかにできず、図上で検討したものである。この竪穴住居14の主柱穴の分別は困難であったが、南に位置する柱穴が次段階の竪穴住居15の柱穴と重複していると推定すると、柱間距離が1.8～2.4ｍと比較的格差をなくすことができ、７本柱と考えてよさそうである。ただし、そうすると同規模の竪穴住居13～15のうち、竪穴住居14だけが７本柱となる点に不安を残す。中央穴の有無は不明で、貼り床を持つ（第18図Ａ－Ｂ第13層）。

遺物としては、完形に復元された橙色を呈する高杯**116**と、砥石**Ｓ38**が柱穴内から出土した。柱の

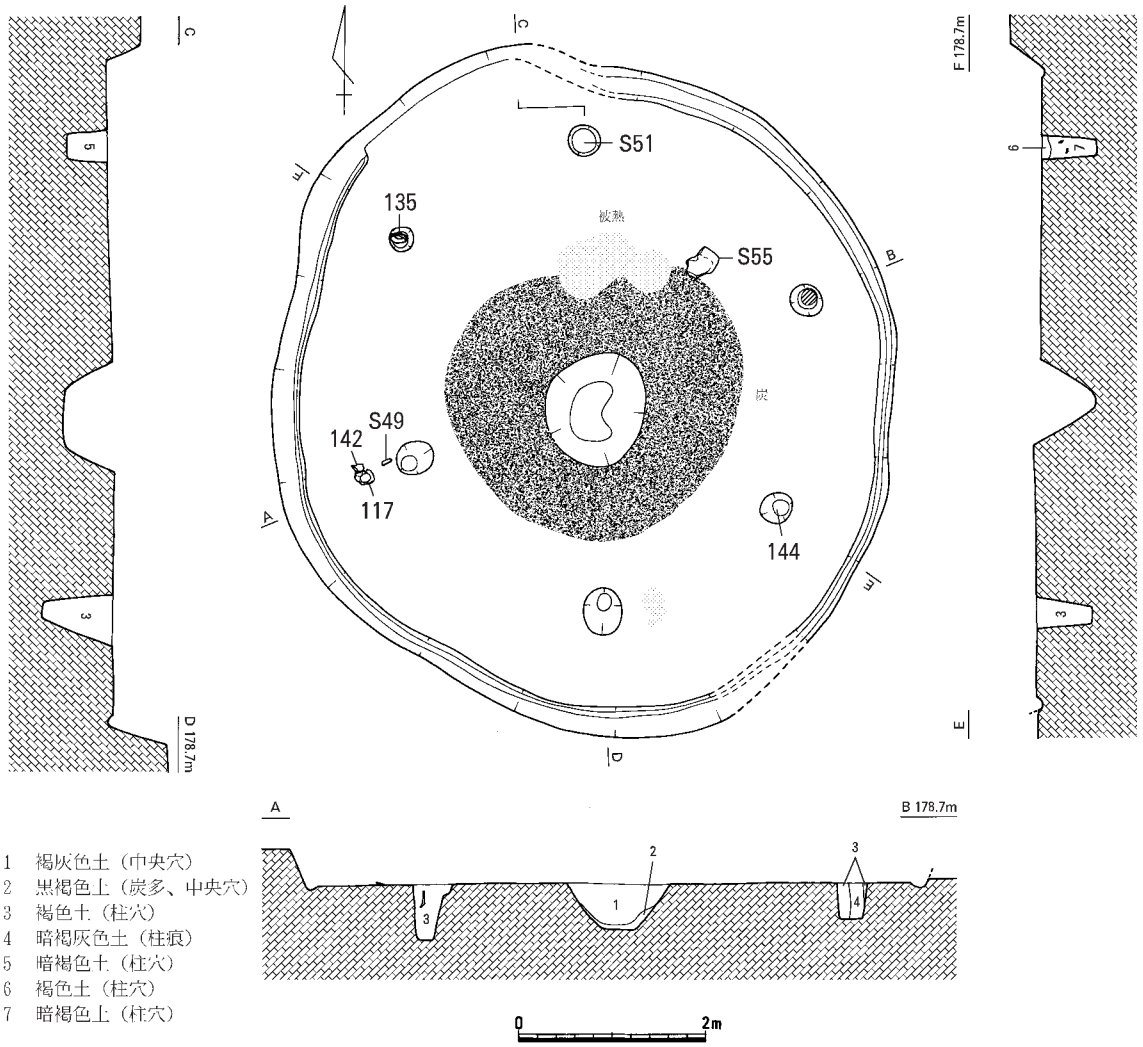


第26図　竪穴住居13（1/80）・出土遺物（1/4）



第27図　竪穴住居14（1/80）・出土遺物（1/4・1/3・1/8）

抜き取り後、内部に収められたか、投入されたと考えられる。S39は花崗岩製の台石である。114・115の高杯小破片は埋土上部、甕底部113は壁付近から出土した。竪穴住居14の時期は、土器の特徴から弥生時代後期前葉と推定される。（物部）

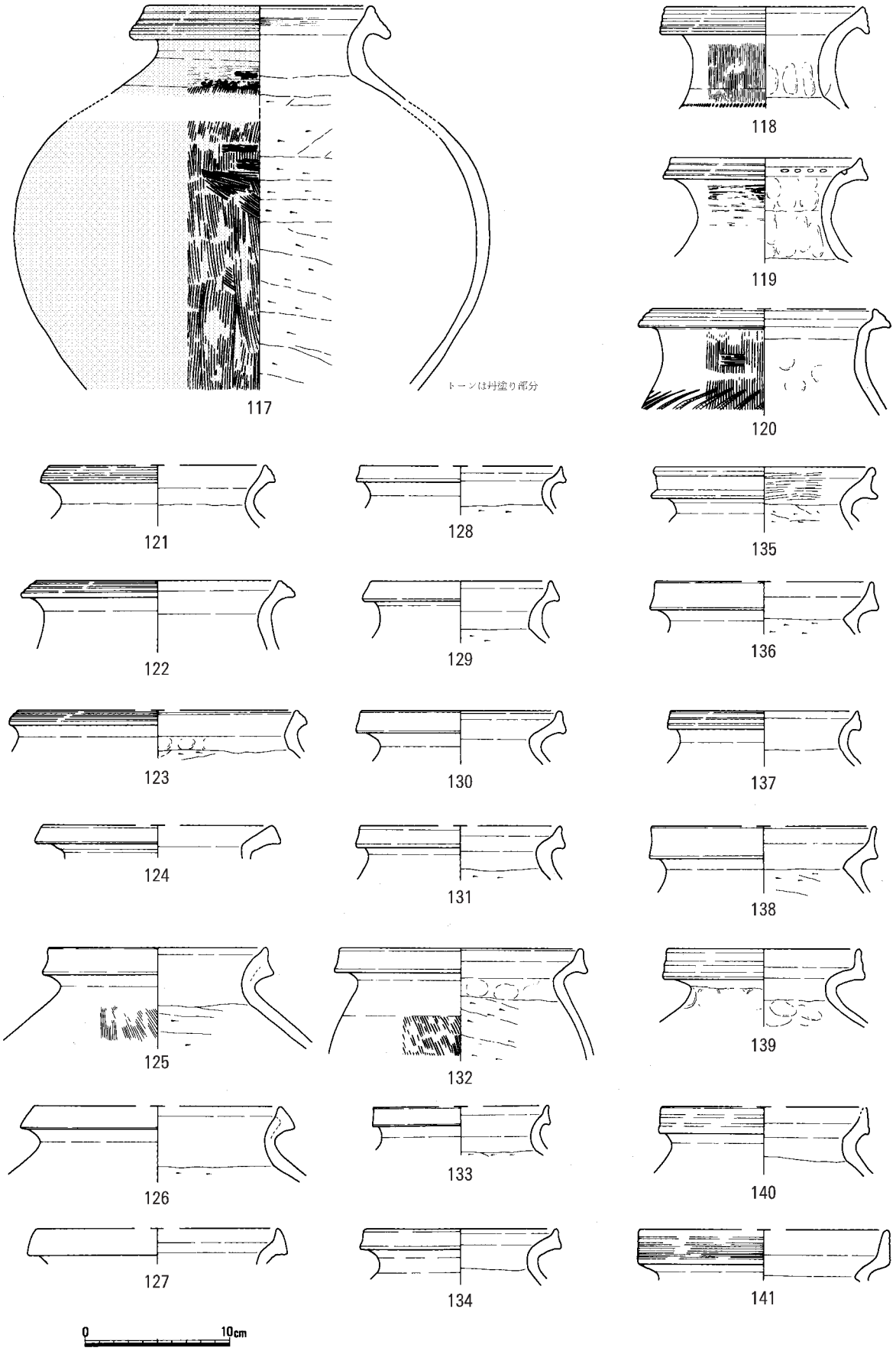


第28図　竪穴住居15（1/80）

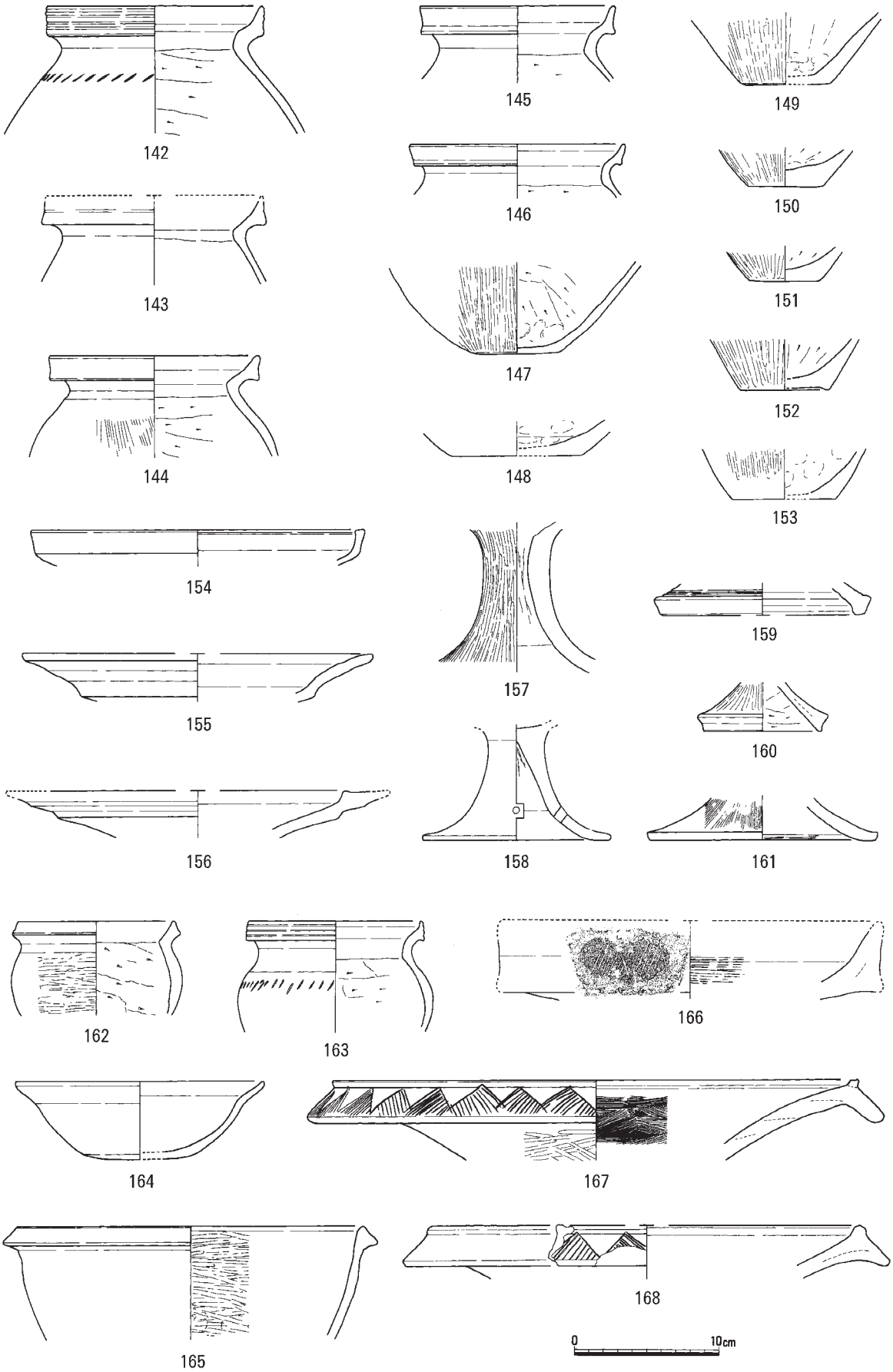
竪穴住居15（第18・19・28～32図、巻頭図版２、図版５・13・15・18）

平面形は直径南北7.0m、東西6.6mの円形に近い形を呈する。主柱穴は６個で、柱痕が確認された柱穴もある。壁沿いに壁体溝が巡る。床面中央で、直径1.1m前後の円形を呈する中央穴を検出した。深さは44cmを測り、底面直上の埋土中には炭粒が多く見られた。中央穴自体に被熱面は確認されなかったが、中央穴の周囲幅約1.0mにわたって床面上に炭粒の散布が見られた。床面には被熱面が２か所検出され、南寄りのものは120×60cmの範囲が橙色に変色している。被熱面の下層に炭の散布面が確認されたことから、貼り床が行われていると考えられた。

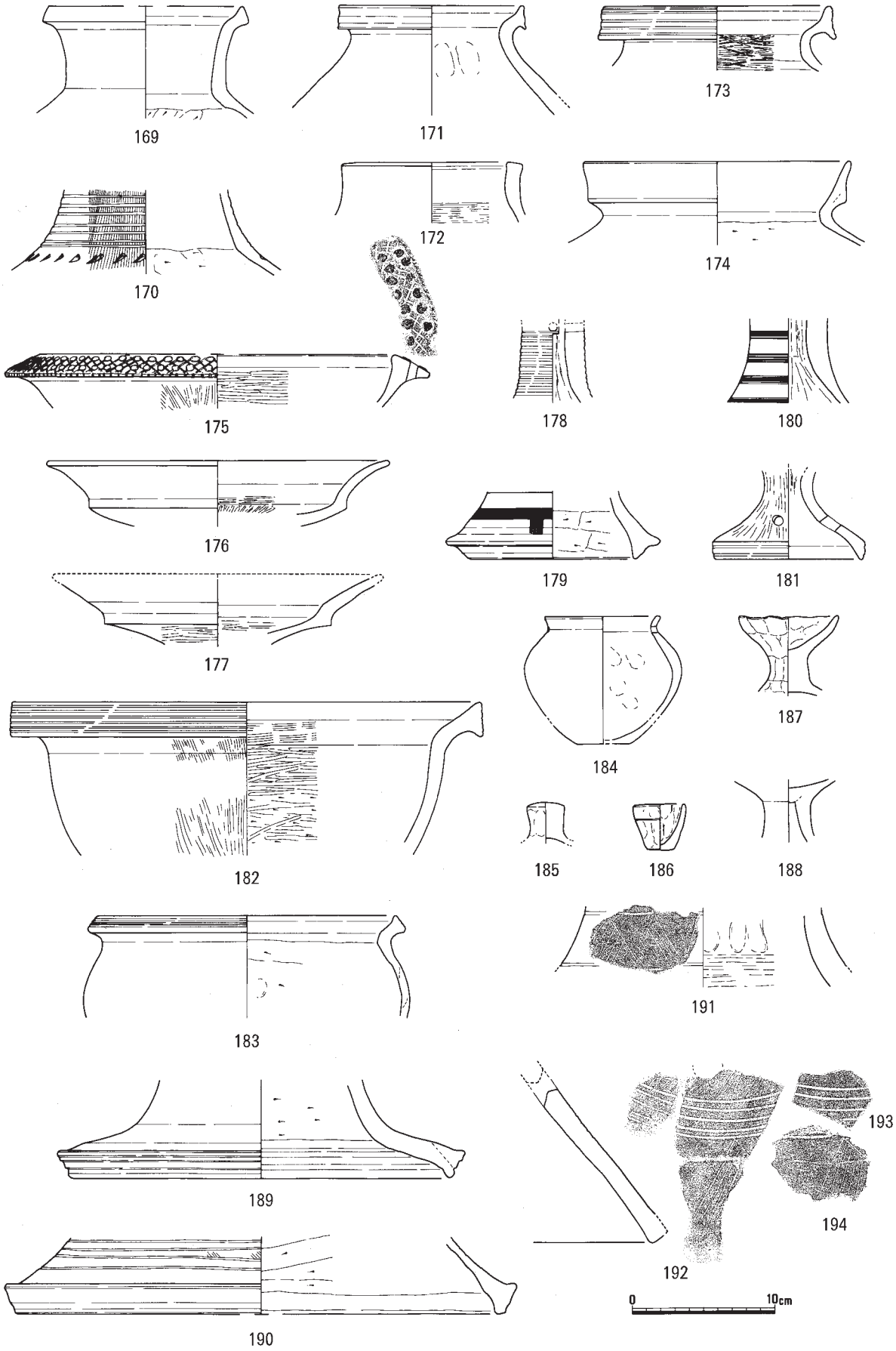
遺物は埋土中、床面、柱穴から多量に出土した。埋土中の遺物は、上・中・下層に分けて取り上げた。第29・30図は下層および床面、貼り床、柱穴出土の土器である。甕**117**・**142**は床面の遺物である。甕**117**の外面には赤色顔料の塗布が見られる。甕**119**・**135**・**144**、高杯**158**は柱穴からの出土である。高杯**158**は差し込み式と推定される。貼り床からは高杯**154**～**156**などが検出された。竪穴住居15の時期は、下層の土器の特徴から弥生時代後期前葉でも新相と考えられる。**192**～**194**は同一個体である。ほかに石器の出土も多く、床面で閃緑岩製叩石**Ｓ49**と玄武岩の原石**Ｓ55**、柱穴から流紋岩製砥石**Ｓ51**、



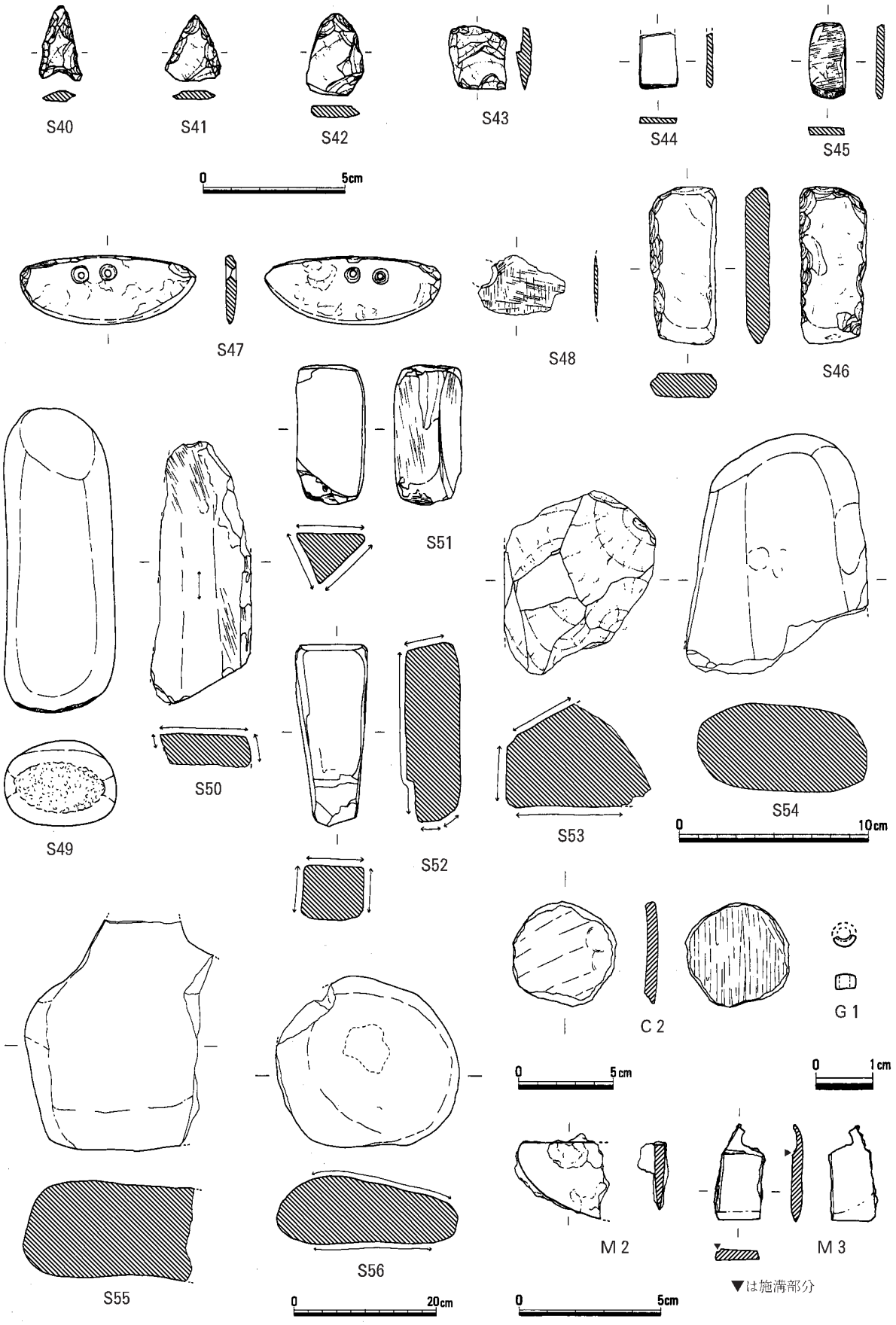
第29図　竪穴住居15下層・柱穴出土遺物①（1/4）



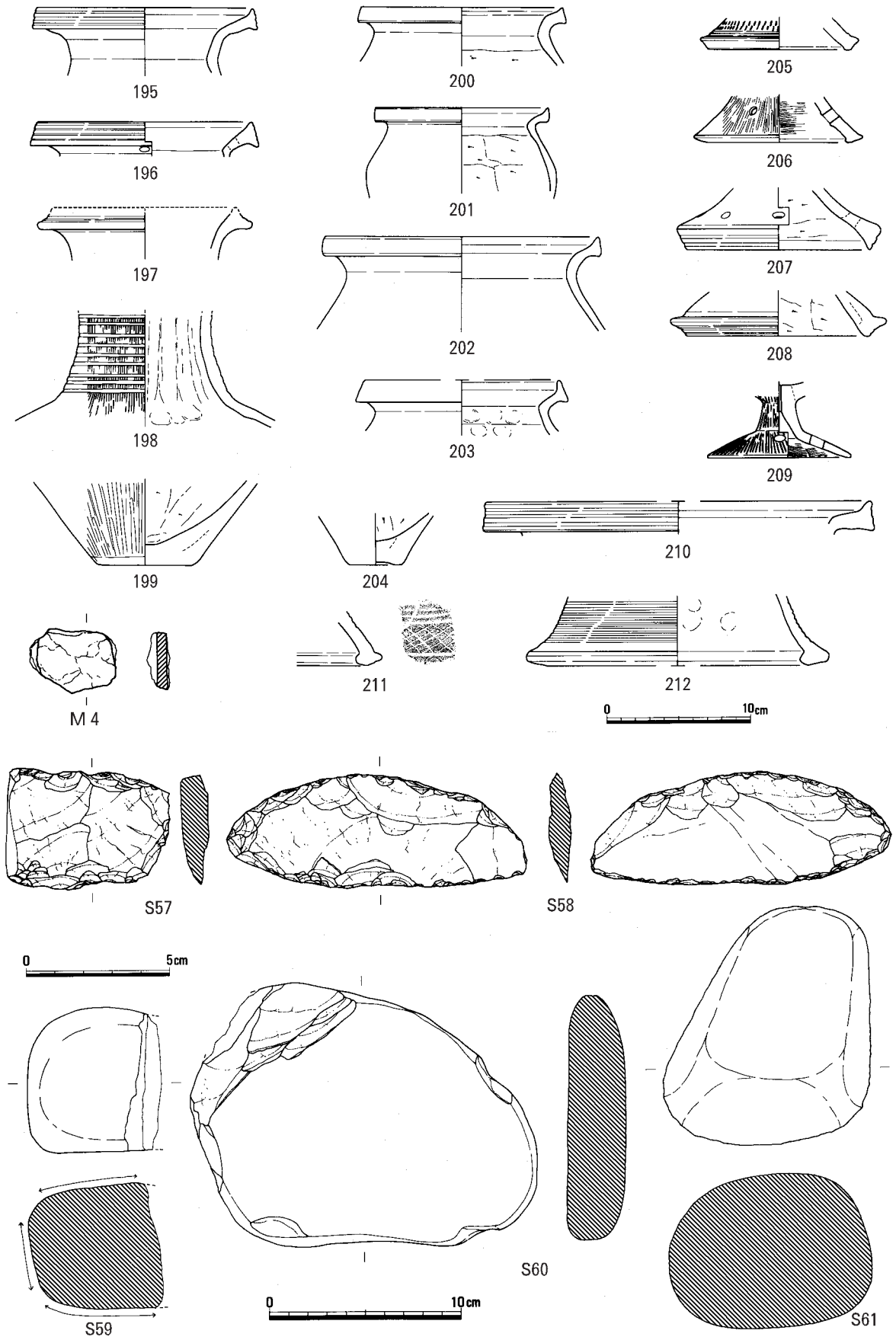
第30図　竪穴住居15下層・柱穴出土遺物②（1/4）



第31図　竪穴住居15上層出土遺物（1/4）



第32図　竪穴住居15出土遺物（1/2・1/3・1/8・1/1）



第33図　Ｂ群（竪穴住居11～15）出土遺物（1/4・1/2・1/3）

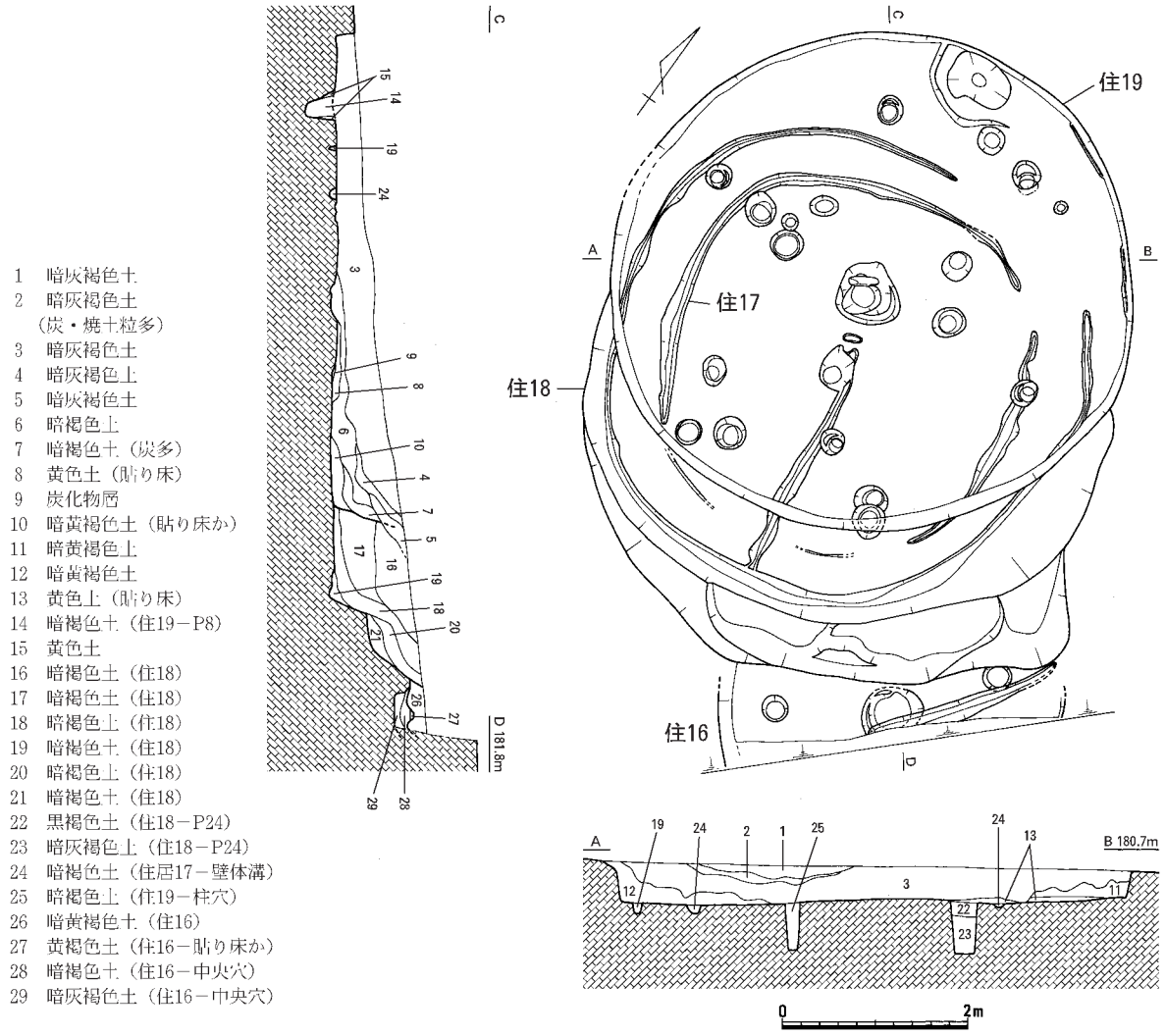
埋土下層から黒色片岩製と頁岩製の扁平片刃石斧の未成品**Ｓ44・45**がある。**Ｍ３**は埋土上層出土で、腐食が見られず、鋳造品を施溝して鑿（のみ）に転用している可能性がある。重量は7.68g。**Ｇ１**はターコイズブルー色のガラス小玉で、西側壁体溝から出土した。（物部）

Ｂ群（竪穴住居11～15）出土遺物（第33図、図版17）

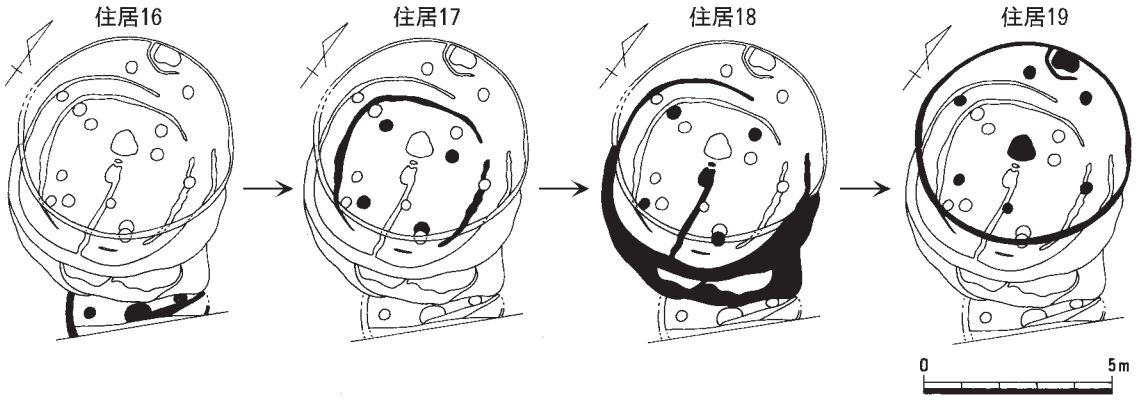
ここに掲載した遺物は、Ｂ群で最後の竪穴住居である竪穴住居15が機能を停止した後、その凹みに最終段階に堆積した黒褐色土（第18図－第２層）を中心に出土したものである。土器の中には、高杯**209**のように弥生時代後期後葉に下るものもわずかに含まれている。そのほか、鋳造と考えられる板状の鉄器**Ｍ４**、サヌカイトの剝片**Ｓ57**、礫岩製磨製石包丁未成品**Ｓ58**、角閃石玢岩製磨石**Ｓ59**、緑色片岩の原石**Ｓ60**、玄武岩の原石**Ｓ61**などがある。（物部）

Ｃ群（竪穴住居16～19）（第34～43図、図版６）

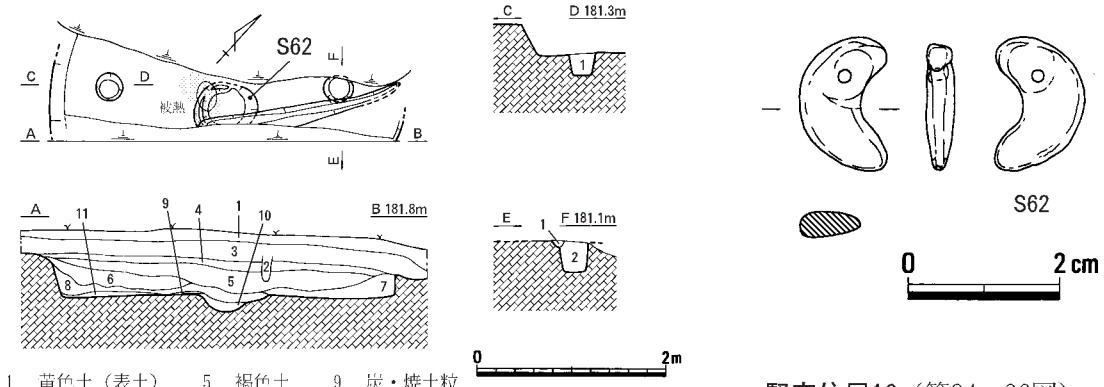
Ｃ群は、Ａ群の東約５ｍ、Ｂ群からは南東に約10ｍ谷を上がった位置に所在し、重複した４軒の竪穴住居からなる。平面形は直径４～５ｍの円形または隅丸方形を呈する。時期は、群内最古の竪穴住居16に出土土器がないため断定できないが、弥生時代後期中葉を中心とした住居群と推定される。また、竪穴住居の建て替えごとに斜面下方へ少しずつ場所をずらしており、規模は少しずつ大きくなる。（物部）



第34図　Ｃ群（竪穴住居16～19）（1/80）

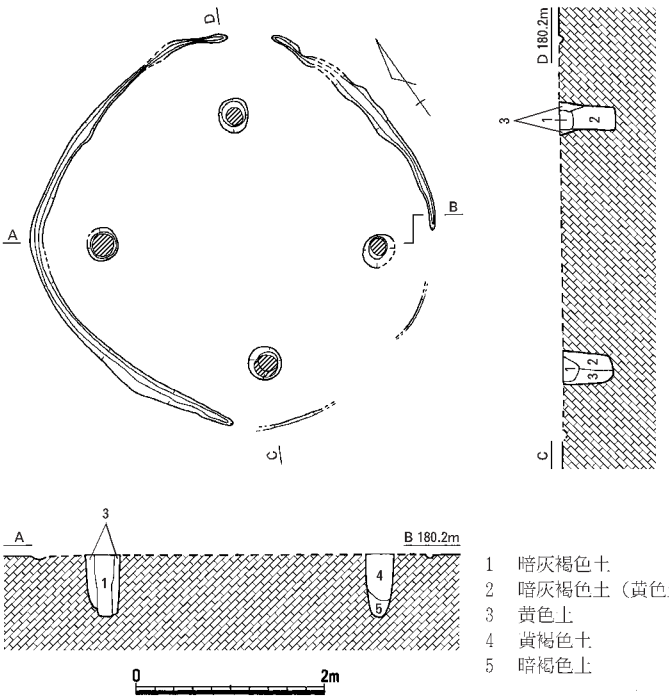


第35図　Ｃ群（竪穴住居16～19）変遷（1/200）



1　黄色土（表土）　5　褐色土　9　炭・焼土粒
2　黄褐色土（柱穴）　6　暗褐色土　10　灰褐色土（中央穴）
3　黄褐色土　7　褐色土　11　褐色土（貼り床）
4　黒褐色土　8　褐色土

第36図　竪穴住居16（1/80）・出土遺物（1/1）

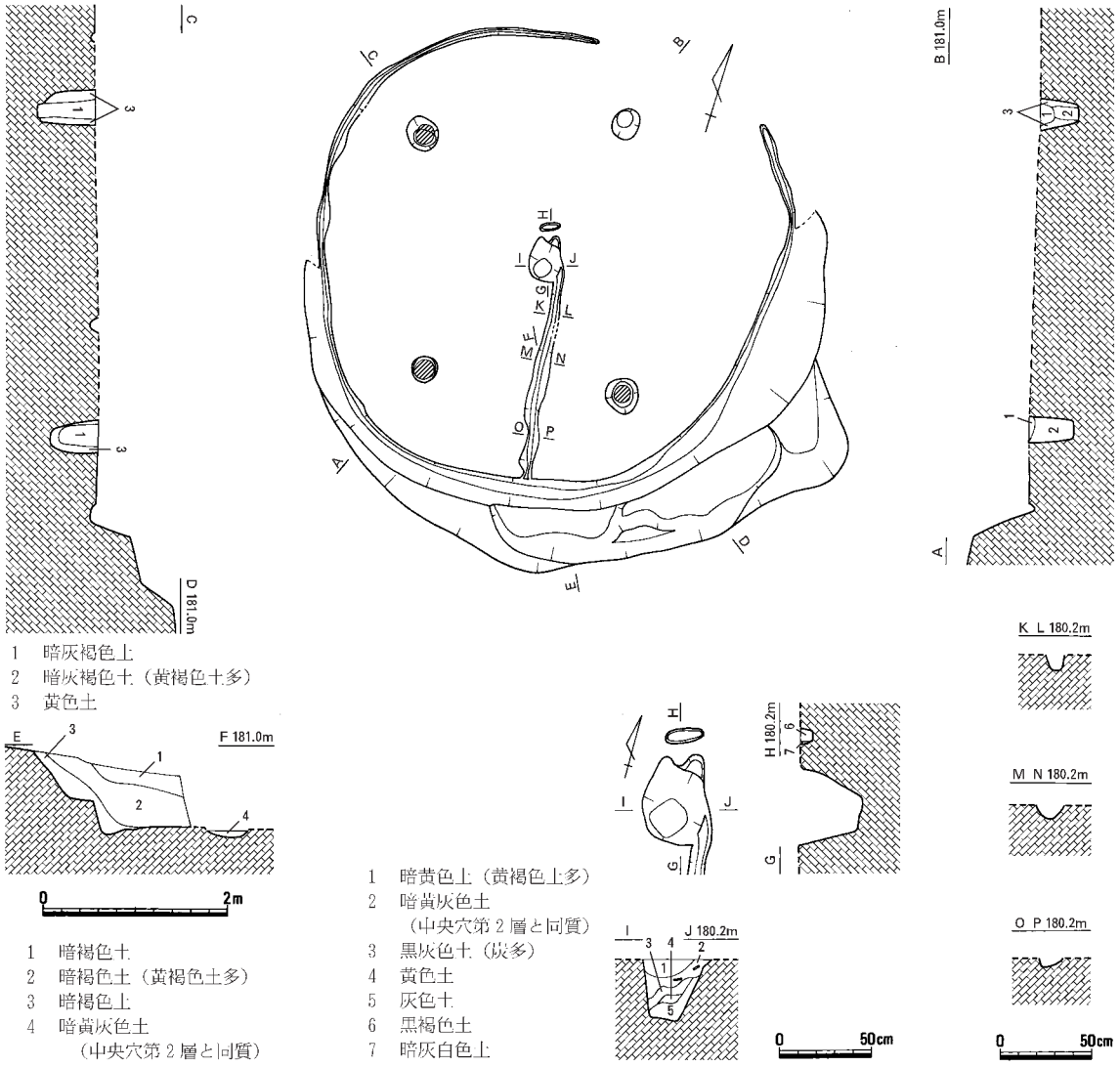


1　暗灰褐色土
2　暗灰褐色土（黄色土多）
3　黄色土
4　黄褐色土
5　暗褐色土

第37図　竪穴住居17（1/80）

竪穴住居16（第34～36図）

住居の南側は調査区外になり、北側は竪穴住居18により削平されている。直径約3.7ｍの円形を呈する竪穴住居と推定される。柱穴は２か所で検出されたが、本来は４本柱と考えられる。床面中央で深さ15㎝の中央穴を検出した。中央穴の埋土上面から西側床面にかけて炭と焼土の粒の散布が見られることから、この中央穴は掘削後埋められた可能性がある。壁体溝は確認されなかったが、中央穴から外方へ延びる間仕切り状の溝を確認した。この溝は中央穴埋土および炭・焼土粒層を切り込んでいるように観察された。また、貼り床を持つ。出土土器はないが、緑色の勾玉S62が中央穴の北東壁に貼り付いた状態で検出された。材



第38図　竪穴住居18（1/80・1/40）

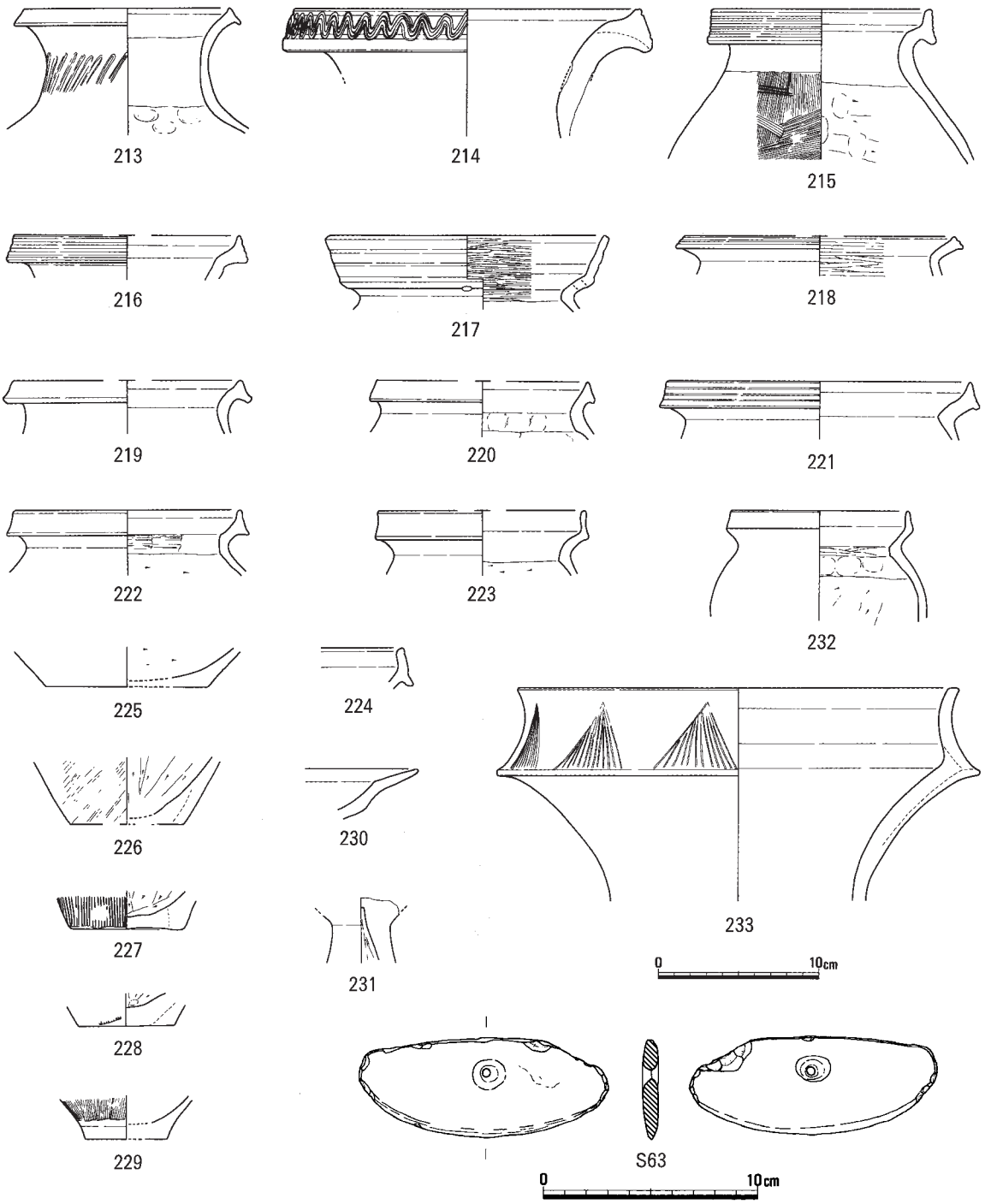
質は、妹尾護氏による蛍光Ｘ線分析の結果、蛇紋岩と推定された。孔の周辺は緩く凹んだ形状を呈し、両面穿孔、全面研磨良好である。時期は切り合い関係から弥生時代後期中葉以前である。　（物部）

竪穴住居17（第34・35・37図）

直径約４ｍの隅丸方形を呈する竪穴住居である。竪穴住居18により削平を受け、検出したのは壁体溝と４個の柱穴である。遺物の出土はないが、この住居の時期は、次段階の竪穴住居18の壁体溝が竪穴住居17のほぼ同心円上に位置することから、竪穴住居18以前の近い時期と推定される。　（物部）

竪穴住居18（第34・35・38～39図、図版６・14・17）

平面形は北東部が若干いびつに張り出すが、隅丸方形状を呈する。直径は約５ｍを測る。４本柱で、柱穴には柱痕が確認された。床面中央には深さ約30㎝の中央穴と、その中央穴東側から南方へ延びる溝がある。この溝は山側の壁体溝に接続するが、深さは壁体溝の方が深い。中央穴の北10㎝ほど離れて、約20×８㎝、深さ７㎝ほどの小さな溝が検出された。この溝の平・断面において、厚さ６㎝ほどの板状の石か木を立てていたのではないかと推定される痕跡が見られた。また、住居南側の山側に不

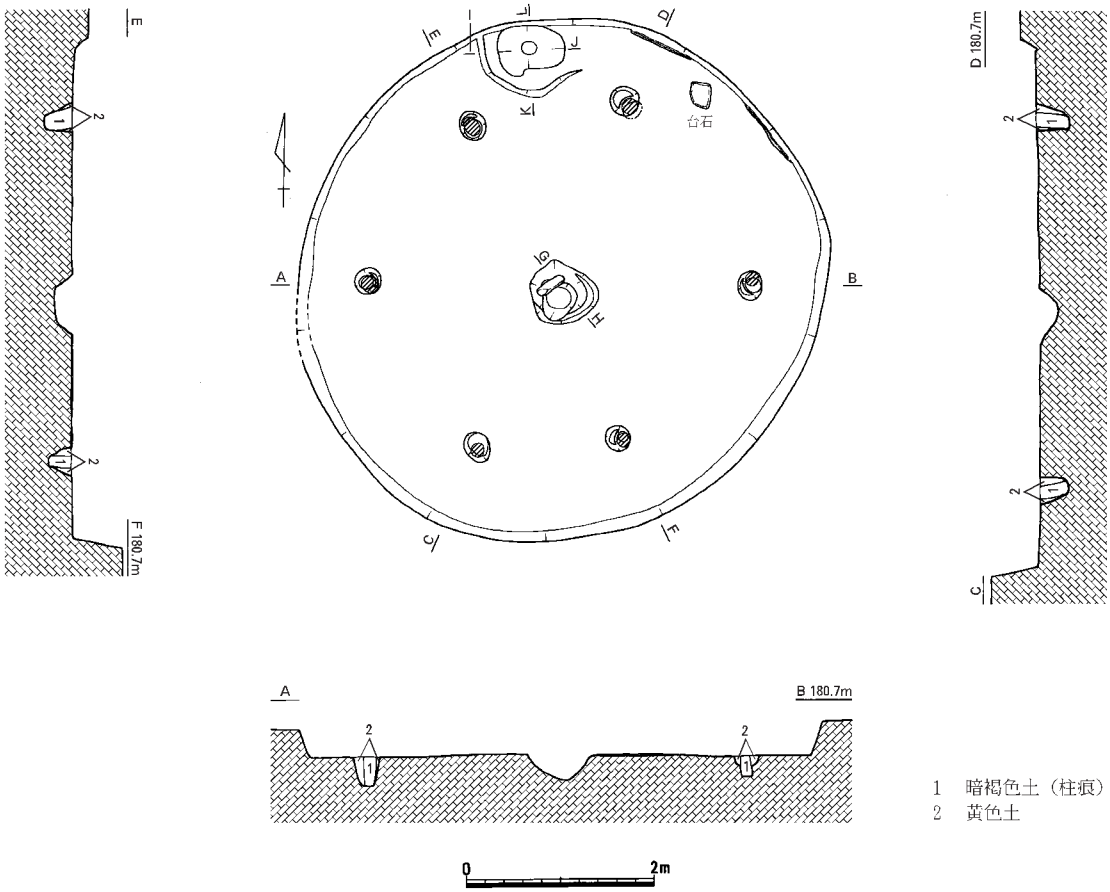


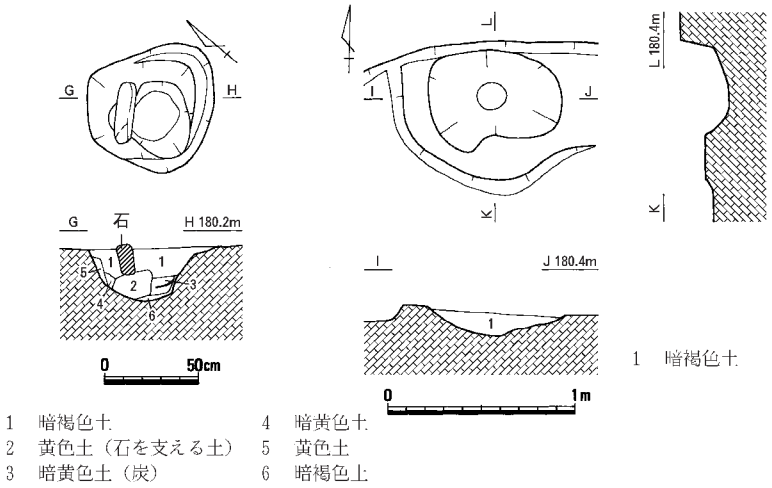
第39図　竪穴住居18出土遺物（1/4・1/3）

整形な段が幅約４ｍにわたって検出された。土器はすべて埋土中からの出土で、床面遺物はＳ63の緑色片岩製の磨製石包丁だけである。出土土器の時期は後期中葉が大半を占めるが、**213・214・216**はやや古く、**217・223・232**などは新しい後期後葉と思われる。この竪穴住居の時期としては、後期中葉と考えたいが、弥生時代後期後葉まで下る可能性がある。（物部）

竪穴住居19（第34・35・40・41図、図版６・18）

竪穴住居19は樋ヶ鼻遺跡における最後の竪穴住居である。平面形は、直径5.5m前後のほぼ円形を





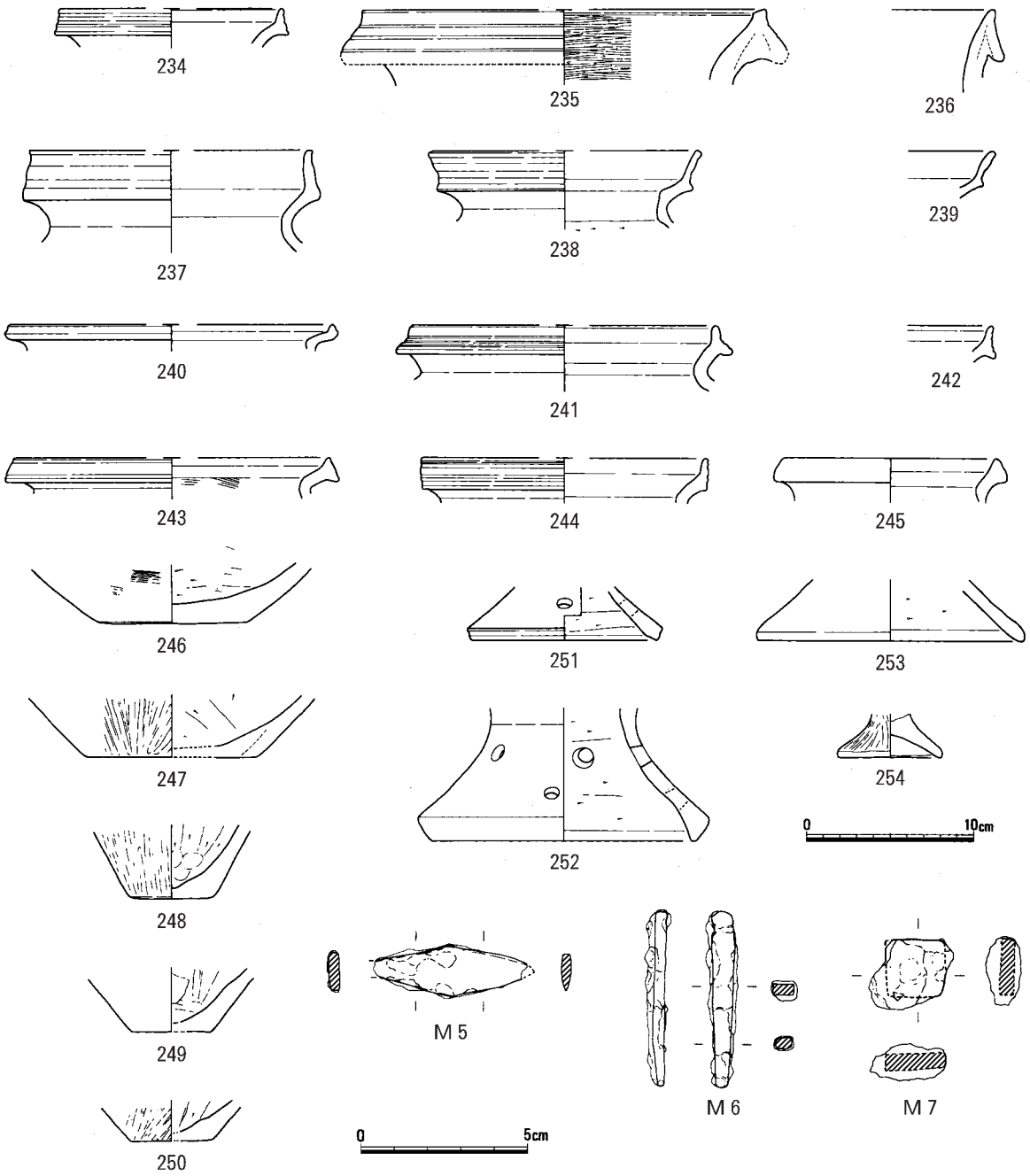
第40図　竪穴住居19（1/80・1/40）

呈する。主柱穴は６個で、すべてに柱痕が確認された。柱間距離は1.6～2.1ｍとばらつきが見られるが、中央穴を挟んで対面に位置する柱穴間距離はほぼ等しくなる特徴がある。中央穴の中央やや北西寄りに30×16㎝、厚さ８㎝を測る平石が横位に立てられている状況が確認された。この石の下部にのみ硬質の黄色土が存在することから、置き土をして平石を立て、中央穴を約１対２の割合に区切ったものと考えられるが、その機能は不明である。壁体溝はないが、北東側壁沿いで、幅１～２㎝で直線的に延びる短い溝を２か所で検出し、これは壁体自体の痕跡かもしれない。また、住居北側の壁際に地山を掘り残して低い段状に加工している部分が見られた。長軸約１ｍ、短軸約80㎝、床面より３～８㎝高くなる。中央部は浅く凹んでおり、埋土は硬質であった。この高段部は主柱穴の間に位置することから、住居の入口に関係する施設の可能性もある。地山および岩盤の小

塊を用いた貼り床がある。出土遺物は、埋土下半で検出されたＭ５～７の鉄器以外に、土器が多数あるが、すべて小片で、埋土中および貼り床土から出土し、床面遺物はなかった。貼り床土から出土したのは甕口縁部242、甕底部247、高杯脚部251・253である。埋土中の土器は竪穴住居18と同様に後期中葉が大半を占めるが、甕237～239のように後期後葉に下る可能性があるものを含んでいる。竪穴住居19の時期は、弥生時代後期中葉の終わりから後葉にかけてのなかで考えたい。（物部）

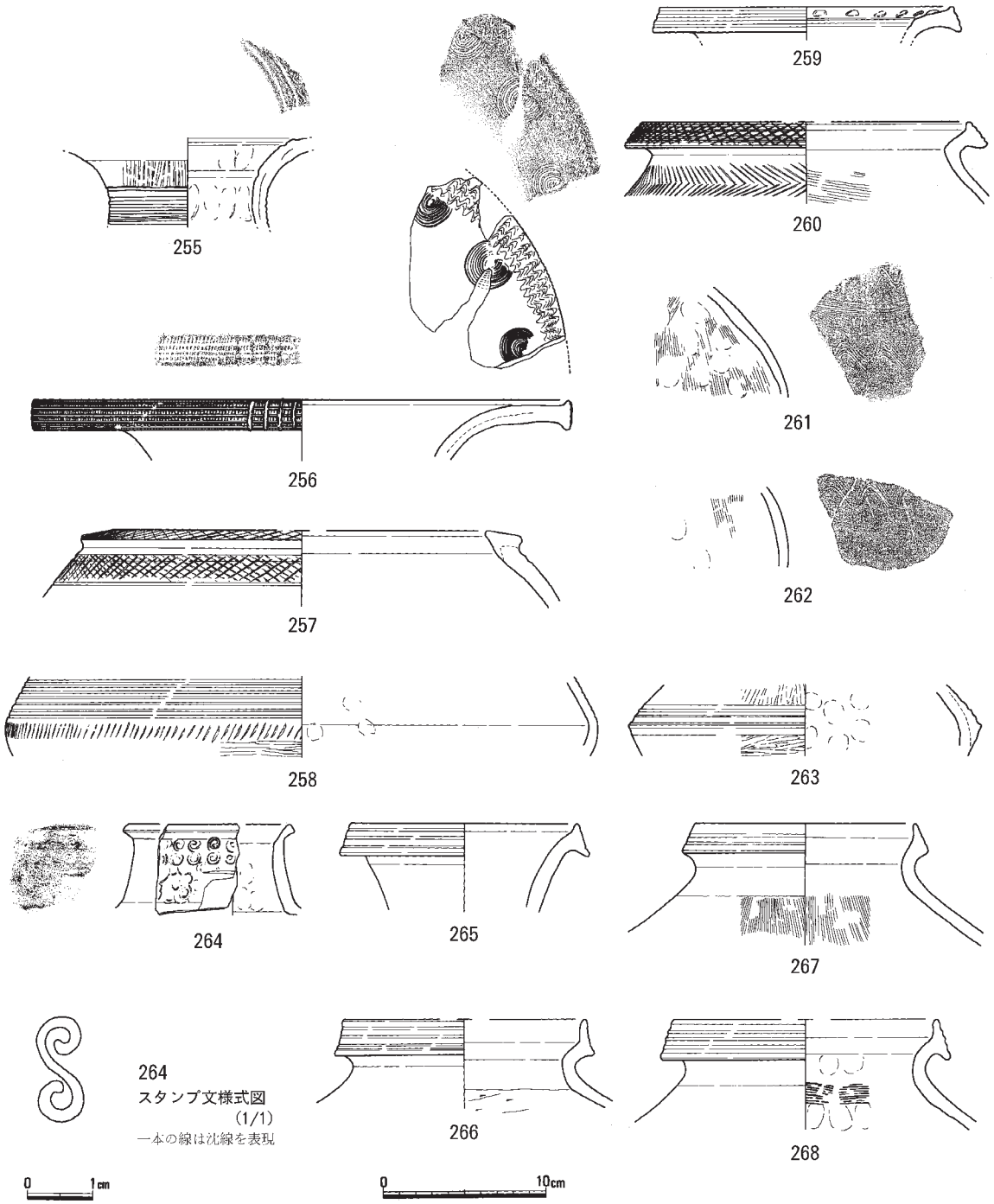
Ｃ群（竪穴住居16～19）出土遺物（第42～43図、図版14・16・18）

ここに掲載した遺物は、竪穴住居Ａ・Ｃ群の上部を広く覆っていた黒色土のうち、Ｃ群上部およびその周辺の黒色土層から出土したものである。弥生時代中期後葉から後期中葉にかけての時期幅があ

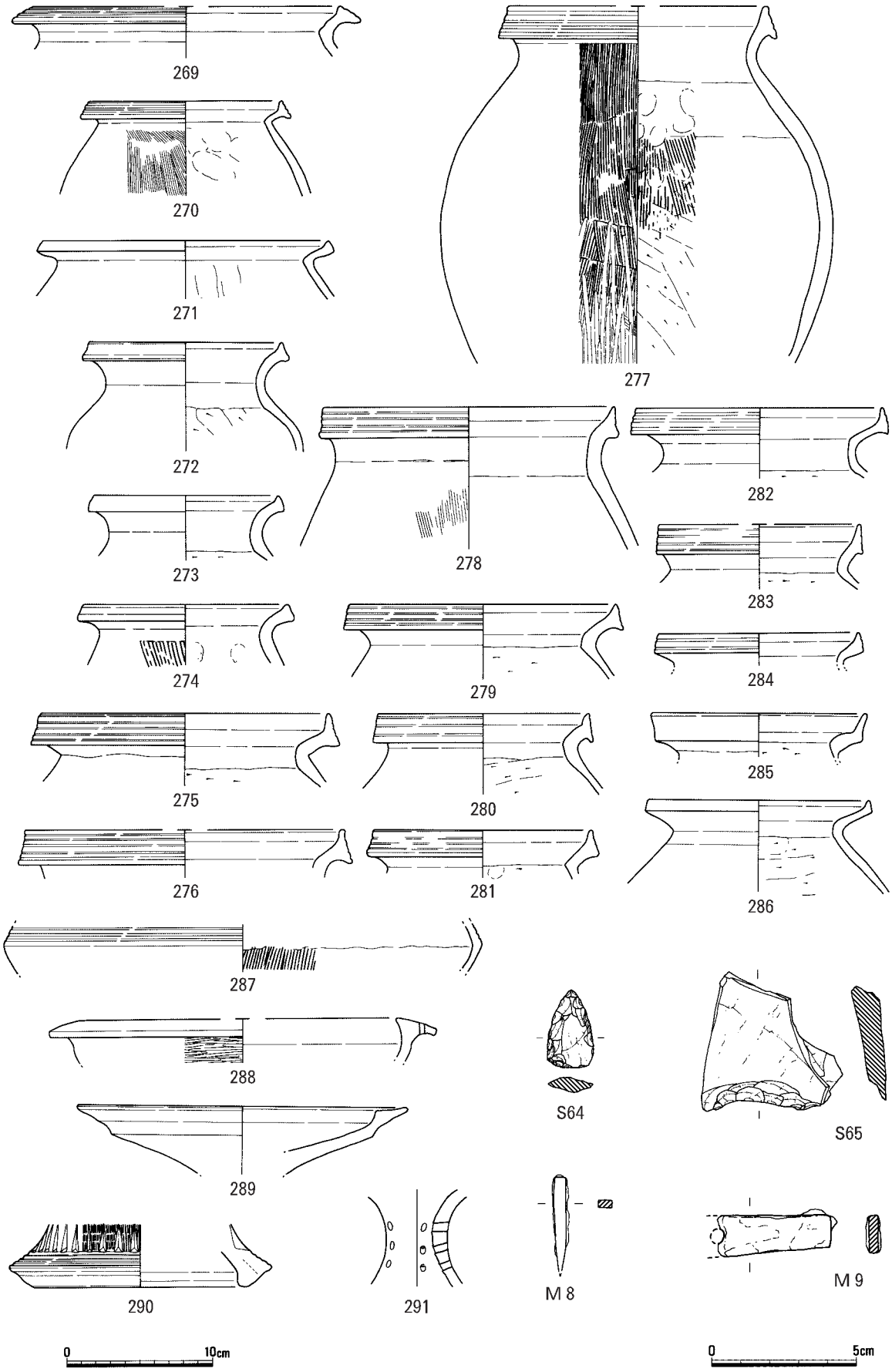


第41図　竪穴住居19出土遺物（1/4・1/2）

る。中期後半の土器は255～263・271・287・288の壺・甕・鉢などで、ヘラ描きによる斜格子文や綾杉状の文様、円形浮文、棒状浮文などの文様や装飾が多い。これらは、Ｃ群の北に位置する竪穴住居30に伴っていた遺物の可能性がある。壺265、甕269～270・277や高杯289、脚台290、器台291は後期前葉と考えられ、Ｅ群の段状遺構に所属するものと思われる。その他はおおむね弥生時代後期中葉の時期と捉えられる。264は短頸壺で、頸部に「Ｓ」字状渦文のスタンプが上下二段に土器片全体に施されている。スタンプ文原体は模式図のように、１本の沈線が巻きこんで反転してもどる。ほかにサヌカイト製石鏃Ｓ64、素材剥片Ｓ65、錐状鉄器Ｍ８や刀子の茎部Ｍ９がある。　（物部・米田）



第42図　Ｃ群（竪穴住居16～19）出土遺物①（1/4）



第43図　Ｃ群（竪穴住居16～19）出土遺物②（1/4・1/2）

Ｄ群（竪穴住居20～29、段状遺構１・２）（第44～56図、図版７）

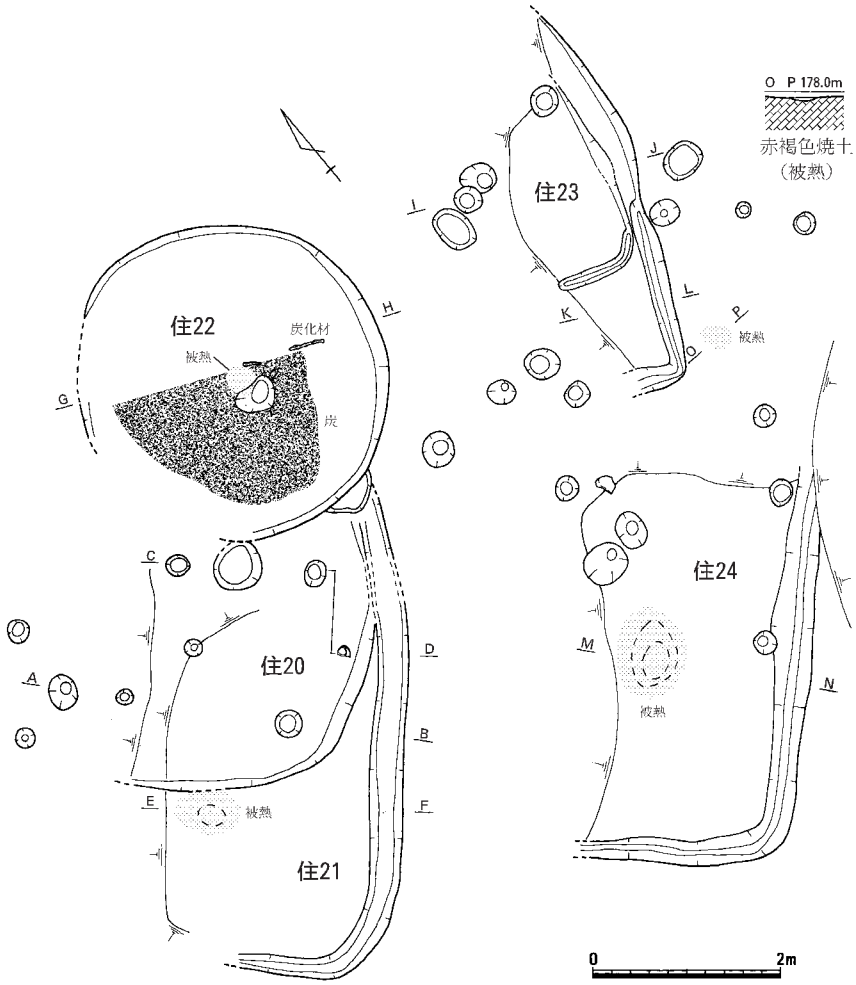
Ｄ群は調査区北西部にあたり、竪穴住居20～29、段状遺構１・２で構成される。竪穴住居22～24は第86図の北西部包含層を完掘後に検出した。また竪穴住居26・29、段状遺構１・２は弥生時代後期初頭～前葉のＣ群（竪穴住居11～15）に切られている。重複する遺構の層位的な新旧関係は、竪穴住居20～22のなかでは古い方から順に竪穴住居20→21→22となる。また竪穴住居26は竪穴住居27よりも古い。Ｄ群南側竪穴住居28・29、段状遺構１・２は、竪穴住居29が竪穴住居28・段状遺構１より新しい。段状遺構２は段状遺構１を切る。竪穴住居21・23・24は長方形を呈するが、長辺が等高線に平行するように主軸が設定されている。Ｄ群の各遺構からの出土遺物、層位による新旧関係、検出面を検討すると、ほとんどの遺構が弥生時代中期後葉の範疇で捉えられる。　（米田）

竪穴住居20

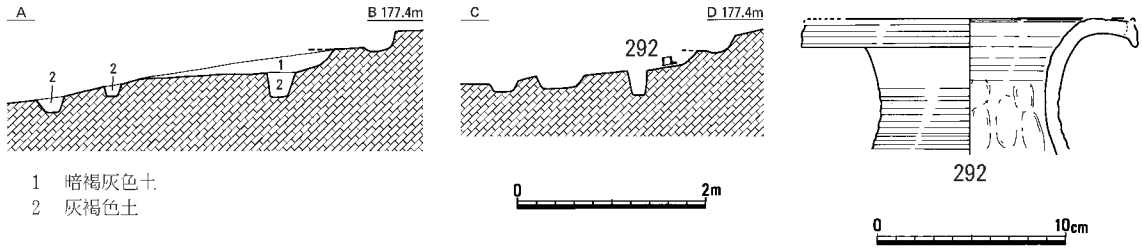
（第44・45図）

Ｄ群北側の西部に位置し、竪穴住居21・22に切られる。平面形は隅丸方形に近いが、明確でない。規模は長辺2.6ｍ以上、短辺2.2ｍ以上、深さ約20㎝を測る。柱穴は数個認められるが、本住居に伴うかは不明である。床面は大半が流出し、被熱面・炭面などは確認していない。

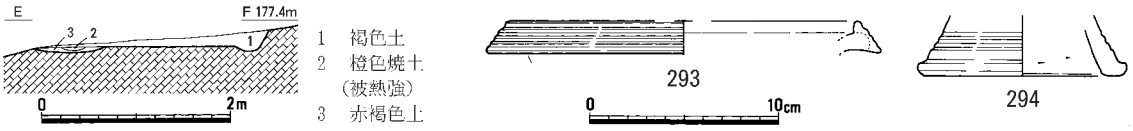
遺物は床面直上か



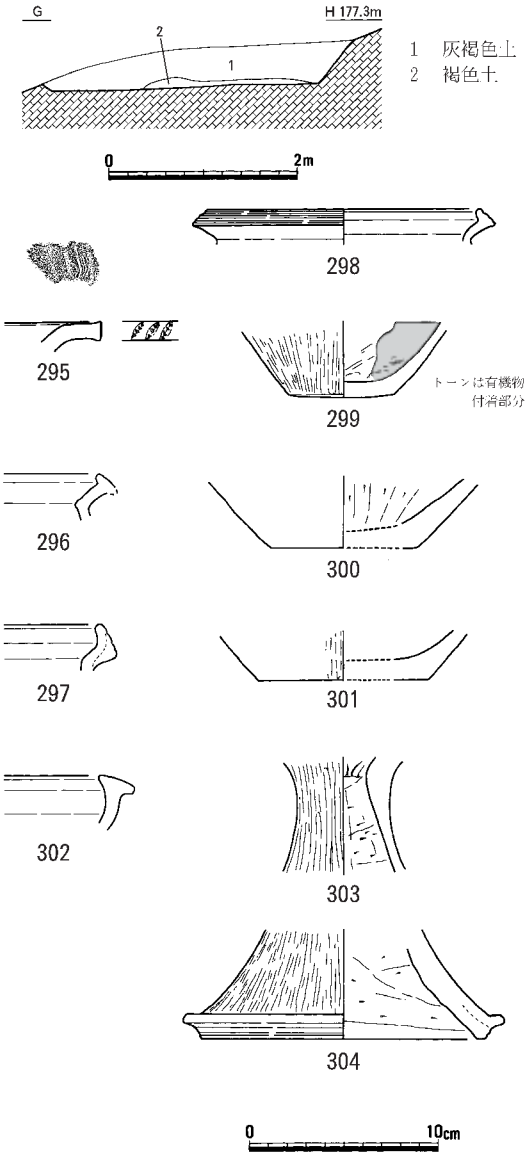
第44図　Ｄ群北側（竪穴住居20～24）（1/80）



第45図　竪穴住居20（1/80）・出土遺物（1/4）



第46図　竪穴住居21（1/80）・出土遺物（1/4）



第47図　竪穴住居22（1/80）
・出土遺物（1/4）

ら弥生土器の壺292が出土した程度である。時期は弥生時代中期後葉の新段階と考えられる。　（米田）

竪穴住居21（第44・46図）

Ｄ群北側の南西部に位置し、竪穴住居20の埋没後に構築されており、北側は竪穴住居22に切られる。西側は流出している。平面形は長方形を呈しており、規模は長辺4.8ｍ以上、短辺2.3ｍ以上、深さ約18㎝を測る。長軸が等高線に平行する。東・南壁は幅約40㎝、深さ８㎝の溝が巡る。南壁から1.2ｍの部分には強い被熱面があり、焼けて硬化している。遺物は少なく、覆土から弥生土器の甕の口縁部293、高杯の脚部294が出土した。遺構の埋没時期は出土土器から弥生時代中期後葉の範疇で捉えられるが、層位的な切り合い関係から竪穴住居20よりも新しく、竪穴住居22よりも古いと考える。　（米田）

竪穴住居22（第44・47図）

Ｄ群北側の北西部に位置し、竪穴住居20・21を切る。平面形は円形を呈し、規模は径3.2ｍ、深さ44㎝である。床面中央では不整形な中央穴と弱い被熱面を確認した。中央東側で炭化材が認められたが、焼失住居としての積極的な根拠は得られなかった。

床面南半では炭面が長径220㎝、短径140㎝の不整円形状に広がっていた。炭面の北端については幅25㎝のサブトレンチのために不明だが、トレンチ内で収まると考えられる。

遺物は覆土から弥生土器の壺295、甕296～298、甕・壺の底部299～301、高杯303・304が出土した。295は壺の口縁部で、端部に刻み目文、内面に櫛描き波状文を施す。299は甕の底部で、外面には部分的に煤が認められ、内面には炭化した有機物が付着している。303・304は高杯の脚部であり、接合はできなかったが、形態・調整・胎土・焼成から同一個体の可能性が高い。

本竪穴住居の埋没時期は弥生時代中期後葉と考えられ、竪穴住居20・21よりも新しい。　（米田）

竪穴住居23（第44・48図）

Ｄ群の北側にあたり、住居の北側と西側は流出しているが、平面形は長方形を呈すると考えられる。現状では南辺が２か所で確認でき、２軒重複している可能性も否定できないが、今回は規模の大きいものを竪穴住居23として報告する。規模は長辺4.0ｍ以上、短辺1.2ｍ以上、深さは約20㎝残存する。壁面は壁体溝状を呈する。被熱面・炭面は、現状では確認できない。

遺物は弥生土器の甕の口縁部**305**、底部**306**、器台の口縁部**307**が覆土から出土している。時期は弥生時代中期後葉に比定される。　（米田）

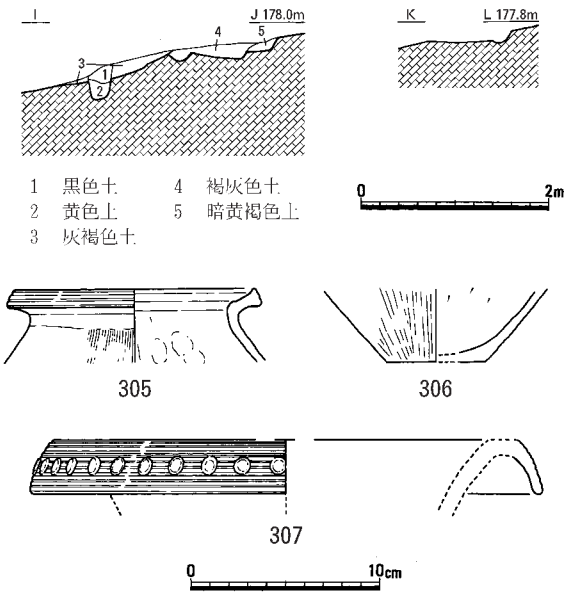
竪穴住居24（第44・49図）

Ｄ群北側の南部に位置する。住居の西側は流出し、北側は竪穴住居11に切られる。平面形は長方形を呈し、長辺4.0ｍ以上、短辺2.4ｍ以上、深さはわずか５㎝ほど残存する。壁面は幅約20㎝、深さ12㎝の壁体溝状を呈する。床面では南壁から約80㎝の地点に被熱面が配され、強く焼けて硬化している。

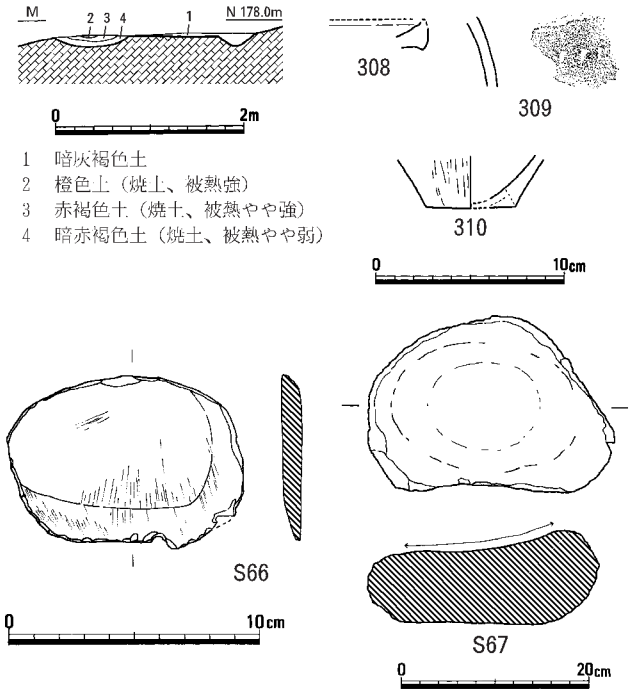
遺物は弥生土器の壺の口縁端部**308**・胴部**309**、甕の底部**310**、黒色片岩製の石包丁未成品**S66**、凹石**S67**が出土したが、いずれも原位置を保っていない。遺構の埋没時期は弥生時代中期後葉の範疇で捉えられる。　（米田）

竪穴住居25（第50図）

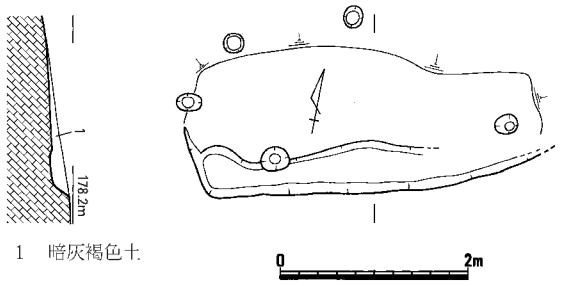
Ｄ群の南西部に位置する。北・東側は流出しており、平面形は長方形を呈する。規模は長辺3.3ｍ以上、短辺1.5ｍ以上を測り、深さは12㎝残存する。南壁は溝状を呈する。遺物は弥生土器片が散見され、遺構の時期は弥生時代中期後葉の可能性がある。　（米田）



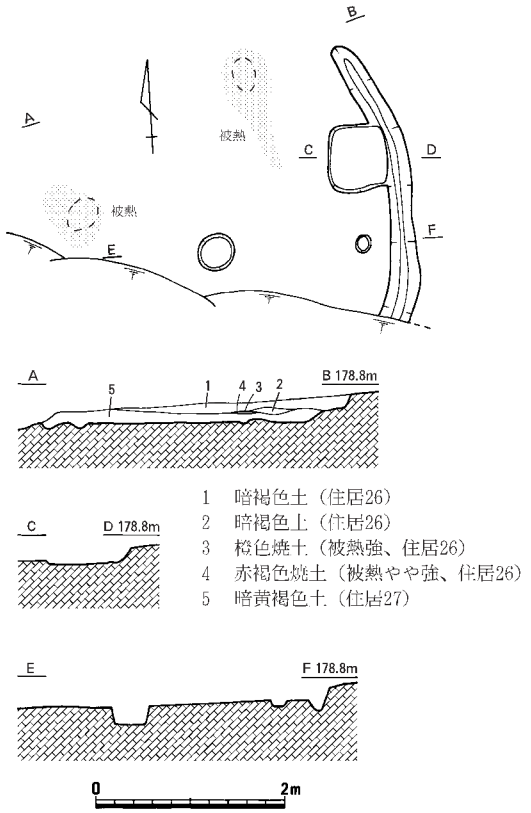
第48図　竪穴住居23（1/80）・出土遺物（1/4）

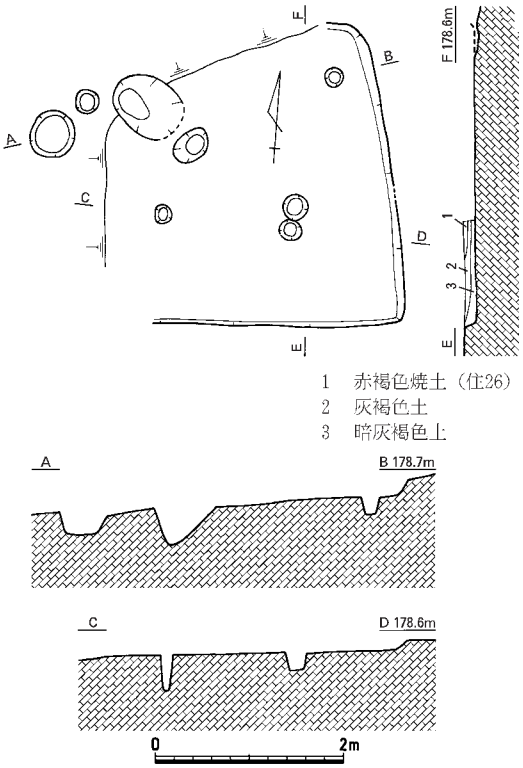


第49図　竪穴住居24（1/80）・出土遺物（1/4・1/3・1/8）

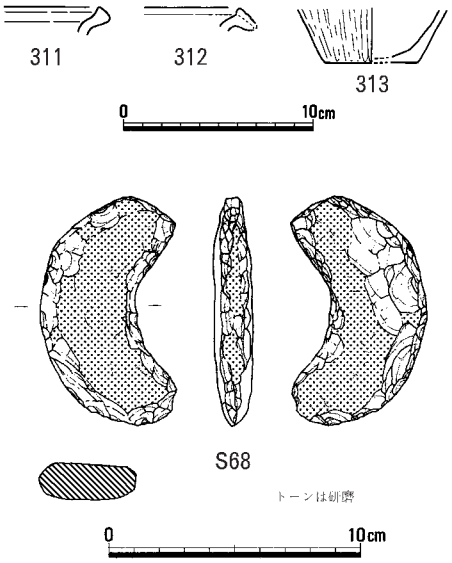


第50図　竪穴住居25（1/80）





第52図　竪穴住居27（1/80）



第51図　竪穴住居26（1/80）
・出土遺物（1/4・1/3）

竪穴住居26（第51図、図版18）

住居の南半部はＢ群の竪穴住居によって削平されている。西から北にかけては斜面の下方で流失し、あるいは竪穴住居27の埋土を切り込んでいることもあって、輪郭をはっきりと捉えることができなかった。東側は地山を掘削しており、壁と壁体溝が検出された。床面ではその壁体溝に取り付くように、非常に浅い方形土壙が検出された。円形の掘り込みも見られたが浅く、柱穴とは考えにくい。また、被熱面が２か所で確認され、橙色または赤褐色に変色している。竪穴住居の平面形は直径６～７ｍの円形と推測されるが、検出幅が狭くて断定できない。土器は、埋土中から甕311～313が出土した。また、東壁沿いの埋土中からは、Ｓ68の「Ｃ」字状を呈する石製品を検出した。その形態から勾玉の未成品かと考えられるが、最大長は９㎝を測り、巨大である。時期は土器の特徴から弥生時代中期後半と考えられる。（物部）

竪穴住居27（第52図）

一辺約３ｍの方形を呈する竪穴住居と考えられる。竪穴住居の北から西側にかけては流失している。壁体溝と中央穴は検出されず、柱穴らしいものも幾つかあるが、主柱穴とは判定できない。出土遺物は弥生土器の細片が少量ある。時期は遺構の切り合いから弥生時代中期後半以前である。　（物部）

竪穴住居28

（第53・54図）

Ｄ群南側の南東部に位置し、竪穴住居29に切られる。平面形は円形を呈し、規模は径3.8ｍ以上を測る。深さは24㎝残存する。柱穴は判然としない。遺物は弥生土器の高杯**314**が覆土から出土した程度である。遺構の埋没時期は、出土土器から弥生時代中期後葉に比定される。　（米田）

竪穴住居29

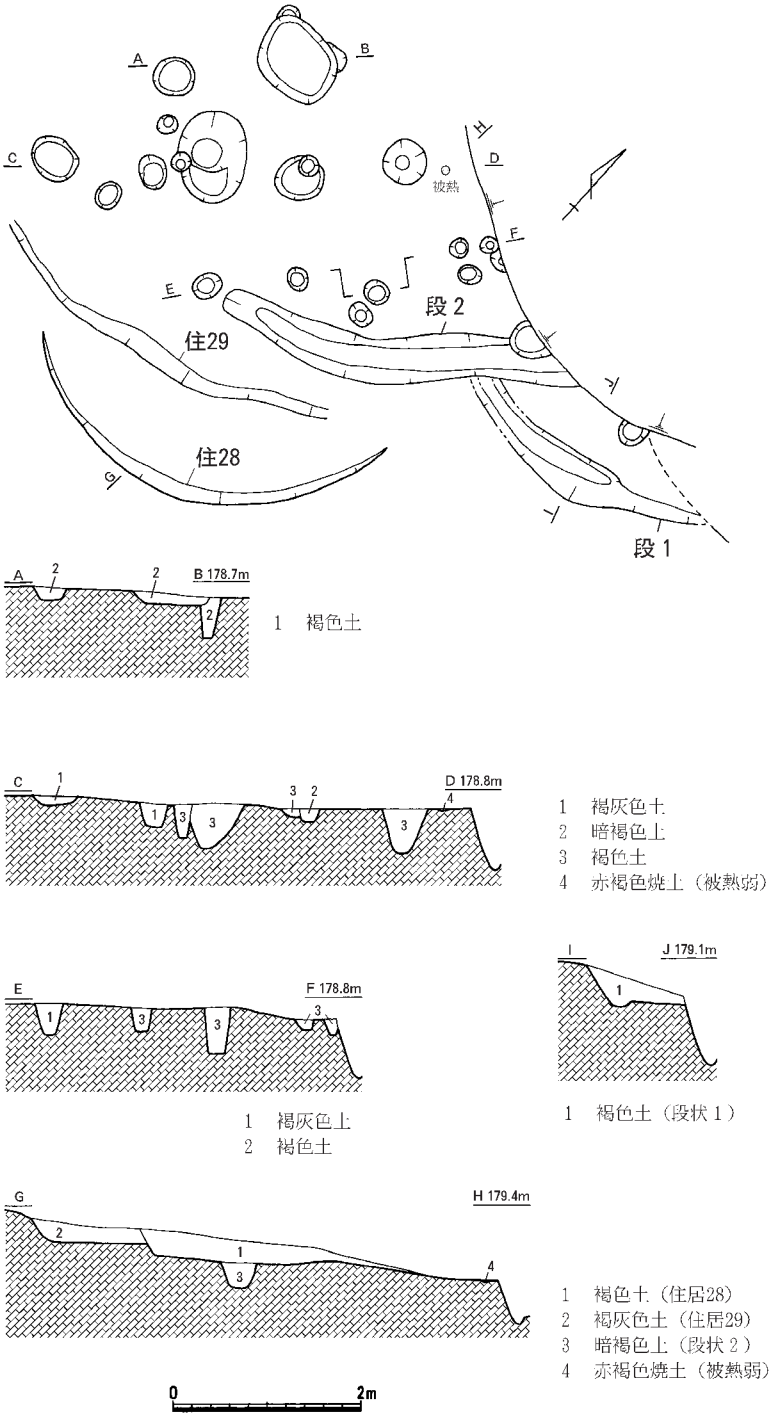
（第53・55図、図版16）

Ｄ群南側の南東部に位置し、竪穴住居28、段状遺構２を切る。平面形は不明であるが、壁面は歪ながらも直線を描く。段状遺構の可能性もあるが、床面が広範囲におよぶため竪穴住居として扱う。Ｇ－Ｈの第４層は被熱面であり、床面のやや下位で確認しており、本住居に伴うかは不明である。柱穴なども特定できない。

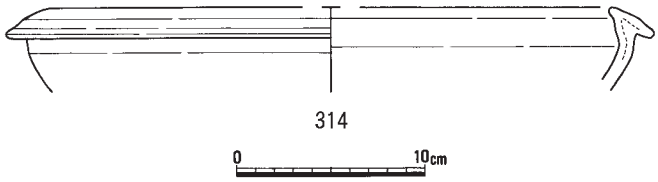
遺物は比較的多く、弥生土器の壺**315**～**317**、甕**318**～**323**、壺・甕の底部**324**・**325**、高杯**326**・**327**、サヌカイトの石鏃未成品**S69**、サヌカイト片116点、玄武岩片２点、黒曜石片１点**S70**が覆土より出土した。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。　（米田）

段状遺構１（第53図）

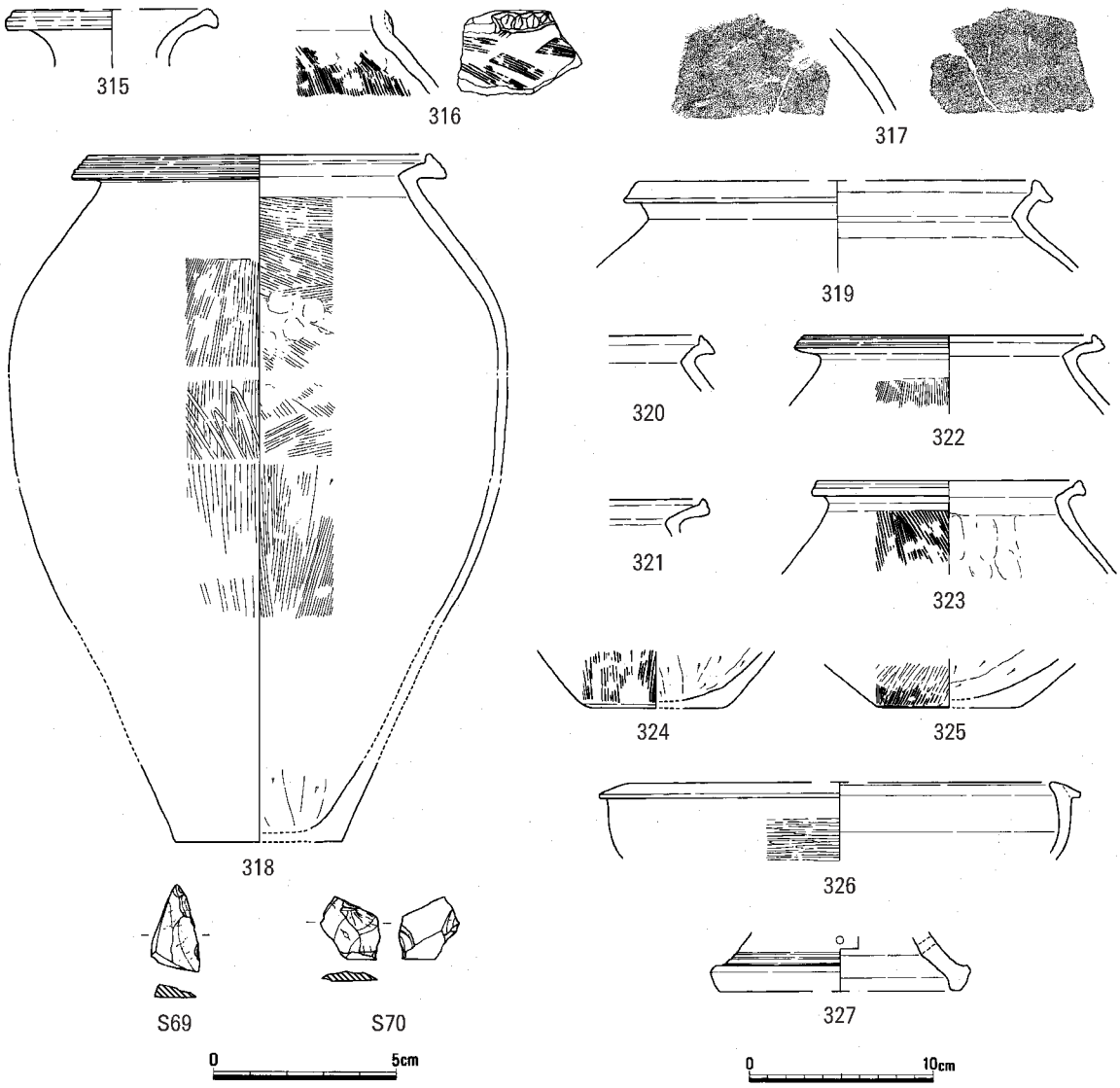
Ｄ群南側の東部に位置し、竪穴住居12、段状遺構２に切られる。長辺約3.0ｍ残存し、幅約50㎝の溝状の



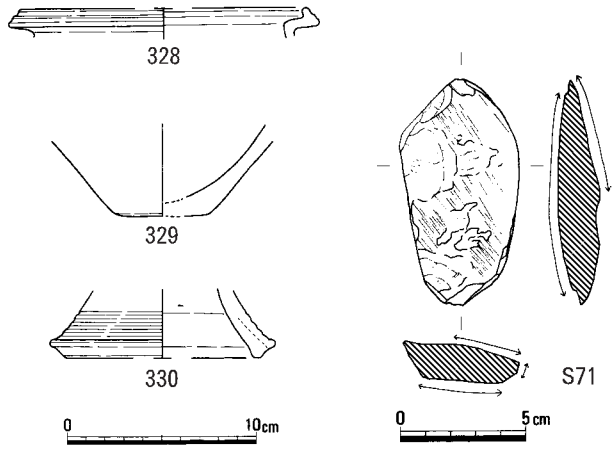
第53図　Ｄ群南側（竪穴住居28・29、段状遺構１・２）（1/80）



第54図　竪穴住居28出土遺物（1/4）



第55図　竪穴住居29出土遺物（1/4・1/2）

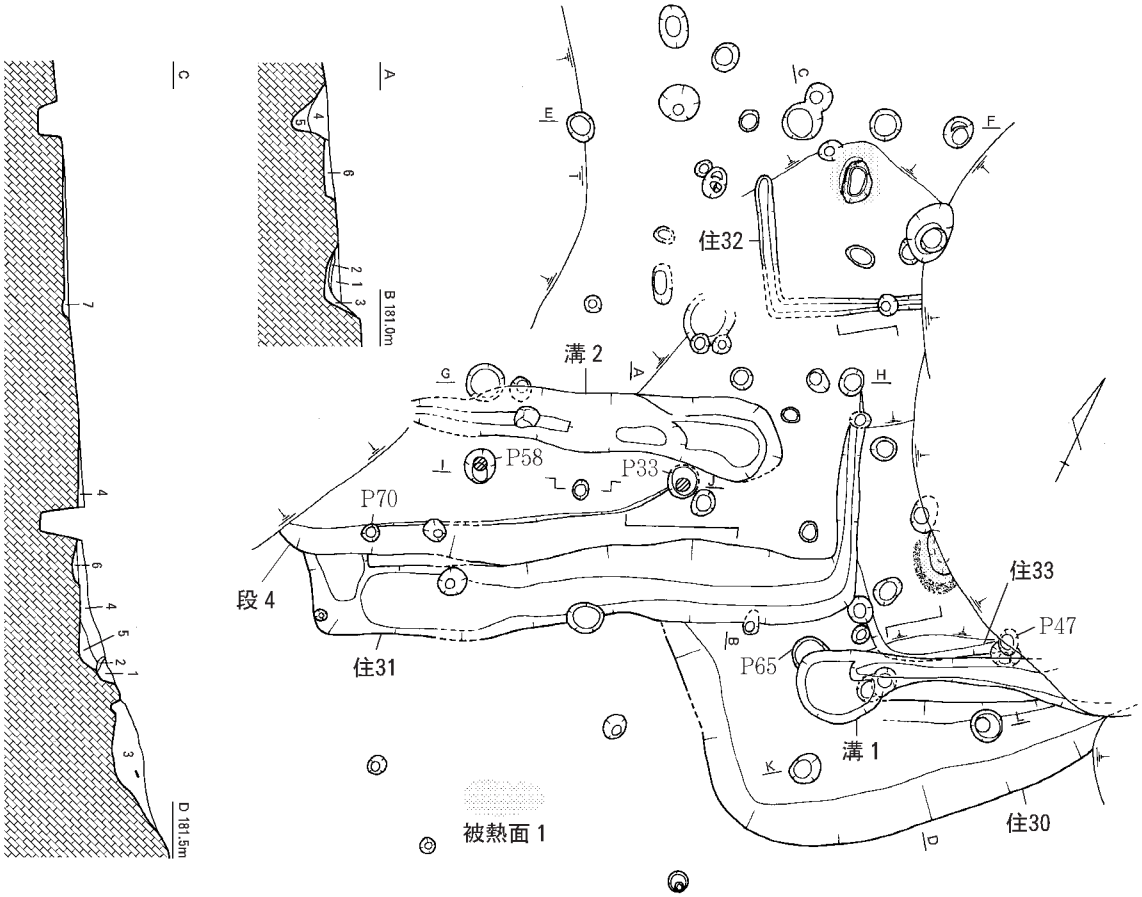


第56図　段状遺構２出土遺物（1/4・1/3）

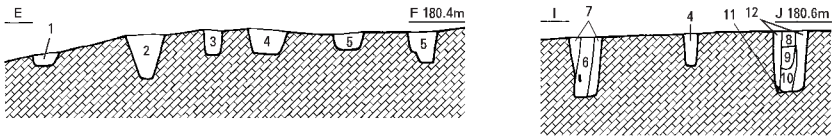
掘り方を持つ。遺物は皆無で、層位的に弥生時代中期後葉以前であろう。　（米田）

段状遺構２（第53・56図、図版13）

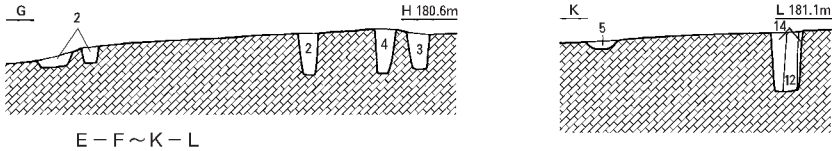
Ｄ群南側の東部に位置し、竪穴住居15・29に切られ、段状遺構１を切る。平坦面が残存していないが、長軸が等高線に平行することから、段状遺構として報告する。長辺約3.8ｍ残存し、溝の幅約50㎝、深さ24㎝を測る。遺物は弥生土器の甕**328・329**、高杯**330**、砥石**S71**、モモ種子１粒が出土した。遺構の埋没時期は、弥生時代中期後葉に比定される。　（米田）



A－B
1　暗褐色土（住居31）
2　暗褐色土（炭多、住居31）
3　暗褐色土（住居31）
4　暗褐色土（溝２）
5　暗褐色土（溝２）
6　暗灰褐色土（段状４）



C－D
1　暗黄褐色土（溝１）
2　暗灰褐色土（溝１）
3　暗褐色土（住居30）
4　褐色土（住居33）
5　暗褐色土（住居33）
6　暗褐色土（焼土粒多、住居33）
7　暗黄褐色土（住居32）



E－F～K－L
1　黄褐色土
2　暗褐色土
3　暗灰褐色土
4　灰褐色土
5　褐色土
6　暗褐色土（柱痕）
7　暗褐色土（黄褐色土塊含）
8　暗黄褐色土（柱痕）
9　暗黄褐色土（柱痕）
10　暗灰褐色土（柱痕）
11　暗灰褐色土
12　暗灰褐色土（黄褐色土塊含）
13　暗灰褐色土
14　暗灰褐色土（黄褐色土塊含）

0　2m

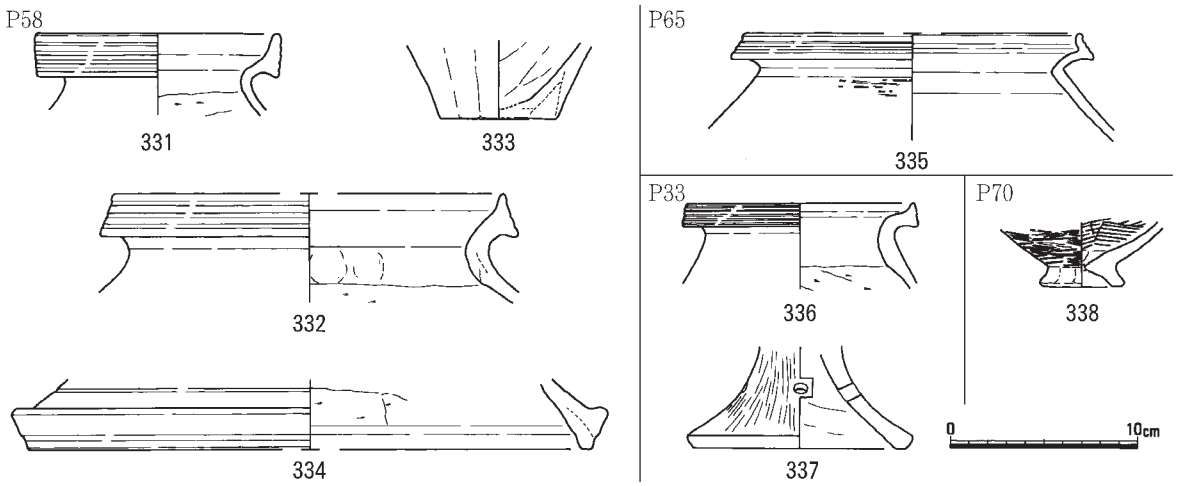
第57図　Ｅ群（竪穴住居30～33、段状遺構３・４）（1/80）

Ｅ群（竪穴住居30～33、段状遺構３・４、被熱面１）（第57～66図、図版７・８）

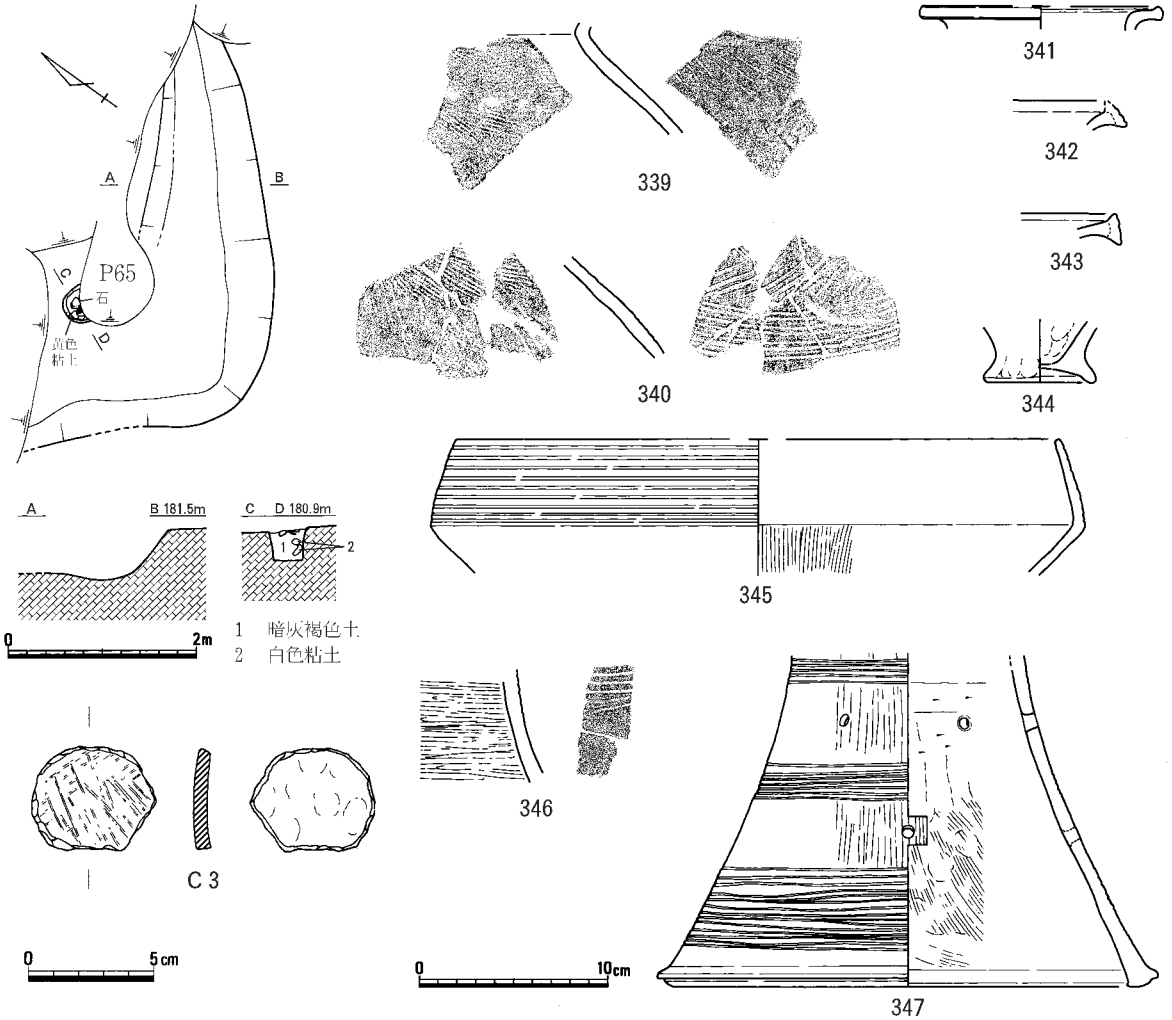
Ｅ群は、Ａ群とＣ群の間の緩斜面に位置する。Ｅ群東部は、後期中葉を中心とするＣ群に削平されている。西部は、Ａ群埋土上に延びていたと想定されるが、識別できなかった。竪穴住居４軒、段状遺構２基、被熱面１か所、溝２条、柱穴が検出された。溝１・２は段状遺構の可能性がある。切り合い関係は次のとおり。溝１は竪穴住居30・33を切る。溝２は段状遺構４を切り、段状遺構４は竪穴住居31を切る。竪穴住居31は竪穴住居33を切る。弥生時代中期後葉から後期前葉をを中心とした遺構群であるが、Ｐ58・33は後期中葉と考えられ、その時期の遺構が存在した可能性もある。　（物部）

竪穴住居30（第57・59図、図版15）

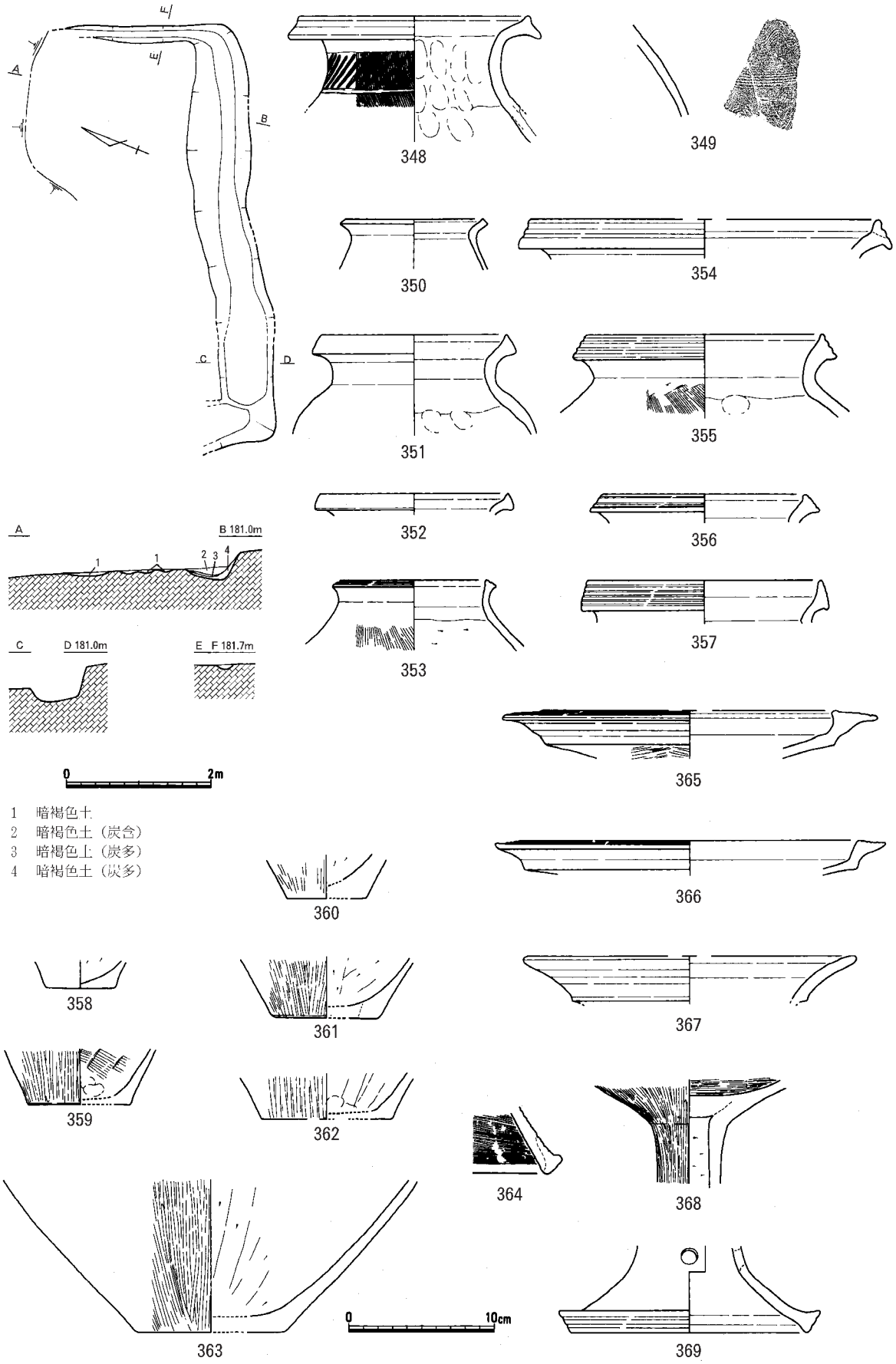
Ｅ群では最も古い竪穴住居である。南東側の壁沿いに広くて浅い溝がある。柱穴は確認されない。Ｐ65はこの竪穴住居に伴う可能性が高い。深さ36cmの小穴で、白色や黄色の粘土が入っていた。この粘土は周辺の岩盤で風化が進んだ部分と類似する。時期は埋土中の遺物から中期後葉である。（物部）



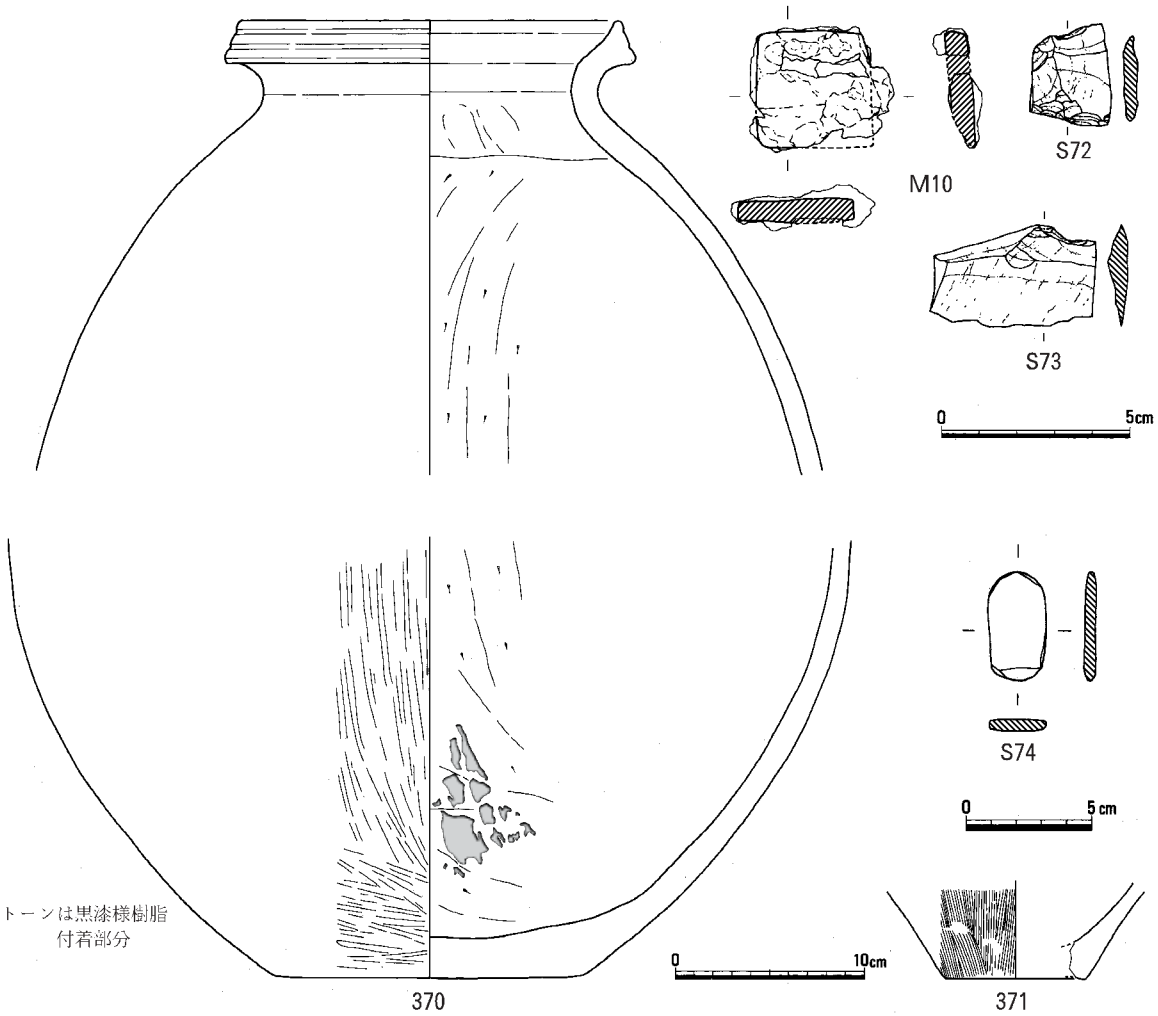
第58図　Ｅ群内柱穴出土遺物（1/4）



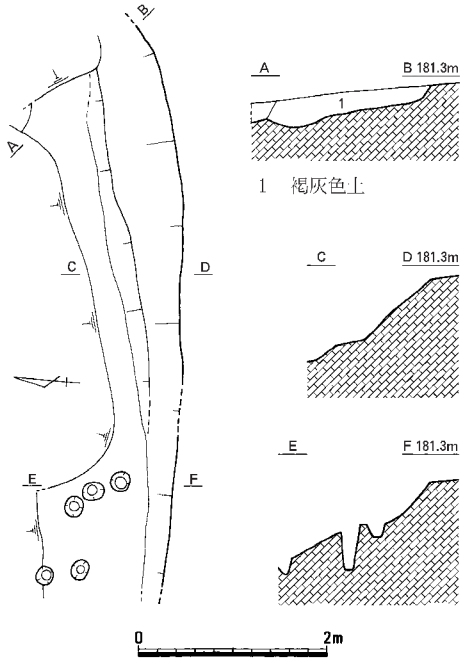
第59図　竪穴住居30（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）



第60図　竪穴住居31（1/80）・出土遺物（1/4）



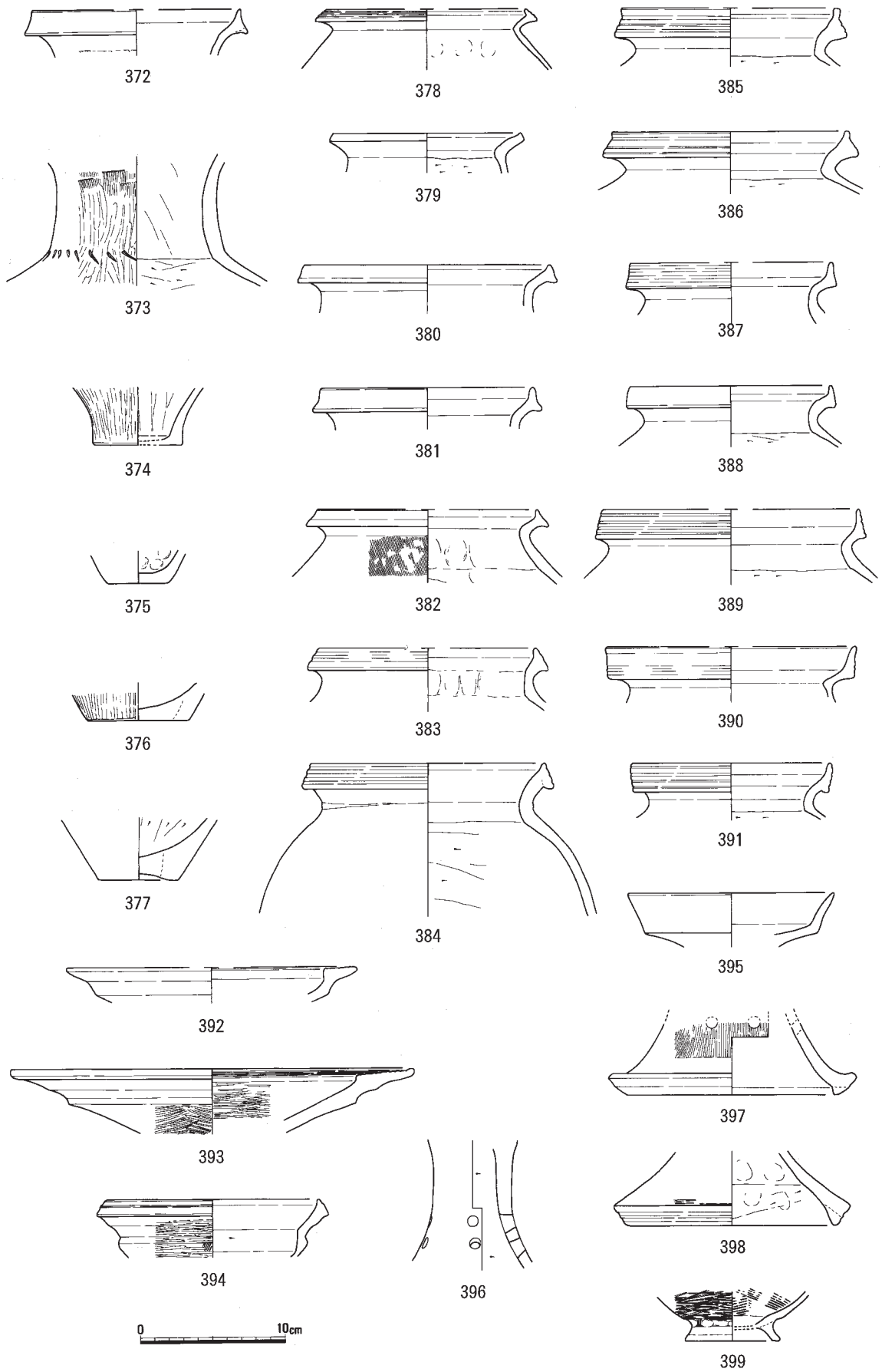
第61図　竪穴住居31・段状遺構３出土遺物（1/4・1/2・1/3）



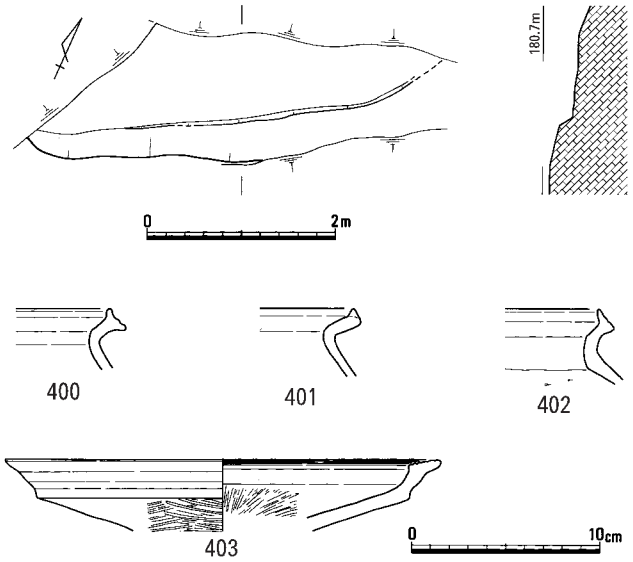
第62図　段状遺構３（1/80）

竪穴住居31（第57・60・61図、図版15）

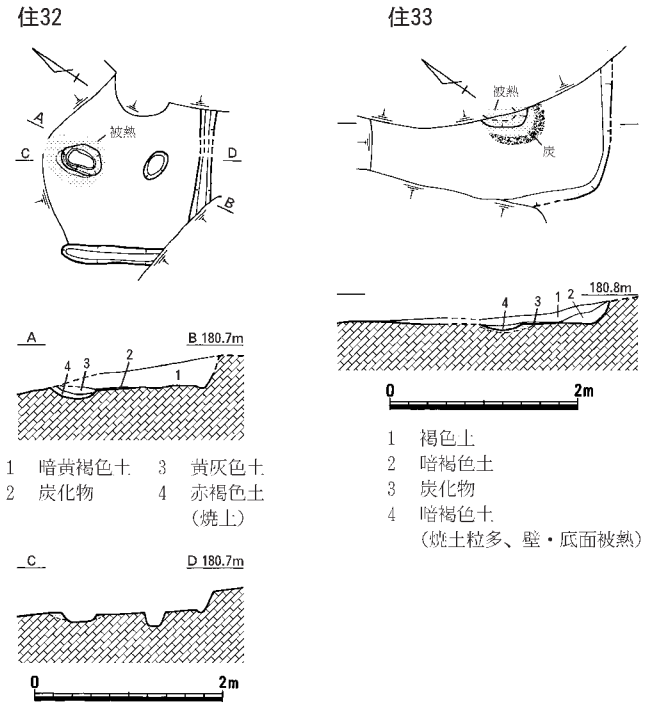
Ｅ群の中央部に位置し、竪穴住居30・33を切り、段状遺構４と溝２に切られる。平面形は長方形で、長軸が等高線に平行する。規模は長辺約4.8ｍを測り、短辺は約1.1ｍ残存する。壁面の溝幅は長辺約90㎝、短辺約20㎝である。遺物は弥生土器の壺**348・349**、甕**350～357**、壺・甕の底部**358～363**、高杯**364～369**、サヌカイト片２点が出土した。また弥生土器の壺**370・371**は竪穴住居31と段状遺構３から出土した土器であり、両遺構出土土器が接合関係にある。壺**370**の底部内面には黒漆様樹脂が付着しており、補修痕の可能性がある。鋳造鉄器の再加工品**M10**、楔形石器**S72**、サヌカイト片**S73**、扁平片刃石斧未成品**S74**は、竪穴住居31と段状遺構３から出土したが、出土位置は明らかでない。時期は弥生時代後期前葉に位置づけられる。　（米田）



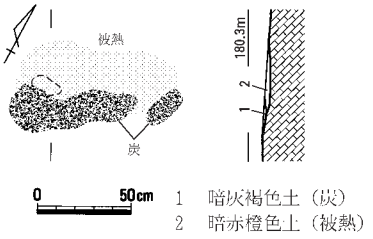
第63図　段状遺構３出土遺物（1/4）



第64図　段状遺構４（1/80）・出土遺物（1/4）



第65図　竪穴住居32・33（1/80）



第66図　被熱面１（1/40）

段状遺構３（第61～63図）

Ａ群の南西部に位置し、竪穴住居10に付設する段状遺構を切る。長辺は約6.0ｍ残存する。覆土中には多量の土器が廃棄されており、弥生土器370～399が出土した。時期は弥生時代後期前葉。（米田）

段状遺構４（第57・64図）

南側の壁と平らな面を検出した。壁は東西両端でわずかに湾曲してゆくようである。平坦面で柱穴などは確認されない。時期は埋土中遺物から弥生時代後期前葉と推定される。（物部）

竪穴住居32（第57・65図、図版８）

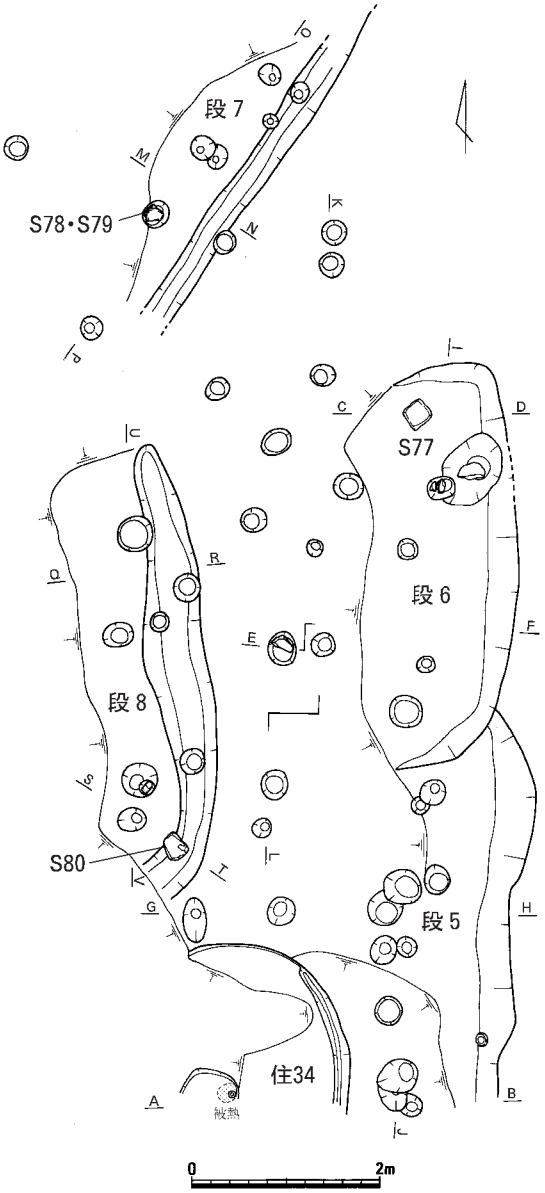
直角に曲がる壁体溝と焼土壙を検出した。竪穴住居の東部はＣ群に削平され、北部は流出しているため、規模は不明である。焼土壙は南東・南西壁体溝からそれぞれ1.3ｍ・0.9ｍ離れた箇所に位置する。長軸約42㎝、短軸約30㎝の楕円形を呈し、断面は深さ約９㎝の浅い皿形を呈する。土壙壁面から周囲にかけて被熱赤化し、北西縁部は橙色で硬化が見られる。西側には炭が散布する。床面を精査したが、遺物は土器細片が数点のみである。住居の時期は切り合い関係から、弥生時代後期中葉以前となる。（物部）

竪穴住居33（第57・65図）

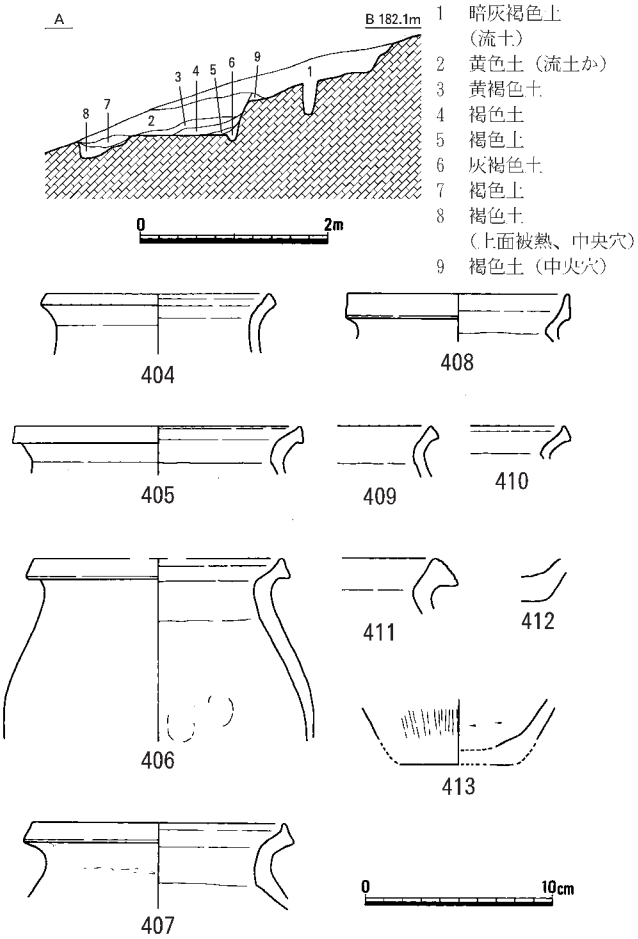
ほぼ直角に曲がる壁と焼土壙を検出した。壁体溝はないが、それ以外は竪穴住居32に類似する。竪穴住居北部はＣ群に、西部は竪穴住居31に、南部上層は溝１に削平されている。焼土壙は両壁から１ｍ前後離れて位置し、推定60×30㎝の楕円形を呈する。土壙底部から周囲にかけて赤色に変色し、炭の散布も見られる。弥生時代後期前葉の竪穴住居31に切られることから、この竪穴住居の時期はそれ以前である。竪穴住居30との関係を把握することはできなかった。（物部）

被熱面１（第66図）

一部黄色に被熱硬化し、竪穴住居あるいは段状遺構に伴う可能



第67図　Ｆ群（竪穴住居34、段状遺構５～８）（1/80）



第68図　竪穴住居34（1/80）・出土遺物（1/4）

性がある。時期は弥生時代中～後期か。　（物部）

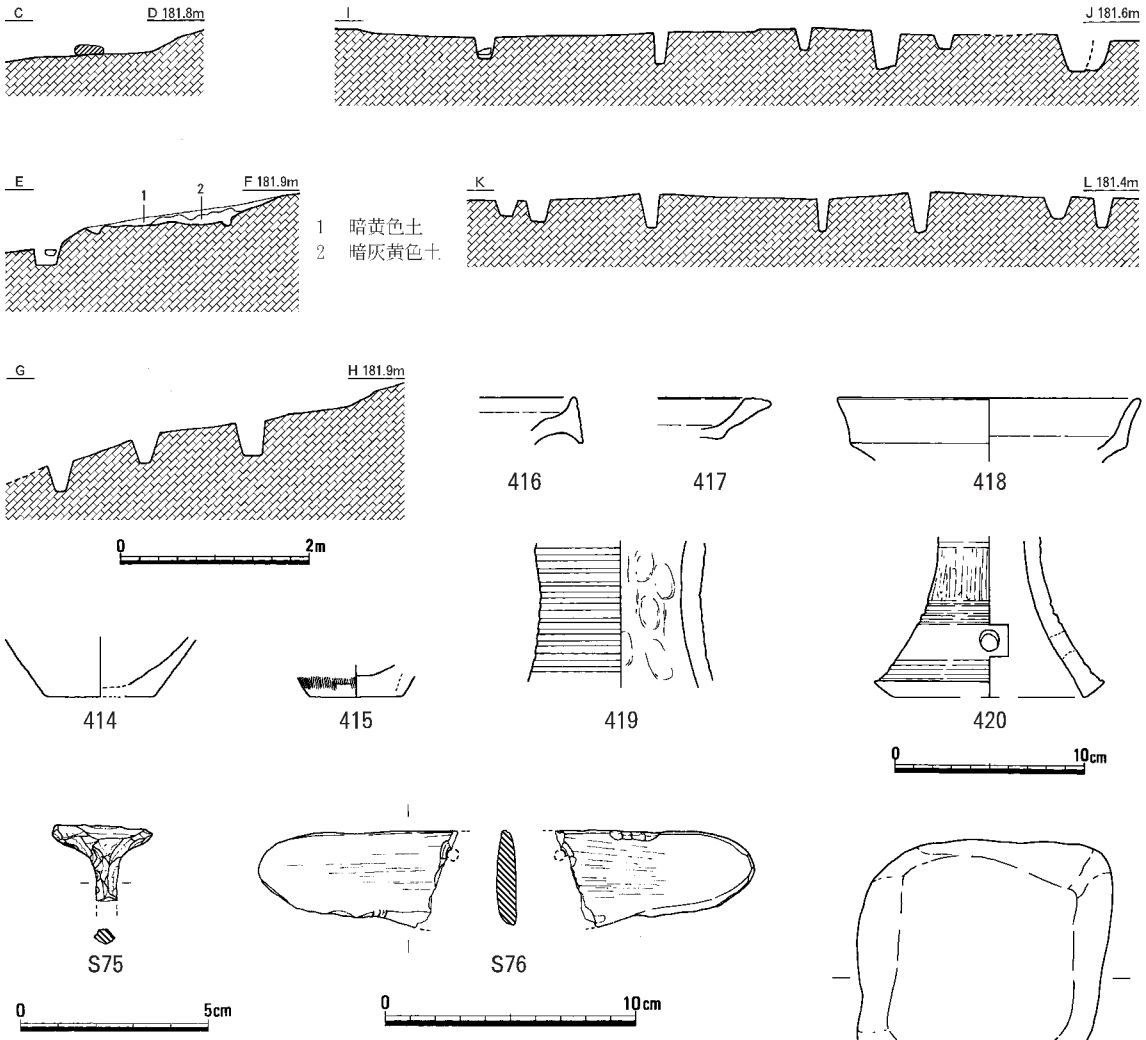
Ｆ群（竪穴住居34、段状遺構５～８）

（第67～72図、図版８）

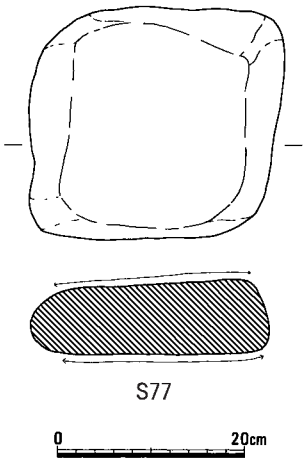
Ｆ群は、谷部に立地するＡ～Ｅ群から離れて、岩脈の尾根を西側に越えた緩斜面部に立地する。竪穴住居１軒と段状遺構４基、柱穴で構成される。時期は弥生時代後期中葉を中心とするが、段状遺構８のみが弥生時代中期に遡る可能性がある。遺構は調査区外にまで延びているが、その先は斜面の傾斜が急になるため、遺構数が増えたとしても若干であろう。重複した遺構は、土層の観察から竪穴住居34→段状遺構５→段状遺構６の順番に新しくなることが判明している。　（物部）

竪穴住居34（第67・68図）

竪穴住居の南半は調査区外になり、西半は流出している。検出した竪穴住居の輪郭と中央穴の位置から、平面形は南北約3.0m、東西約2.7mほどの楕円形を呈すると考えられる。柱穴は調査範囲内には検出されなかった。中央穴の底面は西方へ傾斜して深くなる。壁体溝は東側壁沿いにのみ確認された。遺物は埋土中から土器の小破片が少量出土した。甕の口縁端部の拡張は小さいが、端面はナデ調整であることから、時期は弥生時代後期中葉と考えられる。　（物部）



第69図　段状遺構５・６（1/80）・出土遺物
（1/4・1/2・1/3）



第70図　段状遺構６出土遺物
（1/8）

段状遺構５（第67・69図）

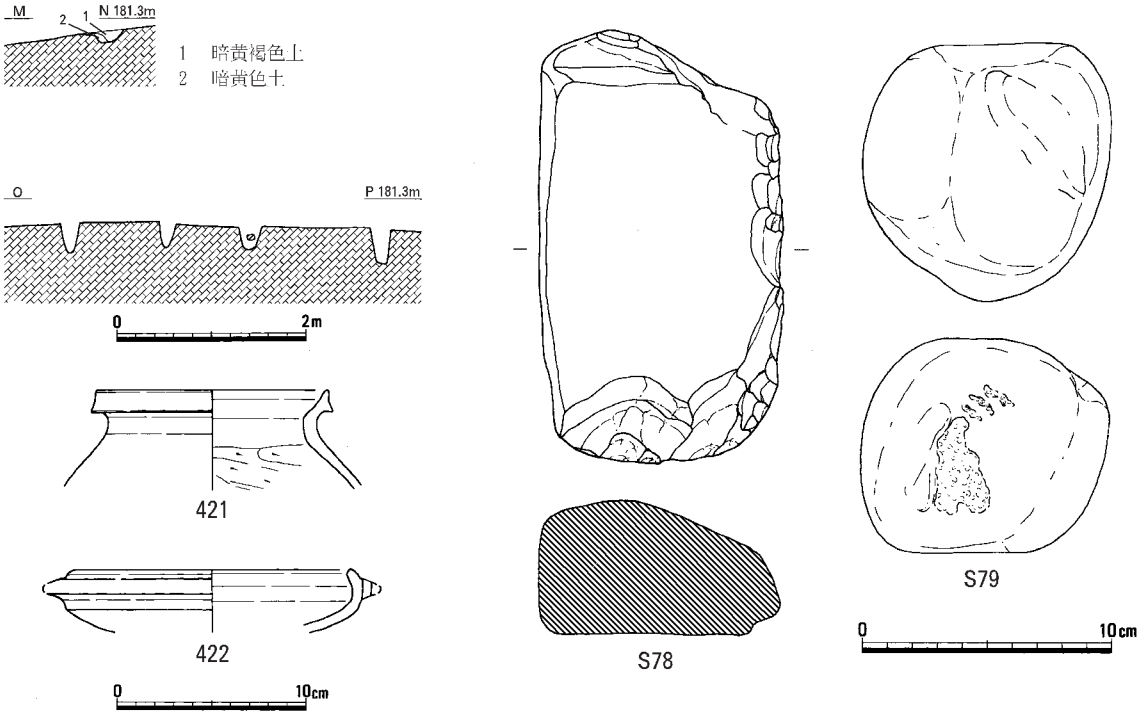
山側を直線的に掘削した平坦面と柱穴を検出した。南部は調査区外になる。柱穴が南北方向に列状をなすが建物としてはまとまらない。時期は弥生時代後期中葉である。（物部）

段状遺構６（第67・69・70図）

主軸方向は段状遺構５と一致し、平坦面の海抜高もほぼ同じである。平坦面の南北長は約４ｍである。柱穴は２個であるが、斜面下方の柱穴とは組み合わない。また、東壁沿いに割り石を投入した土壙11がある。床面の台石Ｓ77以外は流入遺物であり、段状遺構５のものと分別できなかった。弥生時代後期前葉と中葉の土器片と、石器は石錐Ｓ75、磨製石包丁Ｓ76がある。遺構の時期は弥生時代後期中葉であろう。（物部）

段状遺構７（第67・71図）

地形に合わせて主軸を北東－南西方向にとる。両端が削平された溝、わずかな平坦面、柱穴列を検出した。柱穴内から太型蛤刃石斧の未成品と考えられるものＳ78と叩石Ｓ79が出土したが、柱の抜き取り後に入れられたと考えられる。甕421の形態から時期は弥生時代後期中葉。（物部）

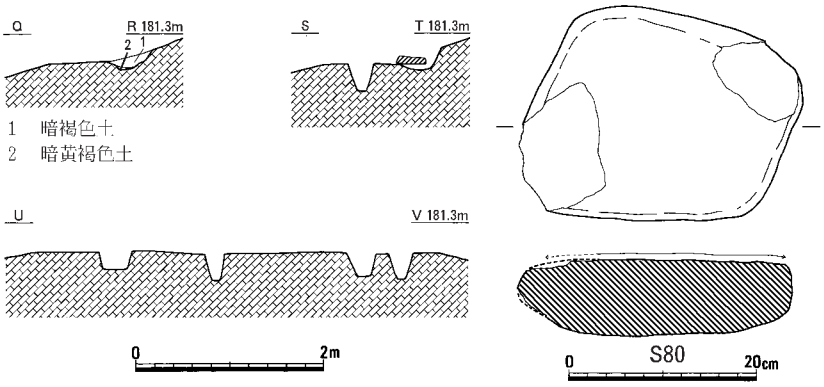


第71図　段状遺構７（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）

段状遺構８

（第67・72図）

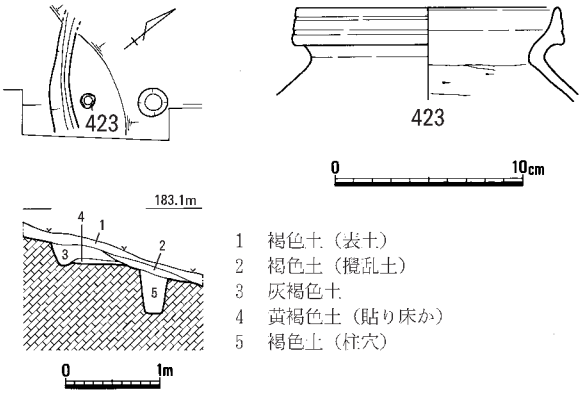
南側が湾曲する溝、平坦面、溝と平行する柱穴列を検出した。台石Ｓ80は溝の埋土上面に載る。流入土中から土器小片が約10点出土した。全てヘラケズリのない甕の胴部片と考えられるが、少量のため、段状遺構８の時期は弥生時代中～後期としたい。（物部）



第72図　段状遺構８（1/80）・出土遺物（1/8）

竪穴住居35（第73図）

調査区東端の中央部に位置し、調査区外へ続く。本竪穴住居は今回設定した各群には属さない。平面形は円形を呈し、規模は不明だが、小さい。壁体溝が巡り、柱穴は１個確認した。床面から弥生土器の甕423が出土した。遺構の機能していた時期は、弥生時代後期中葉に比定される。（米田）

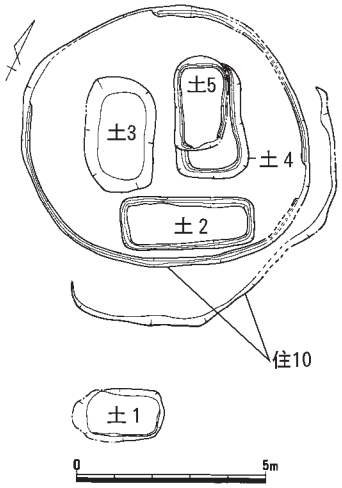


第73図　竪穴住居35（1/80）・出土遺物（1/4）

（３）土壙

土壙１～５（第74～81図、図版９）

調査区中央部の東側では、Ａ群の竪穴住居10が構築され、その内外に土壙１～５が配置されている。特に土壙２～５は層位的に竪穴住居10より新しいが、出土土器に型式差がほとんど認められないことから、竪穴住居10の廃絶直後に掘削されたと考えられる。また土壙２～５の配置状況は竪穴住居10内に収まり、主軸が平行または直交して揃うことから、意図的な配置状況が見てとれる。出土土器からいずれもほぼ同時期と考えられ、形態や規模から貯蔵穴としての機能が想定される。（米田）



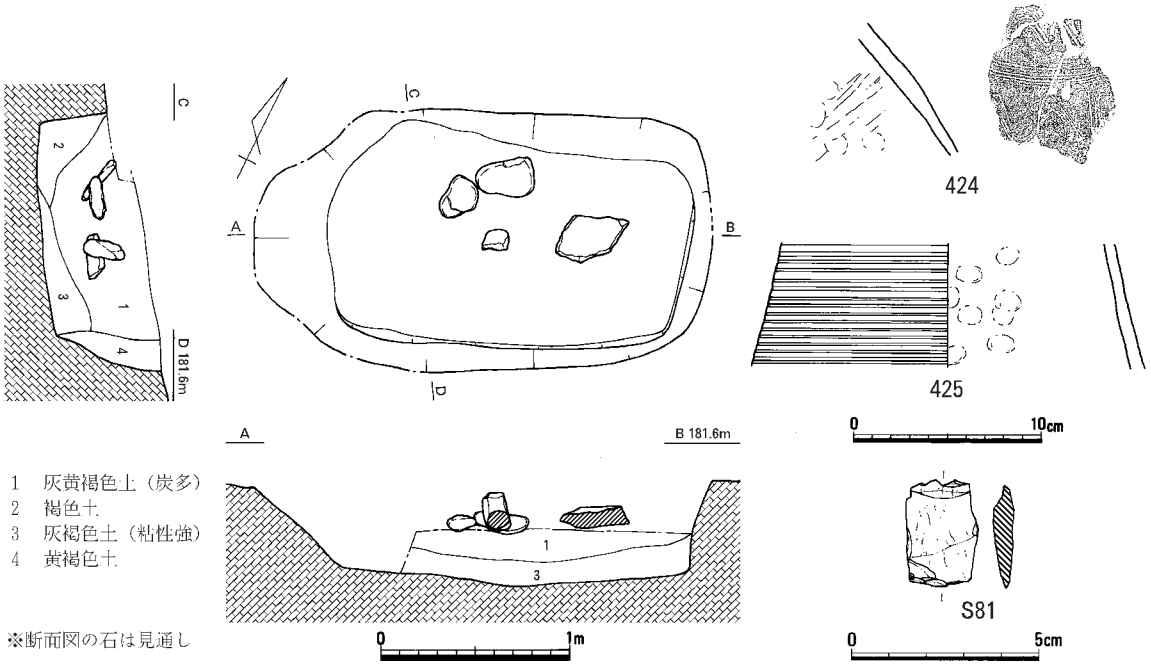
第74図　土壙１～５配置図（1/200）

土壙１（第74・75図、図版９・16）

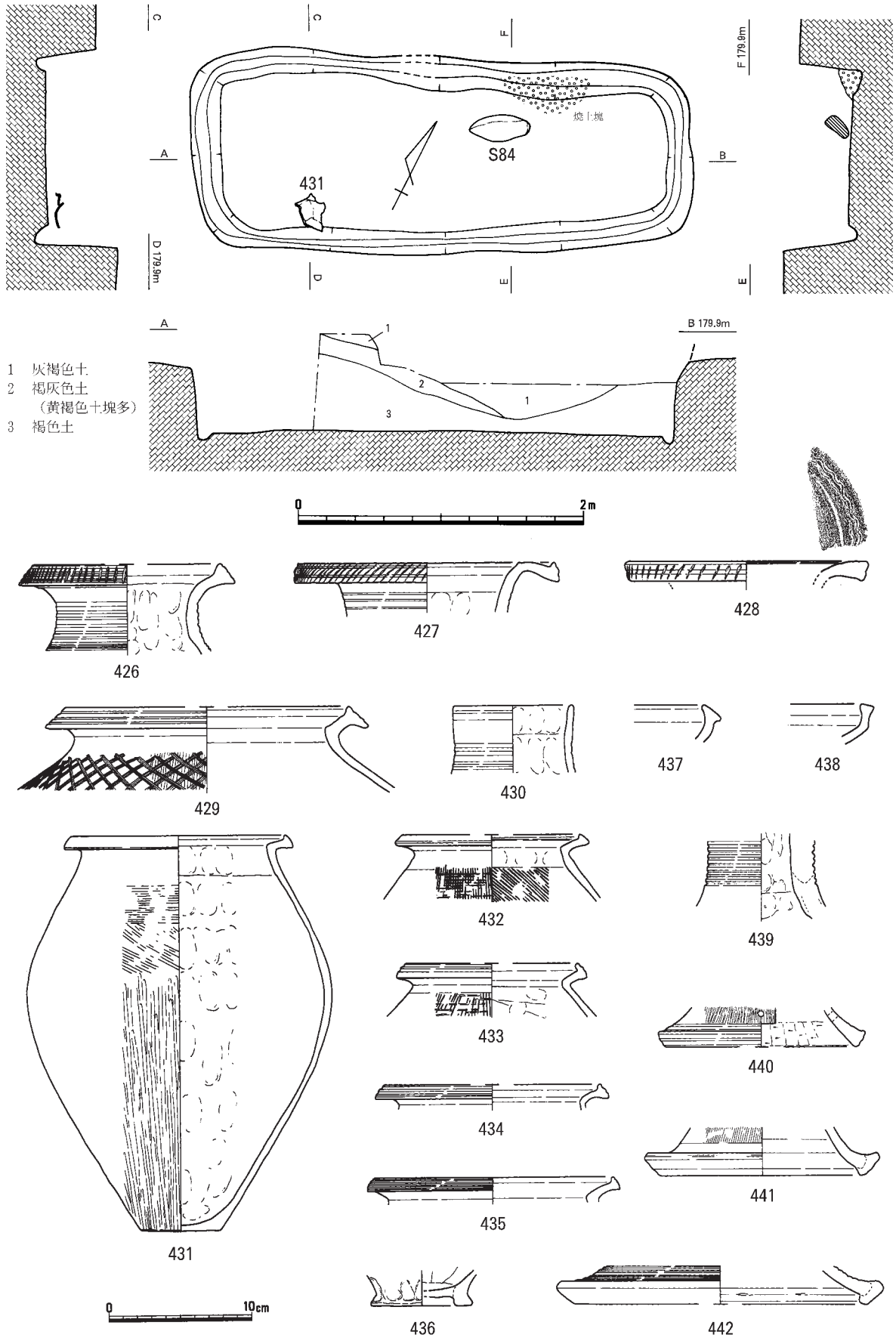
調査区中央部の東側に位置し、竪穴住居10より斜面の上方に配置されている。平面形は長方形を呈し、長軸244㎝、短軸140㎝、深さ53㎝を測る。主軸はＮ－64°－Ｅで、等高線に平行する。北・東壁は垂直に近く立ち上がる。覆土の中位では石が認められた。遺物は弥生土器の壺の肩部**424**、器台の脚柱部**425**、サヌカイト製の楔形石器**S81**が出土した。埋没時期は出土土器から弥生時代中期後葉と捉えられる。土壙の形態・規模・時期、配置状況が土壙２～５に似ていること、土壙２の主軸と同様に等高線に平行にすることから、貯蔵穴としての機能が想定される。（米田）

土壙２（第74・76図、図版９・15・16）

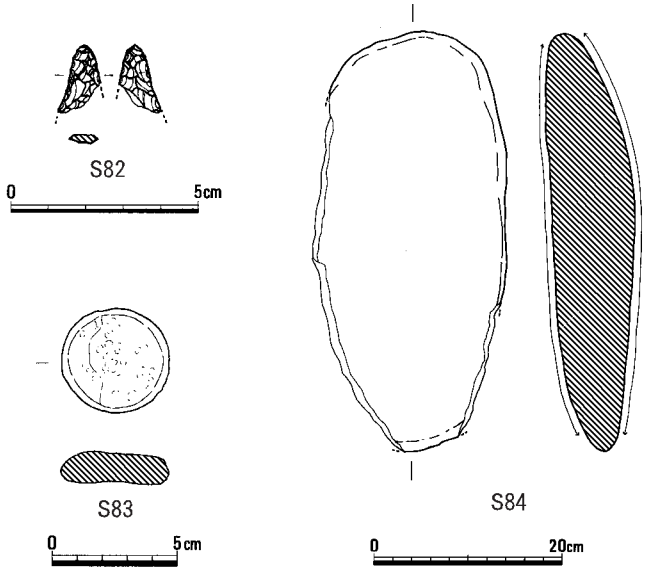
Ａ群の竪穴住居10内の南側に位置する。平面形は長方形を呈し、壁体溝が全周する。長軸350㎝、短軸142㎝、深さ68㎝を測る。主



第75図　土壙１（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）

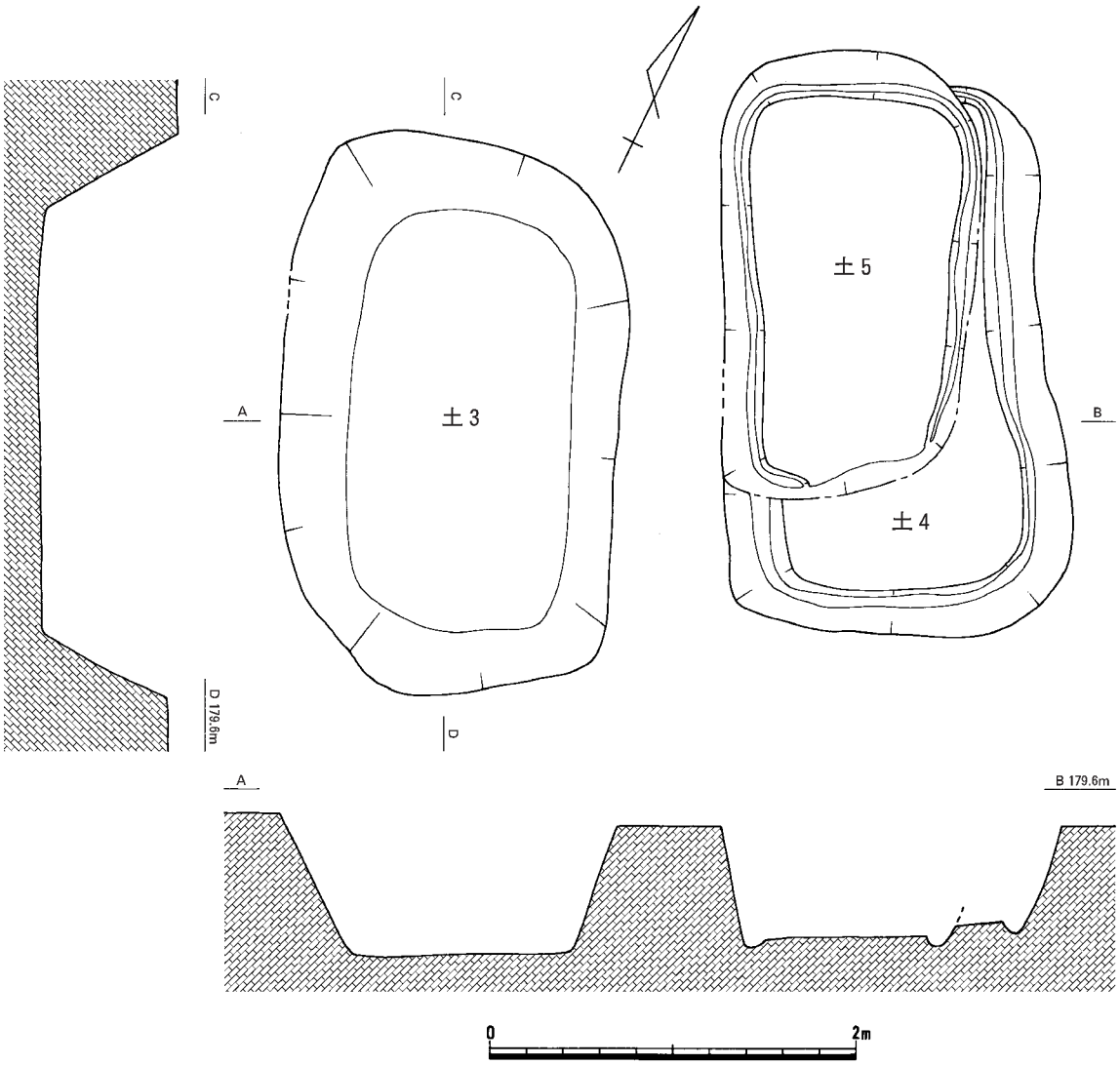


第76図　土壙２（1/40）・出土遺物①（1/4）



第77図　土壙２出土遺物②（1/2・1/3・1/8）

軸はＮ－63°－Ｅで、土壙３～５に直交する。土層断面の第２層は基盤層の黄褐色土塊を多く含み、人為的に埋められた可能性がある。北壁では焼土塊が認められ、竪穴住居10の被熱面が落ち込んだと理解される。遺物は弥生土器の壺426～430、甕431～436、高杯437～442、黒曜石製石鏃S82、円盤S83、台石S84、サヌカイト片４点が出土した。甕431は底面直上からの出土である。432・433の外面はタタキ後タテハケ。遺構の機能時期は、弥生時代中期後葉の新相に比定される。　（米田）



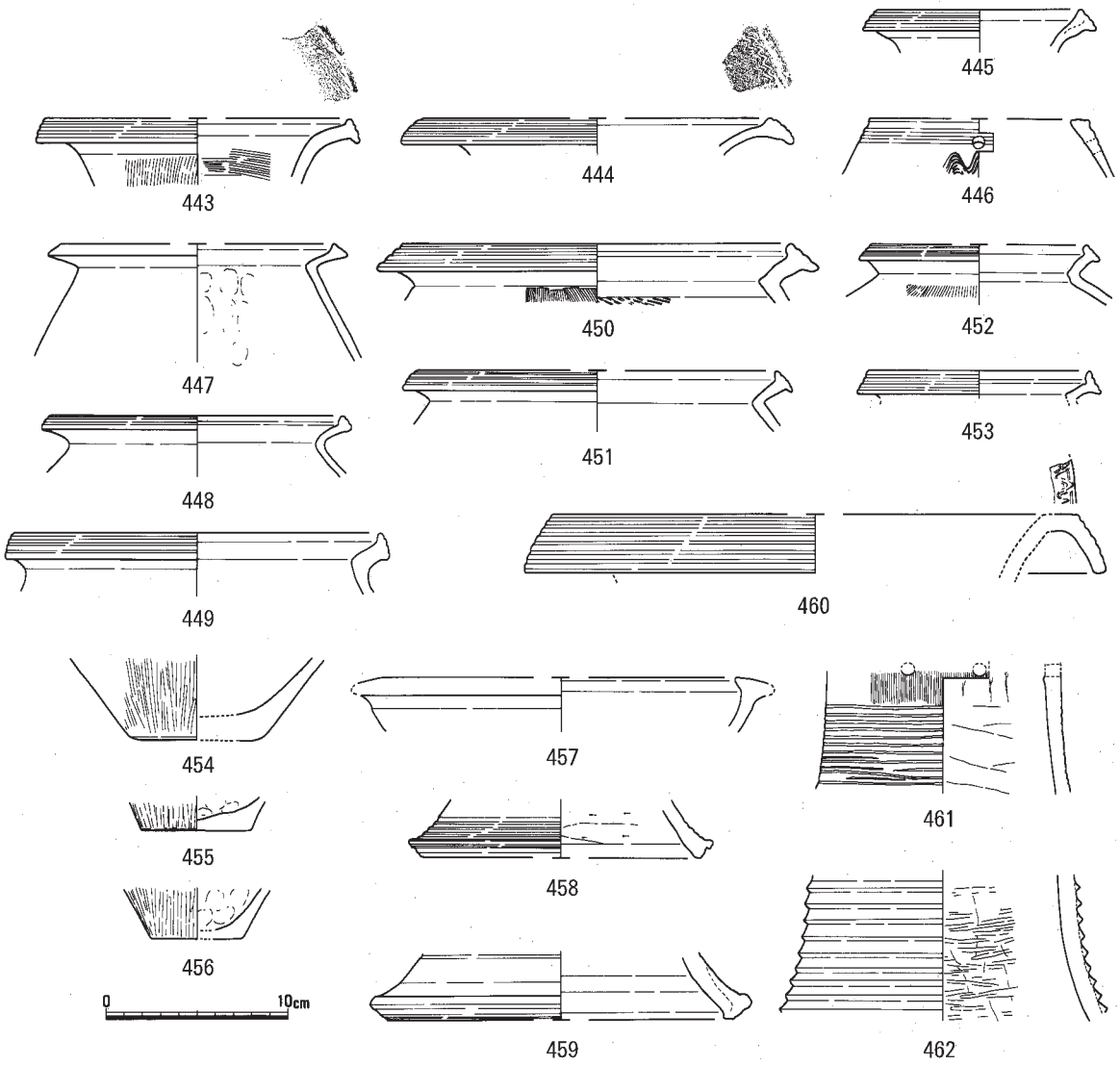
第78図　土壙３～５（1/40）・出土遺物（1/4）

土壙３（第74・78・79図、図版16）

Ａ群の竪穴住居10内の西側に位置し、土壙４・５に並列する。平面形は不整長方形を呈し、長軸304㎝、短軸185㎝、深さ80㎝を測る。主軸はＮ－26°－Ｗを指し、土壙２に直交、土壙４・５と平行する。断面形は逆台形を呈し、壁体溝は存在しない。土層断面の第９図－第２層と第10図－第13層は同一層であり、基盤層の黄褐色土塊を多量に含むため、意図的に埋められた可能性が高い。ちなみに本土壙は、南西方向から埋没している。遺物は弥生土器の壺**443～445**、無頸壺**446**、甕**447～456**、高杯**457～459**、器台**460～462**、サヌカイト製石鏃**S85**、扁平片刃石斧の可能性がある石器**S86**、太型蛤刃石斧の未成品**S87**、サヌカイト片12点、玄武岩片４点などが覆土から出土している。**S86**は両側縁に二次調整を行い、サヌカイト製でありながら下辺のみに研磨を施して片刃を形成している。遺構の埋没時期は、弥生時代中期後葉の新相と捉えて差し支えない。（米田）

土壙４・５（第74・78・81図、図版16）

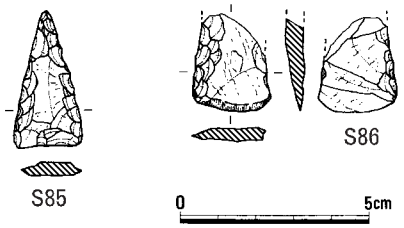
Ａ群の竪穴住居10内の東側に位置し、土壙３に並列する。土壙４・５はほぼ同一地点に重複し、層位による切り合い関係では土壙４が土壙５よりも古い。平面形はいずれも長方形を呈し、壁体溝を有

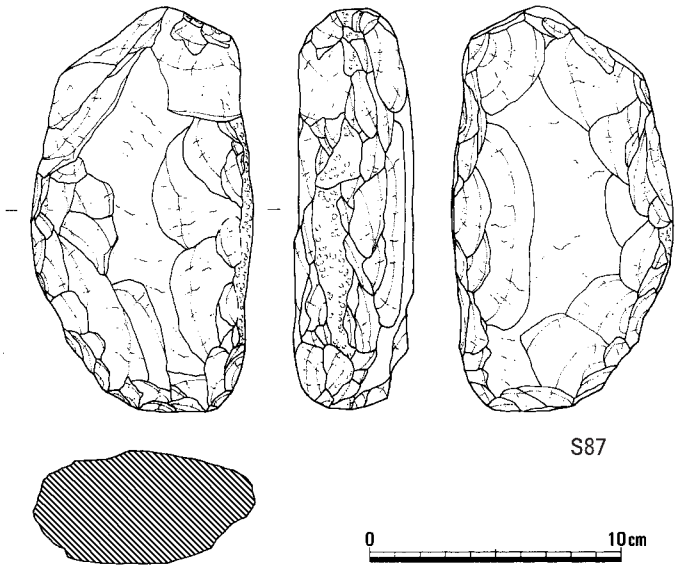


第79図　土壙３出土遺物①（1/4）

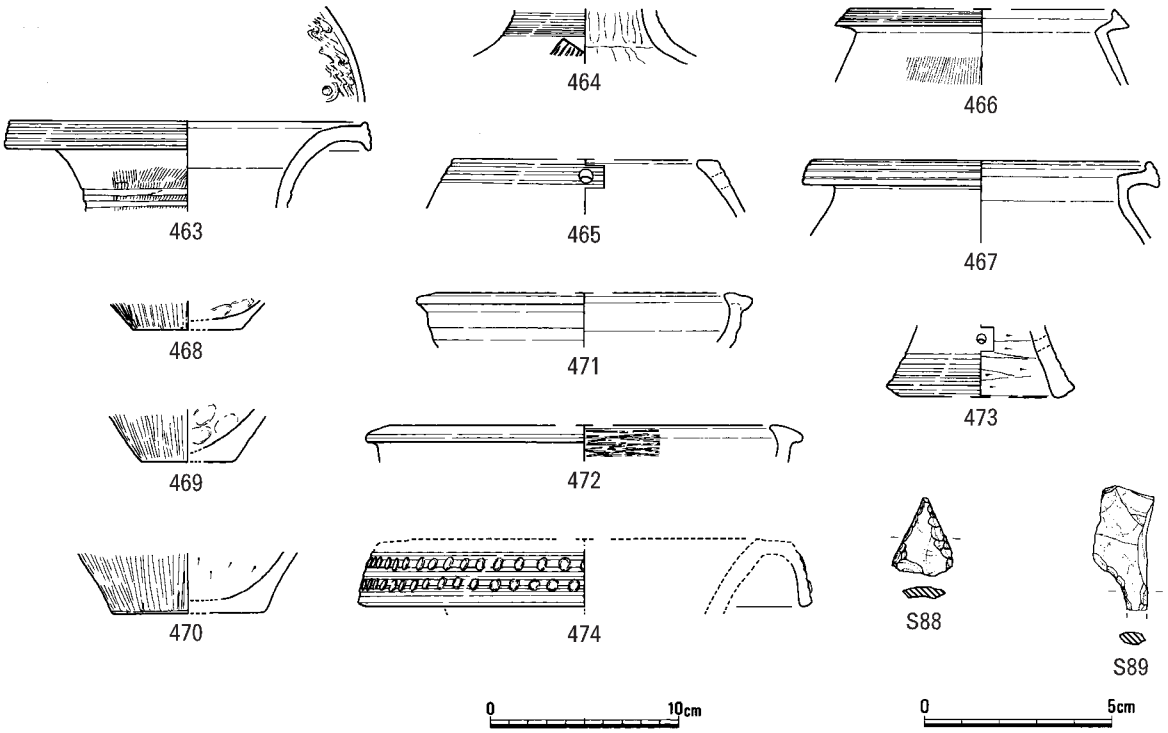
する。土壙４の規模は長軸298㎝、短軸190㎝、深さ54㎝である。土壙５は長軸242㎝、短軸142㎝、深さ62㎝を測る。両遺構の底面海抜高はほぼ等しい。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。主軸はともにＮ－28°－Ｗで、土壙２に直交、土壙３と平行する。土壙５の土層断面の第９図－第６層は、基盤層の黄褐色土塊を多量に含む土層であり、西方向から意図的に埋められた可能性が高い。

遺物は弥生土器の壺463・464、無頸壺465、甕466～470、高杯471～473、器台474、サヌカイト製石鏃S88、石錐S89、サヌカイト片２点が出土しているが、稚拙な調査から完掘直前まで重複関係にあることが確認できず、出土遺物の大半は土壙４・５のどちらに伴うか不明であるため、出土遺物を一括して報告する。出土土器を見る限りは、いずれも弥生時代中期後葉の範疇に収まるため、土壙４・５は連続して掘削され、土壙３・４は同時併存と考える。（米田）





第80図　土壙３出土遺物②（1/2・1/3）



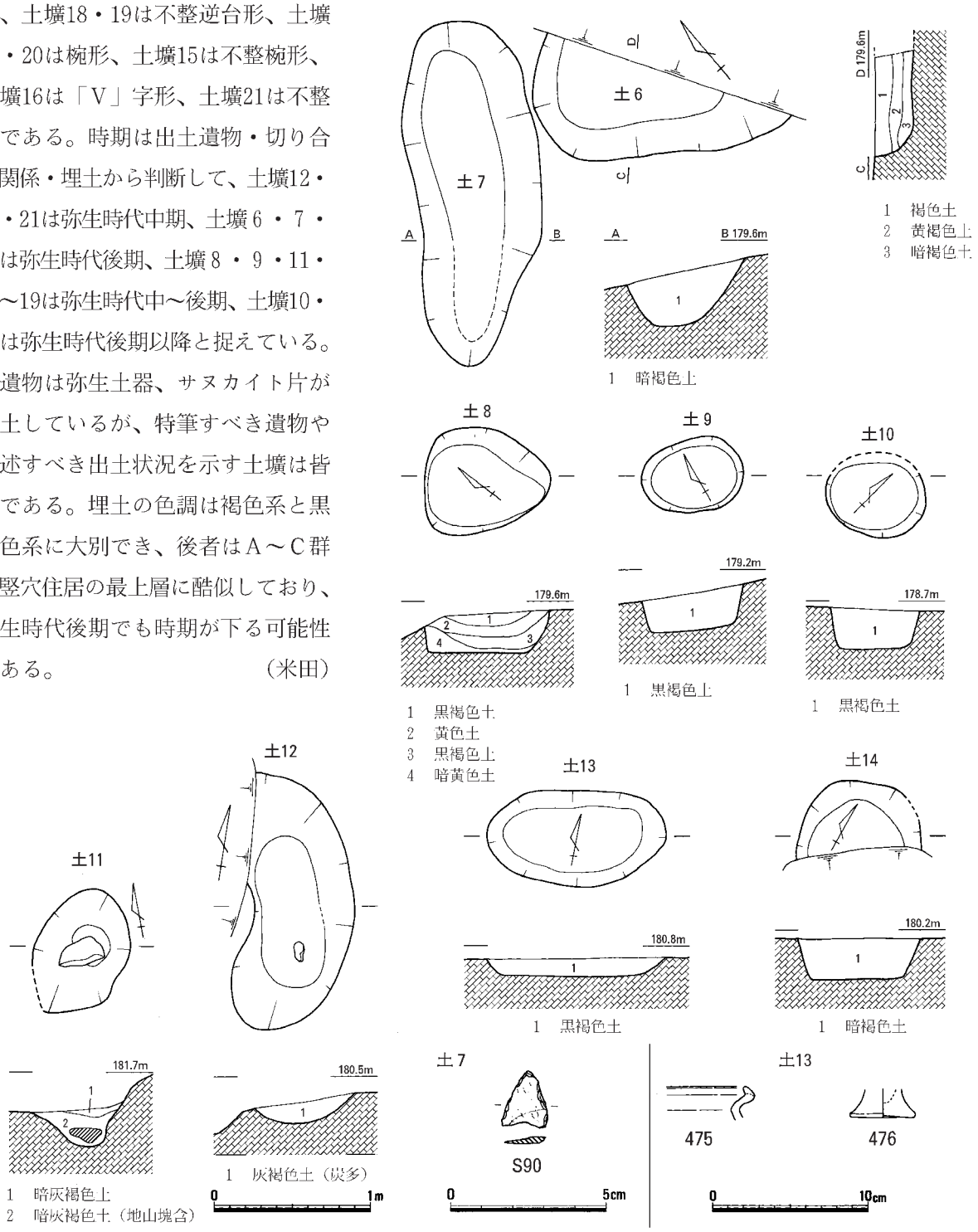
第81図　土壙４・５出土遺物（1/4・1/2）

土壙６～21（第82～83図、第１表）

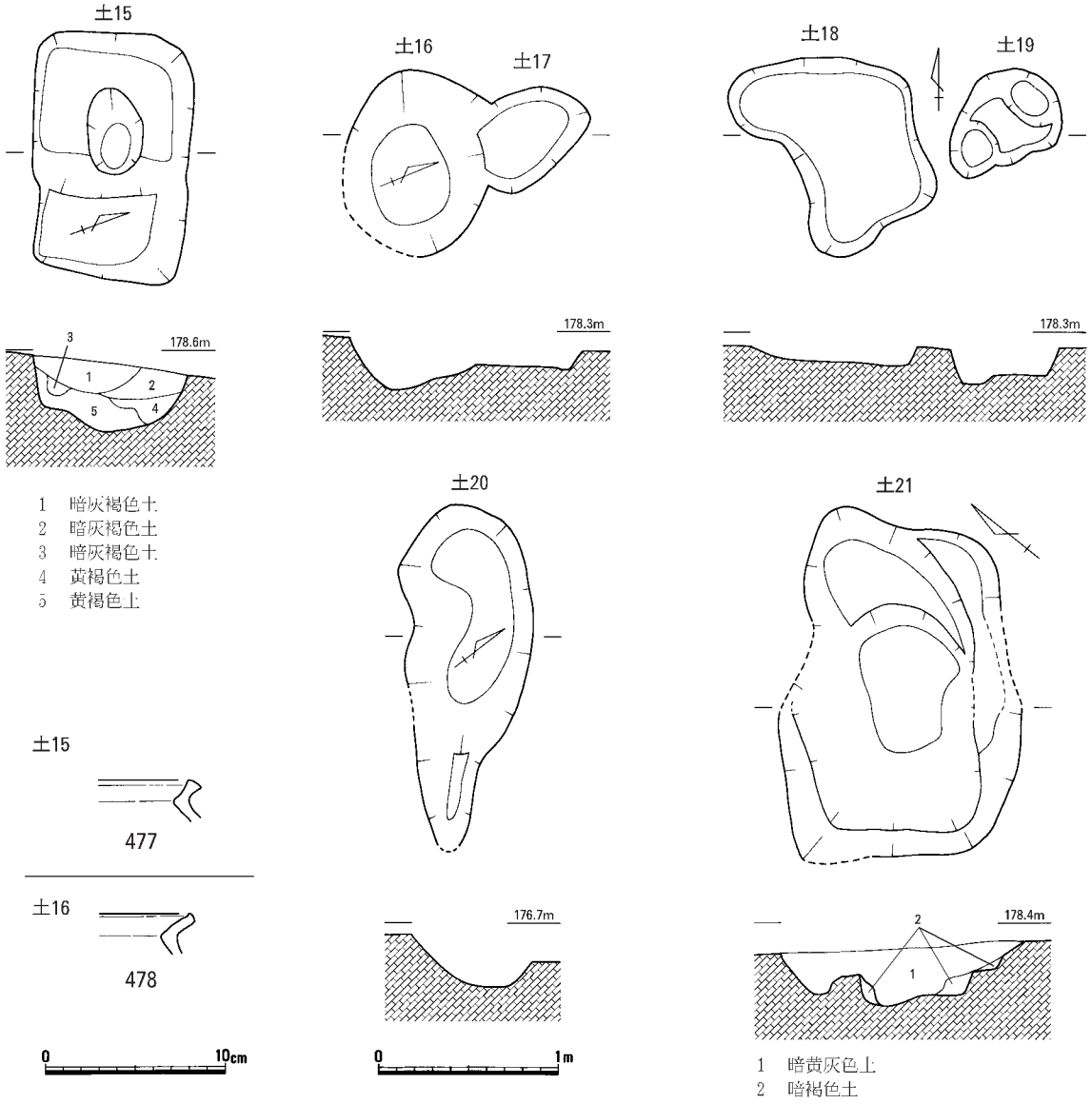
貯蔵穴と考えられる土壙１～５は前述したが、用途不明の土壙６～21について次にまとめる。各土壙の配置地点は第７図、各土壙の形態・規模・時期・出土遺物は第１表を参照されたい。

土壙の平面形を見ると、土壙６・９・10・13は楕円形、土壙７・11・12・20は不整楕円形、土壙８・14・16は不整円形、土壙15は長方形、土壙17は不整方形、土壙18・19は不整形である。断面形を見ると、土壙７～11・13・14・17は逆台形、土壙18・19は不整逆台形、土壙６・20は椀形、土壙15は不整椀形、土壙16は「Ｖ」字形、土壙21は不整形である。時期は出土遺物・切り合い関係・埋土から判断して、土壙12・20・21は弥生時代中期、土壙６・７・16は弥生時代後期、土壙８・９・11・17～19は弥生時代中～後期、土壙10・13は弥生時代後期以降と捉えている。

遺物は弥生土器、サヌカイト片が出土しているが、特筆すべき遺物や詳述すべき出土状況を示す土壙は皆無である。埋土の色調は褐色系と黒褐色系に大別でき、後者はＡ～Ｃ群の竪穴住居の最上層に酷似しており、弥生時代後期でも時期が下る可能性がある。（米田）



第82図　土壙６～14（1/40）・出土遺物（1/2・1/4）



第83図　土壙15～21（1/40）・出土遺物（1/4）

第１表　土壙一覧表

遺構名	平面形	断面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	底面海抜高（m）	時期	出土遺物
土壙１	長方形	逆台形	244	138	54	180.85	弥生時代中期後葉	弥生土器、石器
土壙２	長方形	箱形	350	132	69	179.19	弥生時代中期後葉	弥生土器、石器、サヌカイト片4点
土壙３	長方形	逆台形	303	185	78	178.68	弥生時代中期後葉	弥生土器、石器、サヌカイト片12点、玄武岩片4点
土壙４	長方形	逆台形	298	191	61	178.79	弥生時代中期後葉	弥生土器、石器
土壙５	長方形	逆台形	242	143	52	178.87	弥生時代中期後葉	弥生土器、石器、サヌカイト片2点
土壙６	楕円形	椀形	(168)	(81)	25	179.30	弥生時代後期	弥生土器
土壙７	不整楕円形	逆台形	221	84	39	179.06	弥生時代後期	弥生土器、石器
土壙８	不整円形	逆台形	80	68	23	179.27	弥生時代中～後期？	
土壙９	楕円形	逆台形	65	48	27	178.80	弥生時代中期or後期	弥生土器
土壙10	楕円形	逆台形	64	(50)	25	178.38	弥生時代後期以降	弥生土器
土壙11	不整楕円形	逆台形	74	55	24	181.21	弥生時代中～後期？	
土壙12	不整楕円形	椀形	160	68	15	180.18	弥生時代中期？	
土壙13	楕円形	逆台形	114	61	12	180.60	弥生時代後期以降	弥生土器
土壙14	不整円形	逆台形	78	(45)	25	179.88	弥生時代中～後期？	
土壙15	長方形	不整椀形	135	87	39	178.15	弥生時代中～後期	弥生土器、サヌカイト片2点
土壙16	不整円形	V字形	(97)	82	29	177.97	弥生時代後期	弥生土器、サヌカイト片1点
土壙17	不整方形	逆台形	70	49	11	178.10	弥生時代中～後期？	
土壙18	不整形	不整逆台形	130	70	10	178.12	弥生時代中～後期？	
土壙19	不整形	不整逆台形	70	55	21	178.00	弥生時代中～後期？	
土壙20	不整楕円形	椀形	(192)	70	22	176.34	弥生時代中期？	
土壙21	不整長方形	不整形	198	136	32	177.94	弥生時代中期	

（４）溝

溝１（第84図）

Ｅ群の南東部に位置し、竪穴住居33を切る。規模は長さ約260㎝、幅40㎝、深さ20㎝を測る。主軸が等高線に平行することから段状遺構の可能性もある。溝の西端には土壙が付設する。遺物は弥生土器の壺**479**が出土しており、遺構の切り合い関係も踏まえると、弥生時代後期前半に比定される。　（米田）

溝２（第84図）

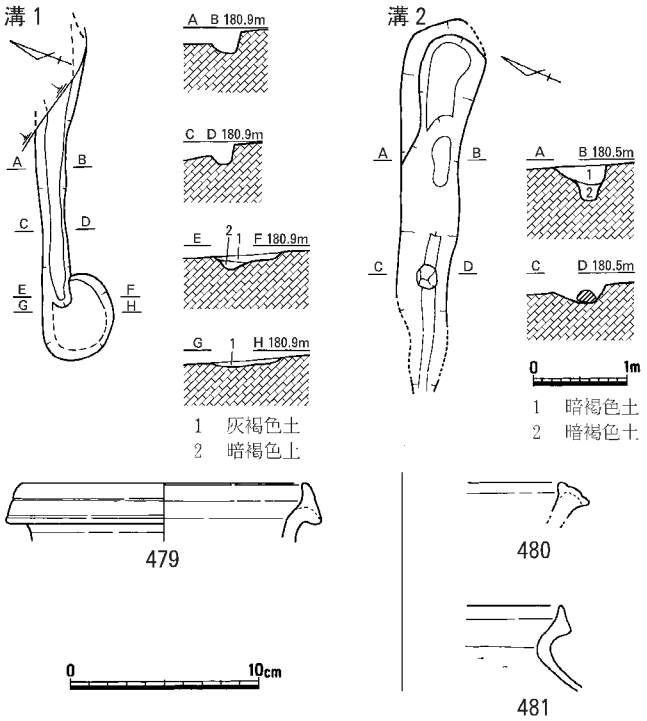
Ｅ群の中央部に位置する。規模は長さ392㎝、幅82㎝、深さ36㎝である。主軸は等高線に平行する。溝の中央底面には石が放置されていた。遺物は弥生土器の高杯**480**、甕**481**が出土した。時期は弥生時代後期前葉と考えられ、切り合い関係から竪穴住居31より新しく、段状遺構４より古い。　（米田）

溝３（第85図）

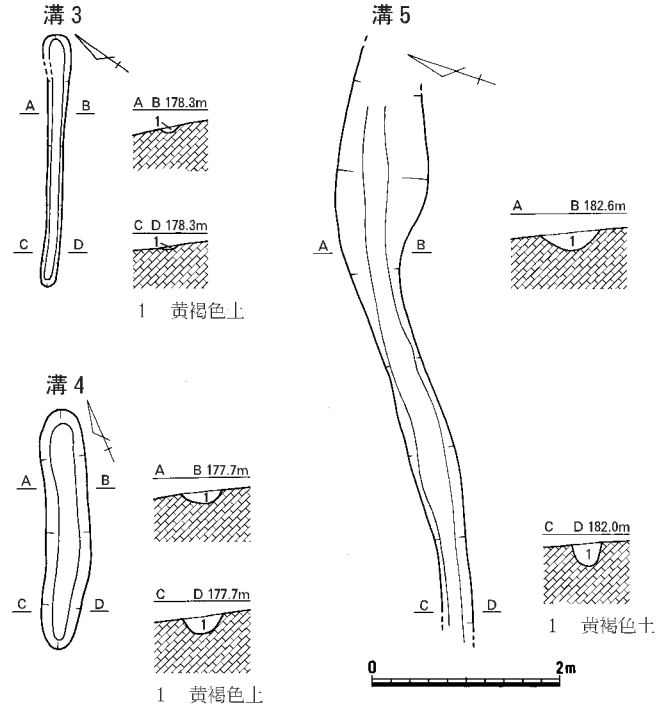
調査区中央部北寄りに位置し、竪穴住居11に北接する。主軸は等高線に平行する。長さ268㎝、幅28㎝、深さ６㎝を測る。遺物は皆無だが、北西部包含層に覆われていたため、弥生時代後期前葉以前と捉えられる。　（米田）

溝４（第85図）

調査区北側に位置し、竪穴住居23に北隣する。主軸は等高線に平行する。規模は長さ256㎝、幅46㎝、深さ16㎝である。遺物は認められないが、時期は溝３と同様に弥生時代後期前葉以前と位置づけられる。　（米田）



第84図　溝１・２（1/80）・出土遺物（1/4）



第85図　溝３～５（1/80）

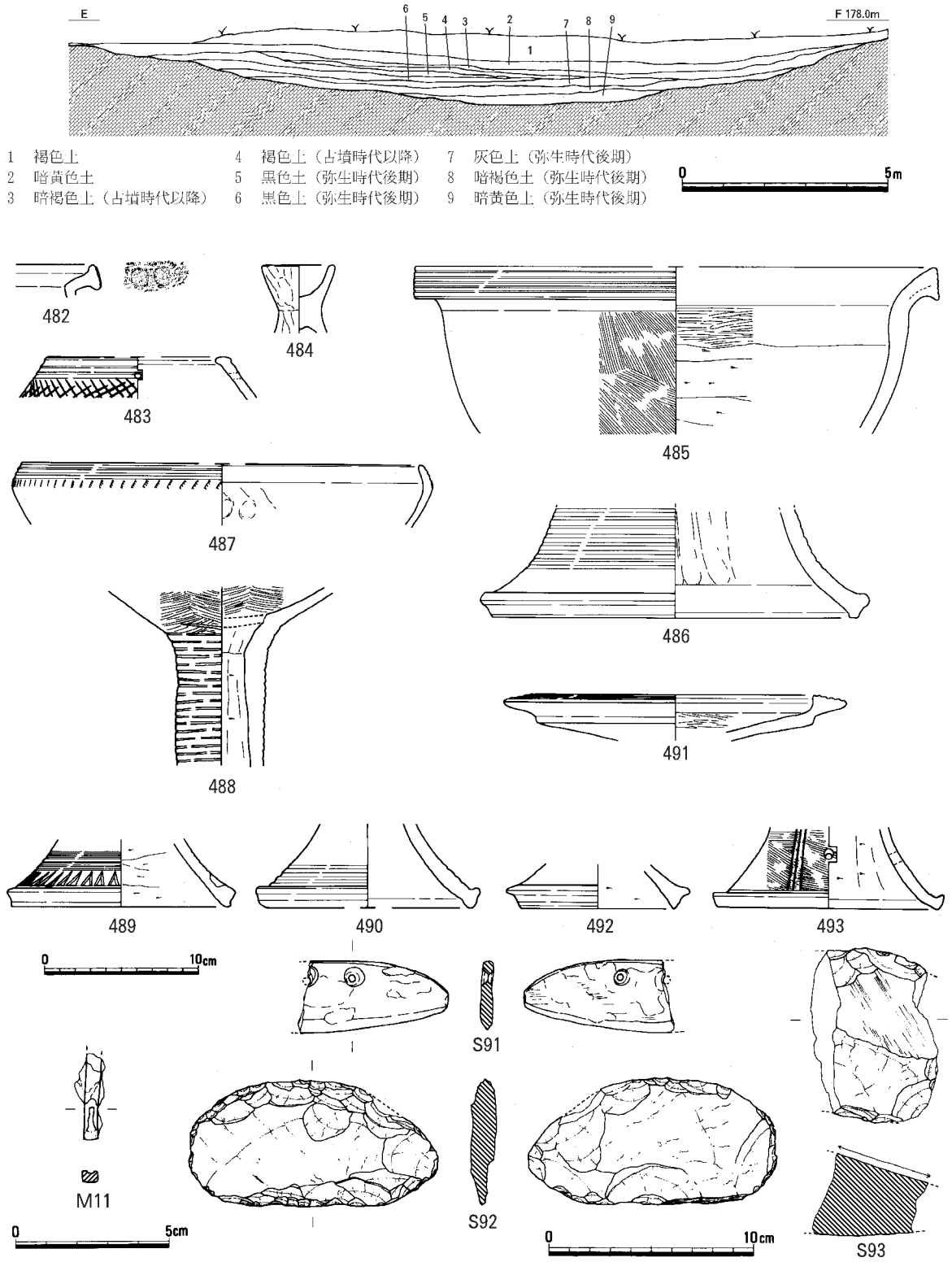
溝５（第85図）

調査区南端、Ｆ群の斜面上方に位置し、東から西へ流走する。長さは約6.0ｍを測る。幅は40～96㎝で、上方は幅が狭く、下方は広がる。深さは最大22㎝である。遺構検出時は周辺から弥生土器片が出土したが、本遺構に伴う遺物はない。時期は埋土から弥生時代中～後期と考えられる。　（米田）

（５）包含層

北谷部包含層（第７・86図、図版17・18）

調査区北西部に位置し、海抜高約178mの等高線より斜面下方に堆積した包含層にあたる。調査区は南北の岩盤に挟まれた小さな谷地形を呈しているため、調査区北西部に厚い包含層が形成されたと

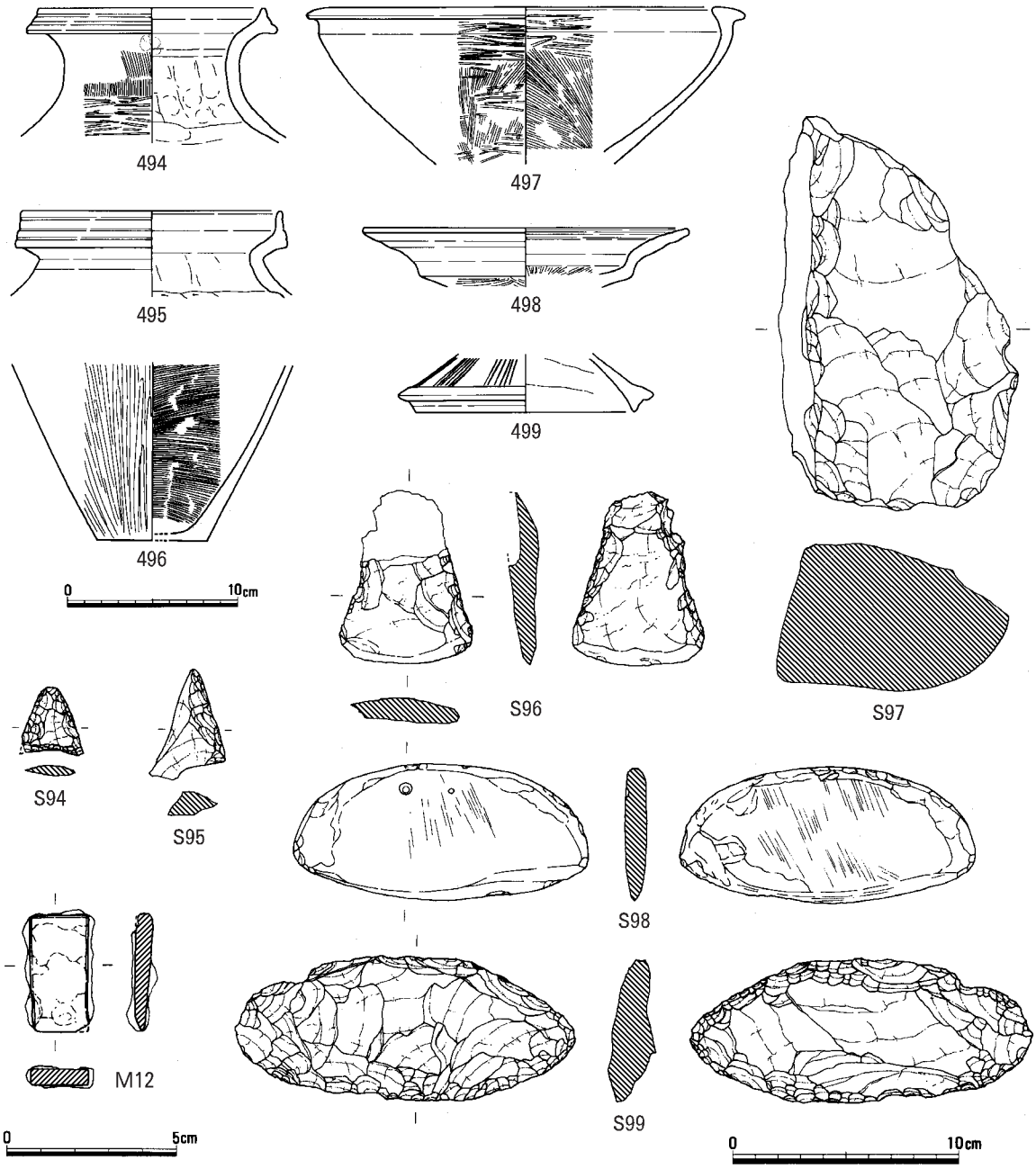


第86図　北谷部包含層（1/150）・出土遺物（1/4・1/2・1/3）

考えられる。第86図のＥ－Ｆ断面は第７図に示した調査区北西部壁面の土層断面であり、第３～９層を中心に弥生時代以降の遺物が出土した。弥生時代中期の土器は壺482、無頸壺483、ミニチュア土器484、高杯486～490、弥生時代後期の土器は鉢485、高杯491～493である。このほか、磨製石包丁S91、磨製石包丁の剥離工程未成品S92、砥石S93、不明鉄製品M11が出土している。（米田）

遺構に伴わない遺物（第87図・図版16～18）

弥生土器の壺494、甕495、壺の底部496、高杯497～499があり、496・497は弥生時代中期後半、他は弥生時代後期に属する。ほかにサヌカイト製石鏃S94・石鏃未成品S95、局部磨製の扁平片刃石斧S96、太型蛤刃石斧の剥離工程未成品S97、磨製石包丁の穿孔工程未成品S98・剥離工程未成品S99、鋳造鉄器再加工品M12がある。S98は表裏面ともに丁寧に研磨されているが、孔は未貫通である。（米田）

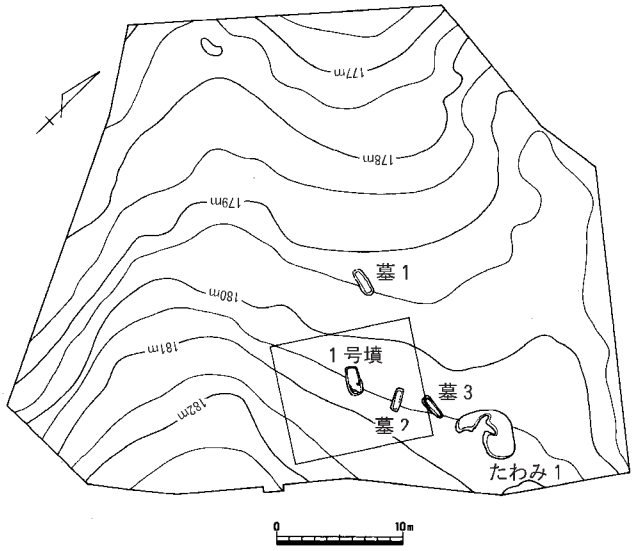


第87図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/2・1/3）

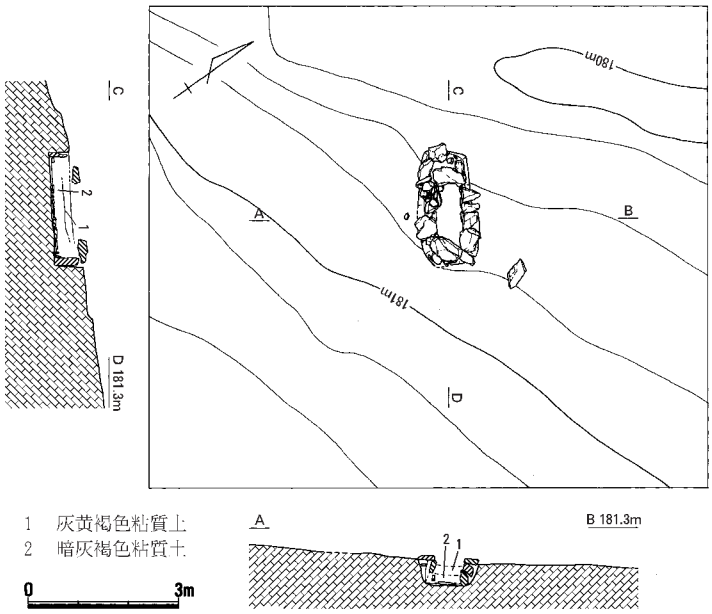
第３節　古墳時代の遺構と遺物

（１）概要

古墳時代の遺構は、前期のたわみ１、後期と考えられる小竪穴式石室を持つ古墳１基、土壙墓３基を確認した。弥生時代中期から後期は遺跡が集落跡として利用されているが、古墳時代以降は主に墓域となっている。遺構数も弥生時代と比べると激減している。遺構の配置は、時期がそれぞれ異なるものの、調査区の東側に限定される。（米田）



第88図　古墳時代の遺構配置図（1/600）



第89図　１号墳検出時地形測量図（1/150）

（２）古墳

１号墳（第89～90図、図版10・19）

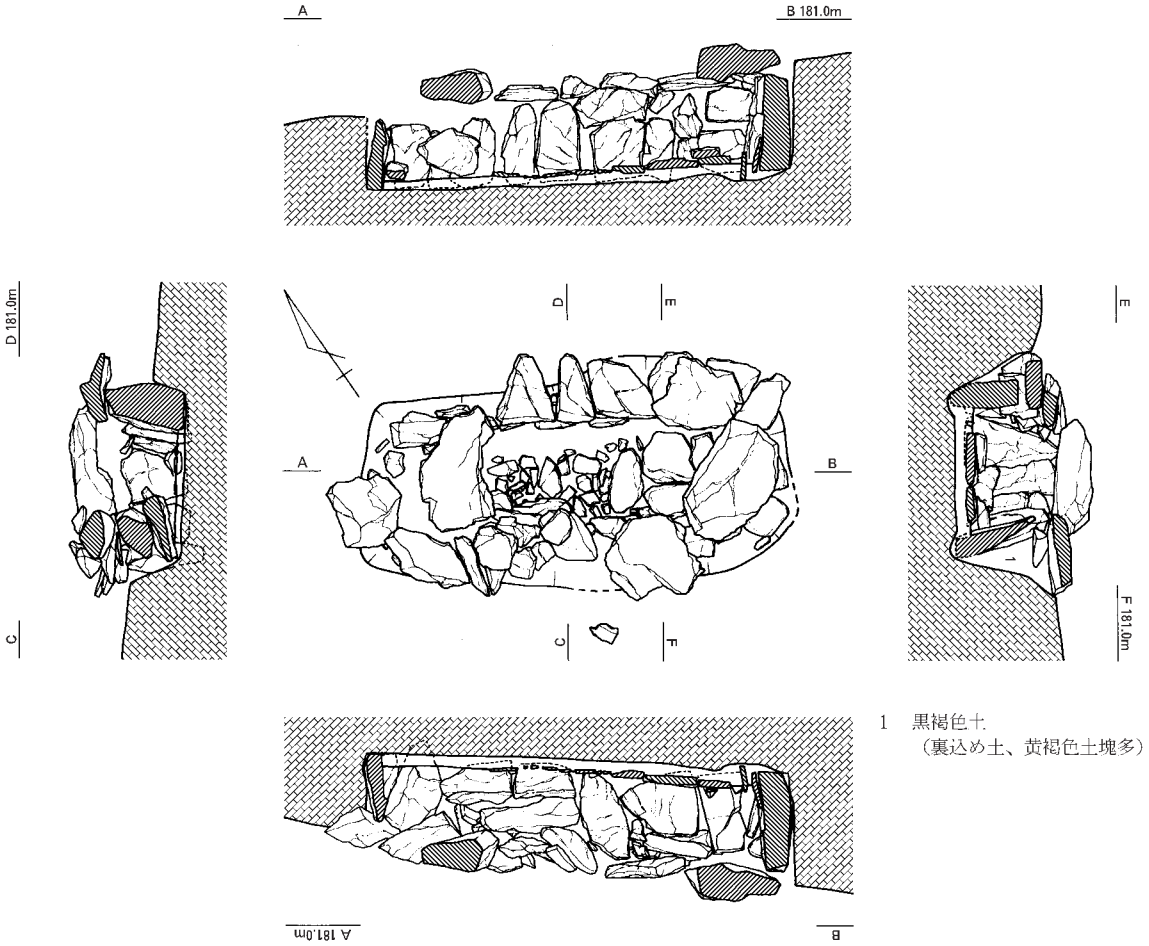
この古墳は調査区中央部南東寄りに位置する新規発見の古墳であり、「（樋ヶ鼻）１号墳」とする。主体部は小竪穴式石室で、平面的にＡ群の竪穴住居10内に収まり、竪穴住居10埋没後、最上層の凹みを利用して築造されたと考えられる。

調査前の状況

１号墳が所在する地点のすぐ南側には、平成13年度に試掘調査でＴ３が設定されていたが、土層（第７図のＡ－Ｂ断面）観察では古墳の墳丘と考えられる土層が認められず、古墳の存在を窺うことはできなかった。本格的な調査に着手し、重機によって表土掘削をした後に、遺構検出するために遺構面を掘り下げていた際、石室石材の一部が見つかり、それが小竪穴式石室を構成することが判明し、ようやく古墳を特定するに至った。

墳丘・周溝

第89図は１号墳検出時の地形測量の状況であるが、墳丘のような高まりは認められなかった。また中世の段状遺構10が石室上面のすぐ東側に造成されていたことも、

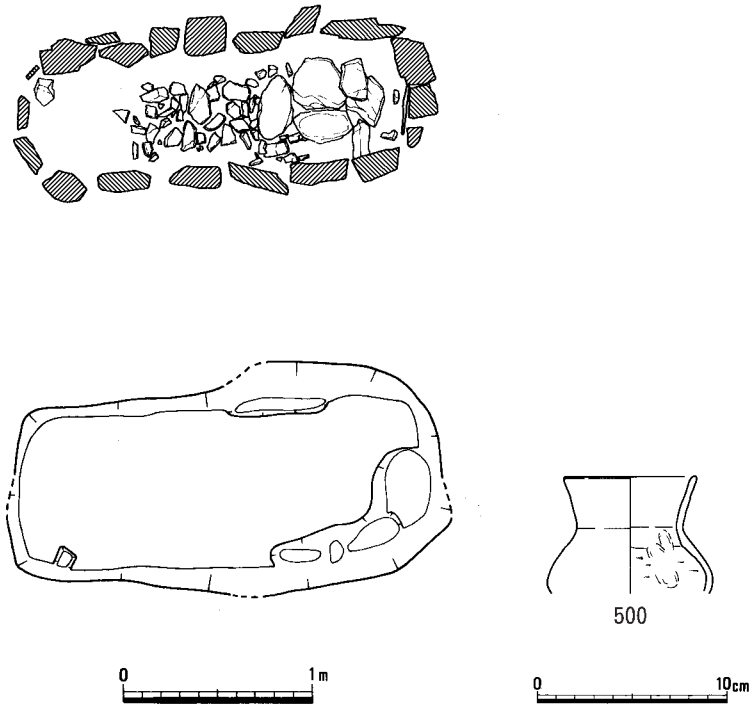


1　黒褐色土
（裏込め土、黄褐色土塊多）

墳丘削平の要因の一つであろうか。調査では石室検出面において石室を中心に約14m四方の範囲を精査し、石室を中心に十字に設定したサブトレンチ内の土層観察を入念に行ったが、周溝は全く残存しなかった。したがって、墳丘の有無、墳形・規模は不明と言わざるを得ない。

主体部

主体部は小竪穴式石室１基である。主軸はＮ－56°－Ｗ。石室の構造は、小口面・両側壁に板石を垂直に立てて箱式石棺状に構築し、そ



第90図　１号墳石室実測図（1/40）・出土遺物（1/4）

の上面に板石・円礫を一段だけ小口積みにした後、さらにその上を蓋石で覆うというものである。側壁は一つの石材が不整形、大きさがまばらで、積み方も統一性がない。そのため基底部の側壁面は歪み、側壁上端は横目地が通らず、整然とした積み方とは言い難い。両小口面・北側壁の石材は原位置を留めていたが、南側の側壁の石材は内側に崩れていた。底面には敷石があり、東側に大きい板石、中央部に小さい割り石が敷かれ、東側（斜面上方）が頭位と考えられる。東側の大きい板材は中央部の小さい割り石と同一平坦面を形成しているため、石枕ではないと考える。蓋石は両小口上にそれぞれ１個ずつ原位置で残存しているほか、蓋石と考えられる石材１個が石室のすぐ東側に転落していた。石室底面の規模は、内法で長さ195㎝・幅52～63㎝を測る。石室底面から蓋石下面までの高さは40㎝である。墓壙の掘り方底面は長さ209㎝・幅75～84㎝であり、石室は掘り方の際に構築されている。石室石材の大半は遺跡周辺の岩盤である黒色片岩と同質であるが、２個は砂岩の円礫を使用している。

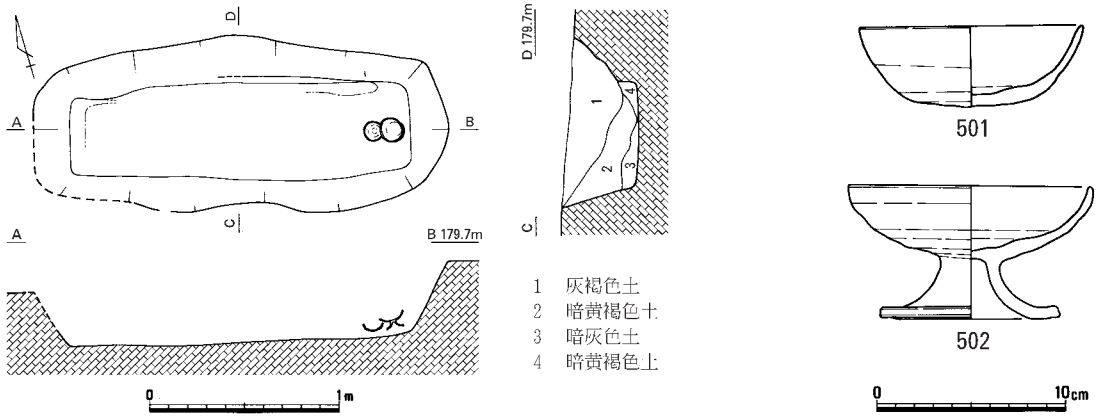
遺物・時期

蓋石は大半が外れており、石室内の遺存状態は良くない。石室内埋土は全てフルイ選別したが、弥生土器片のほか、南壁の東側底面付近で土師器の壺**500**が出土したにすぎない。時期決定には資料が乏しいが、石室構造が中原33号墳に酷似し、５世紀後葉以前の箱式石棺のような整然とした構造ではないこと、壺**500**のような土師器が北房町空古墳などで６世紀後葉以降にも認められること、本古墳に隣接して６世紀中葉・７世紀前葉の土壙墓が構築されていることから、総合的に考えて６世紀代～７世紀前半の範疇に収まることは疑いない。なかでも隣接地域で一定期間に同一の石室構造を共有していることを前提とするならば、７世紀前半の可能性が高いことを付け加えておく。　（米田）

（３）墓

墓１（第91図、図版11・19）

１号墳石室の北西約６ｍに位置する。検出面での平面形は約220×90㎝の長方形を呈する。深さは約40㎝を測り、底面は180×42～53㎝で平らである。主軸はＮ－75°－Ｗである。底面北縁と西縁で直線的に黒ずんだ部分が確認でき、木棺の痕跡と推定される。頭位は不明である。東側小口部から須恵器の杯身**501**と高杯**502**が出土した。底面からわずかに浮いた状態で土壙主軸方向に縦に並び、大きく傾いていないことから、木棺の腐朽に伴って落ち込んだというより、原位置にあると考えられる。時期は出土した須恵器の特徴から、７世紀前葉と推定できる。　（物部）



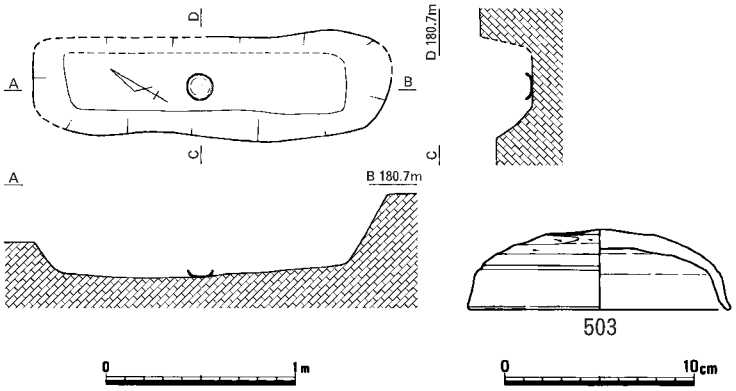
第91図　墓１（1/40）・出土遺物（1/4）

墓２（第92図、図版11・19）

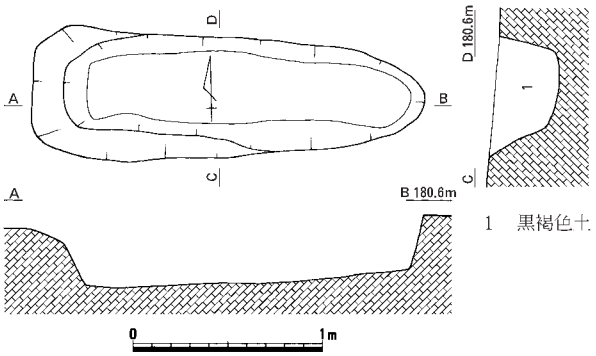
調査区東側に位置する。平面形は長方形を呈する。主軸はＮ－31°－Ｗ。掘り方上面は長さ190㎝、幅54㎝を測り、深さは37㎝残存する。底面は長さ148㎝、幅は復元で32㎝を測る。底面中央では、須恵器の杯蓋**503**が内面が上を向く状態で出土した。頭位は主軸から斜面上方（南東）と推測される。時期は６世紀中葉に比定される。　（米田）

墓３（第93図、図版11）

調査区東側、墓２の東側に位置する。主軸はＮ－89°－Ｗで、ほぼ東西に向く。遺物は皆無であるが、形態・規模・埋土から墓１・２と同様の土壙墓の可能性がある。　（米田）



第92図　墓２（1/40）・出土遺物（1/4）



第93図　墓３（1/40）

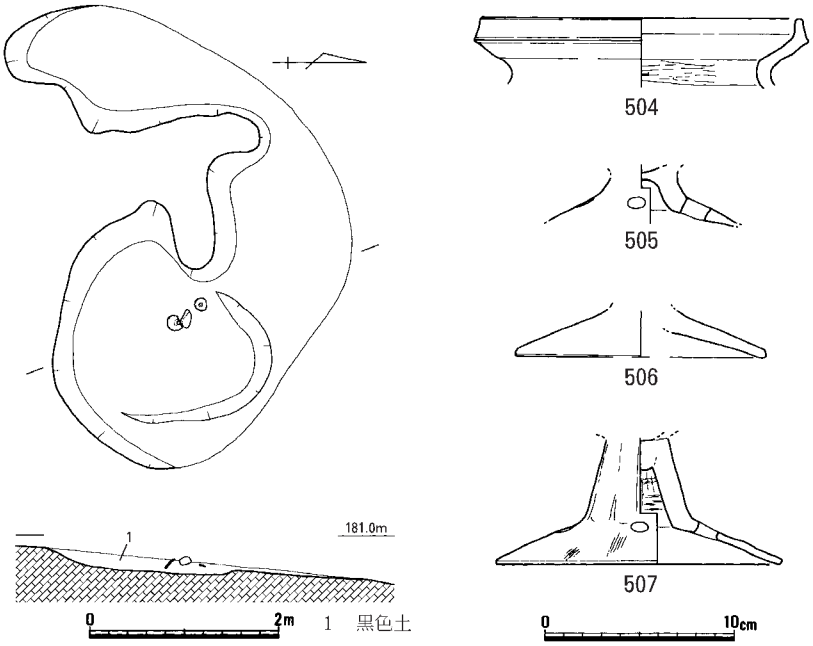
（４）その他

たわみ１（第94図）

たわみ１は、約5.0×3.5ｍの不整形な範囲に黒色土が溜まっているもので、当初は古墳の残骸の可能性を考えたが、その痕跡は確認されなかった。黒色土中に弥生土器とともに前期の土師器**504**～**507**が見られる。（物部）

遺構に伴わない遺物（第95図）

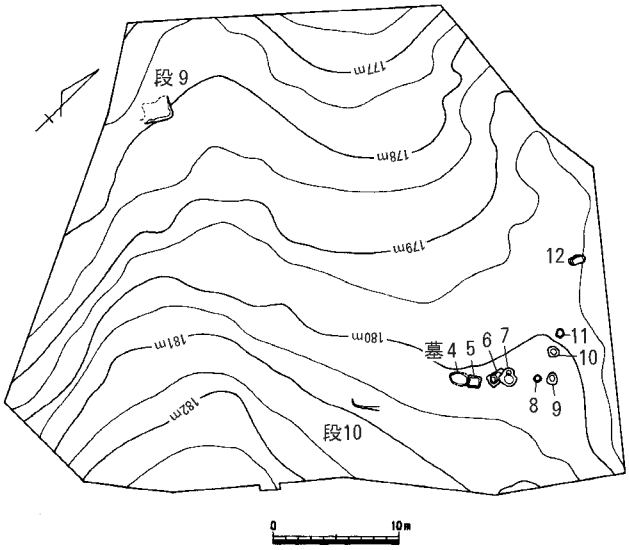
須恵器の杯蓋**508**・高杯**509**は７世紀前葉に比定される。**510**は須恵器甕。**511**は土師器の甑か鍋の把手である。（米田）



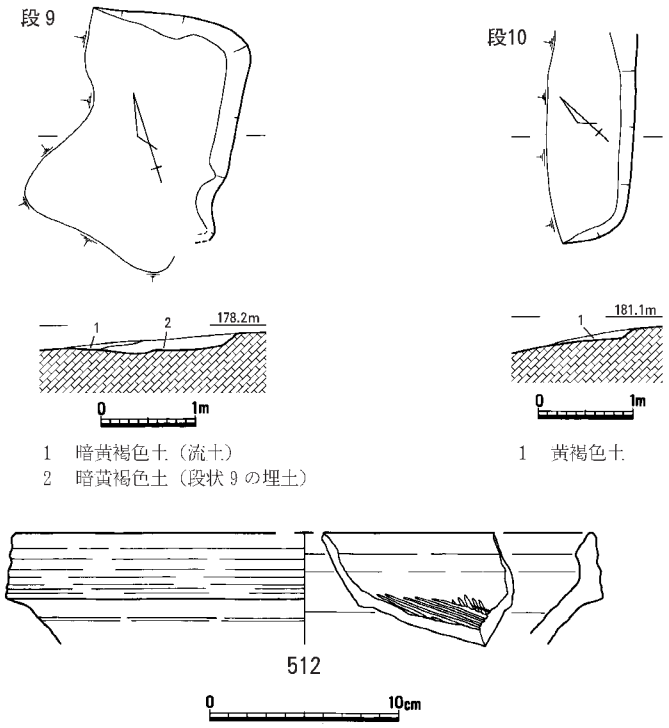
第94図　たわみ１（1/80）・出土遺物（1/4）

第95図　遺構に伴わない遺物（1/4）

第４節　古代以降の遺構と遺物



第96図　古代以降の遺構配置図（1/600）



第97図　段状遺構９・10（1/80）・出土遺物（1/4）

（１）概要

古代の遺構・遺物は皆無に近いが、須恵器514が包含層から出土しているため、当該期の遺構が周辺に存在する可能性がある。

中世の遺構は、調査区西端と中央東寄りにおいて段状遺構を２基確認したのみである。

近世になると、墓地に利用されている。墓は９基確認した。調査区東側に集中し、逆「Ｌ」字状に整然と配置されている。調査地は大字の中原地区と三崎地区の境界にあたり、近世以降も調査地周辺は墓地として利用されていたようである。（米田）

（２）段状遺構

段状遺構９（第97図）

地山を直角に掘削した段とそれに伴う平坦面を検出した。西～南方は流出している。平坦部の南西には地山の混ざる締まった土があり、掘削した土を置いて平坦面を広げている。遺物はないが、遺構を覆う流土中から備前焼の擂鉢512が検出された。遺構の時期は、擂鉢が16世紀第４四半期の特徴をもつことからそれ以前と考えられる。（物部）

段状遺構10（第97図）

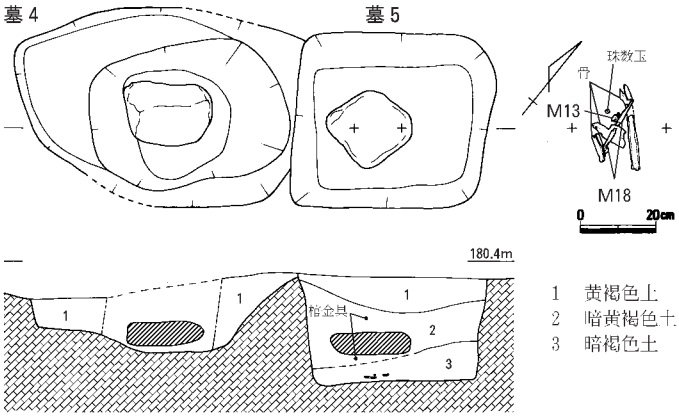
１号墳の東側を切る。土師質土器片が出土し、埋土の状況から中世と思われる。　（米田）

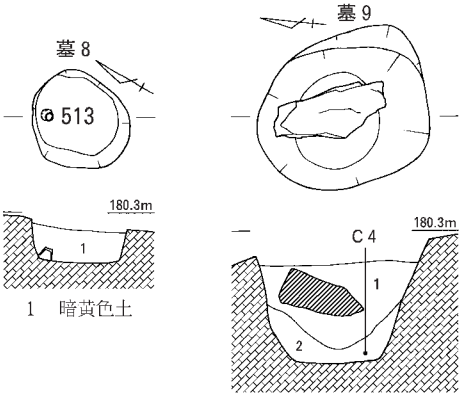
（３）墓

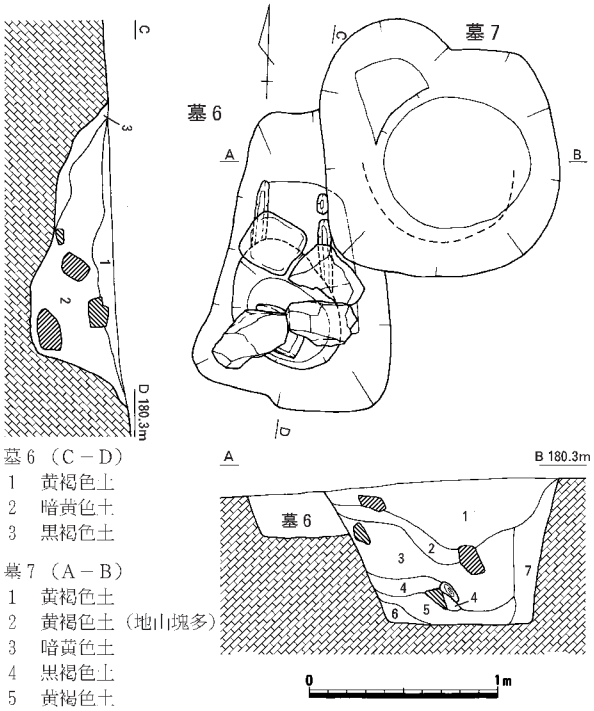
墓４～12

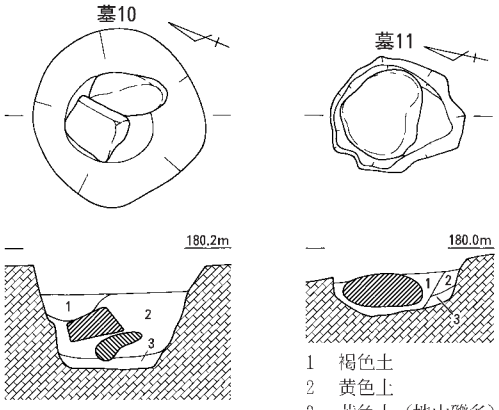
（第98・99図、第２表、図版11・19）

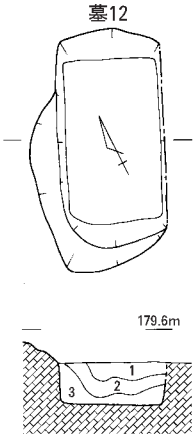
逆「L」字形に配置された９基の近世墓を検出した。多くは木棺で、礫の落ち込みがある。そのなかには平たい河原石があり、それが水平に検出されることから、改葬時に安置したものと仮説を立てたが、掘り返しの痕跡はなく、やはり棺上に置かれていたと推定される。墓６では直線状の側板痕跡を確認したが、その南半は埋葬後の掘削が入る。（物部）







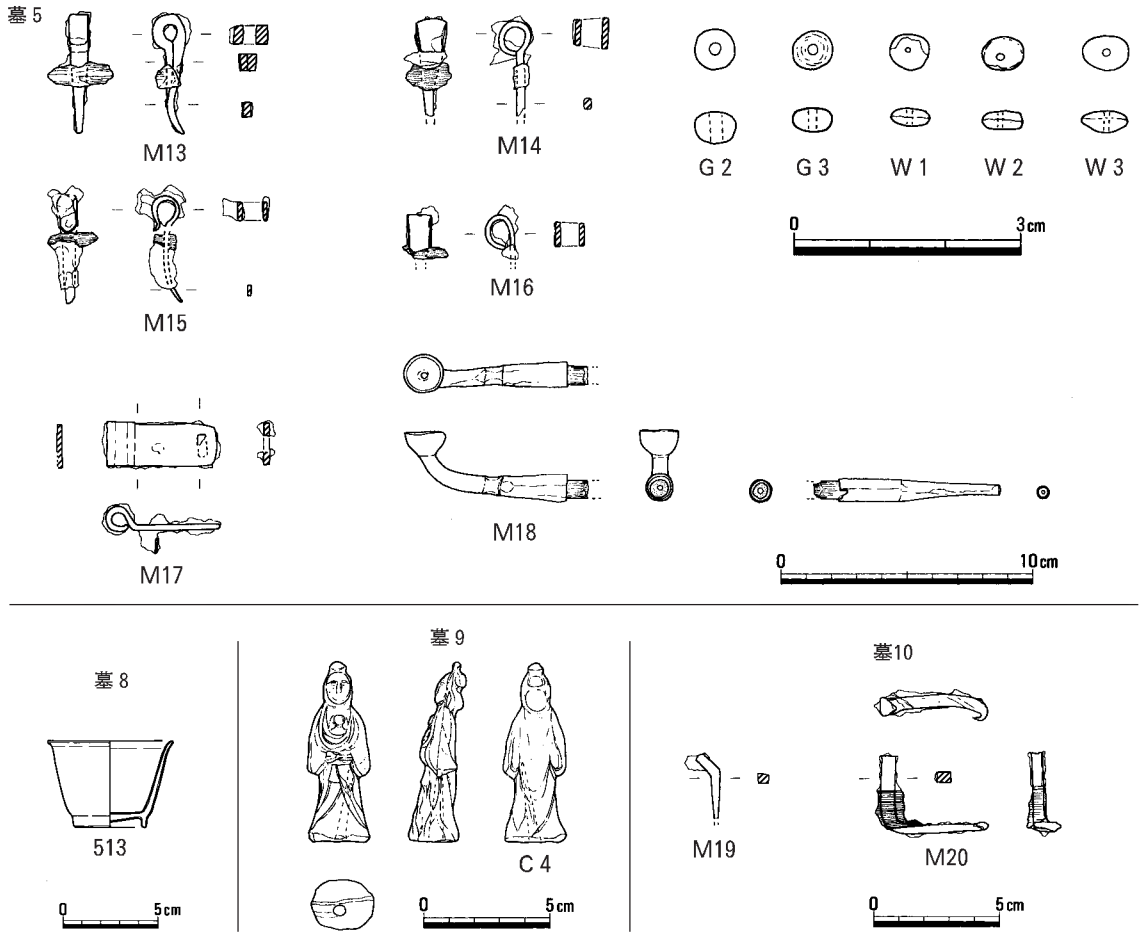




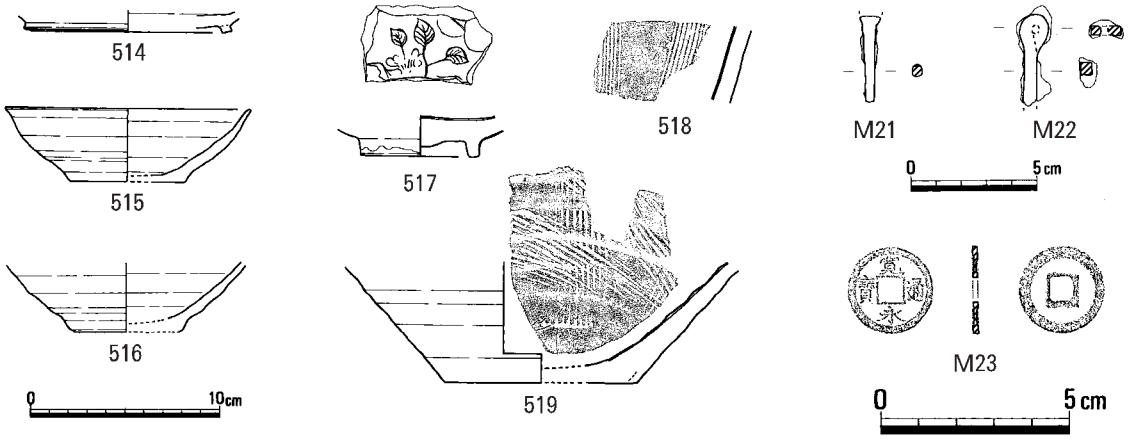
第98図　墓４～12（1/40・1/20）

第２表　墓４～12一覧表

遺構名	平面形	断面形	規模(cm)			人骨	出土遺物	時期	備考
			長軸	短軸	深さ				
墓４	不整楕円形	逆台形	(145)	106	41	無		近世	石
墓５	方形	箱形	102	94	54	有	棺金具・釘、煙管、数珠玉	18C後半	石
墓６	不整楕円形	逆台形	158	109	47	無		近世	石、棺痕跡
墓７	不整円形	逆台形	135	124	78	無		近世	棺痕跡
墓８	円形	逆台形	52	50	25	無	白磁（肥前）	17C後半	
墓９	円形	逆台形	93	90	62	無	土製品（人形）	近世	石
墓10	円形	逆台形	95	92	55	無	棺釘	近世	石
墓11	不整円形	逆台形	73	63	25	無		近世	石
墓12	長方形	箱形	118	58	20	無		近世	



第99図　墓５・８～10出土遺物（1/3・1/1・1/4）



第100図　遺構に伴わない遺物（1/4・1/3・1/2）

遺構に伴わない遺物（第100図、図版19）

514は須恵器の杯身で、８世紀後半に属する。515・516は土師質土器椀で、焼成不良である。517は中国龍泉窯の青磁碗で、釉は松葉色を呈し、14世紀後半から15世紀中葉の特徴を持つ。518・519は16世紀末葉から17世紀初頭の備前焼の擂鉢である。鉄製品は釘状のM21と器種不明M22がある。M23は寛永通寶で、銅一文銭の新寛永である。（米田）

第４章　まとめ

第１節　発掘調査成果

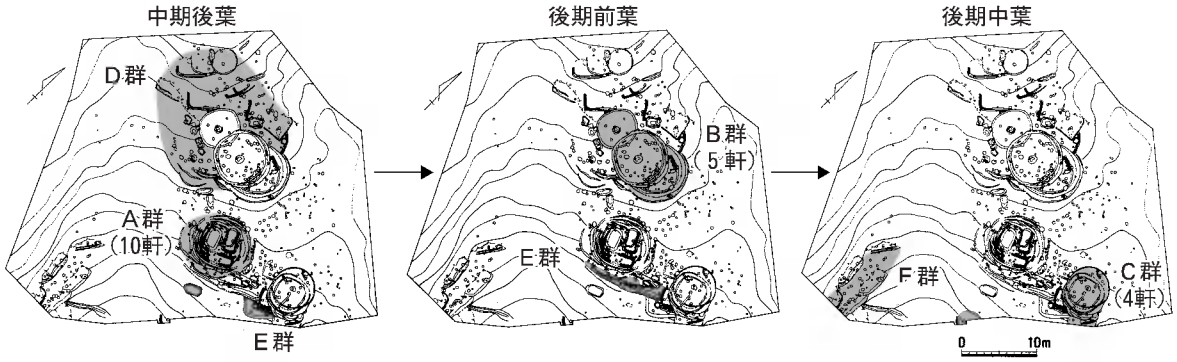
（１）遺構について

本調査では、弥生時代の竪穴住居35軒（円形24軒・方形11軒）・段状遺構８基・土壙21基・溝５条・被熱面１面、古墳時代の小竪穴式石室１基・土壙墓３基、中世の段状遺構２基、近世墓９基を確認し、樋ヶ鼻遺跡は弥生時代の集落跡、古墳時代後期の墓、近世の墓地であることが判明した。

弥生時代

樋ヶ鼻遺跡において集落が形成されるのは、弥生時代中期後葉になってからであり、後期中葉まで連綿と集落が営まれる。第101図・第３表は弥生時代の主要遺構の変遷を模式化したものである。

中期後葉は、Ａ群に円形の竪穴住居、Ｄ群に長方形・円形の竪穴住居、段状遺構、Ｅ群に方形の竪穴住居を配置している。Ａ群は10軒の竪穴住居が重複し、竪穴住居１→２→３→４→５→６→７→８→９→10の順序で連続的に建て替えられている。中期後葉の新段階に竪穴住居10が廃絶した直後は、



第101図　樋ヶ鼻遺跡における弥生時代の遺構群の変遷（1/1,000）

第３表　樋ヶ鼻遺跡における弥生時代主要遺構の変遷

遺構＼時期	弥生時代		
	中期後葉	後期前葉	後期中葉
円形住居群 貯蔵穴	Ａ群 → 住居１～10 → 土壙２～５	Ｂ群 → 住居11～15	Ｃ群 住居16～19
小円形住居 長方形住居 段状遺構	Ｄ群 住居20 → 21 → 22 住居23～27 住居28 → 29 段状１ → ２ Ｅ群 住居30	→ （住居32・33）	Ｅ群 → 住居31・段状３ → 段状４	Ｆ群 住居34 → 段状５ → 段状６ 段状７、（段状８） 住居35

※ Ａ・Ｂ・Ｃ群内の竪穴住居の変遷は、遺構№の小さいものが古く、№が大きいものが新しい。
→：各群の変遷、→：各群内の遺構の新旧関係を表す。

貯蔵穴の土壙２～５を意図的に配置している状況が見てとれる。

後期前葉になると、円形の竪穴住居はＢ群、長方形の竪穴住居、段状遺構の主体はＥ群に移る。Ｂ群は５軒の竪穴住居が重複し、後期初頭に竪穴住居11を構築、後期前葉のなかで竪穴住居12→13→14→15の順に建て替えている。竪穴住居11は焼失住居で、炭化材・焼土塊が良好に残存しており、壁材の一部と考えられる炭化材と掘り方との間に裏込め土があることを確認した。竪穴住居12→13は規模が径５ｍから７ｍへ拡張し、竪穴住居14・15までその規模を維持する。Ｅ群には長方形の竪穴住居31、段状遺構３・４が配置される。またＥ群には後期中葉以前の竪穴住居32・33があり、ともに床面中央に被熱土壙を有し、形態・規模・主軸が同一である。なお、後期以降は貯蔵穴が認められない。

後期中葉には、円形の竪穴住居がＣ群・竪穴住居35、段状遺構がＦ群に限定される。Ｃ群は竪穴住居16→17→18→19の順番で建て替えられ、斜面上方から下方へ移動し、規模は径4.0ｍ弱から5.5ｍへ拡張している。またＦ群には小規模な円形の竪穴住居34、段状遺構５～７が構築されている。Ｃ群の竪穴住居19上層からは弥生時代後期後葉の土器が出土しており、調査地周辺に後期後葉の遺構が存在する可能性もあるが、弥生時代後期中葉をもって集落が廃絶すると現時点では捉えている。

以上のように、弥生時代の集落は、弥生時代中期後葉から後期中葉にかけて連続して営まれている。円形の竪穴住居はＡ・Ｂ・Ｃ群、長方形の竪穴住居、段状遺構はＤ・Ｅ・Ｆ群に各時期でまとまって配置されている。時期別に各群をまとめると、弥生時代中期後葉はＡ・Ｄ・Ｅ群、後期前葉はＢ・Ｅ群、後期中葉はＣ・Ｆ群となり、特に円形の竪穴住居群はＡ群→Ｂ群→Ｃ群と移動していると復元できる。Ａ・Ｂ・Ｃ群の円形竪穴住居は複雑に重複しており、切り合いの状況から各群内の同時併存住居は１軒で、連続的に建て替えられたと考えられる。Ａ群は中期後半に10軒、Ｂ群は後期初頭から前葉に５軒、Ｃ群は後期中葉に４軒の竪穴住居が存在しており、各竪穴住居がほぼ同一期間存続していることを前提とするならば、その建て替え回数から、弥生時代中期後葉から後期中葉の時間幅をある程度推測することが可能であると考える。また、本遺跡では時期を越えて同一住居群内に建て替え・拡張を行っていないことが確認できたことも大きな成果と言える。

古墳時代

古墳時代の遺構は、小竪穴式石室を持つ１号墳、６世紀中葉・７世紀前半の土壙墓３基であり、墓域として利用されている。１号墳の主体部は小竪穴式石室で、箱式石棺様の上面に板石・円礫を１～２段だけ小口積みにしたものである。墳形・規模は不明、副葬品は土師器**500**のみである。樋ヶ鼻１号墳の主体部のような小竪穴式石室の構造は、５世紀後半の中原古墳群[1]や旦山３号墳[2]のような整然とした箱式石棺とは大きく異なる。樋ヶ鼻１号墳の時期決定には資料不足の感が否めないが、主体部が中原33号墳[3]に酷似していること、土師器**500**が北房町空古墳出土の壺[4]（６世紀後半の高杯と共伴）に型式が繋がる可能性があることなどから、７世紀前半として捉えるのが妥当であると考える。近隣の古墳をみると、木谷古墳群[5]、中原25・26号墳、旦山４号墳、奥田古墳[6]では、いずれも横穴式石室を埋葬施設としている。６世紀後半から７世紀前半にかけて横穴式石室が盛行する隣接地域において、樋ヶ鼻遺跡では単体の埋葬施設のみを限定している点が特徴としてあげられよう。

中～近世

本遺跡は篠向城の北東麓に位置するが、中世は段状遺構２基のみで、関連遺構・遺物は皆無である。近世になると、調査区の北東部で墓９基が整然と配されている。近隣では先旦山遺跡、野辺張遺跡[7]、水神ヶ峪遺跡[8]でも近世墓が群をなしており、集落から若干離れた低丘陵上に墓地が形成されている。

（２）遺物について

調査の結果、種々の遺物が出土したが、主体となる弥生時代の遺物について次に触れる。

弥生土器はＡ・Ｂ・Ｃ群の円形竪穴住居を中心に、弥生時代中期後葉から後期中葉の土器が出土している。いずれも一括性の高い土器群とは言えず、各住居には混入した土器も認められるが、おおまかに各小様式の様相を窺うことができる。特にＢ群は後期初頭から前葉に５軒の竪穴住居が連続して建て替えられており、高杯などは型式組列を追うことが可能である。また特異な弥生土器として、黒漆様樹脂が塗布してある土器片29・壺370、「Ｓ」字状渦文がスタンプされた壺264が注目される。スタンプ文土器は、久世町では五反遺跡[9]、旦山遺跡[10]でも出土しており、本遺跡で町内５点目である。

石器は弥生時代中期後葉から後期中葉のものが大半を占める。本来ならば、各時期ごとに石器の組成を検討すべきだが、時期が特定できる石器が少ないため、遺跡全体としてまとめる。第４表は石器の各器種の出土数・組成比を示したものである。器種では磨製石包丁・扁平片刃石斧の比率が高い。また砥石の出土数も15点と多く、全体的に使い込まれているものが目立つ。打製石器はサヌカイト・黒曜石、太型蛤刃石斧は玄武岩、扁平片刃石斧・磨製石包丁は緑色片岩・黒色片岩、砥石は流紋岩が主に使用され、器種によって石材がほぼ選択されている。第５表は石器石材の総出土数・重量比を示しており、磨製石器の主石材である玄武岩・緑色片岩の重量比は63％・29％と高い。サヌカイトは約506ｇ、黒曜石は約1.6ｇと全体の６％に過ぎず、これらの製品は小形品に限定される。

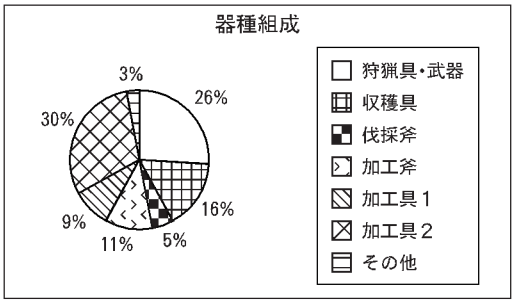
磨製石包丁は、未成品８点・完成品５点が出土しており、原石・剥離・研磨・穿孔工程の未成品が認められることから、遺跡内で一貫して製作されていると考える。製作技術の特徴として、研磨が穿孔に先行することや、初孔部に敲打を行わないことがあげられる。

弥生時代の鉄器[11]は計12点出土した。特に鋳造品は４点あり、なかでもＭ３は施溝して再加工し、鑿（のみ）に転用している。なお、本遺跡の鉄器出現は弥生時代後期初頭である。後期前葉までは竪穴住居15などで石鏃・扁平片刃石斧が残るが、後期中葉以降には磨製石包丁以外の石器が終息することから、後期中葉を画期に利器の鉄器化が進んだとみる。

また弥生時代後期初頭の竪穴住居11（焼失住居）からは、炭化したダイズ684粒・アズキ約13粒・イネ３粒などの穀物種子が出土しており、特筆される。（米田）

第４表　樋ヶ鼻遺跡における石器の器種組成

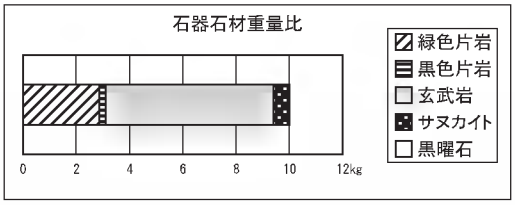
種別	石材	機能分類	器種	未成品	完成品	総計	比率
磨製石器	玄武岩 緑色片岩	—	原石	5		5	5.9%
		伐採・加工具	太型蛤刃石斧	2	2	4	4.7%
			扁平片刃石斧	4	4	8	9.4%
		収穫具	磨製石包丁	8	5	13	15.3%
打製石器	黒曜石	狩猟具・武器	石鏃		1	1	1.2%
	サヌカイト		石鏃	4	13	17	20.0%
		加工具１	石錐		3	3	3.5%
			楔形石器		4	4	4.7%
		加工具	扁平片刃石斧?		1	1	1.2%
その他		加工具２	砥石		15	15	17.6%
			叩石		2	2	2.4%
			台石		7	7	8.2%
		調理具	擦石		1	1	1.2%
		狩猟具・武器	投弾		3	3	3.5%
		漁撈具	石錘		1	1	1.2%
総　計				23	62	85	100%



第５表　樋ヶ鼻遺跡における石器の主要石材　上段…個数　下段…重量

石材	石器	剥片	総計	重量比
緑色片岩	14 2315.37g	7 158.15g	21 2473.52g	28.75%
黒色片岩	7 188.12g		7 188.12g	2.19%
玄武岩	5 3851.90g	40 1581.68g	45 5433.58g	63.16%
サヌカイト	25 139.13g	256 367.02g	281 506.15g	5.88%
黒曜石	1 0.43g	1 1.12g	2 1.55g	0.02%

※石器は打製石器・石斧・石包丁を対象とした。



第２節　久世町中原地区周辺における弥生時代の集落変遷

樋ヶ鼻遺跡の周辺では、真庭産業団地の建設に伴って、旦山遺跡・惣台遺跡・先旦山遺跡・野辺張遺跡など、弥生時代中期から後期の集落跡の発掘調査が相次いだ。[12] そこで、周辺遺跡の調査成果を踏まえつつ、久世町中原地区周辺に展開する弥生時代集落の変遷・動向を探りたい。

（１）各集落について

まず、各遺跡の立地、弥生時代の主要遺構の確認数・消長・配置について検討する。

弥生時代の集落を構成する要素は多岐にわたるが、今回は竪穴住居・貯蔵穴・土壙墓を対象とした。第６表は、各遺跡における円形の竪穴住居数[13]を時期別に分けたものであり、各時期の住居(群)数・のべ住居数を併記した。住居(群)数は同時期の最大住居数（同時併存ではない）を示し、のべ住居数は各時期の時間幅のなかで存続した住居の総数を表している。したがって、各枠内の両住居数の格差が大きい場合は住居の建て替え・拡張が多く行われたことを示すと考える。さらに、第102図は各遺跡における竪穴住居・貯蔵穴の配置・時間的変遷を模式化したものであり、竪穴住居の扱いについては第６表に準拠している。次からは第６表・第102図をもとに、中原地区周辺における各集落の様相について要約する。なお、樋ヶ鼻遺跡については前節をもって換える。

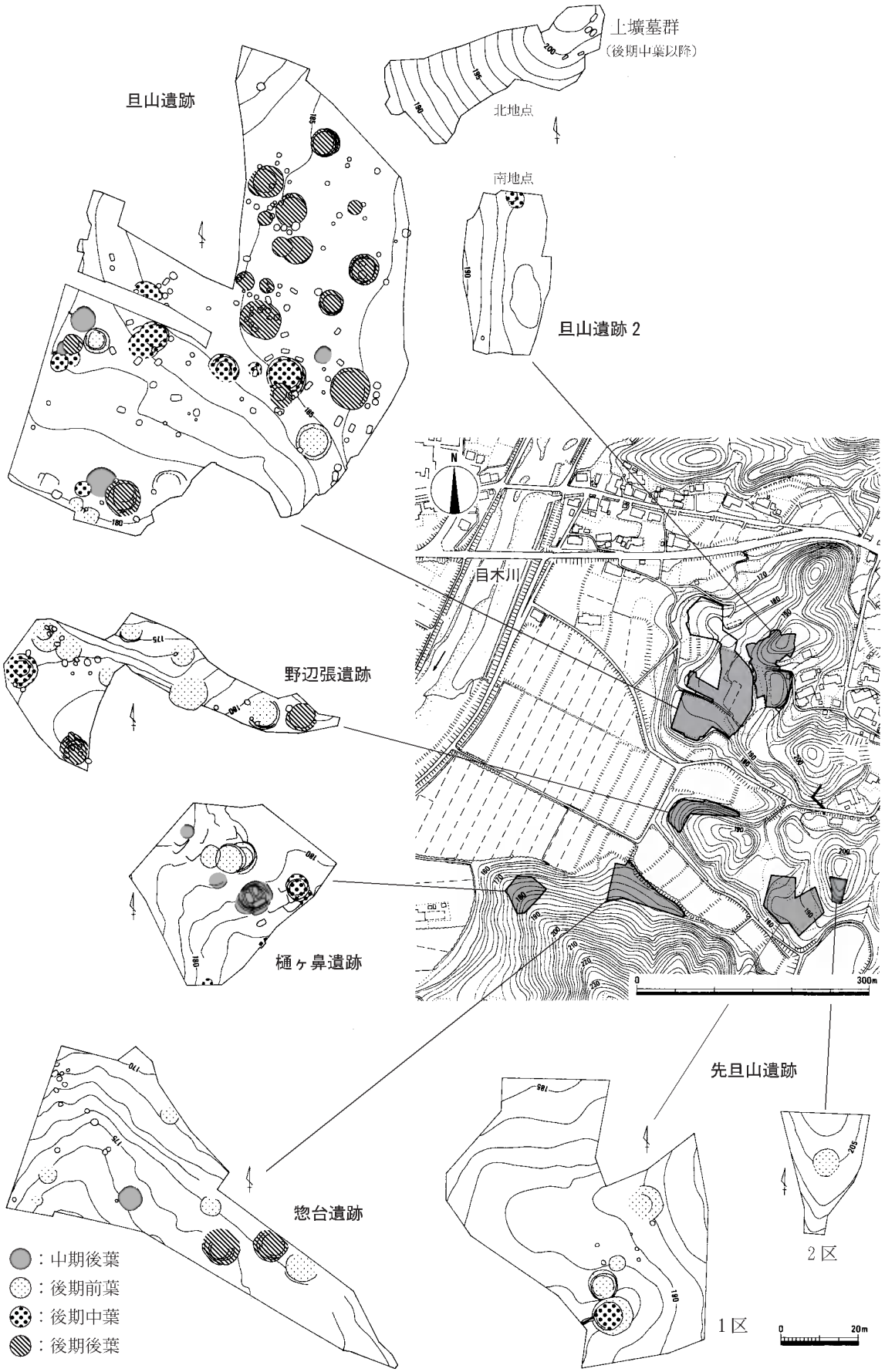
旦山遺跡の弥生集落は中期後葉から後期後葉まで連綿と営まれ、集落域は最も広大である。この間の竪穴住居はのべ77軒、段状遺構15基、貯蔵穴[14]128基に及ぶ。竪穴住居を時期別にみると、中期後葉から後期前葉は４～５軒が丘陵斜面部に散見される。後期中葉には11軒に増加し、ほぼ同一海抜高に直列して配置されていることから、意図的な遺構配置の兆候が認められる。また当該期には丘陵の最高所に土壙墓５基が群をなし、墓域を限定して形成している。後期後葉には竪穴住居が約18軒に急増し、集落の最盛期を迎える。竪穴住居は丘陵頂部に集中しており、その配置は規制されていた可能性がある。貯蔵穴は長方形と円形のものがあり、この形態差は中期から後期前葉は長方形、後期中葉から後葉は円形が多いことから、時期差と捉えられている。[15] 貯蔵穴の配置は、中期後葉から後期前葉は集落内に散在する傾向にあるが、後期中葉以降は大形の竪穴住居を外周するように配されたり、特定の竪穴住居内に集中して重複するようになり、円形住居と同様に遺構配置に規制が設けられていたと考えられる。また大形の竪穴住居については、その突出した規模から、首長層の住居と安易に捉えられる危惧もあるが、多量の鉄器を保有する竪穴住居19・35や、多くの貯蔵穴が付設・集中している竪穴住居21・26・33を見る限り、首長層の存在を裏付ける根拠を見出し難いため、大形住居の中には集落内の一生業を担う共同施設が含まれる可能性がある。

第６表 久世町中原地区周辺における弥生集落の円形竪穴住居数

時期／遺跡名	中期	後期				総計
	後葉	前葉	中葉	後葉	—	
旦山遺跡	4/4	5/ 9	11/26	18/38	1/2	39/ 79
野辺張遺跡		7/10	1/ 1	3/10		11/ 21
先旦山遺跡		4/ 5	2/ 4			6/ 9
惣台遺跡	1/ 1	5/ 5		2/ 2		8/ 8
樋ヶ鼻遺跡	4/13	1/ 5	3/ 6			8/ 24
総計	9/18	22/34	17/37	23/50	1/2	72/141

※ 枠内の数値は、住居(群)数／のべ住居数を表す。

野辺張遺跡の弥生集落は、後期前葉から後葉まで営まれ、竪穴住居はのべ21軒、貯蔵穴29基が確認されている。後期前葉は10軒の竪穴住居が認められ、集落形成当初から盛行



第102図　久世町中原地区周辺における弥生集落の遺構配置・変遷（1/1,500・1/7,500）

している。しかし直ちに衰退し、中葉から後葉にかけては、うち２軒が存続するのみである。貯蔵穴は、２～３軒の竪穴住居に集中して重複している。

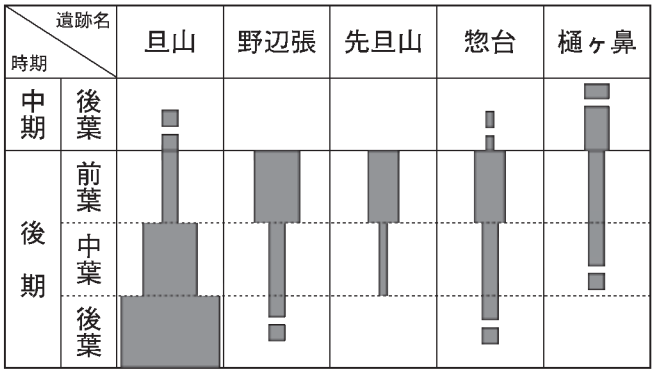
先旦山遺跡の集落は、後期前葉から中葉の短期間に営まれている。１区では竪穴住居のべ９軒、段状遺構１基が確認されている。後期前葉は１区で４軒、２区で１軒の竪穴住居が配置されるが、中葉になると、うち１軒のみが存続し、集落は急速に衰退する。２区の竪穴住居１軒は、ほかの遺跡から比高差20～30ｍの高所に造営されており、見張り台的な機能が想定されている[16]。貯蔵穴は１区丘陵頂部の竪穴住居間にまとまって配置されているが、特定の竪穴住居に近接するという状況ではない。

惣台遺跡は、樋ヶ鼻遺跡と同一丘陵北斜面に立地する。弥生時代の遺構は、竪穴住居のべ８軒、段状遺構２基、貯蔵穴16基が確認されている。弥生集落は中期後葉は１軒であるが、後期前葉になると５軒に急増し、後期前葉にピークを迎える。中葉から後葉までは衰退傾向にあり、うち２軒が存続する。また貯蔵穴は、竪穴住居とは離れた地点に集中して偏在している。

（２）弥生時代の集落変遷

以上が各遺跡における主要遺構の変遷・配置状況であるが、次に遺構数の増減、時期的消長を遺跡間で検討する。第103図は、第６表をもとに、各集落の消長を概念的に表現したものである[17]。

中期後葉から集落が営まれるのは旦山遺跡・惣台遺跡・樋ヶ鼻遺跡であり、いずれの遺跡も１～３軒の竪穴住居しか存在していない。各遺跡の竪穴住居の建て替え数から察して、樋ヶ鼻遺跡の弥生集落は旦山遺跡・惣台遺跡よりも中期後葉でも古い段階に集落を形成したと考えられる。後期前葉になると、旦山遺跡・樋ヶ鼻遺跡は中期後葉と同様な遺構数・配置状況を示すが、惣台遺跡では遺構数が急増している。また、野辺張遺跡・先旦山遺跡では６軒前後の竪穴住居が造営され、新たに集落が形成されており、惣台遺跡と同様に盛行している。後期中葉になると、樋ヶ鼻遺跡は前段階と大差ないが、野辺張遺跡・先旦山遺跡・惣台遺跡は、前葉と比べると竪穴住居が１～２軒に激減するだけでなく規模も縮小し、集落は衰退傾向にある。これらの遺跡とは逆に後期中葉の旦山遺跡では、竪穴住居が10軒と前葉の約２倍に増え、竪穴住居・貯蔵穴が意図的に配置され始める。また当該期の旦山遺跡では、丘陵頂部に墓域(土壙墓群)が形成されている。後期後葉になると、樋ヶ鼻遺跡・先旦山遺跡では集落が廃絶し、野辺張遺跡・惣台遺跡は中葉と同様に衰退傾向にある。一方、後葉の旦山遺跡では、住居数が21軒と中葉のさらに２倍近くまで急増し、丘陵頂部に竪穴住居が集中するように規制されていたと考えられる。このように後期中葉から後葉にかけて、旦山遺跡以外の集落が衰退・廃絶する一方で、旦山遺跡では遺構配置が規制され、遺構数が激増して最盛期を迎えているという現象は、周辺の集落が集約されて旦山遺跡に大集落を形成したかのように見受けられる。



第103図　久世町中原地区周辺における弥生集落の消長

また当地区の集落では、後期以降、鉄器の普及が急速に進むが、後期中葉から後葉を画期として鉄器の保有量にも変化が生じている。樋ヶ鼻遺跡は前葉・中葉に各５点、惣台遺跡は前葉・後葉に各２点であり、ほぼ一定の保有量を示す。一方、旦山遺跡は、前葉・中葉は各１点で

あるのに対し、後期後葉になると14点に激増しており、明らかに後期中葉から後葉を画期として、鉄器の供給量に変化が生じ、ほかの遺跡よりも旦山遺跡が鉄器の保有に優位であったことが窺える。

以上のように、中原地区周辺に展開する弥生集落は、中期後葉から後期前葉までは各集落が同一規模で、貯蔵穴群が各集落に認められることから、集落間が一定の関係を保ちつつも、個別の共同体を形成していたと考えられる。しかし後期中葉になると、集落形成に画期が認められ、それまでの諸集落が集約・再編され、旦山遺跡を中心とする一つの集落のまとまり（ムラ）が形成されたことが想定される。本節では、中原地区周辺の弥生集落の主要遺構を中心とした分析に留まったが、詳細な遺物からのアプローチも必要である。また久世町内には、五反・大旦地区を中心とする拠点的な集落をはじめ、中期後半以降、各地に弥生時代の集落が展開している[18]。今後はこうした周辺地区の弥生集落の動向も踏まえていく必要があり、別稿に期したい。（米田）

註

（１）福田正継・山磨康平「中原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　岡山県教育委員会　1995年

（２）福田正継「旦山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999年

（３）註１文献に同じ。

（４）田仲満雄・松本和男「空古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1796年
該当する土師器の壺は第24図-161である。

（５）福田正継「木谷古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』93　岡山県教育委員会　1995年

（６）福田正継「奥田古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999年

（７）福田正継「先旦山遺跡」「野辺張遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999年

（８）浅倉秀昭「水神ヶ峪遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999年

（９）松本和男「久世町内の弥生時代遺跡」『久世町史』久世町教育委員会　1975年
P53～54に五反地区出土の「Ｓ」字状渦文のスタンプをもつ弥生土器（「後期後葉」とある）が掲載されている。

（10）浅倉秀昭「旦山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999年
第151図-268、第181図-337、第266図-485は、いずれも後期の「Ｓ」字渦文スタンプであり、原体は全て異なる。

（11）本遺跡出土の弥生時代の鉄器については、村上恭通氏に実見していただき、種々の御教示を得た。

（12）ａ．福田正継・浅倉秀昭「旦山遺跡・惣台遺跡・野辺張遺跡・先旦山遺跡・旦山古墳群・奥田古墳・水神ヶ峪遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会　1999年
ｂ．扇崎由「旦山遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』161　岡山県教育委員会　2001年

（13）竪穴住居の数・時期については、基本的に「報告書」に準じているが、主観によるところも多い。建て替えのある竪穴住居や複数の時期にまたがる土器が出土している場合は、樋ヶ鼻遺跡の調査成果から竪穴住居群は同一時期に収まる可能性が高いことから、最新段階の時期を竪穴住居群の時期として採用した。また竪穴住居数については、根拠が不明確な竪穴住居の建て替え・拡張は省略し、その数え方については基準を統一したため、遺跡間を比較する場合には差し支えないと考える。

（14）貯蔵穴は、断面形が袋状・垂直に立ち上がるものなど、確実に貯蔵穴と判断されるものを対象とした。

（15）浅倉秀昭「第３章　旦山遺跡　第６節　小結」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』136　岡山県教育委員会 1999年

（16）註７文献に同じ。

（17）円形の竪穴住居数やその消長が集落の全体像を示すものではないが、円形の竪穴住居は集落内における居住空間の中心的な役割を担っており、竪穴住居以外の段状遺構・貯蔵穴・土壙墓などの集落の構成諸要素も、竪穴住居に対応するように遺構数・消長が変化している可能性が高いと考える。

（18）久世町内の弥生集落は、五反・大旦地区では弥生時代前期末から後期末まで連綿と集落が営まれているが、余野・江森地区、樫西・上野地区は中期後半から後期前葉、宮芝・小谷・三坂地区、草加部地区は後期前葉から中葉、惣・富尾地区は中期中葉から後期前葉を中心に集落が営まれている。
松本和男「久世町内の弥生時代遺跡の展開」『久世町史』久世町教育委員会　1975年

樋ヶ鼻遺跡出土の炭化穀物種子について

小西猛朗（元九州大学）
椿坂恭代（札幌国際大学/博物館）
米田克彦（岡山県古代吉備文化財センター）

1　はじめに

樋ヶ鼻遺跡は岡山県久世町中原に所在し、弥生時代中期後葉から後期中葉を中心とする集落跡であり、弥生時代後期初頭の竪穴住居11の床面直上から、炭化穀物種子（以下、種子とする）が１か所にまとまった状態で出土した。竪穴住居11は焼失住居であり、試料である種子は被熱によって大半が破裂・変形し、遺存状態は良くない。しかし種子を観察した結果、種類が同定できたので報告する。

2　方法

発掘調査では種子がまとまった状態で出土したことから、周辺の埋土ごと種子を一括して採取した。試料は0.5㎜メッシュのフルイを最小単位とし、水洗選別を行った。次に、全種子の中からほぼ原形を留めているものや、種類が同定できそうな試料を抽出し、同じ大きさ・形状のものに大別した。

試料の観察・同定は、まず小西が行い、破裂したダイズの中から観察可能な試料を抽出した。そして椿坂はダイズ（小西抽出試料）・アズキを精査し、同定を行った。観察はともに実体顕微鏡を用いた。なお、最終的な種子の同定は、小西・椿坂両者の協議・合意によるものである。

3　観察結果

観察の結果、マメ類ダイズ684粒、アズキ約13粒、イネ科イネ３粒の計３種が同定された。以下に同定の根拠となる形態的特徴をあげる。なお、各種子の計測値は第13表（図版20）に示している。

（１）マメ科

①ダイズ（*Glycine max* Merr.）

試料は被熱によって黒色化し、海綿状に膨らみ原形をとどめているものは皆無である。破裂の強弱によって粒の大きさが異なる。ダイズと考えられる試料の中から観察可能なものを約60点抽出して精査した結果、２点にマメ科の特徴であるヘソと発芽口となる珠孔の部分が確認できた（図版20－試料１・２）。初生葉は被熱のため欠落していたが、ヘソの位置とヘソの形態の特徴からダイズの可能性が高いと考えられる。

②アズキ（*Vigna angularis*(Wild)Ohwi et Ohashi）

試料は被熱によって炭化しており、黒色を呈する。完全な形に近いもの４粒、半割状のものを約９断片確認した。粒は長さ5.3～6.8㎜、幅3.5～4.4㎜、厚さ3.7～4.4㎜で、被熱による変形は少なく、原形に近いが、全体的に遺存状態は良くない。いずれの試料もマメ科の特徴であるヘソの部分が剥離していたが、試料３ではアズキの初生葉を確認した。また試料４は初生葉が欠落していたが、アズキ特有の初生葉の痕跡が確認できた。以上のことから、これらの試料はアズキと判断される。

（２）イネ科イネ（*Oryza sativa* L.）

イネ種子は被熱によって炭化し、黒色を呈する。種子選別時は完形１粒、破片２粒の計３粒を数えたが、観察に耐えるものは１粒のみである。計測値は長さ4.7㎜、幅2.8㎜、厚さ1.7㎜である。

4　考察

本報告において特筆されるのは、イネ３粒とともに検出したダイズ684粒とアズキ約13粒のマメ類である。３種の種子は１か所にまとまって出土しており、有機物（袋か）に包蔵されていたと考える。

全国的なマメ類の出土例をみると、縄文時代は早期から晩期まで８例、地理的には北海道から九州まで散見され、アズキの仲間が大半を占める[(1)]。アズキの祖先種はヤブツルアズキであり、日本や韓国では半野生のノラアズキの段階を経て、アズキが栽培化されたと考えられている[(2)]が、縄文時代のアズキが栽培種か野生種か判断できるデータは得られていない[(3)]。弥生時代になると、西日本でもマメ類出土例が増え、前期は10例で福岡県・山口県に限定される。中期は９例で長崎県から徳島県まで前期より若干広がる。後期は８例あり、静岡県・東京都・群馬県などの東日本まで分布が及んでいる[(4)]。

岡山県内では弥生時代の炭化穀物種子を検出している遺跡は意外と少なく、管見によると、第７表のとおりである[(5)]。弥生時代前期は１例、中期は６例、後期は21例であり、中期から後期にかけて大幅に増加している。穀物種子は炭化米が大半を占めるが、後期には炭化米とともにアワ・ヒエ・キビ等の検出例も増えている。

本調査で炭化穀物種子を検出した竪穴住居11は焼失住居であった。焼失住居は、こうした自然遺物が良好に残存していることが予想されるため、発掘調査時の床面精査はもちろんのこと、こうした微細の遺物がたとえ目に触れなくとも、床面付近の覆土を採取し、フローテーションを試みることを習慣づけたいものである。こうした調査の積み重ねにより、先史時代の食生活・生業をより具体的に復元でき、ダイズ・アズキの栽培化を解明することが可能であると考える。

引用文献

（１）吉崎昌一・椿坂恭代「先史時代の豆類について－考古植物学の立場から」『豆類時報』№24　2001年

（２）山口裕文「照葉樹林文化が育んだ雑豆“あずき”と祖先種」『雑穀の自然史』北海道大学図書刊行会　2003年

（３）吉崎昌一「先史時代の雑穀：ヒエとアズキの考古植物学」『雑穀の自然史』北海道大学図書刊行会　2003年

（４）寺沢薫・寺沢知子「弥生時代植物質食料の基礎的研究－初期農耕社会研究の前提として－」『橿原考古学研究所紀要考古學論攷』第５冊　奈良県立橿原考古学研究所　1981年

（５）埋蔵文化財研究会『第50回　埋蔵文化財研究集会　環境と人間社会』発表要旨集・資料データベース　2001年

以上の文献、註４文献のほか、岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財報告』（1971年）、岡山県教育委員会『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』157・165・173の成果を加えた。

第７表　岡山県内における弥生時代の穀物種子一覧表

（一部に古墳時代を含む）

遺跡名	所在地	遺構など	時期	品目	数量	文献
雄町遺跡	岡山市	溝14	中期前半	炭化米	16	県1
		溝12	後期末	炭化米	1	
		上壙７	後期前半	炭化米	1	
				アズキ	1	
津島遺跡	岡山市	包含層	前期	炭化米	－	S49年調査
				ヒエ	－	
		北池土壙２	後期Ⅱ～Ⅲ	炭化米	－	県160
		北池土壙７	不明	炭化米	－	
		河道１	後期	炭化米	－	県173
		池１	中期後半	炭化米	－	
		土壙10	後期Ⅳ	炭化米	22.7㌘	
		土壙67	（古墳前期Ⅱ）	炭化米	10.6㌘	
南方遺跡	岡山市	泥炭地	中期	炭化米	－	佐藤1971
				ムギ	－	
川入遺跡	岡山市	大道西Ⅰ地区井戸101	後期Ⅲ	炭化米	364	県16
				アワ	108	
				炭化米	53	
				アワ	3	
足守川加茂B遺跡	岡山市	竪穴住居36	後期末	炭化米	－	県94
		竪穴住居47	古墳初頭	炭化米	－	
		竪穴住居93	古墳初頭	炭化米	－	
		上壙49	後期前半	炭化米	－	
		上壙88	後期後半	炭化米	－	
		上壙126	後期末	炭化米	－	
上東遺跡	倉敷市	才ノ元井戸Ⅲ	後期Ⅰ	炭化米	1	県２
		亀川P-1	後期Ⅰ～Ⅱ	炭化米	161	
				玄米	2	
		亀川P-2	後期Ⅰ～Ⅱ	炭化米	293	
				玄米	1	
		亀川P-3	後期Ⅰ～Ⅱ	炭化米	104	
		亀川P-4	後期Ⅰ～Ⅱ	炭化米	25	
		才の町P-ト	後期Ⅳ	炭化米	多量	
				アワ	－	
		才の町P-ホ	後期Ⅲ	炭化米	6	
				アワ	7	
		亀川井戸P-2	後期Ⅲ	炭化米	13	県16
				アワ	1	
				ヒエ	2	
		波止場状遺構	後期	イネ	－	県157
				アワ	－	
押入西遺跡	津山市	７号住居跡	中期後半	炭化米	－	県３
六番丁場遺跡	鏡野町	土壙７	後期以前	炭化米	約2.3㌘	県165
宮尾遺跡	久米町	溝	中期後半	炭化米	1	県４
領家遺跡	久米町	第31号住居跡	後期初頭	炭化米	18斗	県８
山沿部	大佐町	ピット２	古墳初頭	炭化米	－	県埋文1971
桃山遺跡	北房町	802住居跡	後期初頭	キビ	1	県12
樋ヶ鼻遺跡	久世町	竪穴住居11	後期初頭	ダイズ	684	県183（本報告）
				アズキ	(13)	
				炭化米	3	

※文献の「県」は『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』、「県埋文」は『岡山県埋蔵文化財報告』の略。

樋ヶ鼻遺跡出土の弥生土器に付着固化した黒漆様樹脂の分析

北野信彦（くらしき作陽大学）

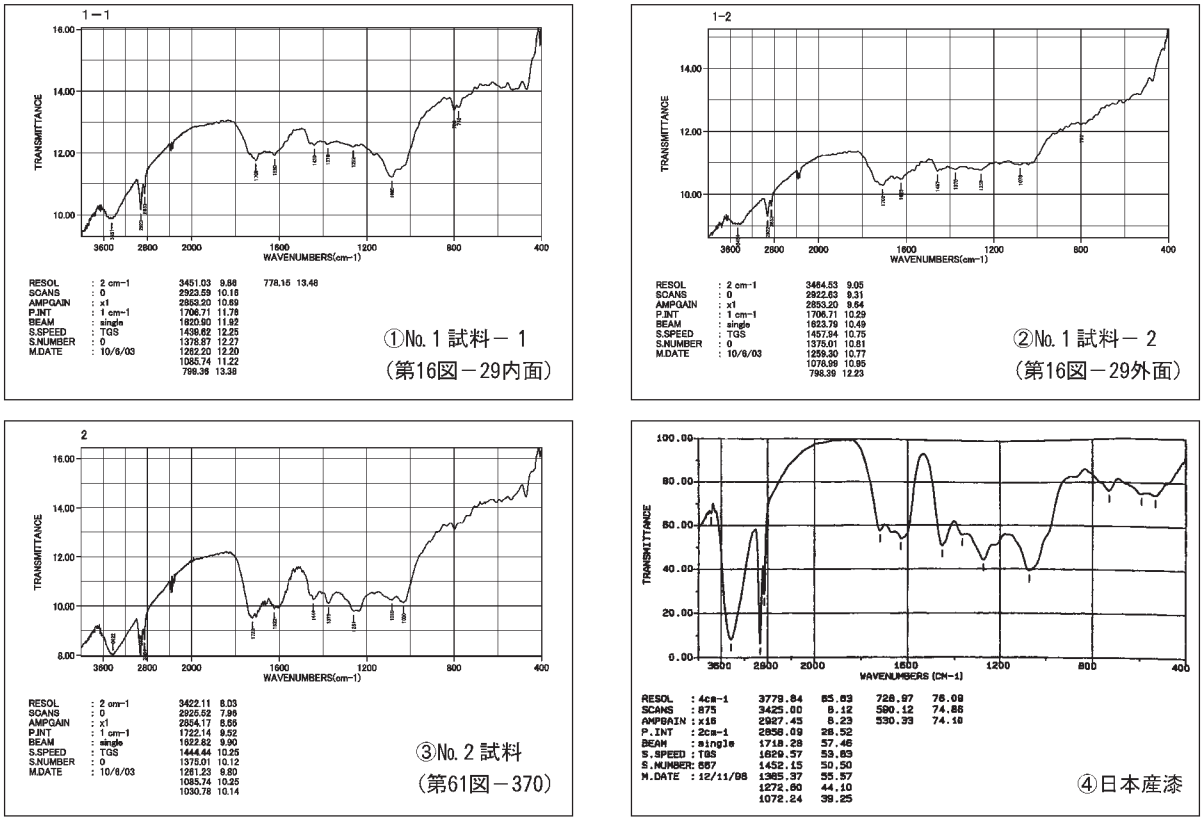
分析結果

調査を行った黒漆様樹脂は、一部漆樹液が溜まって固化した際にできる「ちぢみムラ」現象が観察された。FT-IR分析の結果では、3430、2920～2930、2850、1710～1720、1620～1630、1440～1450、1260、1080cm^{-1}（波数）前後に特徴的な吸収を示した。標準試料である現代の日本産漆（浄法寺漆：第104図－④）は1710～1720、1630、1450、1260cm^{-1}に、膠は1650、1540、1330、1240cm^{-1}に、参考ではあるが油脂類（エゴマの場合）は1730、1460、1240cm^{-1}に特徴的な吸収を示す。このため本試料は、No.1・No.2に若干のスペクトル吸収の差はあるが、いずれも「漆」であると同定した。

次に、これら黒漆様樹脂断面を顕微鏡観察すると、いずれも平滑な塗膜層を呈しているが、空気抜け穴状の球状抜け穴痕痕跡は確認されなかった。ただし、No.1試料は、漆塗膜内に比較的多くの夾雑物を含んでおり、No.2試料は比較的スムーズの状態であるため、両者ともに漆の状態は異なる。この点が赤外吸収スペクトルにおける若干の差異に反映されているのであろう。

（分析方法）

試料は本書第16図－29(No.1－1：内面、－2：外面)、第61図－370（No.2）の3点である。塗膜面の成分については、フーリエ変換型赤外分光光度計（FT-IR）（H本電子製JIR-6000型）を使用して顕微赤外反射法およびKbr錠剤法により測定した。測定は分解能4cm^{-1}、波長領域400～4000cm^{-1}で行った。また内部状態については、黒漆様樹脂の1mm×3mm程度の剥落片を採取し、エポキシ合成樹脂に包埋した後、断面を研磨した。この断面薄層試料の塗膜および内部状態について、金属顕微鏡による×100、×200倍の落射観察を行った。



第104図　樋ヶ鼻遺跡出土の黒漆様樹脂および日本産漆の赤外吸収スペクトル

第８表　石製品一覧表

挿図No.	遺物No.	遺構	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
13	S1	竪穴住居２	磨製石包丁未成品	緑色片岩	64	162	11	138.94	剥離工程。裏面は自然面が残る。
	S2	竪穴住居３	砥石	流紋岩	(58)	(49)	(19)	(22.13)	欠損。作業面は４面か。
15	S3	竪穴住居10	石鏃	サヌカイト	16	12	2	0.34	両側縁のみ二次調整。裏面は主要剥離面。
	S4	竪穴住居10	石鏃	サヌカイト	21	16	4	0.83	大まかに二次調整。
	S5	竪穴住居10	石鏃	サヌカイト	22	14	3	0.93	周縁のみ二次調整。
	S6	竪穴住居10	石鏃	サヌカイト	31	20	3	1.67	周縁のみ二次調整。
	S7	竪穴住居10	石鏃？未成品	サヌカイト	34	14	6	3.07	両側辺のみ二次調整。
	S8	竪穴住居10	石鏃？未成品	サヌカイト	28	15	4	1.49	二次調整は不十分。
	S9	竪穴住居10	石錐	サヌカイト	37	24	4	1.67	全体的に細かい二次調整。
	S10	竪穴住居10	太型蛤刃石斧	玄武岩	138	60	41	614.31	全体的に十分に整形されている。刃部に刃こぼれか。
	S11	竪穴住居10	砥石	砂岩	109	(79)	29	(316.75)	作業面は２面。全体的に風化している。
	S12	竪穴住居10	砥石→扁平片刃石斧未成品？	レキ岩	112	63	35	261.68	作業面は３面。周縁の調整剥離は擦痕より新しい。
	S13	竪穴住居10	石錘	角閃石玢岩	53	42	(36)	(99.77)	欠損。敲打によって抉りを形成。左・右端面は敲打痕あり。
	S14	竪穴住居10	原石	玄武岩	245	197	45	約4000	未調整。擦痕なし。S10・S35などと同質。
17	S15	A群	石鏃	サヌカイト	22	15	3	(0.90)	欠損。周縁のみ二次調整。裏面は主要剥離面。
	S16	A群	楔形石器	サヌカイト	16	25	5	2.77	上・下辺は二次調整。左・右端は裁断面。
	S17	A群	剥片	サヌカイト	43	52	8	18.62	目的的剥片ではない。わずかに調整剥離。
	S18	A群	扁平片刃石斧	緑色片岩	63	41	(9)	(32.97)	欠損。研磨は不十分だが、刃部は鋭利に作出されていたと考えられる。
	S19	A群	扁平片刃石斧未成品？	黒色片岩	(42)	30	5	(10.96)	欠損。岩盤と同質。一部研磨か。
	S20	A群	磨製石包丁未成品	緑色片岩	52	(97)	12	(69.29)	欠損。裏面は自然面が残る。わずかに研磨痕あり。敲打・穿孔痕なし。
	S21	A群	磨製石包丁未成品	黒色片岩	55	(79)	7	(34.14)	欠損。岩盤と同質。剥離工程。周縁に二次調整。敲打・研磨痕なし。
	S22	A群	磨製石包丁未成品？	黒色片岩	45	(84)	9	(42.51)	欠損。岩盤と同質。剥離工程。わずかに二次調整。敲打・研磨痕なし。
	S23	A群	太型蛤刃石斧？	緑色片岩	(53)	(43)	(11)	(33.84)	欠損。敲打痕あり。わずかに研磨か。
	S24	A群	投弾	閃緑岩	46	40	36	86.48	未調整。やや楕円形を呈する。
	S25	A群	投弾	角閃石玢岩	56	51	44	161.52	未調整。球形に近い。
	S26	A群	投弾？	流紋岩	(40)	47	36	(78.44)	欠損。未調整。やや楕円形を呈する。
	S27	A群	砥石	流紋岩	(56)	63	20	(106.24)	作業面は５面。欠損後も使用。
	S28	A群	砥石	安山岩	138	111	75	1825.79	作業面は３面。
23	S29	竪穴住居11	石鏃？未成品	サヌカイト	25	13	3	1.22	左側面のみ二次調整。
	S30	竪穴住居11	石鏃	サヌカイト	(21)	18	4	(1.30)	周縁のみ二次調整。
	S31	竪穴住居11	砥石	流紋岩	86	80	54	536.28	全体的に擦痕がある。下端面は平坦。
	S32	竪穴住居11	砥石	砂岩	51	41	16	32.18	作業面は１面で、よく使い込まれている。
	S33	竪穴住居11	砥石	流紋岩	171	41	31	336.06	作業面４面。火災による熱を受け、欠損して出土。
	S34	竪穴住居11	台石	流紋岩	(254)	(318)	(109)	(約14000)	欠損。周縁部に火災による熱を受ける。
	S35	竪穴住居11	台石	熔結凝灰岩	439	223	71	約9500	作業面は１面。
26	S36	竪穴住居13	石鏃？未成品	サヌカイト	26	22	6	2.92	両側面に二次調整。
	S37	竪穴住居13	調整剥片	サヌカイト	46	23	6	7.24	平行する両側面に二次調整。
27	S38	竪穴住居14	砥石		102	45	73	512.05	作業面は２面。
	S39	竪穴住居14	台石	花崗岩	232	236	144	約15700	作業面は６面。
32	S40	竪穴住居15	石鏃	サヌカイト	26	15	3	1.09	周縁部のみ二次調整。裏面は主要剥離面。
	S41	竪穴住居15	石鏃	サヌカイト	23	20	3	1.34	両辺のみ二次調整。
	S42	竪穴住居15	石鏃？未成品	サヌカイト	29	20	4	3.08	二次調整は不十分。裏面は主要剥離面。
	S43	竪穴住居15	楔形石器	サヌカイト	22	20	5	2.77	上・下辺は二次調整。左・右端は裁断面。
	S44	竪穴住居15	扁平片刃石斧未成品	黒色片岩	(30)	20	3	(3.71)	研磨工程。刃部は未だ鋭利に形成されていない。
	S45	竪穴住居15	扁平片刃石斧未成品	頁岩	40	19	4	6.48	研磨工程。研磨は十分だが、刃部は未だ鋭利に形成されていない。
	S46	竪穴住居15	扁平片刃石斧未成品	流紋岩	83	35	13	66.44	研磨工程。周縁部は二次調整。正面・刃部に研磨。刃部未形成。
	S47	竪穴住居15	磨製石包丁	緑色片岩	92	36	6	30.19	両面穿孔。刃部左半は摩滅が著しい。刃部右半は刃部が鋭利。
	S48	竪穴住居15	磨製石包丁	黒色片岩	(45)	(31)	(2)	(4.03)	欠損。研磨・穿孔の痕跡が残る。
	S49	竪穴住居15	叩石	閃緑岩	161	58	46	741.51	下端面に敲打痕。
	S50	竪穴住居15	砥石	流紋岩	139	53	(22)	(201.96)	欠損。作業面は大きく４面。
	S51	竪穴住居15	砥石？	流紋岩	74	35	28	87.84	作業面は６面。一面は内湾する。
	S52	竪穴住居15	砥石	チャート	96	38	29	196.31	作業面は６面で、いずれも平坦で、使い込まれている。
	S53	竪穴住居15	砥石	ホルンフェルス	(97)	(80)	(54)	(430.41)	欠損。作業面は３面。剥離面は擦痕より新しい。
	S54	竪穴住居15	砥石？もしくは原石	閃緑岩(細粒)	(127)	96	53	(958.53)	石材は砥石として利用可能。人為的な痕跡は認められない。
	S55	竪穴住居15	原石	玄武岩	(324)	(263)	141	－	S10・14と同質。２面剥ぎ取られている。
	S56	竪穴住居15	台石	花崗岩	258	230	95	(約8900)	欠損。作業面は２面。中央部は被熱を受ける。
33	S57	B群	剥片	サヌカイト	43	57	9	31.24	周縁のみ二次調整。
	S58	B群	磨製石包丁未成品	レキ岩	59	157	14	143.97	周縁のみ二次調整。表・裏面に自然面が残る。敲打・研磨痕なし。
	S59	B群	磨石	角閃石玢岩	(70)	76	65	(664.33)	欠損。作業面は２面か。
	S60	B群	原石	緑色片岩	181	138	31	1277.78	大半は自然面（円礫）が残る。一部に剥離面がある。
	S61	B群	原石	玄武岩	124	108	83	1609.26	加工痕なし。
36	S62	竪穴住居16	勾玉	蛇紋岩	17	12	3	0.81	両面穿孔。孔の周縁は抉れる。全面ともに研磨良好。光沢あり。
39	S63	竪穴住居18	磨製石包丁	緑色片岩	46	116	7	67.50	穿孔は一つ。両面穿孔。刃部使用による摩滅が著しい。
43	S64	C群	石鏃	サヌカイト	26	15	5	1.83	周縁部のみ二次調整。裏面は主要剥離面。
	S65	C群	剥片	サヌカイト	47	49	10	21.77	目的的剥片ではない。下辺に調整剥離。
49	S66	竪穴住居24	磨製石包丁？未成品	黒色片岩	94	68	9	84.46	岩盤と同質。表・裏面は研磨。刃部は鋭利に形成されていない。
	S67	竪穴住居24	叩石	花崗岩	262	187	107	約6300	作業面は１面で、やや窪む。
52	S68	竪穴住居26	勾玉未成品？	緑色片岩	91	54	15	95.54	C字形に調整剥離で整形。表・裏面、複部に研磨。
55	S69	竪穴住居29	石鏃？未成品	サヌカイト	24	14	4	0.90	わずかに二次調整。
	S70	竪穴住居29	剥片	黒曜石	17	17	5	1.12	結晶面あり。やや水和化。加工痕・使用痕なし。
56	S71	段状遺構２	砥石	流紋岩	89	47	17	86.46	作業面は３面。
61	S72	住居31・段状３	楔形石器	サヌカイト	27	22	5	3.35	上・下辺は二次調整。左・右端は裁断面。
	S73	住居31・段状３	素材剥片	サヌカイト	27	44	6	7.98	二次調整なし。裏面は主要剥離面。
	S74	住居31・段状３	扁平片刃石斧未成品	黒色片岩	43	23	5	8.31	側縁部のみ研磨で整形。表・裏面は未調整。刃部は未形成。
69	S75	段状遺構５・６	石錐	サヌカイト	(20)	27	5	(1.40)	欠損。上端は裁断面。全体的に細かな二次調整。
	S76	段状遺構５・６	磨製石包丁	緑色片岩	38	(80)	7	(34.29)	欠損。両面穿孔の痕跡が残存。刃部の摩滅が著しい。
70	S77	段状遺構６	台石	ホルンフェルス	245	274	80	約11100	作業面は２面。擦痕は極細かい。
71	S78	段状遺構７	太型蛤刃石斧未成品？	玢岩	172	98	53	1533.71	剥離工程。大半は自然面が残る。右・下辺を大まかに調整剥離。
	S79	段状遺構７	叩石	閃緑岩	102	99	85	415.52	下端面は敲打痕。
72	S80	段状遺構８	台石	閃緑岩	227	304	81	約10500	欠損。作業面は１面。
75	S81	土壙１	楔形石器	サヌカイト	28	19	6	4.15	上・下辺は二次調整。左・右端は裁断面。
77	S82	土壙２	石鏃	黒曜石	(18)	(11)	3	(0.43)	欠損。丁寧な押圧剥離。やや水和化している。
	S83	土壙２	円盤	流紋岩	43	42	13	32.54	正円形を呈するが、人為的な整形ではない。
	S84	土壙２	台石	砂岩	441	206	95	約11500	欠損。作業面は２面。下半は熱を受ける。竪穴住居10からの混入か。
80	S85	土壙３	石鏃	サヌカイト	36	18	3	2.08	周縁のみ二次調整。裏面は主要剥離面。
	S86	土壙３	扁平片刃石斧？	サヌカイト	(26)	21	4	(2.54)	欠損。両側面は二次調整。下辺に研磨を施し、刃部を形成か。
	S87	土壙３	太型蛤刃石斧未成品	玄武岩	160	88	48	979.55	敲打工程か。周縁から調整剥離。右辺は敲打痕か。
81	S88	土壙４・５	石鏃	サヌカイト	21	16	3	1.03	周縁のみ二次調整。
	S89	土壙４・５	石錐	サヌカイト	(33)	16	4	(2.65)	欠損。錐先部をわずかに二次調整。
82	S90	土壙７	石鏃	サヌカイト	18	15	2	0.45	周縁部をわずかに二次調整。裏面は主要剥離面。
86	S91	北谷部包含層	磨製石包丁	緑色片岩	35	(73)	6	25.64	欠損。両面穿孔。刃部はやや摩滅している。
	S92	北谷部包含層	磨製石包丁未成品	緑色片岩	61	121	14	(119.41)	欠損。研磨工程。周縁部に二次調整。一部に研磨痕あり。敲打痕なし。
	S93	北谷部包含層	砥石	ホルンフェルス	85	(62)	41	(247.84)	欠損。作業面は１面。
87	S94	遺構に伴わない	石鏃	サヌカイト	20	18	3	1.13	細かい二次調整。
	S95	遺構に伴わない	石鏃？未成品	サヌカイト	33	22	7	3.38	右辺の二次調整後の欠損か。
	S96	遺構に伴わない	扁平片刃石斧	緑色片岩	77	58	15	(58.69)	欠損。両側面は二次調整。下端のみ研磨し、刃部を形成。
	S97	遺構に伴わない	太型蛤刃石斧未成品？	玄武岩	174	106	72	1628.33	成形のために周縁部を剥離。裏面は自然面が残る。
	S98	遺構に伴わない	磨製石包丁未成品	緑色片岩	130	60	10	128.89	穿孔工程。研磨は全体的に丁寧に施されている。２か所に初孔痕。
	S99	遺構に伴わない	磨製石包丁未成品	緑色片岩	151	63	20	202.40	剥離工程。周縁部を中心に細かい調整剥離。敲打・研磨痕なし。

※（カッコ）内の計測値は残存している長さを示す。

第９表　金属製品一覧表

挿図No.	遺物No.	遺構名	器種	計測値(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	材質	時期	備考
23	M１	竪穴住居11	鉈	(35.0)	12.8	1.7	(2.04)	鉄	弥生時代後期初頭	
32	M２	竪穴住居15	鎌？	(35.0)	(30.4)	12.7	(12.48)	鉄	弥生時代後期前半	
	M３	竪穴住居15	鑿	33.0	15.0	4.0	7.68	鉄	弥生時代後期前半	鋳造品を転用。施溝痕・バリ状あり。
33	M４	B群	不明	(22.1)	(30.3)	10.0	(9.78)	鉄	弥生時代後期？	鋳造品か。
41	M５	竪穴住居19	刀子	(45.7)	17.3	7.3	(6.24)	鉄	弥生時代後期中葉	刃先・基部欠損。
	M６	竪穴住居19	棒状工具	52.9	9.4	7.5	4.49	鉄	弥生時代後期中葉	
	M７	竪穴住居19	不明	(26.0)	21.0	10.0	(7.44)	鉄	弥生時代後期中葉	
43	M８	C群	錐	33.0	6.0	5.0	1.48	鉄	弥生時代後期？	
	M９	C群	刀子？	41.2	14.6	5.9	7.52	鉄	弥生時代後期？	基尻か。
61	M10	竪穴住居31・段状遺構3	斧	34.0	31.0	7.0	21.04	鉄	弥生時代後期前葉	鋳造品を再加工。細かく破損。
86	M11	北谷部包含層	不明	(28.0)	5.0	5.0	(2.44)	鉄	弥生時代後期以降？	巻き込みによる溝あり。
87	M12	遺構に伴わない	斧	36.3	21.3	8.4	11.97	鉄	弥生時代後期？	鋳造品を再加工。
99	M13	墓５	棺金具	48.0	13.0	8.0	8.71	鉄	近世	木質付着。
	M14	墓５	棺金具	(39.0)	13.0	2.0	(4.36)	鉄	近世	木質付着。
	M15	墓５	棺金具	4.72	20.0	20.0	4.66	鉄	近世	木質付着。
	M16	墓５	棺金具	(18.0)	10.0	2.0	(2.39)	鉄	近世	木質付着。
	M17	墓５	棺金具	4.40	18.0	2.5	7.55	鉄	近世	
	M18	墓５	煙管(雁首)	(73.0)	10.0	－	(6.66)	青銅	18世紀後半	竹製吸管0.34g
			煙管(吸口)	(74.0)	9.0	－	(3.53)	青銅	18世紀後半	竹製吸管0.27g
	M19	墓10	棺釘	(25.0)	4.0	4.0	(1.32)	鉄	近世	
	M20	墓10	棺釘	(3.0)	6.0	5.0	(4.26)	鉄	近世	
100	M21	遺構に伴わない	釘	34.6	8.2	7.0	2.22	鉄	中世以降？	
	M22	遺構に伴わない	不明	(36.0)	12.0	5.0	(6.10)	鉄	中世以降？	
	M23	遺構に伴わない	寛永通寶	23.4	－	1.3	2.50	銅	近世	

第10表　土製品一覧表

挿図No.	遺物No.	遺構名	器種	計測値(mm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	色調	胎土	焼成	時期	備考
16	C1	A群	分銅形土製品	(34)	(42)	12	(17.5)	にぶい橙色7.5YR6/4	1mm以下の砂粒	良好	弥生時代中期後葉?	欠損
32	C2	竪穴住居15	土器円盤	55	54	6	22.0	にぶい黄橙色10YR5/3	1mm以下の砂粒	良好	弥生時代中期後葉	甕片転用、未成品
59	C3	竪穴住居30	土器円盤	49	44	5	12.8	にぶい黄橙色10YR6/4	1mm以下の砂粒	良好	弥生時代中期後葉	甕片転用、未成品
99	C4	墓９	人形土製品	72	25	20	17.8	にぶい黄橙色10YR7/3	水漉し	良好	近世	型取り

第11表　小玉一覧表

挿図No.	遺物No.	遺構	直径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	色調	時期	備考
32	G1	竪穴住居15	(2.6)	3.6	2.0	(0.02)	ガラス	ターコイズブルー5B6/8	弥生時代後期前葉	欠損
99	G2	墓５	5.4	4.0	1.7	0.20	ガラス	オリーブ5Y6/6	18C後半	数珠玉
	G3	墓５	5.0	3.3	1.3	0.14	ガラス	生成り色10YR9/1	18C後半	数珠玉
	W1	墓５	5.0	2.4	0.7	0.01	埋もれ木	黒褐色10YR2/2	18C後半	数珠玉
	W2	墓５	5.7	2.2	0.7	0.02	埋もれ木	黒褐色10YR2/2	18C後半	数珠玉
	W3	墓５	6.3	2.3	0.7	0.03	埋もれ木	黒褐色10YR2/2	18C後半	数珠玉

※(カッコ)内の計測値は残存している値を示す。

第12表　新旧遺構名称対照表

竪穴住居

新遺構名	旧遺構名
竪穴住居１	No.51住居
竪穴住居２	No.39住居
竪穴住居３	No.52住居
竪穴住居４	No.53住居
竪穴住居５	No.50住居
竪穴住居６	No.49住居
竪穴住居７	No.48住居
竪穴住居８	－
竪穴住居９	－
竪穴住居10	No.30・34・40住居
竪穴住居11	No.69住居
竪穴住居12	No.76住居
竪穴住居13	No.61・64・77住居
竪穴住居14	No.66住居
竪穴住居15	No.60住居
竪穴住居16	No.22住居
竪穴住居17	No.18住居
竪穴住居18	No.14住居
竪穴住居19	No.９住居
竪穴住居20	No.80住居
竪穴住居21	No.88住居
竪穴住居22	No.83住居
竪穴住居23	No.81住居
竪穴住居24	No.79住居
竪穴住居25	No.59住居
竪穴住居26	No.75住居

新遺構名	旧遺構名
竪穴住居27	No.86住居
竪穴住居28	No.68住居
竪穴住居29	No.65住居
竪穴住居30	No.25住居
竪穴住居31	No.27住居
竪穴住居32	No.46住居
竪穴住居33	No.54住居
竪穴住居34	No.58住居
竪穴住居35	No.96住居
A群	B住居群
B群	C住居群
C群	A住居群

段状住居

新遺構名	旧遺構名
段状遺構１	No.95段状
段状遺構２	No.71段状
段状遺構３	No.28段状
段状遺構４	No.37段状
段状遺構５	No.32段状
段状遺構６	No.38段状
段状遺構７	No.55段状
段状遺構８	No.56段状
段状遺構９	No.１段状
段状遺構10	No.７段状

土壙

新遺構名	旧遺構名
土壙１	No.16土壙
土壙２	No.35土壙
土壙３	No.42土壙
土壙４	No.47土壙
土壙５	No.44土壙
土壙６	No.91土壙
土壙７	No.92土壙
土壙８	No.62土壙
土壙９	No.63土壙
土壙10	No.67土壙
土壙11	No.57土壙
土壙12	No.41土壙
土壙13	No.15土壙
土壙14	No.90土壙
土壙15	No.70土壙
土壙16	No.72土壙
土壙17	No.73土壙
土壙18	No.93土壙
土壙19	No.74土壙
土壙20	No.89土壙
土壙21	No.84土壙

墓

新遺構名	旧遺構名
墓１	No.23墓
墓２	No.43墓
墓３	No.17墓
墓４	No.５墓
墓５	No.４墓
墓６	No.６墓
墓７	No.３墓
墓８	No.20墓
墓９	No.11墓
墓10	No.12墓
墓11	No.13墓
墓12	No.24墓

溝

新遺構名	旧遺構名
溝１	No.26溝
溝２	No.31溝
溝３	No.82溝
溝４	No.85溝
溝５	No.36溝

その他

新遺構名	旧遺構名
被熱面１	No.10焼土面
１号墳	No.２古墳
たわみ１	No.８たわみ

1　調査地遠景（北から）

2　調査区空撮（北東から）

図版 2

1　調査区中央部全景（東から）

2　調査区東側全景（北から）

1　竪穴住居10（Ａ群）床面検出状況（北西から）

2　Ａ群（竪穴住居１～10）完掘状況（北西から）

図版 4

1　B群（竪穴住居11～15）完掘状況（南西から）

2　竪穴住居11東半 炭化材等検出状況（東から）

3　竪穴住居11床面 炭化穀物種子出土状況（南東から）

1　竪穴住居12・13完掘状況（南東から）

2　竪穴住居14・15完掘状況（西から）

図版 6

1　C群（竪穴住居16～19）完掘状況（北から）

2　竪穴住居18中央穴・間仕切り溝（北東から）

3　竪穴住居19完掘状況（東から）

4　竪穴住居19中央穴断面（南西から）

5　竪穴住居19内土壙（東から）

１　Ｄ群（竪穴住居20～25）全景（南西から）

２　Ｅ群（竪穴住居30～33、段状遺構３・４）全景（西から）

図版 8

1　竪穴住居31完掘状況
（北東から）

2　竪穴住居32完掘状況
（北西から）

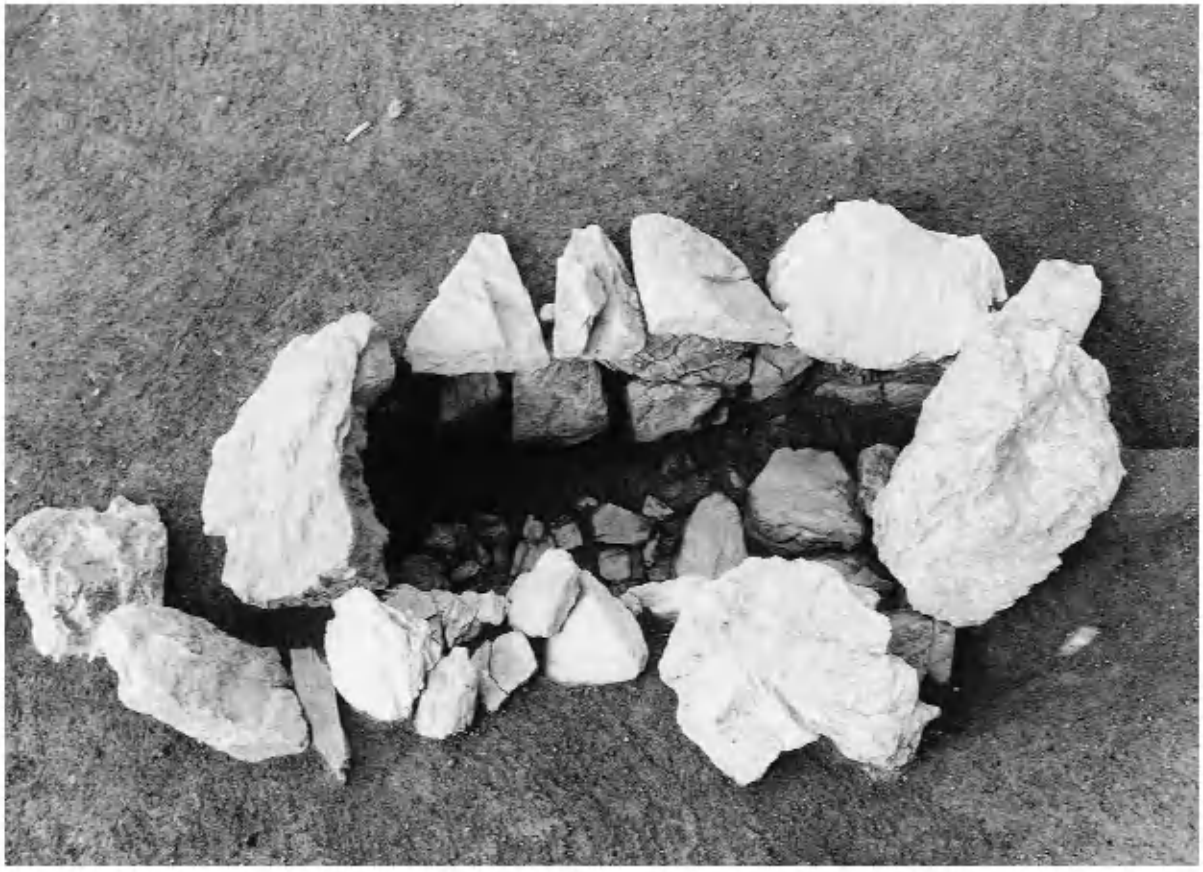
3　Ｆ群（竪穴住居34、
段状遺構５～８）
全景
（北西から）

1　土壙 1
（北西から）

2　土壙 2 ～ 5
（西から）

3　土壙 4 ・ 5
（東から）

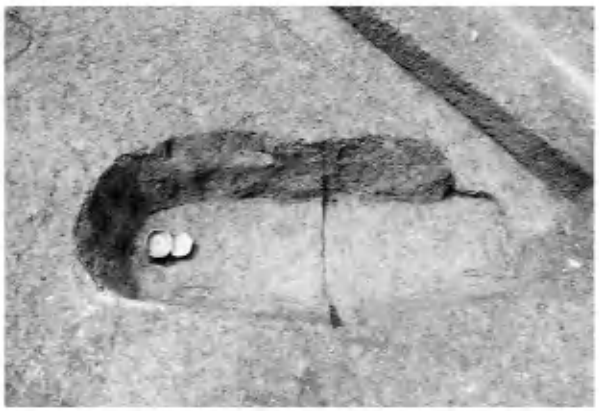
図版10



1　1号墳 主体部（北西から）

2　1号墳 主体部（南西から）

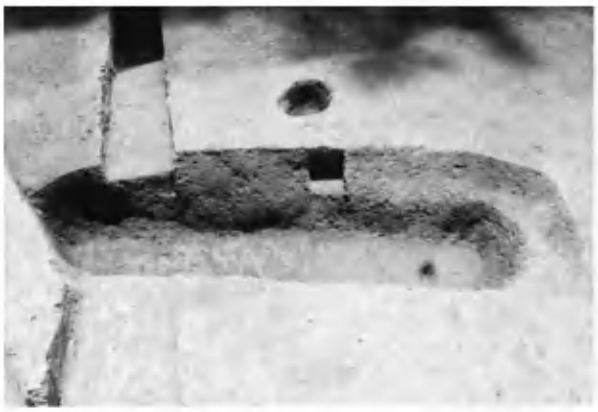
3　1号墳 主体部礫床（南西から）



1　墓１(北から)

2　墓１遺物出土状況（南から）

3　墓２（北東から）



4　墓３（北から）

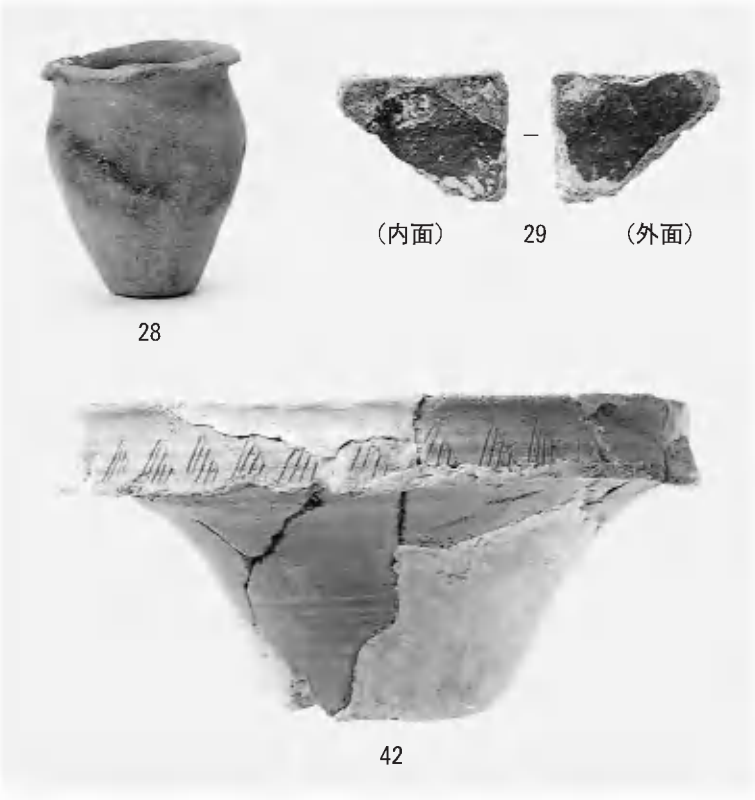
5　墓４・５（北東から）

6　墓５遺物出土状況（北東から）

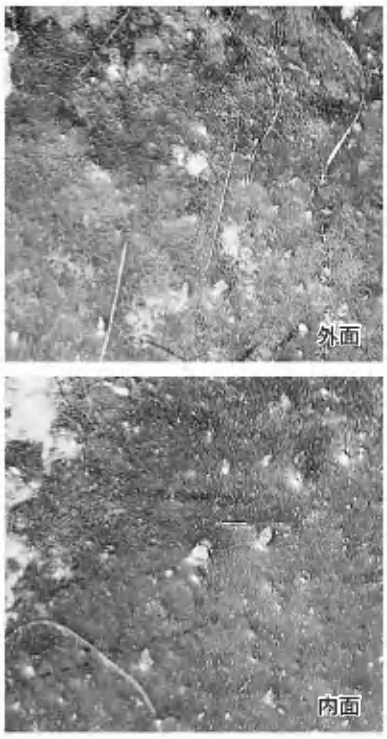
7　墓６・７（西から）

8　墓８～11（南西から）

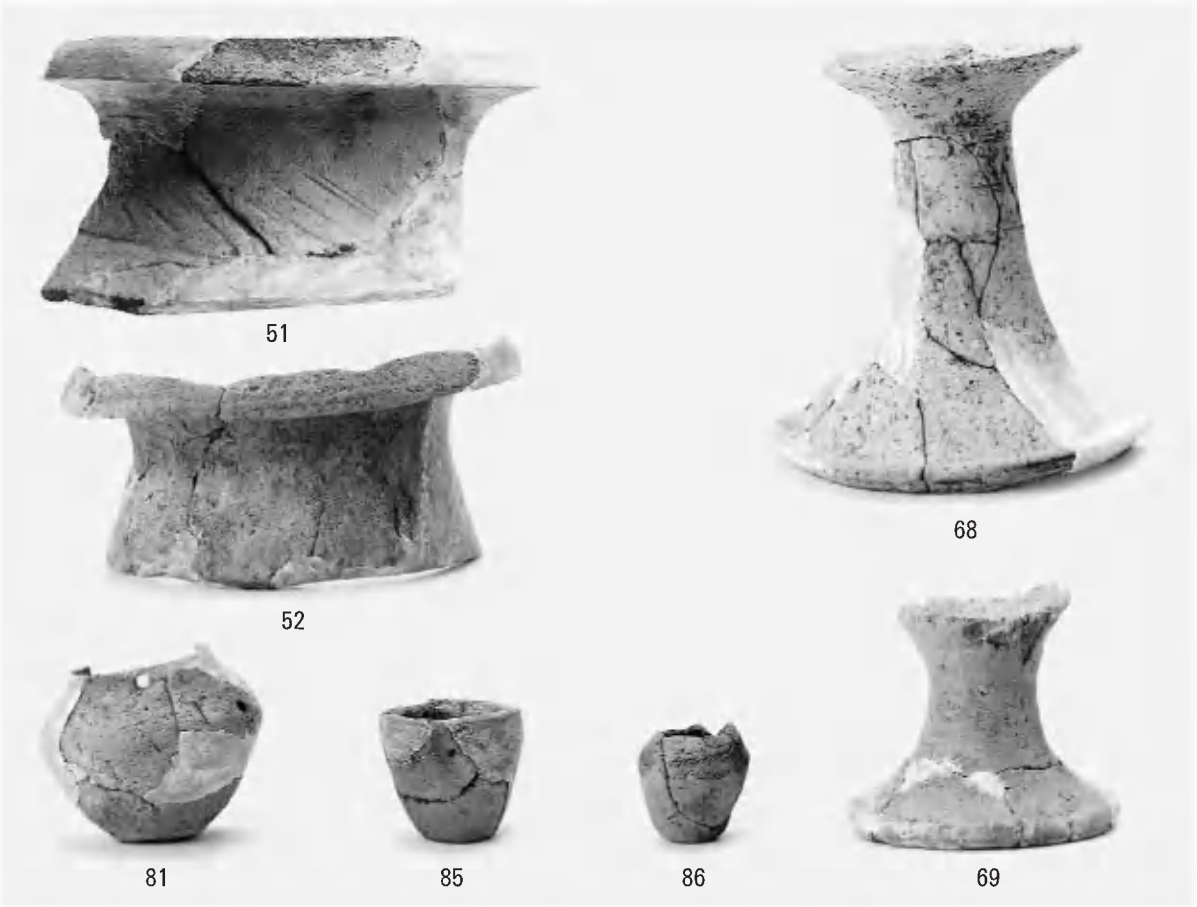
図版12



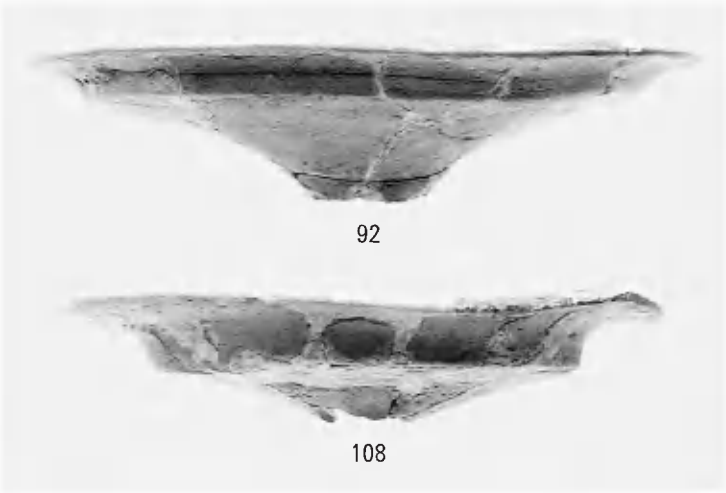
1　A群（竪穴住居1～10）出土土器



2　弥生土器（29）に塗布
された黒漆様樹脂（約8倍）

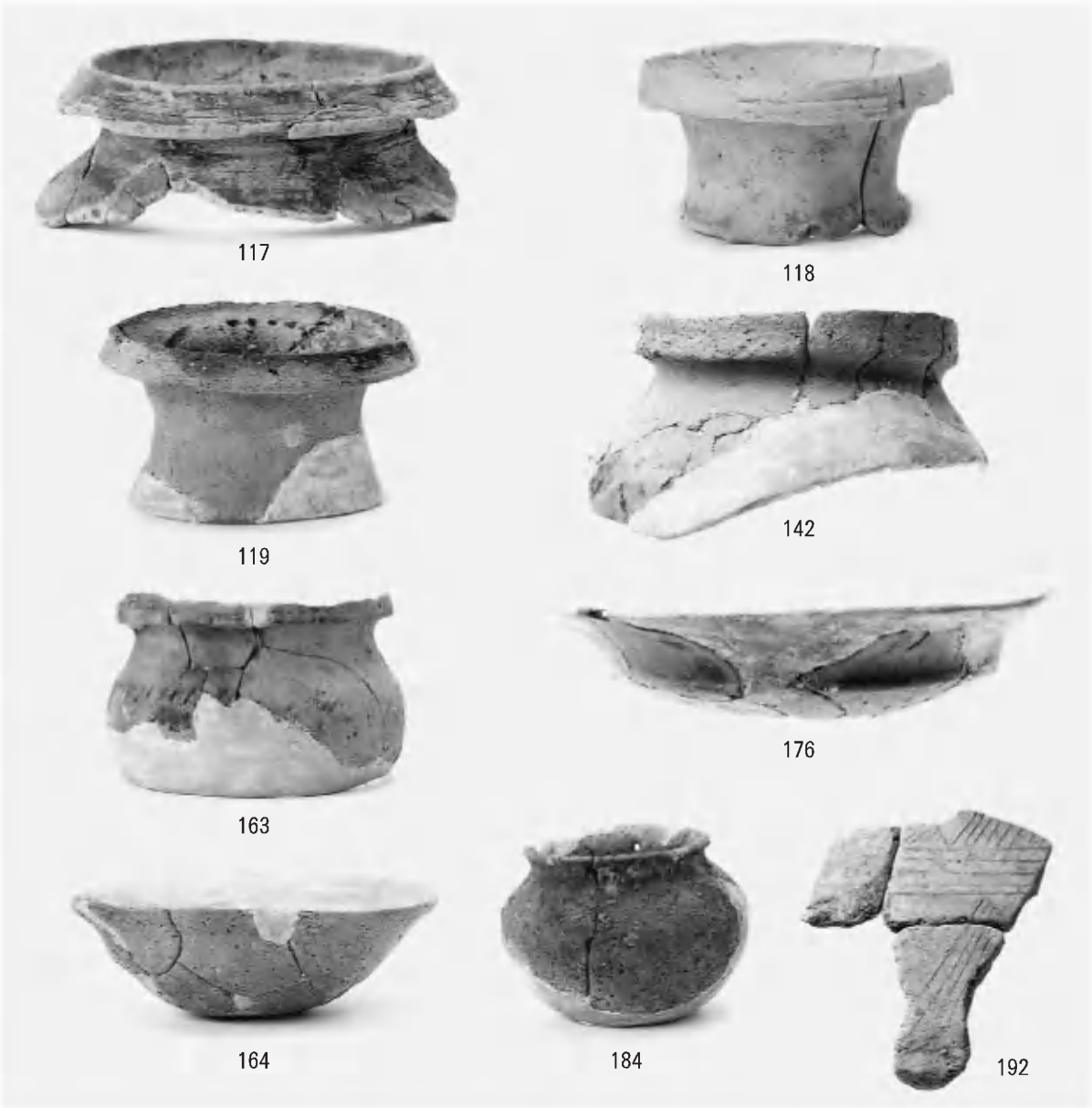


3　竪穴住居11出土土器



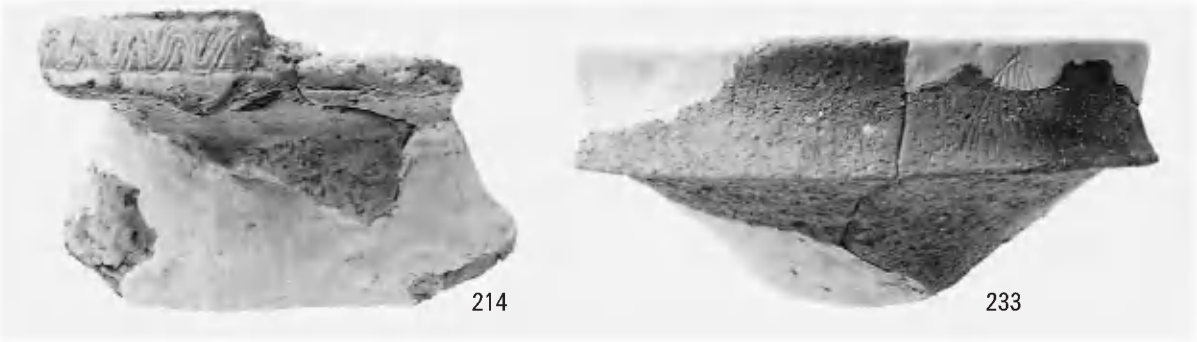
1　竪穴住居13出土土器

2　竪穴住居14出土土器

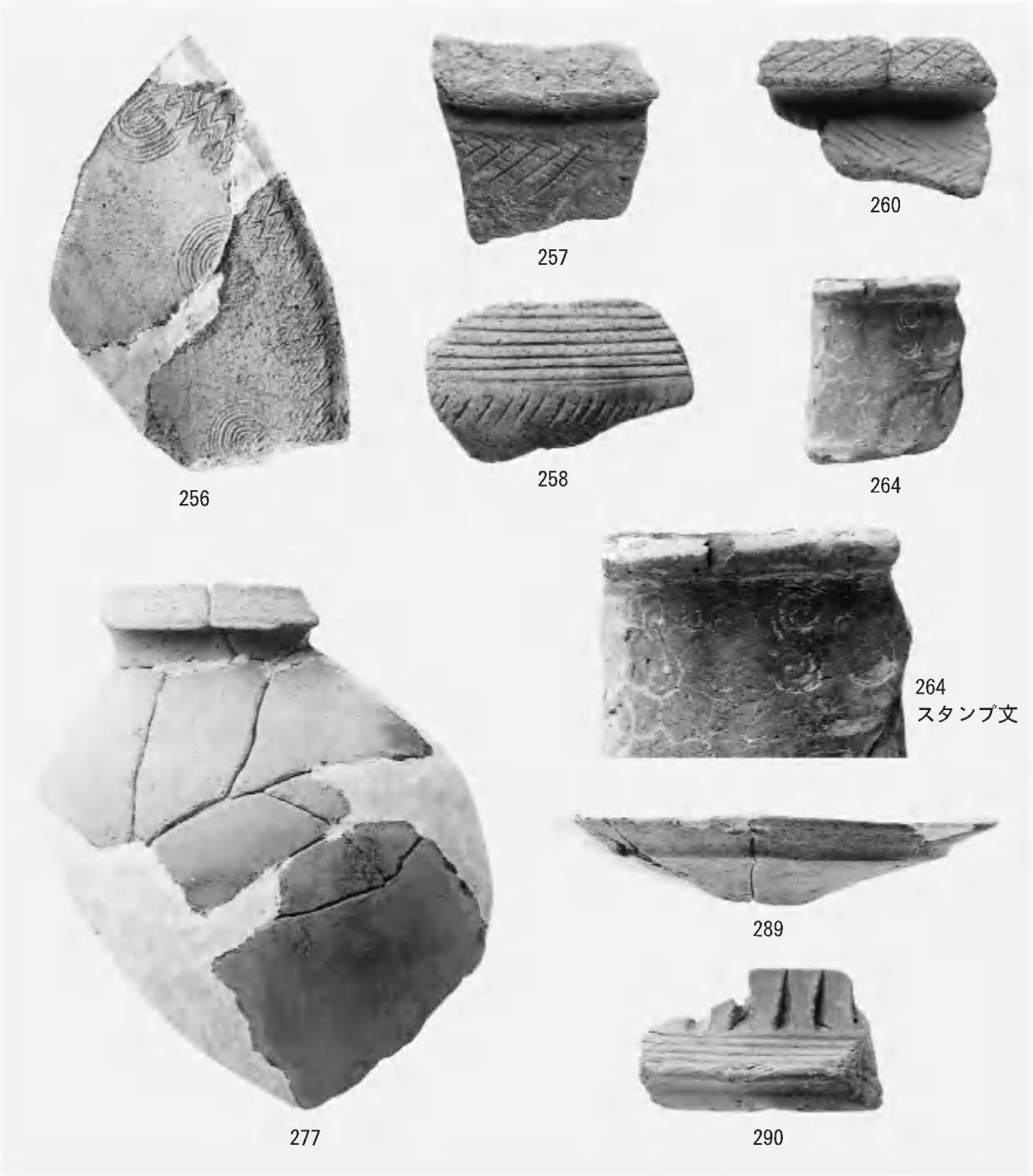


3　竪穴住居15出土土器

図版14



1　竪穴住居18出土土器

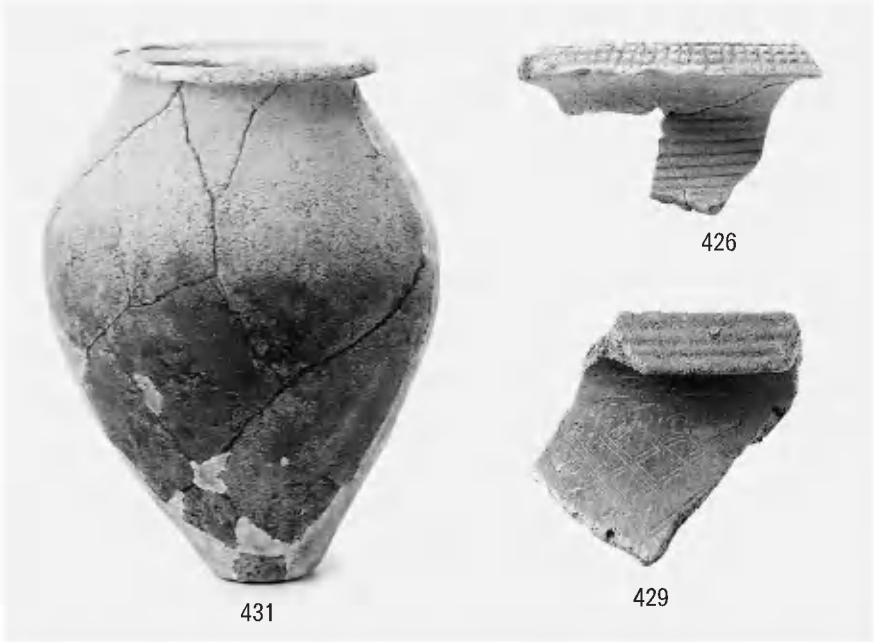


2　C群（竪穴住居16～19）出土土器

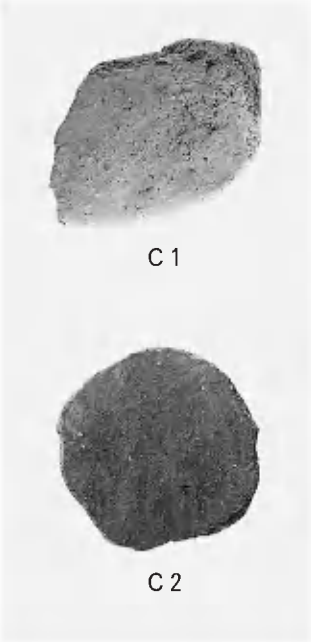
1　竪穴住居30出土土器

3　弥生土器の壺(370)底部内面に付着した黒漆様樹脂

2　竪穴住居31出土土器



4　土壙２出土土器



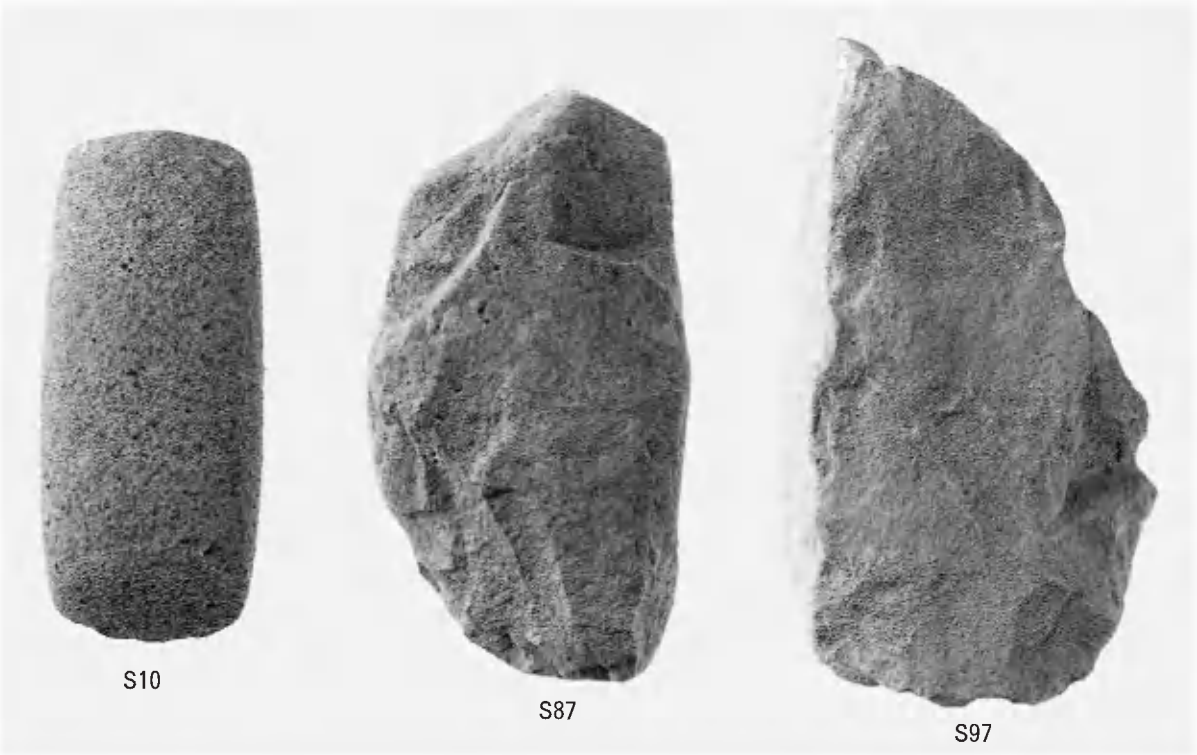
5　弥生時代の土製品

図版16

1　サヌカイト製石器

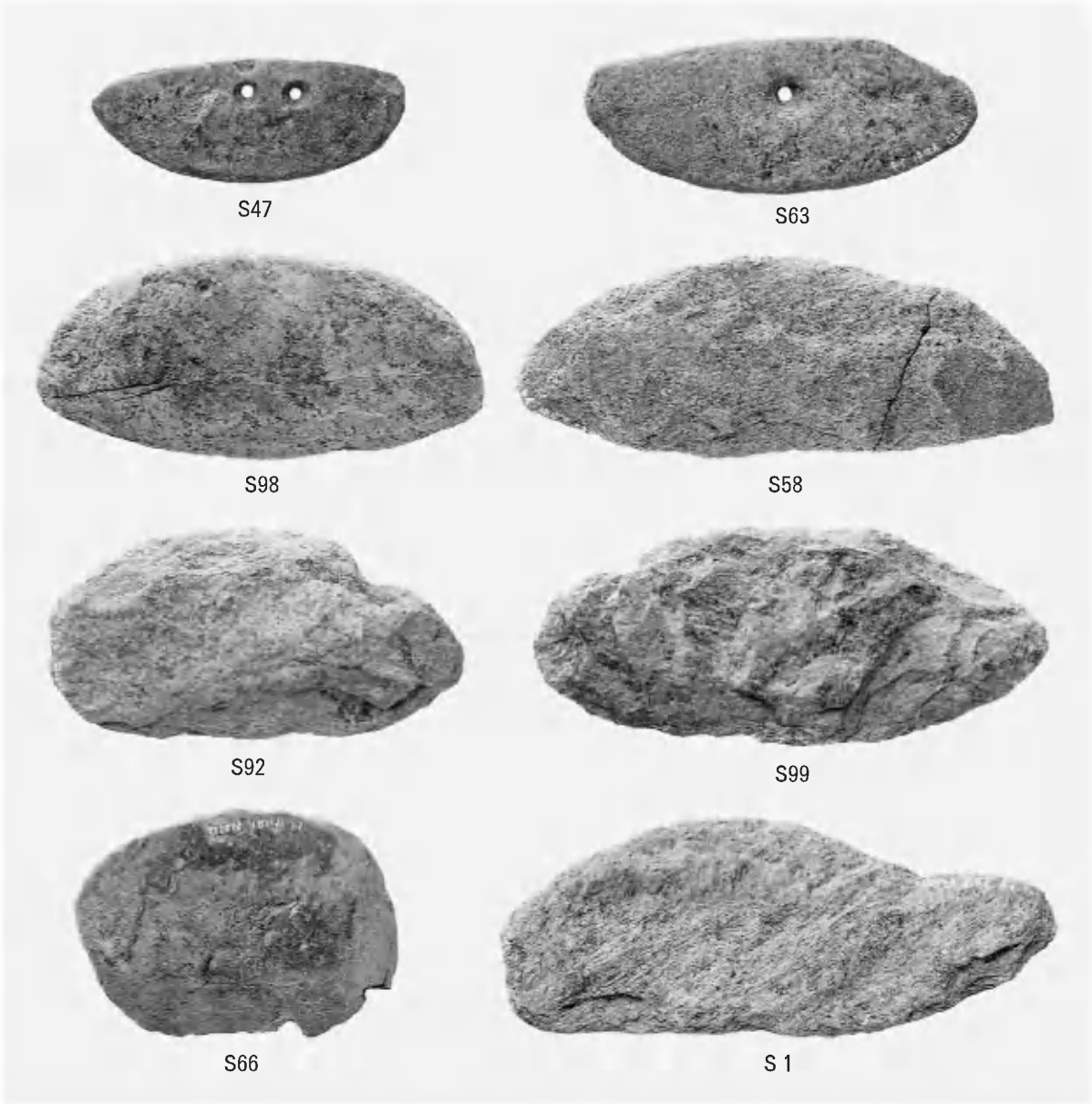
2　黒曜石製石器

3　サヌカイト剝片（竪穴住居10）



4　太型蛤刃石斧の未・完成品

1　扁平片刃石斧の未・完成品



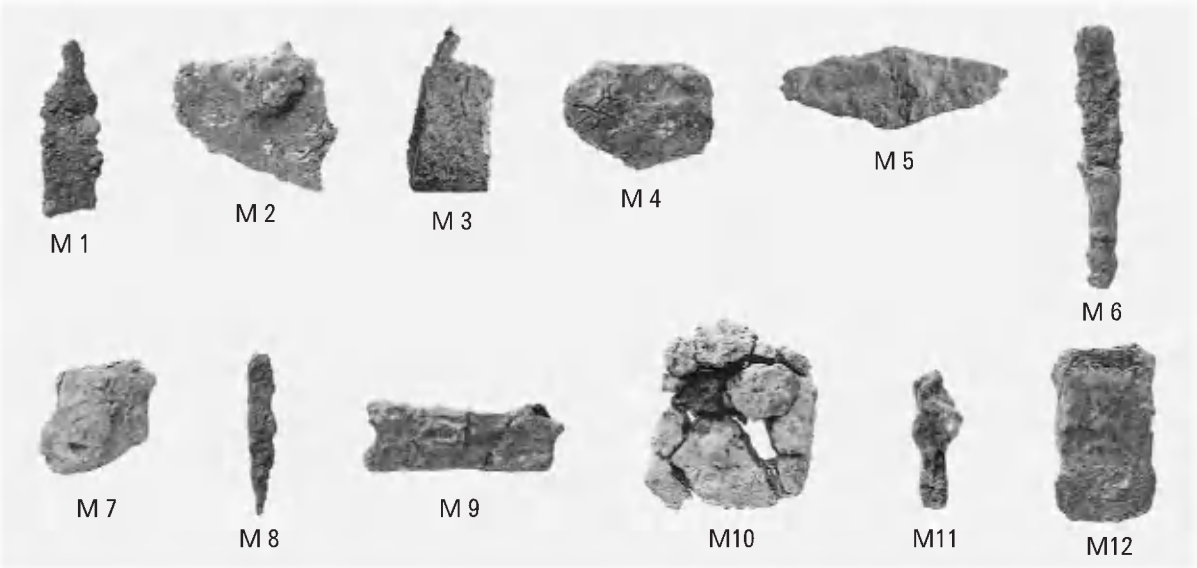
2　磨製石包丁の未・完成品

図版18

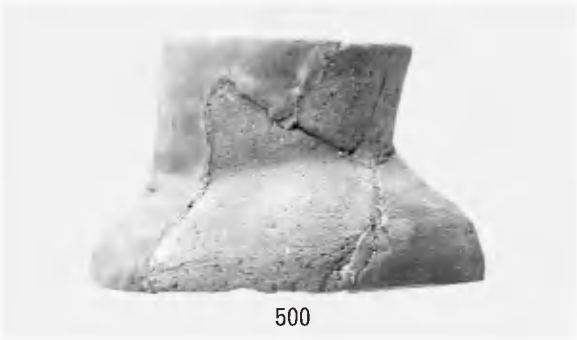
1　砥石

2　その他の石製品

3　モモ種子

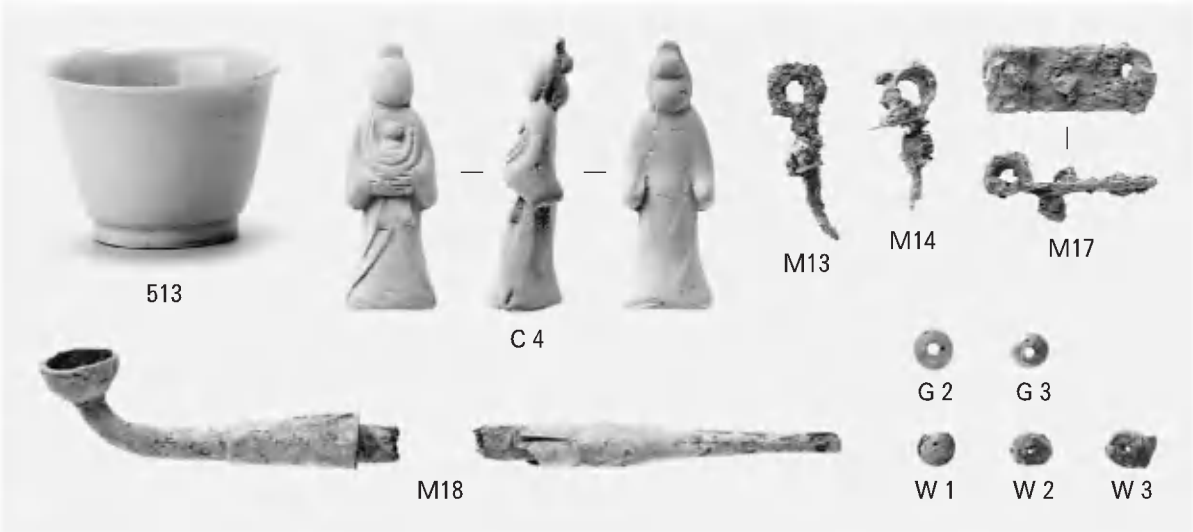


4　弥生時代の鉄器

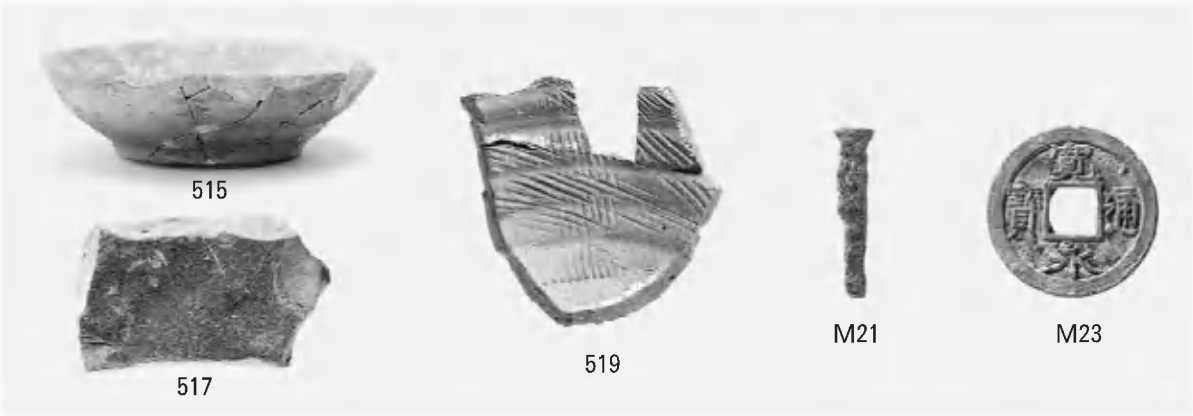


1　1号墳出土土器

2　墓1・2出土土器

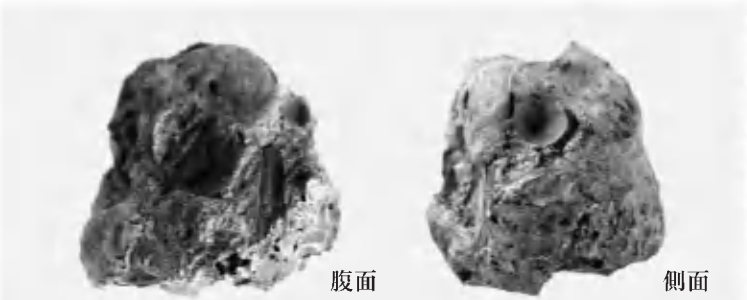


3　墓5・8・9出土遺物

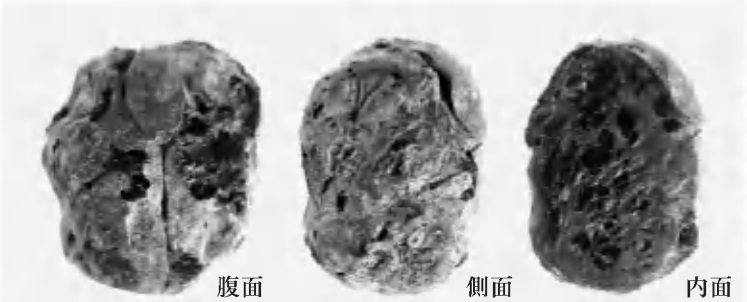


4　古代以降の遺物

図版20



試料1　ダイズ



試料2　ダイズ

炭化したダイズ

試料3　アズキ

試料4　アズキ

試料5　アズキ

試料6　アズキ

試料7　イネ

竪穴住居11出土の炭化穀物種子

第13表　樋ヶ鼻遺跡の炭化穀物種子計測表

試料No.	種類	計測値(mm)			備　考
		長さ	幅	厚さ	
1	ダイズ	(7.1)	(7.6)	(6.8)	ヘソ剝離
2	ダイズ	(7.9)	(6.9)	(5.5)	ヘソ剝離
3	アズキ	5.3	3.5	3.7	ヘソ剝離、初生葉確認
4	アズキ	6.8	4.4	3.8	ヘソ剝離
5	アズキ	6.3	4.1	4.1	ヘソ剝離
6	アズキ	6.3	3.8	4.4	初生葉確認
7	イネ	4.7	2.8	1.7	

※（カッコ）内の数値は、被熱によって大きく変形した現存値を示す。
また、いずれの計測値も原形の大きさを表すものではない。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	といがはないせき
書　　名	樋ヶ鼻遺跡
副 書 名	一般県道目木大庭線改築に伴う発掘調査
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	183
編 著 者 名	米田克彦　物部茂樹　福田正継　大橋雅也　松本和男　小西猛朗　椿坂恭代　北野信彦
編 集 機 関	岡山県古代吉備文化財センター
所　在　地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL 086-293-3211
発 行 機 関	岡山県教育委員会
所　在　地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL 086-224-2111
発行年月日	2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所　在　地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
といがはないせき 樋ヶ鼻遺跡	おかやまけんまにわぐん 岡山県真庭郡 くせちょうなかはら 久世町中原	335843	277	35° 4′ 7″	133° 46′ 59″	2003.4.1～ 2003.9.30	2,280㎡	一般県道目木大庭線改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
樋ヶ鼻遺跡	集落・墓地	弥生時代中～後期 古墳時代 中世 近世	竪穴住居　35軒 段状遺構　8基 土壙　21基 溝　5条 古墳　1基 土壙墓　3基 近世墓　9基	弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 土製品 石器・石製品 玉（勾玉・小玉） 鉄製品 青銅製品 炭化穀物種子	遺構密度が高い弥生時代中～後期の集落 弥生時代後期の炭化穀物種子 古墳時代後期の古墳・土壙墓

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 183

樋ヶ鼻遺跡

一般県道目木大庭線改築に伴う発掘調査

平成16年３月11日　印刷
平成16年３月31日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山市西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
　　岡山市内山下2-4-6

印刷　株式会社 三門印刷所
　　岡山市高屋116-7